

ダンジョンにバゲ子がいるのは間違っているだろうか？

猪のような

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

妖精騎士ガウエインの力と姿を持った転生者君がオラリオでベル君と一緒に頑張るお話。アヴァロン・ル・フェを終わらせて書きたい衝動が溢れ出てしまった…けど反省も後悔もしない。最初は妖精騎士ランスロットをベル君の姉として振じ込もうとしたが、アイツチートだからガウエインにしたよ…もっとダンまちとFateのクロスオーバー作品増えて欲しいな！

目次

第一話	白兔と黒犬の出会い	1
第二話	ヘスティア・ファミア	17
第三話	怪物祭	34
第四話	お買い物	51
第五話	サポーター	66
第六話	弱肉強食	83
第七話	剣姫と修行	99
第八話	物語の一言	113
第九話	離れた黒犬。二人の鍛冶師	130
第十話	黒犬は月の下へ	146
第十一話	黒犬と狩人達の歩み	158
第十二話	運命の天蠍	173
第十三話	天蠍を喰らいし黒犬	184
第十四話	知らない事	199
第十五話	真の楽園と中層ダイジェスト	212
第十六話	カーリー・ファミア	227
第十七話	分裂	243
第十八話	演奏開演	261
第十九話	演奏閉演	278
第二十話	神の宴	295
第二十一話	騎士行進	311
第二十二話	騎士に非ず	327

第一話 白兔と黒犬の出会い

——ん…？あれれ、おかしいぞ？俺は友人達とFGOの話をしながら帰っていたんだがな…

「あれ？覚えてない？君死んじゃったんだよ？」

ああ、なるほど、死んだのか…

えっ、死んだの!?

「そうだよ、ホントに覚えていない？」

目の前には朧げな人型の光があった…

いや全く…

「君は不幸にもやべー指名手配中の犯罪者達に絡まれて、君はお友達を逃す為に一人で足止めして死んじゃったんだよ…」

なん…だと…!?

「お友達が逃げる時に君何て言ったと思う？」

さあ…

「〇〇…足止めするのは構わんが、別に、アレらを倒してしまっても構わんのだろう？って言ってたよ」

いや思いつきり死亡フラグ建ててるじゃん、自業自得だわ…はっ、さっきまで死んだ事に驚き過ぎて状況が全く飲み込めなかったが…つまり、此処は死後の世界…!?

「まあ、そんなところよね…」

つまり…あなたが神かつ!!

「術ジルみたいに言わないでくれたまえ…まあ、そうだけど」

神様 Fate 知ってるんですね…

「ああ、因みに推し鯖は魔神ちゃんだぞ」

なるほど…死後の世界でもFGOは流行ってるんですか？

「ああ、この前ゼウスが爆死してるの見て皆で爆笑してるレベルには流行っているぞ。皆でこう言っちゃったよ、愉悦っ!!ってね！」

わぁー、FGO凄ーい…

「それより、本題に戻ろうか…さて、本当なら君を天国に送り届けなきゃいけないんだが…」

え、どうしたんですか？

「今日は年に一度の死者を転生させて異世界に送る日でね…神が皆天国から人を選んで転生させているんだが、私は君にする事にした」

ほへへ、そんな日があるんですね…

「ああ、神々は娯楽に飢えているからね、自分が送り出した転生者がどんな人生を歩むのか楽しんでいるのさ…さて、私が君を選んだ理由だが、単純だ」

その理由とは…？

「君の魂を見て気に入ったんだ、一目惚れと言ってもいい」

え、それが理由ですか？

「神は皆気まぐれ、ちゃんとした理由は求めても無駄さ…それで君を今から異世界に送り出す訳だが…ほら、このクジを引きたまえ」

差し出されたクジを適当に引くと、クジには『ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか』と書かれていた。

「ほう、ダンまちか…まあ、悪くないな、型月ワールドみたいな地獄よりはマシだろ」

ダンまちか…

「そうガツカリするな、ほら、次はこのクジを引け」

そう言われて再びクジを引くと、次は『妖精騎士ガウエイン（バーゲスト）』と書かれていた。

「お！ほら、FGO要素出たじゃないか！」

これ、俺が妖精騎士ガウエインになるって事でいいんですか？

「そうだよ、けど色々変更する所はある。妖精から人間にしたりね、後、寿命の長さ…第三スキルのファウル・ウエーザーとかだな」

あ…アレは捕食で得た能力だから…

「そうだ、アレばかりはお前に取り付ける事は出来ん…よし、準備するから少し待っている」

神様はそう言ってその場から消えた。

暫くすると戻って来た。

「待たせたね」

そう言つて指を鳴らすと扉が現れ、ゆつくりと開かれている。

扉の向こうは光で溢れており、何も見えない。

「あの扉を潜れば、君は転生する。どう生きるも君の自由さ、まあ、僕的にはオラリオに行き、原作に関わつてくれるとありがたいが…」

行きますよ、オラリオ。

「…随分ハッキリ言うね、理由は？」

俺もオラリオに行つてみたいってのと、妖精騎士ガウエインならそうするからです。

「…強者としての責務、だったかな？君も彼女も立派だ、案外似た物同士なのかもね？」

だとありがたいですが…

「まあいい、君の人生が面白く、そして幸福である事を願うよ。それと君が成長して妖精騎士ガウエインと同じ姿になる時期と原作開始時期は合わせておくよ」

はい、ありがとうございます。行つてきます。

「ああ、行つてらっしゃい」

俺は扉をくぐり、そこで意識が途絶えた…

「おーい、バーゲストーリー！」

遠くから私を呼ぶ声が聞こえ、私は剣を振るのをやめ、声が出た方を見る。

「どうかしたの、ジエニー？」

「村の近くで熊の足跡が見つかったんだってー」

「分かったわ、直ぐ行くわね」

私はその場を離れ、熊の足跡が見つかった方に行く。

私はとある村で捨て子として拾われた。

私には角が生えていたが、皆それを気にせず大切に育ててくれた。

私は村の皆に恩を返したいと、大きくなってから畑仕事や、狩猟を手伝い、やがて村で一番頼れる存在として皆から尊敬された。

私は熊を倒し、背負って村に戻る。

「うおっ、マジか…流石バーゲスト、こんなデケエ熊をあつさりとかも一人でもってるし…」

「それに比べ村の男共は全く！ガタイも負けてるし、少しはバーゲストを見習いな!!」

『すいません…』

村の女性が男性達を叱っているのを見て私は苦笑する。

流石に普通の人は熊を一人では倒せないし持てないからな…

「あはは…そこまでにしてやってくれ、私は皆に比べて身体が強かっただけだ…」

「バーゲスト、アンタって奴は…村一番のしつかり者で働き者、性格良し、それに言葉遣いもまるでどこかの貴族様の様に丁寧！ホント、アンタ程出来た人間はいないとあたしや思っているよ」

「そんな事は無い…さて、この熊は任せる、私はもう帰らせてもらう。明日は早いからな」

「…バーゲスト、本当に行っちゃまうのか？オラリオに…」

「…ああ、私は、オラリオで強くなりたい。そして、弱い人の為に戦うんだ」

それが私、バーゲスト、妖精騎士ガウエインの生き方。

私は強者としての責務と、その生き方を貫く為に、オラリオに行く。

く翌日く

朝早くにご飯を食べ、持ち物を確認する。

「水に食料に…後これも…よし…これで準備は整ったわね！」

私は荷物を背負い、家を出て村の入り口に向かう。

すると村の入り口には村の住民が集まっていた。

「皆さん、どうして？」

「どうしても無いよー！バーゲストは大切な村の一員なんだから、見送るのは当然でしょー！」

「ジェニー…ありがとう、とても嬉しいわ…」

「バーゲスト、ほれ、わしからの贈り物じゃ」

「コレは…鎧、かしら？」

村唯一の鍛冶師から渡されたのは、F G Oで見たまんまの妖精騎士ガウエインの鎧だった。

「それとこれ、ワシの先祖が作った業物じゃ、ほれ」

次に渡されたのはこれもF G Oで見た妖精騎士ガウエインの剣。

私は鎧を身につけてみた。

『おお〜!!』

「本物の騎士みたいでカッコいいよ、バーゲスト！」

「ええ、こんな素晴らしい贈り物をありがとう、エクター」

「何、ワシもお前の様な奴に鎧を作る事が出来て、光栄じゃわい」

「そう言ってもらえて本当にありがたいわ…私、本当に村の皆に感謝しているわ。拾ってくれた事、大事に育ててくれた事、仲良くしてくれた事…私、この村で暮らせて、本当に幸せだったわ！皆、本当にありがとう！」

そう言っていると、村のおば様が泣きながら抱きついて来た。

「いいかい！絶対に死ぬんじゃないよ！もし死んだ日には私が追って説教してやるんだからね！」

「あら、それは大変…ありがとう、おば様」

「バーゲスト、お前がいけない間は、俺たちが村を守る。だから、安心して行っていい！」

「次会う時は強くなって、お前を驚かせてやるよ！」

私と同世代の男達がそう言い、私は笑う。

「ええ、頼んだわよ。私だって、次に会う時は強くなって、あなた達を驚かせるんだから」

「バーゲスト、これお弁当、ちゃんと食べてね」

「ありがとうジュニー…私の、村一番の親友。貴女の料理、大好きだったわ」

私は弁当を受け取り、鎧を隠す様にマントを羽織り、角を隠す為にフードを被る。

「それでは皆さん、また会える日を楽しみにしてますわ！」

私はそう言って村から出た。

「達者でなー！」

「元気でねー！」

「次来る時は恋人も連れてきなー！」

「それは期待しないでくださいまし!!」

『ははははは!!』

皆さんの笑い声を聞きながら歩き、やがて声が聞こえなくなり、振り返ると、村はもう見えなくなっていた。

「…さて、地図によると…こっちですわね」

私は暫く村のある方を見つめた後、地図を広げてオラリオを目指し始めた。

「此処がオラリオ…！ようやく辿り着きましたわ…！」

オラリオを目指して数週間、バーゲストはようやくオラリオに着く事が出来た。

バーゲストは長い行列に並び、自分の番が来るまでに考えている事があつた。

(そういえば、今は原作のどの地点にいるのかしら？後、私が入るファミリアも決めないと…)

自分がどのタイミングでオラリオを訪れたのか、バーゲストはそれが知りたかつた。

(私が成長し切ってから村を出たから多分原作開始に近い時期だと思うのだけれど…まあ、こればかりは入って見ないと分からないわね…)

「よし、次の者は前に出ろ！」

そうこうしている内に、バーゲストの番が訪れ、バーゲストは門番の前に立つ。

「！…で、でけえ…お、オホン！オラリオに来た理由は？」

「冒険者に成りに来ました」

「そのガタイで女だったのかよ…!?あー…一応あつちで背中に神ファルナの恩恵があるかどうか確認してくれ」

「分かりました」

バーゲストはガネーシャ・ファミリアの女性団員ファルナに神の恩恵があるかどうか確認して貰った後に、ようやくオラリオに入る事が出来た。

「よし、まずは冒険者になる為にも、どのファミリアに入るか決めましょうか」

バーゲストはオラリオを散策しながら、候補が上がっているファミリアについて考える。

(まずはヘステイア・ファミリア。言わずと知れた主人公、ベルが所属しているファミリア。主人公と一緒にダンジョンへ行きたい気持ちはあるけれど、メリットが何も無いのよね…)

「後、主神が凄く眷属子ども思いなのもいいところね…次はロキ・ファミリア」

(オラリオでトップクラスのファミリア。『勇者』フィン・ディムナを始め、実力の高い冒険者が揃っている。多分私を入れる実力もあるし、ロキ様の女好きな面も考えると、寧ろ彼方から勧誘して来る場合

もあるかも…)

「実力と経験のある冒険者に指導してもらおうメリットは有るわね…けれど、ロキ・ファミアアって私と似た戦い方の人っていたかしら…？まあ、今のところ最有力候補ね…次にフレイヤ・ファミアアだけ…論外、何に利用されるか分かったものでは無いわ」

(私は鍛冶に興味は無いからへファイストス・ファミアアも無し…ミアハ、タケミカツチ…ダメね、ロキ・ファミアアが一番いいかしら…)
「ロキ・ファミアアで決まりね…とりあえず今日はもう暗いから、何処かで食事を頂きましょうか、村に居た時にお金はたつぷり貯めましたからね…そういえば、今、物語はどの辺りなのか確認するのを忘れていましたわね…」

バーゲストは人混みの中を歩きながら、何処か食事を出来る場所を探している。

(背が高いと辺りを見渡せて楽ですわね…あら?)

するとバーゲストの目に、ある店の看板が目に残る。

「豊穰の女主人…此処があのだ…よし、今日は此処にしましょう」

バーゲストはそう言っただけで店に足を踏み入れた。

「いらつしやっいますにや!何名様ですかにや?」

「一人です」

「カウンター席になりますが、大丈夫ですかにや?」

「構いません」

「ありがとうございますにや!それでは、こちらですにや」

バーゲストはカウンター席に案内され、座るとこの店の店主であるミア・グランデが現れる。

「アンタ、見るからに旅人って感じの服装だけど、オラリオは今日が初めてかい?」

「はい、冒険者になろうと思っただけで村から出て来ました」

「ふーん…アンタ、なかなか出来そうだね…」

「それなりに鍛えていると自負はしていますが…」

「まあいいさ!アンタはガタイもいいし、じゃんじゃん食べな!」

「それは勿論、全力で堪能させていただきますわ」

バーゲストはメニューを開き、適当に注文して料理が来るのを待つ。暫くすると美味しそうな料理が運ばれてくる。

バーゲストは出された料理を食べ始めた。

「お、いい食いつぶりだねえ。どうだい、うちの料理は？」

「とても美味しいです、まあ、私の親友の料理には及びませんが」

「言ってくれるねえ…まだたんまりあるからじゃんじゃん食いな！」

そうして食事を楽しんでいると、バーゲスト隣に誰か座る。バーゲストは余り気にしないが、一応一瞬だけ目を向けると…

「アンタがシルの知り合いかい？冒険者つて割に、可愛い顔してんね！」

「ゴフツ!？」

バーゲスト思いつきり咳き込み、水を飲んで一旦落ち着き、もう一度横目で確認してみる。

(いやどう見てもベル・クラネルですわね)

「店主、私に彼に出した物と同じ物を」

「お、まだ食うのかい、ほら、アンタも横の奴を見習ってじゃんじゃん食いな！」

お金の心配をしながら料理を食べるベルを横目に、バーゲストは確信した。

(トマト野郎イベントですわね、これ)

今思えば明らかに席が空いている時点で気付くべきだったと、バーゲストは思った。

「それにしてもアンタ、食べる時くらいフードは脱ぎな！」

「いえ、コレはその、少し訳ありでして…」

「オラリオで冒険者としてやっていくのに、一々そんなの気にしちややっていけないよ」

「む、それは確かに…では…」

バーゲストはフードを外し、マントの内側に仕舞っていた髪を外に出す。

ベルはバーゲストの頭にある角を見て驚いた顔をする。

「ふーん…かなり変わった奴だけど、それにしたって美人だね！うち

で働いてもらいたいくらいだよ」

「ありがとうございます…気になりますか」

先程からベルがずっとバーゲストの角を見ているため、バーゲストがそう訊くとベルは慌てて「すみません！」と言いながら顔を逸らして料理を食べ始める。

「そんなに慌てずとも、別に気にしてませんわ。それよりあなた、冒険者なのでしょう?」

「は、はい、そういう貴女は…?」

「私は今日オラリオに来ました、冒険者になろうと思っっていますが、ファミリアをまだ決めていなくて…」

「そ、そうなんです…」

(主人公なんだし、ここである程度交友を深めておいた方がいいわね…)

「にやあ!ご予約のお客様、ご来店にや!」

キャットピール

猫人のウェイターがそう言うのと、店内にあるファミリアが入ってくる。

店内にいる客がざわつき始め、そのファミリアに注目している。

(アレがロキ・ファミリア…)

バーゲストはロキ・ファミリアをジッと見つめていたが、今日関わるのはやめておこうと、ロキに目をつけられない為にも再びフードを被り、料理に目を戻した。

「皆、ダンジョン遠征ご苦労さん!今夜は宴や!思う存分、飲めええええええええ!」

ロキ・ファミリアの宴が始まったが、バーゲストはベルと会話しようとするも…

(完全に剣姫に夢中ですわね…)

これは話しかけても無駄だと思ったバーゲストは食事を終え、会計を頼もうとすると…

「そういうえばアイズ!お前あの話聞かせてやれよ!」

「…あの話?」

「あれだって、ほら、昨日俺達が鉢合わせた時のあれ、5階層まで逃げ

やがったミノタウロス！ お前が最後に始末したヤツ！ そんなほ
ら、あの時のトマト野郎のことだよ！」

バーゲストはベルを見ると、ベルの手は震えていた。

そこからベートはその話をしてベルを笑いものにしていた、リヴェ
リアが抑えようにも酔ったベートは止められず、終いには。

「雑魚じゃアイズ・ヴァレンシユタインには釣り合ねえ!!」

と言った辺りでベルは勢いよく立ち上がり、店を出て行ってしまっ
た。

慌ててシルとアイズが追いかける様に店を出て行った。

「何、食い逃げ？」

「ミア母ちゃんの店で、大それたやつちやなー」

「店主、彼の払いは私が」

「ん？」

ロキは食い逃げしたベルの金を払うと言った存在を目にする。

フードは被っており、顔は見えないが、ガタイがよく、声からして
女性と思われる人物がベルの分合わせて代金を支払っていた。

「アンタ、ホントに良かったのかい？ 私としちや別に構わないんだが
ね」

「はい、ああそれと…今から少し騒がしくします」

「…ああ、そういうのはせめて店の外でやりな」

「勿論」

フードを被った女性は立ち上がり、ベートに近付く。

身長が190にも及ぶ彼女の存在感は凄まじく、ベート以外のロ
キ・ファミリアの面々はその女性の接近に気付いていた。

そして女性はベートの側に立つ。

「おい」

「ああ…？ 何だおまつ…!?!」

女性がベートに声をかけ、ベートが女性に気付いた瞬間にベートは
首を掴まれ、店の外へ投げ出された。

ロキ・ファミリアの面々はその事に驚いていたが、女性は気にせず
ベートを追う様に店を出た。

店の外ではいきなり店から飛んで来たベートに驚いているアイズやシルがいた。

女性は店の入り口の前に立ち、起き上がろうとしているベートを見下す。

「テメエ……一体何のつもりだ、ああっ!?!」

「吠えるな駄犬、さっきから聞いていればみつともない……それでもオラリオの誇る有力ファミリアの一員か?」

「何だと……!」

「自分達の不始末で起こった出来事を笑い話にし、被害者の名誉を傷つける事は断じて許されない。騎士として、お前の行動を許す訳にはいかない」

「……おい、それは喧嘩を売ってるって事だよな……?」

「そう聞こえなかったか? 駄犬」

「上等だ、後悔すんじゃないぞ!」

ベートは立ち上がり、バーゲストに近付いて拳を振るう。

バーゲストはそれに反応出来ずに、顔に一発喰らい、後ずさる。

(ぐっ……コレがレベル5……酔っているのに全く捉えられなかった……けど、威力は大した事は無い!)

「その程度か!!」

「ぐおっ!?!」

バーゲストも負けじと殴り返すと、ベートは勢いよく吹き飛ぶ。

ぺっ!と口の中の血を吐き出し、バーゲストはベートに近付く。

「舐めんじゃねえ!!」

ベートは次に蹴りを繰り出し、バーゲストの腹に命中するが、バーゲストは少し後ずさるだけで、ベートの足を掴む。

「てめ、ぐおっ!?!」

「話にならない!」

バーゲストはベートを棒の様に振り回し、何回か地面に叩きつけて投げ飛ばす。

「その程度か駄犬、レベル5と聞いて苦戦するかと思ったがな」

(こつちが硬すぎてあまり攻撃が効きませんわね……)

「ふざけんなー！」

ベートは負けじとバーゲストに再び接近し、攻撃を繰り返すが、ベートの攻撃をバーゲストが受けては直後に反撃するという繰り返しだった。

「ちっ！テメエ硬すぎんだろ！」

まるで同じロキ・ファミリアのガレスの様な硬さに埒が明かないと感じたベートは、バーゲストに反撃されない様に連撃を繰り返す。バーゲストは腕を交差させ、ベートの攻撃をただただ受ける。

「どうした！話にならないんじゃないかあ!？」

「…いい加減…」

「ああ!? って、なっ…!？」

ベートが立て続けに攻撃していたが、バーゲストは次の瞬間、ベートの右腕を掴む。

「テメエ、離せっ!？」

ベートは左腕でバーゲストを殴り、顔に直撃したが、バーゲストは怯まずに受けた瞬間にベートの左腕も掴む。

(何だ、この力っ…!)

ベートを必死に抵抗するが、バーゲストの力は強く、逃げられそうに無い。

そしてバーゲストは少し身体を反る。

「お前はいい加減…!？」

「お前、何をっ…!？」

「少しは頭を冷やせっ!!」

バーゲストはベートに頭突きをかまし、ゴオオン!と鈍い音が鳴り響く。

バーゲストは頭を上げ、ベートの両腕を離すと、ベートは崩れ落ちた。

「…強かった、お前が酔っていないければ、本当に苦戦しただろう」

バーゲストはそう言ってベートを肩に担ぎ、ロキ・ファミリアに近づく。

ベートを預けた後、ファミリアの団長であるフィン・ディムナの方

を向く。

「迷惑をかけた、すまなかった」

「ああ、いいよ、いい薬になったと思えば……こちらもすまなかった。リヴェリア、彼女を治療してやってくれ」

「分かった」

「感謝する」

「それにしても強いなあ！なあなあ、名前なんて言うん？アンタみたいな子ウチ初めて見たで」

「私はバーゲストと言います、覚えて頂ければ幸いです」

「バーゲスト……聞いた事ある？」

「無いわよ、けれどおかしいわね、ベートを倒すくらいの実力者、有名な筈が無いんだけど……」

「バーゲスト、君の所属しているファミリアを聞いてもいいかな？」

「私はファミリアに入ってなどいない、今日オラリオに来た」

『……は？』

「……ロキ」

「信じられへんけど、嘘はついてない……自分、神の恩恵は？」

「ありません」

「マジか……まあ、見るからに普通じゃないってのは分かるんやけどな……」

ロキはそう言いながらバーゲストの頭にある角を見ている。

「けど、無所属なんか……よし、バーゲストたん！良かったらウチのファミリアに入らん？」

「ロキ!?何を言ってる」

「僕も是非お願いしたいね」

「フィンまで……!」

リヴェリアはガレスに目線を向けるが。

「ベートの攻撃に動じないタフさ！気に入ったわい、はっはっはっはっはっ……」

(ダメだコイツも使えない……!)

「……光荣だが、やめておく」

バーゲストは少し考えたが、キツパリと断った。

「…それは何でかな」

「私は何であれロキ・ファミリアの者と争った、それでその後ロキ・ファミリアに加わる事は私もソイツも納得出来ないだろう」

バーゲストはベートを指差しながらそう言った。

「…なるほど、分かった。君の事は諦めるよ」

「感謝する…では私は失礼するぞ、まだやる事がある」

そう言ってバーゲストはバベルの塔へ向かって歩き始めた。

ベル・クラネルはダンジョンからボロボロになりながら出て来た。フラフラとおぼつかない足でホームを目指していると、不意に倒れそうになる。

しかし、ベルは倒れる事は無かった。

「大丈夫？意識はあるかしら？」

「あ…なた…は…」

倒れそうになったベルは顔を上げると、そこにはバーゲストが居た。

バーゲストはベルを背負い、歩き始める。

「あなたのホームはあっちね」

「はい…すみません…こんな事に付き合わせてしまって…」

「構いません、目の前にボロボロな人がいるのに放っておく訳にはいきません」

「ありがとうございます…」

「…自己紹介がまだでしたね、私はバーゲスト、あなたは？」

「…ベルです…ベル・クラネル…」

「そう…クラネル、何故あなたはこんな無茶をしたの？」

「…強く、なりたかったから…」

「強くなって、どうしたいのかしら」

「強くなって、僕は、あの人に…アイズさんに追いつきたい…!」

「…そう、良い目標ね、頑張りなさい…あなたなら、きっと出来るわ」

コレが、白兔と黒犬の出会いだった。

二人はこれからダンジョンで共に戦い、どんな成長を遂げるのか、それはまだ、誰にも分からない…

第二話 ヘステイア・ファミリア

「ベル君、一体何をしているんだ、一晩中帰って来ないなんて…」

ヘステイアはいつまで経っても帰って来ないベルを心配していた。外は既に日が昇り始めており、何かあったんだろうかと思っっている。と、ヘステイア・ファミリアのホームであるボロボロの教会の扉からノック音が響く。

ヘステイアはベルが帰って来たんだと急いで扉を開ける。

「ベル君！一体今まで何処に…」

しかしヘステイアの目の前に現れたのはベルではなく…

「初めまして、女神ヘステイア。取り敢えず中に入りたいのですが、よろしいでしょうか？」

ベルを背負ったバーゲストだった。

「…なるほど、事情は理解したよ。ベル君を此処まで運んでくれてありがとう」

「いえ、騎士として当然の行いをしたまでです。私に出来ることはそれくらいしかありませんでしたから…」

バーゲストからベルがダンジョンに行つて無茶をした経緯を説明されたヘステイアは、バーゲストに頭を下げる。

「まさかベル君の行った酒場でそんな事があつたなんてね…おのれ口キのどこの眷属_{子供}め…！」

「その後私が叩きのめしたので、それでお許しください」

「君が？凄いな、だってあの【凶狼】ヴァナルガンドが相手だったんだろ？君の所属ファミリアは？」

「まだファミリアには所属していません」

「そっかー無所属なんだー……えっ、無所属!?だ、だって彼は確かレベル5だろ！それに恩恵無しで勝つなんて、普通じゃ……」

そう言ったところでヘステイアはバーゲストの頭の角を見る。

「…多分普通じゃないんだね、君…」

「まあ、自覚はあります」

「そっか…入るファミリアはもう決めてるの？」

「最初はロキ・ファミリアに行こうと思ってはいましたが…」

「けど？」

「勧誘もされましたけれど、一応ロキ・ファミリアの団員に喧嘩を売ってしまいましたので、それで加入するのは納得が出来ませんでした」
「ま、真面目だなあ…そっか、じゃあ今はまたファミリアを探しているって事だね？」

「はい」

「ボクたちのファミリアに入ってくれないかな!？」

ヘステイアは身を乗り出してバーゲストに迫りながら言う。

「言われるかもとは思っていましたが…理由を聞いてもよろしいでしょうか？」

「ベル君はこれから多分、沢山無茶ををすると思う。何度危ない橋を渡るか分かったものじゃない…ボクは戦えないからベル君の無事を祈る事しか出来ない…けど、ベル君の側に君みたいな子がいてくれたら、ベル君が危険な目にあつた時、君が助けてくれる！」

「初対面でそこまで信用してくださいさるのですか？こんな角を持つ明らかに普通じゃない存在を」

「うん、ベル君の為に怒ってくれた、ベル君を此処まで運んでくれた。それだけでボクは君を信用できる。角があるとか普通じゃないとかそんなのは、君がベル君にしてくれた事に比べればどうでもいい」

「……」

「…怒っているよね、分かるよ」

黙り込んだバーゲストに対して、ヘステイアは申し訳無さそうにしながら言う。

「ボクが君を勧誘する理由は、全部ベル君の為だ、君の為じゃない。ロキ・ファミリアに勧誘される程の実力を誇る君なら、きつと何処に行ったってその名をオラリオ中に知らしめる事が出来るだろう。君がこのファミリアに入る理由は何一つとして無い」

ヘステイアは「けれど」と言って強い眼差しでバーゲストを見つめる。

「ボクには、ベル君には君が必要なんだ！ベル君が傷つき、倒れ伏した時、ベル君をどんな奴からも守って、ベル君を連れて帰って来る様な存在が、だからお願いだ！ボクから差し出せるものなんてたかが知れてるけど、ボクに出来る事ならなんでもする！だから、ベル君が英雄になる為の手伝いをしてくれないか！」

ヘステイアはそう言って再びバーゲストに頭を下げた。

バーゲストは目を閉じて考え込む。

ヘステイアは不安そうにしており、最終兵器であるタケミカツ直伝のDOG EZAを使うべきか悩んでいた。

一見してバーゲストは先程と様子が変わらない様に見えるが、その実…

(…コレが、女神ヘステイアなのね…こんな良い神キトから好意を寄せられているベル・クラネルが少し、羨ましいわ…)

ヘステイアに対して感動や尊敬を向けていた。

(自分の眷属子典の為なら何でもする。平気で頭を下げるし、多額の借金を背負う事も、危険なダンジョンに潜る事も、厭わない。彼の夢を誰よりも応援している。私にも誠実に接してくれた…ヘステイア様がここまでしてくれたのなら…私も覚悟を決めるべきね)

「頭を上げてください、女神ヘステイア」

「！……返答を、聞かせてもらえるかな…？」

「女神ヘステイアからの頼みでファミリアに加入するのは納得出来ません」

「っ……そう、か…無理を言ってすまな「ですのぞ」え？」

「私から頼んでもよろしいでしょうか？」

「！」

「女神ヘステイア…どうか私を、このファミリアの一員として、迎えてくださいませんか？」

「うん…うん…！歓迎するよ、バーゲスト君…！」

ヘステイアは「やったー！」と嬉しそうにぴよんぴよん跳ねている。

こうしてバーゲストはめでたく、ヘステイア・ファミリアに入団したのだった…

「つて、何だコレはー!?!」

「へ、ヘステイア様？どうかなされましたか？」

ヘステイアがバーゲストに『ファ神の恩恵』ルナ与え、ステイタスを確認する。

ヘステイアは驚き、頭を抱えながらバーゲストにステイタスの詳細を写した紙を渡す。

バーゲスト

レベル 1

力：1 0

耐久：1 0

器用：1 0

敏捷：1 0

魔力：1 0

《魔法》

《スキル》

【太陽の騎士（着名）】
ガウエイン キフト

・ 任意発動

・ 魔力を消費することで武器に炎を付与する
エンチャント

・ 魔力を消費することで炎を放出させる

【聖者の数字】

・ 日の当たる午前中において、力の超高補正

「えつと…コレがどうかされたのですか？」

「いや明らかにおかしいよ！何で最初からスキルを二つも持っているのさ！なんだい太陽の騎士って!？君もしかして、アポロンと会った事ある!？」

「いえ、神アポロンに会った事は一度もありません…ヘステイア様、説明しますので落ち着いて聞いてください」

「う、うん…」

「この世界の者達は知りませんが、ガウエインという太陽の騎士と呼ばれた英雄がいたのです」

「君のスキルにもあるね、君はそのガウエインとどんな関係があるんだい？」

「私は、名前は知りませんが、ある神によってガウエイン…太陽の騎士の力を授けられてこの世界に誕生したのです」

「そうだったんだ…その神について知っている事は？」

「いえ、名前も知りませんので調べようも無く…」

「そっか…分かった、何はともあれステイタスは刻んだんだし、これからどうする？」

「私は一先ずギルドに行って冒険者登録して参ります」

「そっか、ボクは此処でベル君が起きるのを待っているよ」

「分かりました、では、行って参ります」

「うん、行ってらっしゃい」

バーゲストはホームを出てギルドに向かって歩き出した。

ヘステイアはため息を吐き、一枚の紙を取り出す。

バーゲスト

レベル1

力：1 0

耐久：1 0

器用：1 0

敏捷：1 0

魔力：1 0

《魔法》

《スキル》

【太陽の騎士ガウエイン（着名ギフト）】

- ・ 任意発動
- ・ 魔力を消費することで武器に炎を付与エンチャントする
- ・ 魔力を消費することで炎を放出させる

【聖者の数字】

- ・ 日の当たる午前中において、力の超高補正

【強者仲間としての責務】

- ・ 早熟する
- ・ 守る存在がいる限り効果持続
- ・ 守ろうとする想いの丈により効果向上

「…ありがとう、バーゲスト君…」

ヘステイアはその紙を見て微笑みながらそう言った。

「此処がギルドか…」

バーゲストはギルド本部の入り口の前に立ち、建物を見上げてい

た。

すると周囲から視線を感じ、バーゲストは周りを見渡しすと、周囲の人々が自分を見て何か話している事に気付いた。

「おい、アイツじゃねえか？」ヴァナルガンド【凶狼】をぶちのめしたって奴は」

「ああ、金髪のがタイのいい美女、そしてなによりもあの角……！間違いない、アイツだ……！」

「しかしあの角は一体何なんだ？あんな奴見た事も聞いた事もねえぞ？」

「確かに、オラリオにあんな奴居なかったよな？何処のファミリアのもんだ？」

何処からかバーゲストがベートを倒した話が広まっている様だが、バーゲストは気にせずギルド本部に入って行った。

（ヘスティア・ファミリアに入ったのだし、あの人も顔を合わせておきましようか……）

そうやってバーゲストはギルドの受付員を一人一人見ていく。

（いた、あの人ね）

ギルド職員であるハーフ・エルフのエイナ・チュールは、何時もと少し違うギルドの雰囲気になんか戸惑っていた。

ギルドに居る冒険者達は皆ある噂に夢中になっている。

『【凶狼】ヴァナルガンドことベート・ローガが、無名の女冒険者にやられた』

という、正直言ってあまり信憑性の無い噂だが、実際、豊穣の女人の前でベート・ローガが女性にやられていたという目撃情報が多数寄せられており、噂は本当ではないか？と皆思い始めた。

「けれど、本当にそんな事あるのかしら……」

「だよね、あの【凶狼】ヴァナルガンドが無名の冒険者にやられるとか、そんな光景思いつかないし……」

エイナが呟くと、同じギルド職員のミィシャ・フロットがそう答え

る。

ベート・ローガはロキ・ファミアアが誇るレベル5の冒険者。そんな人が酔っていたとはいえ無名の冒険者にやられることがあるのか？と二人は思っていた。

「その女性の容姿とか、分からないの？」

「情報によると、容姿は金髪で、背はかなり高いんだって。顔はとても美人で…頭に角が生えてたってあるね」

「角？」

「そう、角、丁度あんな感じの…」

ミイシャはそう言っ指を差した瞬間にピタツと動きが止まる。

エイナは何だろうとミイシャが指を向ける方向をみると…

背が高く、金髪の美女で角が生えている女性が真っ直ぐエイナ達に向かって歩いていった。

「エ、エエエエイナ！絶対あの人だよ！絶対そう！」

「た、確かに女性と全部一致してる…！あの人…！」

角が生えた女性ことバーゲストは、エイナの前に立った。

「すみません、今、よろしくて？」

「は、はい！本日はどの様なご用件でしょうか！」

「冒険者登録をしたいのだけれど」

「あつ、冒険者登録ですね！少々お待ちください…え？」

（冒険者じゃ、無い…？）

目の前の女性は冒険者登録をしに来たと確かに言った。

（人違い…？いや、これだけ特徴が一致しているのにそれはありえない…今までオラリオで活動していなかった…？）

「あの、現在のレベルを教えてくださいませんか？」

「？…レベル1です、今日神の恩恵を初めて刻まれました」

「えっ!？」

（じゃあ、昨日は神の恩恵が無かったって事!?じゃあ、やっぱり人違い…？）

「あの…早く登録して欲しいのですけれど…」

「あつ、はい！すみません、失礼しました！こちらの紙をどうぞ！」

バーゲストは冒険者の情報を書く紙を受け取り、素早く記入していく。

あつという間に書き終え、エイナに渡す。

「はい、確認するので少々お待ち下さい…えつと、所属ファミリアは、ヘステイア・ファミリア…えっ!?!」

エイナは今日何回めの驚愕か、バーゲストの所属がヘステイア・ファミリアだという事に驚く。

「しよ、所属はヘステイア・ファミリアなんですか?」

「そうだけれど…何か問題でも?」

「い、いえ!何でもありません!」

(やった、これでベル君もパーティーを組んでダンジョンに行ける!)

エイナは担当冒険者であるベルがパーティーを組める事に喜ぶ。

(つて、ベル君と同じファミリアなんだし、一応自己紹介してた方がいいかな…?)

「はい、冒険者登録はこれで終わりです」

「ありがとうございます」

「あ、少しいいですか?」

「何でしょう?」

「私、ベル・クラネル氏の専属アドバイザーをしている、エイナ・チュールと申します。クラネル氏の事、専属アドバイザーとしてよろしくお願ひします」

「ああ、クラネルの専属アドバイザーの方でしたか。私はバーゲスト。クラネルの事、同じファミリアの団員としてこれからもよろしくお願ひ致します」

「は、はい!それで…バーゲストさんにもう一つ訊きたい事が…」

「…もしかして、【凶狼】ヴァナルガンドの事かしら?」

「!は、はい!それでその、もしかして噂は…」

「まあ、本当の事です。昨日あの駄犬を叩きのめしたのは」

「け、けれどバーゲスト氏はその時恩恵が無かったですよね?なにどうやって…」

「私が普通では無い事など、この角を見れば分かるでしょう?…どう

やって倒したのか訊かれても、真正面から殴り合っただけです」

「そ、そうですか…あ、これからのご予定は…？」

「特にありませんが」

「でしたら、ダンジョンに関する講習を受けていきませんか？クラネル氏も受けたんですよ」

「それはありがたい事です、是非お願い致します」

「はい！ではこちらにどうぞ、案内します」

「これで講習は終了です、お疲れ様でした」

「とても実りの多い時間でした、感謝致します」

「いえいえ！バーゲスト氏がとても熱心に受けてくださってこちらの想定より早く終わって良かったです！」

「取り敢えず今日はこれで失礼します。明日からクラネルとダンジョンに潜りますので、よろしくお願い致します」

「はい！こちらこそよろしくお願い致します！」

そしてバーゲストは冒険者ギルド本部から去って行った…

「ふう…バーゲストさん、とても良い人だったな…噂が本当ならとても強いだろうし、これでベル君の事も少しは安心出来るかな…」

バーゲストはホームに戻り、地下に入ると、ベルが目覚めており、ヘステイアと何か話していた。

するとヘステイアはバーゲストに気付く。

「お帰り、バーゲスト君！」

「はい、只今戻りました」

「あ、貴女は、昨日の……！」

驚いているベルを見てヘステイアは「フフン」と胸を張りながらバーゲストの側に立つ。

「紹介しようベル君！君が眠っている間に新しく入った、バーゲスト君だ！」

「バーゲストよ、姓は無いから気軽にバーゲストと呼びなさい。今日からよろしく頼むわね、クラネル」

「あ、はい！ベル・クラネルです！僕も、普通ベルと呼んでくださって結構です、よろしくお願いします、バーゲストさん！」

「ふふ、どうだいベル君、驚いただろう？」

「はい！凄いですよ神様、これでダンジョン攻略が楽になりますね！」

ヘステイアを讚えるベルと喜んでいるヘステイアを見てバーゲストは微笑む。

「つと、挨拶も済んだ訳だし。今日はバーゲスト君の歓迎会をするぞ！ジャガ丸くん持つてくるね！」

「ああ、それでしたら食材を買ってきたので。私が料理を作りますよ」

「え、バーゲスト君料理出来るの？」

「はい」

「美味しい！神様、凄く美味しいですよ、これ！」

「ああ！バーゲスト君が来てくれて本当に良かった！良い事尽くしじゃないか！」

「そう言われると作った身としてはありがたい限りです」

バーゲストの歓迎会は盛り上がり、ヘステイアは2、3日留守にすると行って何処かに行ってしまった。

ベルとバーゲストは明日に備えて寝ようと、ベルはソファで眠ろうとしたがバーゲストから「無茶したんだから今日はちゃんとベッドで寝なさい!」と言われてバーゲストがソファで寝た。

そして翌日…

バーゲストとベルは準備を終えてダンジョンに向かおうとすると、ベルが何か悩んでいる。

「何か忘れている様な…」

「…豊穡の女主人で食い逃げしたことかしら?」

「……あつ?!?」

「本つ当にすみませんでした!!昨日はお金も払わずに飛び出して行ってしまつて…これ、お勘定です」

「わざわざ謝りに来るとは感心じゃないか、ああ、それと金はいいよ、アンタの隣の奴が代わりに払ったからね」

「えっ!?バーゲストさん、払ってくれたんですか?」

「まあ、なんとなく事情は察しましたし、気にする事はありません。結論ですが、同じファミリアの仲間なので」

「うう、ありがとうございます…」

ベルが涙を流しながらバーゲストに感謝していると、シルがお弁当箱を持ってやってくる。

「ベルさん、今日もダンジョンに行かれるんでしょう?これ、お弁当です」

「えっいや、そんな…バーゲストさんに悪いですし…」

「私は昨日の料理の残りを持って来ています、問題ありません」

「…それなら、すみません、頂きます」

ベルはシルから弁当を受け取り、二人は今度こそダンジョンに向かい始めた。

ダンジョンに着き、二人で下へ向かう階段を降りていく。

「今日は取り敢えず三階層を目指しましょうか、バーゲストさんは初

めてですし、僕エイナさんに勝手に五階層まで降りた事凄く怒られて…」

「そうですね、最初は無理をせずにその辺りで自分の力を試すのが良いでしょう」

こうして二人は今日、三階層目指して攻略を始めた…

「……………」

ベル・クラネルは目の前の光景を信じられない、と言った感じで眺めていた。

「軟弱者!!」

ベルの目の前には重厚な鎧を身に纏い、コボルトやゴブリン相手に炎が宿る剣で無双しているバーゲストの姿があった。

「ベル!この辺りのモンスターは片付けた、他の場所に行くぞ!」

「あ、はい!」

(思いつきり口調が変わってるし!)

地上に居た時の丁寧な喋り方とは打って変わって、しっかりとした戦士の様な口調になったバーゲストに戸惑いながらベルはバーゲストを追った。

「やはりあの程度の相手では手応えが余りありませんね」

「そ、そうですね、凄いなあ、バーゲストさんは…武器に炎を宿らせたリ、炎を飛ばしたり、一応冒険者としては僕の方が先輩なんですけれ

ど…」

「取り敢えずヘステイア様が戻って来るまでは同じ様に稼ぎましよう」

「そうですね、今日の収入も何時もより多かったですし、この調子で明日も頑張りますよ！」

二人はダンジョン攻略について話し合いながらホームへと戻っていった…

ベルとバーゲストがダンジョンに行っている頃、ヘステイアは招待されていたガネーシャ主催の神の宴へ来ていた。

豪華な食事を少しだけホームに持って帰ろうと気付かれない様に箱に入れてみると…

「こんばんは、ヘステイア」

「…フレイヤ…」

ヘステイアはフレイヤに声をかけられ、少し戸惑った様子でフレイヤを見る。

「お邪魔だったかしら？」

「ボク、君のこと苦手なんだ」

「うふふ、貴女のそういうところ、私は好きよ？」

「まあ、君はまだマシな方だけだね」

ヘステイアがそう言うと、遠くからドレスを着たロキが走ってやって来る。

「おーい、フレイヤ、ドチビっ！」

「あらロキ」

「ロキ、丁度良かった、君に訊きたいことがあったんだ」

「ハア？ドチビがウチにいい？」

「君のファミリアの【剣姫】、ヴァレン何某には、付き合っているような男や伴侶はいないのかい？」

「あほう、アイズはウチのお気に入りや。ちよっかい出す奴は八つ裂きにしたる」

「ちっ！」

ロキが顔を顰めながらそう言うと、ヘスティアは舌打ちして、次の話題に切り替える。

「そういえば君のこの【凶狼】、ヴァナルガンドバーゲスト君に負かされたって聞いたけど？」

「あーアレな、ほんつと勿体ない事したわ：バーゲストたん、ウチのファミリアに入ってくれたらなあ…っていうかドチビ、バーゲストたん知り合いなんか？」

「ああ、昨日ウチのファミリアに入ってくれたんだ」

「……………は？」

「いやーごめんねロキ！君が目をつけてた子だったのに！まあバーゲスト君はロキ・ファミリアの団員に喧嘩売ったからロキ・ファミリアには入らないって言ってたからね！もう関係ないか！はっはっは！」

「こっ…のお…！なんでや、バーゲストたん、他のファミリアならともかく何でよりもよってドチビのファミリアなんやあ…！」

「いやー、あんなに切実にお願ひされたら受けるしかないよね！『女神ヘスティア：どうか私を、このファミリアの一員として、迎えてくださいませんか？』だって！」

「ぐはあっ！？」

バーゲストでマウントを取るヘスティアと、バーゲストをヘスティアに取られた悲しみと、元凶であるベートに対する怒りが湧き上がるロキを見てフレイヤはこう言った。

「仲が良いのね、二人とも」

「…どっこが!?!」

そこからはいつもの様にヘステイアとロキの取っ組み合いが始まり、他の神たちがそれを見て笑っていた。

「今日はこんくらいにしといてやる！」

「次会う時は、そんな貧相なものをボクの視界に入れるんじや無いぞ！」

「うっさいわボケエ！」

「またやってたの？アンタ達……」

「……ヘファイストス！やっぱり来て良かった、君に会いたかったんだよ！」

次に現れたのは、ヘステイアと古くから交友があるヘファイストスだった。

「私に……？言つとくけど、お金はならもう1ヴァリスだって貸さないからね」

「失敬な！ボクがそんな神友の懐を漁るような神に見えるのかい？」

「よく言うわよ、散々ウチのファミリアに居候した挙句！追い出した後もお金が無い、家が無い、仕事が無いって泣きついてきて、そう思われるのは当然でしょうが！」

「ぐう……！た、確かに昔はそうさ、でももう違うんだ！ボクにも、ファミリアが出来たんだからね！」

「そうだったわね、ベルって言ったかしら？白髪で赤い目のあのヒューマン。まあ、ファミリアが出来て変わる神は多いけど……」

「ヘファイストス、ヘステイア、私そろそろ失礼するわ」

ヘステイアとヘファイストスが話していると、側に居たフレイヤがそう言う。

「え、もう？」

「ええ、確かめたい事があったのだけれど……それも済んだし……」

「それに、此処にいる男は皆食べ飽きちゃったもの、じゃあね」

そしてフレイヤはその場から去っていった……

「すげー……」

「で、私に会いたかった用事ってなんなのかしら？内容次第じゃ、金輪

際縁を切ってもいいけど？」

「わ、分かってるよ！実は…ベル君の為に、武器を作って欲しいんだ
！」

第三話 怪物祭

「神様、一体何処に行っちゃったんでしようね…」

「気にしても仕方ないだろう。それより今から5階層まで行くのだ、しっかり気を引き締めておけよ」

「あ、はい!…それにしてもバーゲストさん、一度もステイタス更新出来てないのに、大丈夫なんでしょうか…」

「私はお前の方が心配なんだがな…」

へステイアが留守にしてから一日が経ち、今日も今日とてダンジョンに潜る二人。

「でも、普通はステイタス更新しないまま5階層とか行かないと思うんですけど…」

「だが三階層などでは手応えが無きすぎる。少しでも収入を得る為にも五階層に行くのに問題は無いだろう」

「確かに…」

先程まで三階層でモンスターを倒していた二人だが、あまりに余裕過ぎてしまった為、もう五階層まで降りるか、と先程話し合って決めたのである。

「そういえば、ずっと聞きそびれていましたけど。バーゲストさんのその角は一体何なんですか？」

「これか?…これは…ある騎士によれば、私の内に秘めた本能を抑える為の理性の角らしい。私自身この角の事はよく知らないが…昔一度だけ、この角が取れた事があつてな…」

「えっ、取れるんですかその角!？」

「ああ、狩りに出かけている時にな。気がつくとも周囲は大変な事になっていった。薙ぎ倒された木々、亀裂の入った地面、粉々に砕かれた岩…村から離れていたから良かったものの、もし村の近くだったらどうなっていた事か…」

「す、凄いですね…」

「だから今のところこの角を取る時は本当に危険な時だけだ、そうならない為にも頼んだぞ、ベル」

「はいー」

この後五階層でも無事、無双しまくった二人は昨日より多い収入を得て帰路につくのであった…

ホームに帰ると途中、ベルとバーゲストは青い髪の神と遭遇する。

「ミアハ様ー」

「ベルではないか、つとそちらは？」

「初めまして神ミアハ、私は最近ヘスティア・ファミリアに加入した、バーゲストと申します。以後お見知りおきを」

「おお、ヘスティアの新しい眷属か、それは喜ばしい事だ…どれ、ポジションをやろう。私からの祝儀だ」

「ええーそんな、悪いですよー！」

「祝儀と言っただろう。今後もウチのファミリアをこ鼻根にな」

「本当によろしいのですか？」

「ああ」

バーゲストはミアハからポジションを受け取ると、ベルがヘスティアが何処に居るか知らないか訊く。

「ヘスティアが？」

「少し前に友人のパーティ神様に出席されてからまだ帰ってなくて…」

「ふむ…まずパーティというのはガネーシヤの開いた宴で間違い無いだろう。私も声をかけられてはいたが、弱小ファミリア故、調査に明け暮れてな…力になってやれずにすまない」

「い、いえーそんな気にしないでくださいー！」

「謝罪といつてはなんだが、このポジションを」

「それはもう大丈夫ですから！」

「む、そうか…では私はこれで失礼する。二人とも気をつけてな」

「はい、ミアハ様。ありがとうございます」

二人はミアハと分かれ、ホームに帰還したのだった。

その翌日も、ヘスティアは戻って来なかった。

ベルはダンジョンに潜りながらヘスティアの事を考えていると…

「ベル、ヘスティア様の事を幾ら考えても、ヘスティア様が戻って来る訳では無いのだ、それより今はモンスターに集中しろ」

とバーゲストに注意され、ベルは気を引き締めて自分出来る事をしようとダンジョン攻略に臨んだのだった。

一方ヘスティアは…

「……アンタ、いつまでそうやってるつもりよ？私、これでも忙しいんだけど、そこに居られると気が散るの、分かる？」

絶賛神友であるヘファイストスに対して土下座を敢行中であった。「自慢する訳じゃないけど、ウチの品のオーダーメイドがいくらかかるか分かってるの？」

「値が張るのは知ってる、けど！今じゃなきやダメなんだ！頼むよヘファイストス、この通り！」

「この通りって…さつきからずっと思ってたけど、なんなのそのポーズ？」

「土下座、これをすれば絶対頼み事が成功するって、タケから聞いた」「アイツ。余計な事を…！」

ヘファイストスはヘスティアに余計な知恵を授けたタケミカツチを今度会ったらどうしてやろうか考えると、ヘスティアに訊く。

「ヘスティア、教えて頂戴。どうしてそうまでするのか」

「ベル君の力になりたいんだ！あの子は変わろうとしている、一つの目標を見つけて、高く険しい道のりを走り出そうとしている！バーゲスト君がベル君を助けてくれるけど、それが絶対に安全とは限らない。だから欲しい、あの子を手助けしてやれる力が、あの子の道を切り開ける武器が！」

「……………」

ヘファイストスは黙ってヘスティアの話に耳を傾ける。

「ボクはあの子に助けられているだけだ、ひたすら養ってもらってるだけだ！ボクはあの子の神なのに、神らしい事は何一つしてやれない！何もしてやれないのは…ベル君の事をバーゲスト君に押し付けているだけなのは、嫌なんだよ……」

「…変わろうとしている、か…分かったわ」

「！じゃ、じゃあー！」

「武器、作ってあげる。アンタの子にね」

「ありがとう、ヘファイストス！」

「言つとくけど、ちゃんと代価は払ってもらわよ。何十年、何百年かかっても」

「うん、分かってる！」

「アンタも手伝いなさい、助手として、しっかり働いてもらうからね」

「ああ、任せてくれよ！」

こうして、ヘステイアとヘファイストスによるベル専用の武器の製作が始まった。

「神様：まだ帰って来て無いですね」

「仕方ありません、今日も頑張って資金を稼ぎましょう」

「はい！」

ベルとバーゲストはホームを出て街に出ると、何時もと比べて街の様子が違うことに気付く。

「なんだろう、人が多いですね。何かのお祭りの準備かな…？」

「確かに、今日は何か祭りがあるようですね…」

「おーい！」

二人が歩きながら街の様子を観察していると、後ろから声が聞こえる

「待つニヤ白髪頭！頼みがあるニヤ〜！」

そう言つてベルに声をかけたのは豊穰の女主人のウェイターの一人であるアーニヤだった。

「え？」

「ニヤから、おミヤーはこの財布をおちよこちよいのシルに渡すのニヤ〜！」

「え、えーと…ごめんなさい、まだよく話が見えないんですが…」

ベルがそう言うと、今度は同じウェイターであるエルフのリユーが

現れる。

「アーニヤ、それでは説明不足です」

「リユーはアホにや、店番サボって、モンスターフィリア怪物祭を見に行つたシルに忘れた財布を届けて欲しいニヤンて、一々言わなくても分かる事ニヤ」

「という訳です」

「なるほど…」

「シルは無論サボつた訳では無く、休暇を取つての祭り見物です。今頃財布が無くて困っているでしょう。お願いします、ベルさん」

「分かりました、バーゲストさんも良いですか？」

「ええ、折角ですから私も祭りを楽しんできます」

「じゃあ、今日はダンジョンに行くのやめましようか…で、あの、モンスターフィリア怪物祭って何なんですか？」

モンスターフィリア

「怪物祭というのは、ガネーシャ・ファミリア主催の年に一度のどどかいお祭りなのニヤー！」

「闘技場を一日まるまる占有し、ダンジョンから連れて来たモンスターを観客の目の前で調教するのです」

「ま、要するに、えらくハードな見せ物つて訳ニヤー！」

「なるほど…」

財布を受け取り、ベルはシルを探す為、バーゲストは祭りを楽しむ為に、それぞれ分かれて行動する事にした。

「……………」

フレイヤはある店で自身を呼び出したある神を待ちながら、ある人間の事を思い出していた。

(バーゲスト…)

フレイヤはベルの近くに居たバーゲストの事について考えていた。

(とても気高い魂の色をしていた、他者を思い尽くそうとし、正しくあろうとし、誰よりも自分に厳しい…けれど、何かしら、少しの悪も感じられ無いような魂をしているのに…あの魂の深い深い奥底にある…ほんの少し、一瞬だけ見たそれは…どんな物かは分からないけれど…とても悍ましいものだと感じた…)

フレイヤはバーゲストの中に眠る何かを恐れていた。

(恐らくアレは…世界三大クエスト並みの脅威になり得る。正直に言ってアレを野放しにはしたくはないのだけれど…あの子が彼に良い影響を与えているのもまた事実…暫くは様子見かしら…)

「よおー…遅なつてすまんなー!」

するとフレイヤを呼び出した神であるロキと、その護衛役であるアイズが現れる。

「いえ、私も少し前に来たばかりよ」

ロキはフレイヤにアイズの事を紹介した後、本題に入る。

「で?今度は何企んどる?また何処ぞのファミリアの子を気に入つて、ちよつかい出そうとしとんのか?…つたく、諍いの種ばかり蒔きよつて、この色ボケ女神が」

「あら、分別はあるつもりよ」

「抜かせ…責任は取れるんやろな?」

「当然よ、もしかしたら少し付き合つてもらう事になるかもしれないけれど」

「けっ!相変わらずやな…で?どんな奴や、お前の狙とするその子供ちゆうのは?」

「とても頼りなくて、少しの事で泣いてしまう。そんな子…でも、綺麗だった、透き通っていた、私が今まで見たことの無い色をしていた。見つけたのは本当に偶然、偶々視界に入っただけ…っ!」

するとフレイヤとアイズは店の外にベルが居た事に気付く。しかしベルは道を進んで人混みに紛れ、直ぐに見えなくなった。

するとフレイヤは突然立ち上がる。

「どないした?」

「ごめんなさい、急用が出来たわ」

「はあ？お前いきなり…」

「また会いましょう」

フレイヤはそう言って店から出ようとする。

しかしふと立ち止まると、振り返ってロキの方を見る。

「そうだロキ、あなたに教えておく事があるわ」

「何や？」

「あなたが気に入っていた角の生えた子…あの子は気をつけなさい。私もあの子が危険になるとは思えないのだけれど…とにかく、あの子への接触は慎重にね」

「？」

フレイヤはそう言うのと今度こそ店から出て行った。

「何やアイツ…角の生えた子って、バーゲストたんの事やろ、アイツがあんな事言うなんてな…って、勘定もこつちかいな！」

「さて…」

バーゲストは祭りを楽しみながら、闘技場の方を警戒していた。

「そろそろ何かあってもおかしくないのだけれど…ん？」

バーゲストはモンスターが現れるのを待っていると、ギルド職員が何やら慌ただしく動いているのを発見する。

バーゲストは職員の一人に近付き声を掛ける。

「何かあったのですか？」

「！も、もしや冒険者の方ですか？」

「はい、何やら慌てているようでしたので」

「実は、闘技場の地下からモンスターが逃げ出してしまい…今、周囲の冒険者の皆様に協力を呼びかけています」

「分かりました、モンスターが何処に向かったか分かかりますか？」

「はい、あちらの方向にモンスターが何匹か…」

「直ぐに向かいます」

「ありがとうございます！」

バーゲストは剣を取り、教えてもらった方角に向かって進行する。やがて入り組んだ街の中に入ると、住民を襲っているモンスターを何匹か発見する。

「見つけたぞ、モンスター共！」

バーゲストはそう言つてモンスター達に突撃する。

オークが振り返り、バーゲストを視界に入れた瞬間に首を撥ねられ、灰と化する。

他のモンスター達は一斉にバーゲストの方を向く。

「今の内に逃げろ！」

「あ、ありがとうございます！」

バーゲストは住民が逃げるのを確認した瞬間、視界が炎で埋め尽くされ。バーゲストは咄嗟に左腕を盾の様に構える。

バーゲストが炎に飲み込まれ、炎を放つたモンスター、ヘルハウンドは殺したと確信し、他のモンスター達も住民達を追いかけようとしたが…

「おい」

炎の方から声が聞こえ、モンスター達が振り返るとヘルハウンドが放つた炎の中から炎が放たれ、ヘルハウンドを焼き払った。

「どうだ？ 貴様如きが放つ炎など、私の炎に比べれば余りに温いだらう？」

バーゲストはそう言いながらヘルハウンドの炎を左腕で払い、炎の中から現れる。

するとソードスタッグが持ち前の角を武器にバーゲストに突進する。バーゲストはソードスタッグの突進を避ける動きを微塵も見せず、ソードスタッグの突進を真正面から受ける。

ソードスタッグにズルズルと押されたバーゲストだが、徐々に速度を失っていき、やがて止まる。

ソードスタッグはこれ以上進もうとしても進めない為、バーゲスト

から離れようとしても何故か頭が動かせず、離れる事が出来なかった。

その理由はバーゲストは左腕でソードスタッグの角を掴んでおり、凄まじい力で頭を固定させていたからだ。

「その程度か？」【凶狼】ヴァナルガンドの一撃の方が重かったぞ？」

バーゲストは剣をソードスタッグの首に下から突き刺し、更に剣を通してソードスタッグの体内を炎で燃やし、ソードスタッグは灰になった。

「さあ、次は誰だ!？」

バーゲストはそう言つてモンスター達に近付く、しかしモンスター達は気付いた。「目の前に居るのは自分が勝てる相手では無い」という事に。

それに気付いたモンスター達はバーゲストから一斉に逃げ出す。

「ほう、逃げるか…ならばここからは戦いでは無い、狩りの時間だ…！」

バーゲストはそう言つてモンスター達を追い始めた。

レフィーヤ、ティオナ、ティオネの三人は、地中から現れた未発見のモンスターヴィオラス食人花に苦戦を強いられていた。武器が無いティオナとティオネが食人花の気を引き、レフィーヤが魔法で仕留める算段が、食人花は魔力に反応し、レフィーヤを優先して攻撃した。負傷し、倒れ伏すレフィーヤに食人花がその頭を近付ける。

「何これっ、邪魔!」

「レフィーヤ、起きて、起きなさい!」

ティオナとティオネはレフィーヤを助けようとするも、食人花から

伸びる触手に邪魔され、レフイーヤの元へ行けない。

レフイーヤは臆げな視界で食人花を見つめる。

(…嫌だ……また、私は……きつとまた……)

レフイーヤの頭に浮かんだのは、金色の髪を持ったロキ・ファミアの剣士。風を纏い戦場でモンスターを斬り裂くレフイーヤが尊敬する存在。

アイス・ヴァレンシユタイン
(あの 人に守られる……!)

今回もきつとそうだと、レフイーヤは思った。

だが次の瞬間、彼女の視界に映ったのは風では無く、炎だった。

食人花は突然上を向くと、炎を纏った剣が口の部分に突き刺さり、炎は食人花の中身を焼き尽くしていく。

「やはり植物は、よく燃えるっ!!」

彼女はそう言つて炎の勢いを強める。

そして剣を引き抜き、地面に着地すると食人花は灰になった。

「あな……た、は……」

レフイーヤの前に現れたのは、アイス・ヴァレンシユタインでは無く、鎧を幾分かモンスターの返り血に染めた、角を持つ騎士、バーゲストだった。

「レフイーヤ!」

次にアイスが到着し、レフイーヤに近寄る。

しかしバーゲストはアイスに向かってこう言う。

「まだ来るぞー!」

バーゲストがそう言った瞬間、地面から更に食人花が現れる。

「また!?!」

「6匹!?!」

バーゲストとアイズは並んで食人花と対峙する。

「右の3匹を頼む、私は左をやる」

「分かった」

アイズは風を纏い、食人花に斬り込んでいく。

バーゲストは剣を横に払いながら炎を放つと、食人花が一斉に突っ込んで来る。

「二人ともーそいつは魔力に反応するわ！」

「結構！向こうから近付いて来るなら手間が省ける!!」

バーゲストはそう言つて食人花の触手を一斉に焼き払うと、食人花の一匹がバーゲストに頭を突っ込ませると、バーゲストはそれを受け止めて左腕と右足で食人花の口を開かせ、その奥にあるもう一つの口に剣を入れると、剣先から炎を放つ。

先程と同じように食人花を体内から焼き尽くし、これでようやく一体倒した。

バーゲストはアイズの方を見るとアイズは食人花に吹き飛ばされしており、建物の壁に激突していた。

「ヴァレンシュタイナーぐっ……い！」

1匹がアイズを口で拘束し、残りの4匹がバーゲストに殺到する。テイオナとテイオネではダメージを与えられず、バーゲストが仕留めるしかないと思われるが……

(冗談じゃないわ……こっちはレベル1、それにファミリアに加入してからステータス更新していかないのよ!?!さつきまで別のモンスターを狩っていたから、コイツらを倒し切る魔力が残っていない!)

バーゲストはそう思い、食人花の攻撃を躲し続けると……

「森の先人よ、誇り高き同胞よ!」

不意にそんな声が聞こえ、バーゲストは声が出た方を見ると、レフイーヤが詠唱を始めていた。

だがしかし、レフイーヤの魔力に反応して食人花がレフイーヤの方を向く。

「きせんっ!!」

バーゲストは食人花達に向かって炎を放つと、食人花は再びバーゲストの方を向く。

(こっとなつたら、マインドダウン精神疲弊承知で意識をこちらに向ける!威力重視じゃなく範囲重視で、4体纏めて引きつけてみせる!)

「我が声に応じ草原へと来れ。繋ぐ絆、楽宴の契り。円環を廻し舞い踊れ。至れ、妖精の輪——どうか、力を貸し与えてほしい!」

「ハアアアアアア!!」

バーゲストは食人花達に炎を放ち続ける。

食人花達はバーゲストに近付こうにも立て続けに放たれる炎に怯んでおり、近付けずにいた。

一匹だけ、アイズを捕まえている食人花がレフイーヤの元に行こうとするが、ティオナとティオネがそれを阻んでいる。

「[エルフ・リング]！」

レフイーヤが一つ目の魔法の詠唱を終え、二つ目の詠唱に入る。

「[終末の前触れよ、白き雪よ。黄昏を前に風を巻け]」

(不味いですね、身体が重くなってきました…)

バーゲストは重く感じる身体に力を込め、食人花達に炎を放ち続ける。

「[閉ざされる光]、[凍てつく大地]！」

「ハアツ、ハアツ、ハアツ…！」

(剣が重い、腕が上がらない、頭が痛い)

「そんなの、知った事か!!」

バーゲストは最後の気力を振り絞り、炎を放つ。

「[吹雪け、三度の厳冬。——我が名はアールヴ]！」

レフイーヤは食人花に向かって手を翳し、叫んだ。

「[ウイン・フィンブルヴェトル]!!」

その瞬間、強烈な冷気が食人花を襲い、食人花達は一瞬で氷漬けにされ、バラバラに砕け散った。

(で、出来た…：守ってくれたアイズさん達を、私の魔法で助ける事が！)

「ありがとレフイーヤ、助かったあ！」

「て、ティオナさん!？」

「凄い魔法だったわよ」

「うん、リヴェリアみたいだった…：ありがとう、レフイーヤ」

「そ、そんな…」

三人から褒められ、レフイーヤは照れながら呟くと、逃げ遅れた迷子の女の子を連れたロキが現れる。

「皆…苦勞さーん」

ロキはそう言って剣を折ってしまったアイズに新しい剣を投げ渡す。

「ロキ…」

「まだ仕事が残つとるでー。アイズは逃げた残りのモンスターを片付けてや。テイオネとテイオナは、悪いけど地下水路を調べてきてな、他にも居ると厄介や」

「分かったー！」

「レフイーヤは無理せんでええ、ギルドに治療してもらいや」

「は、はい…」

「…ごめん、レフイーヤ」

「はい？」

「服、こんなになっちゃって…」

アイズの服はすっかりぼろぼろになっていた。

この服はアイズがレフイーヤ達と出かけて買った大切な服だったのだ。

「……また買いに行きましょうー！」

「うん」

アイズはポーションを取り出し、少し飲むとレフイーヤに渡す。

「残りは飲んで」

「えっ、いいんですか!?!」

「うん」

(こ、これってもしかして、間接ほにやららく!?)

レフイーヤが変なことを考えていると、遠くから人の歓声が聞こえてくる。

「人の歓声、何かあったんでしょかって、あ、アイズさん！が、頑張つてくださーい！」

アイズは歓声のした方に行つてしまい、レフイーヤはそれを見送つた。

「ふう…あれ？何か忘れてる様な…」

レフイーヤは何を忘れているのか思い出そうと、記憶を辿る。

するとレフイーヤの記憶に食人花へと放たれる炎の記憶が蘇る。

「あ、あーっ!!あの騎士の人!」

「あつ!バーゲストたん、すっかり忘れとったわ!」

ロキもレフイーヤの発言でバーゲストを思い出し、一人と一柱が周りを見渡すと…

——倒れ伏している騎士の姿があった。

「っ!バーゲストたん!」

「大丈夫ですか!」

レフイーヤとロキは慌てて駆け寄り、うつ伏せになっているバーゲストの身体を二人掛かりでひっくり返し、仰向けにする。

「……特に傷は無いな、こりや^{マインドダウン}精神疲弊やな」

「よ、良かった…」

「たった一人で4匹も受け持ったんや、レフイーヤを信じてな。この子にも感謝しとき。じゃ、ウチはアイズの方に行くから、バーゲストたんの事よろしく!」

「は、はい!」

ロキはそう言ってアイズが向かった方向に走っていった。

レフイーヤはバーゲストの顔を見ながら思い返す。

(この人とアイズさんが並んで立つ姿、とてもカッコ良かったな…いつか私も、この人と同じ様に…!)

バーゲストの姿を見て、レフイーヤは決意を新たにすのだった。

「……………ん、んん……………」

バーゲストは目を覚ますと、視界に入ったのは知らない天井だっ

た。

「此処は…」

「おっ、目が覚めたんか？」

バーゲストが横を見ると、そこには椅子に座ったロキが居た。

「…神ロキ…此処はまさか、ロキ・ファミリアのホーム…？」

「そうや、気分はどうや？立てるか？」

「ええ…大丈夫です、身体に異常はありません」

「そっか、ならええんや」

「えつとそれで…あの後、どうなったのですか？」

「騒動は無事鎮圧出来たで、犯人は分からなかったけど、取り敢えず一件落着や。バーゲストたんもありがとな、ウチの子を助けてくれて」

「いえ、騎士として当然の事をしたまで。感謝されるような事では…」

「真面目かつ！良いからお礼の一つや二つくらい受け取るときい！それで、もう動けるんならどうする？」

「直ぐにホームに帰ります、私の鎧と剣は…？」

「今ウチの子に洗わせとる、それよりバーゲストたん！」

「は、はい？」

「もう外も暗いし、晩飯はウチで食ってき！」

「…ええ？」

気付けばバーゲストは食堂に連れられ、目の前に食事を出されていった。

「ほ、本当によろしいのですか？」

「ええつてええつて！これもウチの子を助けてくれた返礼や！」

バーゲストは戸惑いながらも食事を口にします。

「お、美味しいです」

「せやろせやろ？」

「あつ！テメエあん時の角女！」

「ん？」

角女聞こえた方を見ると、そこには最近バーゲストが叩きのめしたベート・ローガが居た。

「何でテメエが此処に居んだ！アア!？」

「ちよいべート、バーゲストたんに手え出すなよ、ウチはべートがバーゲストたんと喧嘩した所為でバーゲストたんがウチに来る気無くした事まだ許してへんからな？」

「まだ言ってるのかよ！大体アレは角女から仕掛けて来たんだろが！」

「お前がバーゲストたんに喧嘩売られるような事をするから悪いんや！」

「ああん!? っておい！角女、俺ともう一回勝負ゴフツ!?」

「すまんな、ウチのもんが」

「い、いえ…」

べートはガレスに引き摺られて連れて行かれた。

「あつ！あの時の！ほら、皆行こ！」

「ちよつと、待ちなさいテイオナ！」

「あわわわわ…！あ、アイズさんはあの人の事どう思ってます…?」

「?…強くなって思った」

「お、皆来たなー！ほら、バーゲストたん。花のモンスターと一緒に戦った子や、左からテイオナ、テイオネ、アイズ、レフイーヤや。仲良くしてやってな」

「バーゲストです、皆さんよろしくお願い致します」

「た、戦ってる時と全然雰囲気違う…！」

「ねえねえ！剣から炎を出してたよね！凄かったよ、4体もあのモンスターを引きつけて…」

…
バーゲストは四人と楽しく会話しながら食事を堪能したのだった

「食事まで頂いてしまい、申し訳ありません」

「ええつてさつきから言うとするやろ…じゃあ、また会ったらそんな時はよろしくな」

「ええ、それではまた。さようなら四人共、楽しかったわ」

バーゲストはロキ・ファミリアのホームである『黄昏の館』の入り口でロキ、アイズ、レフィーヤ、ティオナ、ティオネに見送られながら去って行った。

「さて、んじやウチらも戻るか」

「ロキ」

「んあ？何やアイズたん？」

「良かったの、こんな事して。フレイヤ様の言ってた事…」

『あなたが気に入っていた角の生えた子…あの子は気をつけなさい。私もあの子が危険になるとは思えないのだけれど…とにかく、あの子への接触は慎重にね』

「…ええんや、バーゲストたんが絶対にええ子や、それは絶対自信を持って言える。アイズたんもバーゲストたんが悪い奴とは思えんやろ？」

「それは、うん…」

「ならええんや」

ロキはそう言っただけでホームに入ってしまった…

第四話 お買い物

「な、ななななな…!？」

ヘステイアは黄昏の館から帰って来たバーゲストのステイタスを更新した。

「ヘステイア様？どうされたのですか？」

「……………魔法だ」

「え？」

「魔法が出てる…」

バーゲスト

レベル1

力：E 4 7 3

耐久：D 5 1 2

器用：F 3 6 3

敏捷：F 3 3 4

魔力：D 5 6 3

《魔法》

【チエーン・ハーディング】

・拘束魔法

・詠唱式【鎖は我が猟犬達、我が敵を捕らえる牙となれ】

《スキル》

【太陽の騎士（着名）】
ガウエイン ギフト

・任意発動

・魔力を消費することで武器に炎を付与エンチャントする

・魔力を消費することで炎を放出させる

【聖者の数字】

・日の当たる午前中において、力の超高補正

【強者^{仲間}としての責務】

・早熟する

・守る存在がいる限り効果持続

・守ろうとする想いの丈により効果向上

（いや、魔法が出てるのも驚いたけど、このステイタスの上がりようは一体何だい…!? 熟練度トータル2000オーバー!? 幾らベル君と似たスキルがあるとはいえ、コレは上がり過ぎだ!）

「ヘステイア様? ステイタスを見せて貰っても?」

「あ、ああーごめんごめん、少し待ってておくれ、今写すから…」

ヘステイアは【強者^{仲間}としての責務】のみ写さずにバーゲストにステイタスを見せる。

「…:何でしょうか、このステイタスの上がりよう」

「正直言つて異常だね、何か心当たりは?」

「と言つても、アイズ・ヴァレンシユタインが苦戦するモンスターを倒したくらいしか…:後は、ファミリアに加入してから一回もステイタス更新してないのにベルと同じ階層に潜ったからかもしかかもしれません…:」

「倒れたって聞いたけど、そんな無茶してたのかい!? ていうかステイタス更新出来なかったのはホントごめんね!」

「無茶ではありません。実際私は余りダメージを受けませんでしたし、^{マインドダウン}精神疲弊しただけです」

「ああ、魔力が一番上がっているのはそれだけ魔力を消費したからか…:それにしても、こんな簡単に魔法を発現させるなんて、君はやっぱ普通じゃないよ…:っていうか、余りダメージを受けなかったって言ったけど、この耐久の上がりようは?」

「真正面から攻撃を受けても効かないだけです」

ヘステイアは頭を抱え、「もう、ボク寝る!」と言ってベッドに潜り込んでしまった。

バーゲストは服を着て上に上がると、ベルが座りながら待っていた。

「バーゲストさん! ステイタスはどうでしたか?」

「コレを見れば分かりますわ」

ベルはバーゲストのステイタスが記入された紙を受け取り、じっくり見る。

「つて、何ですかこのステイタスの上がり方！もう僕と同じくらいになつてるじゃないですか！」

「あなたと一緒に階層に居たんだから当然じゃなくて？寧ろ私は今までステイタス更新せずにそれをやってきたのです。これくらい上がつてもらわなくては、割に合いません」

「た、確かに…」

（まあ、もしかしたらベルの「憧憬一途」リアリス・フレイゼと同じタイプのスキルが発現しているかもしれませんが、それは余り深く考えないようにしましょう）

「つて、魔法も発現してる!?良いなあ〜僕も魔法使いたいなあ〜…」

「はいはい、もう夜も遅いのですし。今日はもう休みましょう」

「はいつて、寝る場所どうします?」

今まではヘステイアが留守にしていたのでバーゲストがベッドで、ベルがソファアで眠っていたが、今はヘステイアがベッドで眠っている。

どうするかバーゲストは考え、そしてこう言った。

「仕方ないので…ベル、ヘステイア様と寝なさい」

「え!何ですか!?!」

「何でと訊かれましても…」

（元男だから女性と寝るのに抵抗感があるとは言えませんが…）

「い、いやいや!バーゲストさんが神様と寝てくださいよ!」

「仕方ありませんね…ベル、今からあなたに二つの選択肢を提示します」

「は、はい…」

「一つ、大人しくヘステイア様と寝るか」

「は、はあ…」

「二つ、ソファアで私と一緒に寝る「ベッドで寝ます!」よろしい。では降りましょうか」

（まあ、私としてもベルと一緒に寝ても構いませんが、ヘステイア様に何て言われるか分かったものではありませんし、この身体で密着するのは不味いですからね…）

(うう、勢いだったとはいえ、神様と寝る事に……！)

この日、ベル・クラネルは余り眠れなかった……

因みにヘスティア様は翌朝ご満悦な笑みを浮かべていた。

ベルとバーゲストはダンジョンに向かい、これからある事をしようとしていた。

「【チェーン・ハーディング】……どんな魔法かちゃんと調べておく必要があるな」

「僕も早くバーゲストさんの魔法を見てみたいです！あつ、あそこにゴブリンが何匹かいますよ！」

ベルの指差す方向にはゴブリンの集団がおり、魔法を試すのには丁度良かった。

「では、いくぞ」

バーゲストは左手をゴブリンに向け翳し、詠唱を始める。

「鎖は我が猟犬達、我が敵を捕らえる牙となれ」【チェーン・ハーディング】！」

その瞬間バーゲストの左腕に何本かの鎖が巻き付いた様な状態で現れ、鎖はゴブリンに向かって飛んでいき、ゴブリンの身体に縛り付く。

バーゲストは鎖をから逃れようとするゴブリンを引っ張り、自身の近くまで倒れた状態で引き摺ると頭に剣を突き刺した。

「す、凄くカッコよかったです、バーゲストさん！」

「そうか、そう言われると嬉しい……が、一先ず他のゴブリンを殲滅するぞ！」

「はいっー!」

「なあなかいそうー!?」

ギルドにエイナの声が響く。

ベルとバーゲストは今日ダンジョンを七階層まで降りた事を報告していたのだった。

「キ、ミ、はっ! 何でこの前5階層で死にかけたばかりなのに、何で7階層まで降りてるのっ!? バーゲストさんも! ついこの間冒険者登録したばかりですよね! 何でそんな階層に行っちゃうんですか!?!」

「余裕でしたからっ!」

「そ、それにエイナさん! 僕、あれから結構成長して…ステイタスがいくつかEまで上がったんですよ! エイナさん!」

「ベル、そう簡単にステイタスの情報を教えてはなりません」

「あ、ああ! すみません、つい…」

「Eって、そんな訳…」

エイナは少し考え込むと、ベルにある提案をする。

「ベル君、今から私にステイタスを見せてくれないかな?」

「え? けど背中中のステイタスの文字は神様じゃないと読めないんじゃない?」

「私、少しだけなら神聖文字ヒエログリフが読めるんだ。お願い、絶対秘密にするから…!」

エイナは手を合わせてベルに頼み込む。

結局ベルはエイナにステイタスを見せる事にした…

「嘘…!」

そして現在、エイナは個室でベルのステイタスを見て絶句していた。

(力と耐久がE、敏捷…:D!?)

「ベル君の言う通り、この短期間でステイタスが急上昇している…私じゃ読めない部分もあるけど、アビリティは本物だし…」

エイナはそこで二人の様子を側で見ているバーゲストに視線を向ける。

「?何ですか?」

(…まさか、バーゲストさんも…)

「力E、耐久と魔力、D!?!」

ベルに一旦退室してもらい、バーゲストのステータスも確認したエイナはベルの時以上に驚いていた。

(おかし過ぎる!バーゲストさんはまだ冒険者になって六日目なのよ!?!なのに何でベル君と並ぶどころかちよつと超えてるぐらいにステータスが上がっているの!?!)

「…驚くのも分かりますけれど、間違いなく事実ですわ。不正も何もしてはいません」

「む、むむむ…!」

取り敢えず二人は個室から出てベルと合流する。

「それで、僕達これからも7階層で探索しても大丈夫ですよね!」

「確かに、このステータスなら7階層進出を許可しない訳にはいかないけない…:そうなる問題は…:」

エイナはベルとバーゲストを交互に見る。

「…バーゲストさんは大丈夫だけど、ベル君がなあ…:」

「エイナさん?」

「うん、ベル君、明日予定空いてるかな?」

「?」

「…暇ですわね…」

翌日、バーゲストはホームの中を一人で寛いでいた。

ベルはエイナと一緒に買い物、ヘステイアはバイトで居らず、バーゲストは今日一日をどう過ごすか悩んでいた。

「…そういうえば、私服がありませんでしたわね」

バーゲストは自分が外出する時は何時も鎧を着ていたのを思い出し、そろそろちゃんとした服を買おうと外出するのであった。

「何処かに良いお店は無いかしら…」

バーゲストは適当に歩きながら店を探していると、ふとある服屋に目が留まる。

「『Earl』？」

バーゲストは何故かその店が気になってしまい、その店の扉を開けて入ると…

「いらつしやーい！あらあら、コレはまた可愛いらしい子が来てくれたものね！」

「?!?!」

「?!?!」

「?!?!」

「ば、かなっ…?!」

そこに居たのは——美しい肉体を持つ、人間だった。

男として、女として、ではない。

“人間という生物”として均衡バランスのとれた体躯。

その顔には、どことなく不敵な、それでいて人懐っこさを感じる笑みが浮かんでいる———というか…

(どこからどう見ても…:スカンジナビア・ペロンチーノ…!!)

バーゲストもよく知ってる人だった。

「あらやだ何その表情？まるであり得ないものを見るような目を向けられているのだけれど」

「い、いいえ！何でも無いです！」

「あらそう？それより貴女、このお店は初めてよね？角の生えたお客様なんて、今まで一人も見なかったことないもの」

「は、はい」

「なら自己紹介しておくわ。私はスカンジナビア・ペペロinna。このEarlの店長にして、一流のカリスマファッションデザイナー！覚えて行ってちょうだい♡」

「は、はあ…私はバーゲスト、ヘスティア・ファミリアの冒険者です」「ヘスティア様の！あの神キトつたら最近私好みの男の子を眷属にしたっていうのに！続けてバゲ子ちゃんみたいな可愛い子も眷属にしちやってもう、隅に置けないわね！」

「バゲ子ちゃん!?!」

突然のバゲ子ちゃん呼びに困惑するバーゲスト。

というか色々な面で困惑しており何がなんだか分からなかった。

「それで？バゲ子ちゃんはどうしてこの店に来たのかしら？」

「ええつと…私服を買いに…」

「私服ね、バゲ子ちゃんサイズの私服だったらこっちにあるわ。ついて来て」

ペペロinnaはバーゲストを案内し、服を選び始める。

最初はバーゲストが自分で選ぼうとしたのだが…

「ダメね貴女、ファッションセンスが女性としては絶望的だわ」

と言われてしまい、仕方なくペペロinnaに選ばせる事になったのだ。バーゲストは元男な上、オラリオに来るまでは村で暮らしていた為、女性としてのファッションセンスを磨く機会など無かったのである。

「んーバゲ子ちゃんにはコレが良いかしらね。コレも良いわね。こっちも悪く無いわ〜!!」

(…:どうやら、転生者でも、はたまたFGOの世界のスカンジナビア・ペペロinnaでも無い…この世界で偶然生まれたそっくりさんといったところかしら…)

彼の名前はスカンジナビア・ペペロinna。

オラリオで知る人ぞ知るカリスマファッションデザイナーだった。曰く、女神フレイヤのドレスを手掛けた事があるとか、実は今の名前は偽名で実は極東出身者とか、昔はガネーシャ・ファミリアの一員だったとか、そんな噂がある人物である。

「バゲ子ちゃん！この服どうかしら、似合うと思うわよ〜！」

「ありがとうございます、ペペローンナさん」

「んもう、気軽にペペで良いわ。私はバゲ子ちゃんなんて気安く呼んでるんだし」

「では、ペペ殿と」

「うんうん、さっ！さっさと試着室で着替えて来なさい！」

「は、はい」

バーゲストは試着室で着替え、ペペローンナの前に姿を現す。

「きゃー！今のバゲ子ちゃん最っ高よ！！これなら大抵の男はイチコロねー！」

「ありがとうございます、こんな素敵なお服を選んで頂き……」

「いいのよいいのよ、さっ！次はこの服よ！どどん着てちょうだい！」

「は、はは……」

このバーゲストはペペローンナから着せ替え人形として色んな服を着せられたのだった……

そして試着が終わり、服を何着か選んで会計しているとペペローンナが突然。

「そういえばバゲ子ちゃんって好きな人とかいるのかしら？」

と訊いて来た。

「いえ、そういうのは今のところ……」

「あら残念、私、バゲ子ちゃんと恋の話がしたかったのに……」

「恋の話、ですか？」

「私、結構色んな人から恋愛相談受けたりするのよ？特に最近は何フレイヤ様とか……服屋なのにおかしいでしょ？まあ、私は好きだからいいんだけどね！」

「……恋、か……」

「バゲ子ちゃんがもし好きな人が出来て、デートする事になったら言ってちょうだい。その時はとっておきの勝負服を作つてあげ・る♡」

「ペペ殿が作る勝負服なら、きつと魅力的過ぎて私が着こなせるか心配ですわね」

「あら、嬉しい事言ってくれるじゃない！ちよつとサービスしちゃうわー！」

ペペローンナはそう言つて服の会計を済ませた後に店の奥に行く。すると何かの箱を持つて戻つて来た。

「はいこれ、服をちゃんと着こなすなら、コレも必要よ」

バゲストは箱を受け取り、中を確認すると中には黒いヒールが入っていた。

「あ、ありがとうございます！こんな素敵なものまで頂いて…」

「いいのよ、素敵なものでも身につける人がいなければ意味無いもの。それとちよつといい？」

「はい？」

「貴女は私の作つた勝負服を着こなせるか心配つて言つてたけれど、もし本当にそんな服を作る事になったら私の方こそ自分が貴女に相應しい服を作れるか心配なのよ？」

「そうなのですか？」

「ええ、断言するわ。だつて恋する乙女、恋を叶える為に努力する女の子に勝る美しさ、輝きなんてこの世界には存在しないわ。私が貴女に服を作る時は貴女を輝かせる為に服を作るんじゃない。貴女の持つ輝きを落とさない為に服を作るのよ」

「ペペ殿…はい、肝に銘じておきます」

「お買い上げ、ありがとうございます！またのご来店をお待ちしてるわー！♡」

バゲストは買ったものを大切そうに抱えて店から出て行った。

バーゲストが服を買いに行っている頃、ベルはエイナと共にバベルの塔を訪れていた。

途中何故かヘファイストス・ファミリアの店でバイトをしていたヘステイアに出会うなんて事もあったが、特に問題は無く目的の階層に来る事が出来た。

「わあ……！」

「ベル君はヘファイストス・ファミリアみたいな高級ブランド、自分には縁がないものと思っっているでしょ？」

「は、はい……」

「実は、そうでもないんだな……ほら、見てみて」

エイナがそう言っつてベルに見せた剣は、ベルが下の階で見た剣より圧倒的に安かった。

「あれ、そんなに高くない……？」

「ふふ、驚いた？ここにるのは新米鍛冶師だからね。安くても実際に売られて評価を受けるのが、駆け出しの彼らにはプラスになるの。中には掘り出しものもあつたりするんだよ。さっ、行こう」

二人は店内を見て周ると、ベルは奥の方に一人で行ってしまった。するとベルは箱の中にある軽装の防具に目をつける。

「製作者のサインだ、ヴェルフ……クロツツ……」

ベルがその防具をジツと見ていると、エイナが現れる。

「あ、良かったー。ベル君、私あつちでいいの見つけた……ん？あれ？」

「エイナさん、僕、コレにします！」

「はあ：ベル君ってホント軽装が好きなんだね：」

「す、すいません：」

「いいよ、ベル君が使うんだもんね。ベル君がこれって決めたものなら良いと思うよ」

「！：ありがとうございます！」

「で、明日もダンジョンに行くの？」

「はい、バーゲストさんも一緒に！」

「二人なら大丈夫だとは思うけど：サポーターを雇ってみるとかどう？」

「サポーター、ですか？」

「うん、なにかと効率上がると思うよ？君とバーゲストさんがその気なら探してみるけど」

「：ちよつと、考えてみます」

「うん、バーゲストさんとも話してみてね：そうだ！バーゲストさんにも何か買ってく？」

「バーゲストさんに？」

「うん、バーゲストさん片方の手空いてるんでしょ？盾とか良いと思うけどな？」

「確かに：良いかもしれませんね！」

こうして二人はバーゲストに盾を買って帰る事にした。

バーゲストにあげる盾を買い、エイナからグリーンサポーターをプレゼントされたベルは帰る道で小人族バルウムの女の子とぶつかってしまう。

「大丈夫ですか？」

「もう逃がさないからな：このクソ小人族バルウムが！」

ベルが倒れた小人族の女の子を心配すると、冒険者が一人現れて女の子に斬りかかろうとする。

ベルは咄嗟にヘスティア・ナイフを引き抜き、冒険者の剣を受け止める。

「何だテメエ、そいつの仲間か!？」

「ち、違います、初対面です！」

「じゃあ何で庇う？」

「えっ…？お、女の子だから？」

「はあ？何言ってるんだクソ餓鬼！」

「やめなさい」

冒険者が再び斬りかかろうとすると、横から声が聞こえ、ベルは横を向くと、そこには買い物袋を抱えたリユーが居た。

「はあ…街中で剣を交えるとは、穏やかではありませんね」

「ああん？口出しすんじゃないやねえ！とっと失せろこのクソ」吼えるな！」ツ！」

「手荒な事はしたくありません。私は何時もやり過ぎてしまう…」

「くっ…くそっ…！」

リユーに威圧された冒険者はその場から去って行った…

「はあ…ありがとうございます。助かりました、リユーさん」

「いえ、差し出がましい真似を…」

「あつ、そうだ、あの子…あれ、いない？」

ベルが振り向くと、女の子は既に居なくなっていた。

「怖くて、逃げちゃったのかな…？」

リユーは一瞬曲がり角に目を向けたが、視線を戻してベルに話しかける。

「あなたが傷ついたなら、シルが悲しみます。どうかお気をつけて」

「あ、はい！」

「…：…：…：そういえばクラネルさん、その背負っている盾は？」

「ああこれ、バーゲストさんにあげようと思って買ったんです。何時も助けてもらってますから…」

「なるほど、きつとバーゲストさんなら喜んでくれます。それでは私はこれで」

「はい！本当に、ありがとうございます！」

ベルとリユーは別れ、ベルはホームに帰還したのだった。

「盾ですか？私に？」

「はい！バーゲストさん、片手で剣を振ってますから、丁度いいかなって。それにバーゲストさん、モンスターの攻撃を受けとめる事が多いですから…あつ、魔法の事も考えて腕にしっかりと巻き付けるタイプにしたんです！」

バーゲストはベルから渡された逆三角形型の盾の裏側を見ると確かに固定する為の革のベルトがあつた。

「なるほど…ありがとうベル。この盾、しっかりと使いこなしてみせます」

「はい！明日もダンジョン攻略頑張りますよう！」

「うんうん、二人とも今日は買い物して楽しく過ごせたようだね！じゃあそろそろご飯にしよう！」

「はい、神様！」

バーゲストも立ち上がり、地下に降りようとする、ふと盾の裏側に製作者のサインがある事に気付く。

「……!?…あ、アルトリア…キャスター…!?!」

その盾の裏側には、しっかりとアルトリア・キャスターというサインが刻まれていた。

「へっくち！今、誰かに噂された気がします！」

「それは気のせいだろお前…それより今度はどんなやつ作ったんだ？」

「よく訊いてくれました、ヴェルフ！次の作品はですね…」

「ば、馬鹿な…!？」

「バーゲストさん？どうしたんですか？」

「い、いえ、何でもありません…直ぐ行きます」

（何故この名前が!?!、いえ、落ち着きなさい。同じ名前なだけという事もあるのですから、け、けれどペペ殿の事もありますし…!）

その日、バーゲストは色々と悩みを抱えながら夜を過ごしたのだっ
た…

第五話 サポーター

「サポーター？」

「はい、エイナさんから雇って見たらどうだつて…」

「ふむ…確かに私達だけでは回収出来る魔石の量に限界がありますものね…」

「じゃあ、サポーター雇ってみます？」

「そうですね、今日ダンジョンから出たらエイナさんに…」

「そこのお兄さん、お姉さん。白い髪のお兄さん、角の生えたお姉さん！」

ダンジョンに向かいながらサポーターについて話していると、突然後ろから声を掛けられた二人は振り向く。

其処には緑色の大きなバックを背負い、フードを被った小さな女の子が居た。

「初めましてお兄さん、お姉さん！突然ですが、サポーターを探していませんか？」

「あれ、君は確か…」

「知り合いですか？」

「いや、知り合いじゃないんですけど…」

「混乱してるんですか？でも、今の状況は簡単ですよ。冒険者さんのおこぼれにあずかりたい貧乏なサポーターが、自分を売り込みにきているんです」

「そ、そうじゃなくて。君、昨日のパルウムの女の子だよね？」

「パルウム？リリは獣人…シアンスロープ犬なんですか？」

そう言つて女の子はフードを取ると、頭にはシアンスローフ特有の耳があつた。

「ホントだ…パルウムじゃ、ない？」

ベルはそう言つて女の子の耳を触つて確認する。

「ああうう…！お兄さん…！」

「ああごめん！つい！」

ベルとバーゲストは一旦噴水に座り、女の子の話を聞く事にした。

「えつと、それでリリルカさんはどうして僕達に声を？」

「はい、見たところお二人のようでしたし、冒険者さん自らバックパツクを装備していらつしやつたので、恐らくは、と……」

「ああ……なるほど……」

「確かにどちらもサポーターという格好ではありませんものね……」

「それでお兄さん、お姉さん！どうですか、サポーターはいりませんか？」

「ええつとそれが……出来るなら欲しいかな……と丁度思っていたところ
で……」

「本当ですか!?なら、リリを連れてつてくれませんか?リリは貧乏で、手持ちのお金も心もなくて……それに、男性の方にリリの大切なモノをあんなにされてしまうなんて……責任を取ってもらわないといけませんね……?」

「うっ……わ、分かりました。それじゃあ取り敢えず今日一日、サポーターをお願いします。バーゲストさんも良いですよね?」

「ええ、サポーターに興味がありましたし」

「ありがとうございます!」

こうしてサポーターであるリリルカ・アーデを加えて、ベルとバーゲストはダンジョンに臨んだのだった。

「ハアア!」

ベルがキラアアントを次々とハステイア・ナイフで斬り裂く。

「ベル様、後ろ!」

「っ!」

「させるか!」

ベルに飛びかかろうとしたキラアアントをバーゲストが斬ると、そ

れと同時にキラアアントがもう一体バーゲストに飛びつく。

バーゲストは盾を構えるとキラアアントは盾にしがみつく。

「離れろっ！」

バーゲストは盾を払ってキラアアントを振り払い、壁に激突させる。

「お二人とも、更に来ます！」

前方からキラアアントの群れが更に迫っており、ベルは構え、バーゲストは壁に激突し震えているキラアアントに左手を向ける。

「鎖は我が猟犬達、我が敵を捕らえる牙となれ！」【チエーン・ハーディング】！

バーゲストの左腕から伸びた鎖は壁に激突したキラアアントに巻き付き、バーゲストはそのキラアアントを新たなキラアアントに向けて勢いよく引っ張る。

キラアアント同士が衝突し、灰になる。

するとリリルカの近くの壁からキラアアントが壁を突き破って現れる。

「リリ！」

「ベル、行け！前は私がやる！」

「頼みます！」

ベルはリリルカの救援に向かい、バーゲストは剣に炎を宿らせ、キラアアント達に向かって放つ。

バーゲストが放った炎は前方のキラアアントを焼き尽くし、戦闘は終了した。

バーゲストはふう…とため息を吐くと、後ろに居るベルとリリルカに視線を向ける。

（この後はベルがナイフを奪われる筈だけど、私が居ると警戒して盗まないかもしれないわね…原作通りに進める為にも、此処は一手打ちましょう）

バーゲストは魔石を回収して二人の下へ戻る。

「二人ともご苦労。リリ、この魔石を頼む」

「はい！」

「バーゲストさん、このキラーアントから魔石を回収したら今日は上がりましょうか」

「む、そうか…ならば私は今から奥に何かないか見てくるから、先に二人で戻っててくれ」

「え？けどバーゲストさんを一人には…」

「大丈夫だ、ベルから貰った盾もある。何も問題は無い」

「そうですねよベル様！バーゲスト様はすっごくお強いんですから、きつと一人でも大丈夫です！」

「うーん…分かりました、先に戻ってます。あまり遅くならないでくださいいね？」

「ああ、ではまた後でな、ベル。ではな、リリ」

「はい、バーゲスト様もお気をつけて！」

バーゲストは奥に向かい、ベルは切れ味の悪いナイフでキラーアントから魔石を回収し始めた。

ダンジョンを出た後、ベルはエイナにリリルカの事を話した。

リリルカの所属しているソーマ・ファミリアは一見すると普通のファミリアだが、団員達皆必死で、どこか死に物狂いに見えるらしい。

そしてベルはギルドから出ようとする時に、エイナから腰にある筈のヘスティア・ナイフが無いことを指摘され、何処かに落としたと思っ慌てて探し始めた。

「結局あの後モンスターの群れを何個か壊滅させてしまったわね…」

バーゲストは袋に入れた魔石をギルドに行って換金しようと道を歩いていると、横の道から誰かが飛び出してくる。

バーゲストは咄嗟に受け止め、飛び出して来た存在を見る。

「大丈夫かしらって、リリ？」

「ば、バーゲスト様？」

飛び出して来たのはリリルカだった事を確認すると、リリを追う様

にリユーとシルが現れ、リユーがリルルカを見る。

「シアンスロープ？」

「リユーさん、それにシルさんも、一体どうされたのですか？」

「先程まで人を追っていたのですが…見失ってしまいました。ああ、バーゲストさん。このナイフ、ベルさんのでは？」

そう言っつてリユーはバーゲストにヘステイア・ナイフを見せる。

「確かに、ベルのナイフです。どこかで無くしたのかしら…ありがとうございます、うございます、リユーさん」

バーゲストはリユーからヘステイア・ナイフを受け取る。

「何処でこれを？」

「一人のパルウムが所持していました」

「そうですか…ありがとうございます」

「では、私達はこれで」

シルが最後にリリに何か囁くと、二人は去っていった。

バーゲストは周りを確認し、リリを見る。

（ベルは周りにはいない…やってしまいましたわね、これは…仕方ありません、私が言っておきますか）

バーゲストはリルルカの方を向き、話しかける。

「ですが丁度良かったわ、リリの事を探そうと思っていたの」

「へ…？」

「リリ、明日も私達と、ダンジョンに潜ってくださいる？」

「バーゲストさん、ナイフを落としてしまいました！」

「リユーさんが見つけてくれたから、感謝しておきなさい」

「リユーさんありがとうございますううううう!!」

そして翌日、豊穰の女主人でリユーに泣きながら何度も感謝していたベルとバーゲストは再びリリルカを連れてダンジョンに潜っていた。

「ベル様、バーゲスト様。改めて、正式に雇っていただきありがとうございます
ございます」

「うん、こちらこそよろしくね」

「ああ、よろしく頼む」

「はい！どこかで、ベル様、あのナイフが見当たらないようですが……？」

「うん。今度は落とさないように、グリーンサポーターに収納したんだ」

そう言っつてベルがグリーンサポーターを前に出すと、ヘステイア・ナイフが中に収納されていた。

「そうですか……」

「二人とも、そろそろ行くぞ」

「あ、はい！行こう、リリ」

今日も同じようにモンスターを倒し、魔石を回収して三人はダンジョンを出たのだった。

「4万5000ヴァリス!!」

「ゆ、夢じゃないよね!こんなにお金が入るなんて!」

「お二人とも凄いです!たった三人でこれほど稼いでしまうなんて!」

「いやほらあ!兎もおだてりや木に登るって言うじゃない?それだよそれ!」

「全く訳が分かりませんが、今日は便乗しときます!凄ーい!まだまだ上を目指せますよ!」

大量のお金が手に入り、喜んでいる二人を見てバーゲスト「コホン」と咳き込む。

「二人とも落ち着きなさい。お金が沢山入って嬉しいのは分かりますが…」

「つと、そうですね。ベル様、バーゲスト様、そろそろ分け前を…」

「一人1万5000ヴァリスで良いですよね?」

「ええ、それで良いわ」

「じゃありり、はい」

「え?」

ベルはリリルカに1万5000ヴァリスを差し出し、リリルカはそれをを見て困惑する。

「1万、5000ヴァリス…!?!」

「これなら神様に美味しいもの食べさせてあげられるかもしれませぬ!」

「あら、私の料理は美味しくないという事かしら?」

「あああ!!違います、すいません!そんなつもりじゃないんです!」

「ふふっ、分かっています。ベルもヘステイア様も毎日美味しそうに食べてくれますから」

「べ、ベル様!バーゲスト様!」

リリルカはサツと報酬を渡したベルとバーゲストに問いかける。

「な、なんで山分けなんか…!リリは契約金も貰ってますし…独り占めしようとか、お二人は思わないんですか!?!」

「え、どうして?」

「契約金の時も話しましたが、リリ。私達は貴女に頼んでサポーターをしてもらっているのです。貴女が契約金を受け取るのは勿論の事、そして働きに応じた報酬を得る事も何もおかしな事では無いわ」

「そうだよ、僕とバーゲストさんだけじゃこんなに稼げなかつたよ。リリのお陰だよ、ありがとう」

ベルはそう言つてリリルカに手を差し出し、リリルカは戸惑いながらもベルの手を握る。

「…変なの…」

「…さて、お金もこんなに入ったのだし、今から一緒に食事に行きましようか」

「あつ！良いですね、ほらリリ、行こう！良い場所知ってるんだよ！」

「あ、ちよ、ベル様!」

ベルとリリルカは手を繋いだまま歩き出してしまい、バーゲストはその様子を見て少し微笑んだ後に追いついたのだった。

因みにその姿をヘステイアが見て大変ショックを受けてミアハとやけ酒を飲み、途中から現れたペペローンナに話を聞いてもらったのはまた別の話…

そして翌日。

「う、ううう…!」

ヘステイアは思いっきり二日酔いで苦しんでいた。

「大丈夫ですか、神様?」

「コレは今日は看病していた方が良さそうね…ベル。今日は私とリリだけでダンジョンに行くから、あなたはヘステイア様をお願い」
「え、けど残るならバーゲストさんの方が…身体に良さそうなものも作れそうですし…」

「私とベルなら私の方が生存率が高いでしょう？心配しなくても、今日も沢山稼いできますから」

「そ、そういう事なら…」

（ば、バーゲスト君、まさか僕の為に…！）

ヘステイアとベルを二人きりにする為にそれらしい理由を言っているバーゲストにヘステイアは感動を覚える。

（君には本当に世話になってばかりだ、絶対にお礼はするからね！）
「取り敢えず朝のご飯にお粥は作っておきましたから、今日一日ヘステイア様をお願いします。ベル、ヘステイア様をお願い事はなんでも聞いいてあげなさい」

「はい！」

「絶対によ」

「え？」

「それがどんなお願いであろうと、絶対に！嫌だなど思っても！よろしい！」

「は、はい!!」

「では、行って参ります」

バーゲストは上に上がり、ホームから出てダンジョンに向かった。

「な、何だったんだろう…」

ベルはヘステイアにお粥を食べさせた後にベッドに横にさせる。

しかしヘステイアはどこか不機嫌そうであった。

「か、神様、どうかしたんですか？」

「どうもしないよっ…ふんっ、ベル君の浮気者…！」

何故か勝手にベルを浮気者認定しているヘステイアに、ベルはある話を切り出す。

「あの、神様、こんな時なんですけど…次のバイトのお休みっていつですか？」

「休み？何でだい？」

「実は最近、ダンジョンで沢山稼げるようになって、神様に恩返ししたいなって…だからその、行きませんか？三人でちよつと豪華な食事でも食べに…」

「いいね、確か休みは…」

瞬間へスティアに電流走る。

『ベル、へスティア様のお願い事はなんであれ聞いてあげなさい』

『それがどんなお願いであろうと、絶対に！嫌だなど思っても！よろしい!?!』

「…今日行こう」

「え？」

「今日行きたい！」

「で、でも…」

「今日行くんだ！」

「ええつ、そんな、バーゲストさんに悪いですよ！」

「おんやあベル君、そのバーゲスト君に言われたじゃないか、今日一日、ボクのお願いを、なんであれ、嫌でも、絶対に聞くなって」

「ぐっ…、た、体調は…?」

「もう治った！ベル君、6時に南西のメインストリート、アモールの広場に集合だ！じゃくねくベル君！」

へスティアはそう言つて勢いよく飛び出して行つた。

(ありがとう、バーゲスト君！君はベル君に並ぶ最高の眷属だ…！)

「そうですか…ではベル様は今日はいないと…」

「ええ、ですので今日は二人で頑張りましょう。リリ」

「はい！それでは今日も張り切っていきましょう！」

へスティアがベルとのデートに向けて張り切っている頃、バーゲストとりりルカはダンジョンに潜り始めた。

「ハアッ！」

バーゲストが炎を放ち、キラアアントの群れを焼き尽くす。キラアアントが灰になり、魔石がゴロゴロと地面に落ちる。

「ふう…一先ず落ち着いたか、魔石を回収するぞ」

「はい…あの、バーゲスト様、一つ良いですか？」

「何だ？」

「バーゲスト様は何故ベル様と同じファミリアに入ったのですか？その、バーゲスト様のファミリアには悪いですが、バーゲスト様ならきっとロキ・ファミリアやフレイヤ・ファミリアでも活躍出来ます」

「私がヘステイア・ファミリアに入った理由か…」

リルルカは最初にバーゲストの戦いぶりを見てからずっと疑問に思っていた。何故バーゲストが団員が一人しかいないファミリアに加入したのか、リルルカはその訳を知りたかった。

「ベルを助ける為だな、それ以外に理由は無い」

「へ？それ、だけ…ですか？」

「ああ、他に理由など無かった。私の為になる事など無かったし、他に入るファミリアなら幾らでもあっただろう。だが私は…ヘステイア様の事を知り、ヘステイア・ファミリアに入ろうと決めた。それだけだ」

「ベル様を…助ける為…」

「最初はロキ・ファミリアに入ろうとは思ったがな、やめた」

「それは…やはり【凶狼】ヴァルナガンドと関係が？」

「リリも知っていたのか、そうだ。ロキ・ファミリアの者と喧嘩をしてロキ・ファミリアに入ろうなど馬鹿げているだろう？だから勧誘されても断った」

「凄いですね…ロキ・ファミリアの勧誘を断るなんて…」

「だが、ヘステイア・ファミリアに入って良かったと、心の底から思っている」

「それは…どうしてですか？」

「あの二人と居て幸福を感じなかつた事は無い、夢に向かつて走るべ
ル、それを全力で応援するヘステイア様：私は、二人のそういうところ
ろに惹かれた。それに、リリにも出会えたからな」

「リリに、ですか？」

「ああ、サポーターを雇い、共にダンジョンに赴き、ヴァリスを多く稼
いで喜び合う：きっとロキ・ファミリアでは体験出来なかつた事だ、
だから私は誇りに思っている。ヘステイア様の眷属である事に」

「喜び、合う：」

「さあ、今日はこれくらいにしておくぞ。そろそろ暗くなり始めるか
らな」

「あ、はい！」

二人はダンジョンから出て魔石をギルドで換金し、山分けしてから
別れた。

「明日も頼みますわ、リリ」

「はい、こちらこそよろしくお願いします！」

バーゲストは誰もいないホームの地下で料理を作りながら二人の
帰りを待つ。すると料理が出来ると同時に足音が聞こえ始め、バーゲ
ストは机に料理を並べる。

「ただいま、バーゲスト君！上まで良い匂いが漂っていたよ！」

「ただいま、バーゲストさん。すみません、今日二人で出掛けちゃつて
：」

「良いのです、三人で出かける機会などこれから幾らでもあります。
さ、二人共早く座つて、ご飯を食べましょう」

「うう：バーゲスト君の優しさが沁みる：！つてあれ、バーゲスト君、

どうしてボク達がご飯食べてないって知ってるんだい？」

「帰り道で女神様方に追いかけられているのを目撃しましたから」

「ええー!? そんな、助けてくださいよおー!」

「二人がどこか楽しそうでしたから」

「まあまあベル君、二人で出かけた罰だと思えばいいさ。さっ、早く食べよう!」

その頃リルルカは、ベル達と一緒に稼いだお金をソーマ・ファミリアの冒険者に奪われていた。

「お前みたいな役立たずが、ソーマ・ファミリアの一員でいられるのは、誰のお陰だあ?」

「ぼ、冒険者様のお陰ですっ…!」

「だったら、死ぬ気で稼いで来い!」

ソーマ・ファミリアの冒険者はそう言いながらリルルカを蹴落とし、階段を転がっていくリルルカを笑いながら去っていった。

「…何が冒険者様、ですか…まあ、いいです。目標の金額まで、後ちょっと…あのナイフも、絶対手に入れて…」

『リリのお陰だよ、ありがとう』

『明日も頼みますわ、リリ』

「…ホント…変なの…」

そして翌日、今度は三人揃ってダンジョン潜ると、何時もより夥しい程に数が多いキラアアントに苦戦する三人。

「ベル様、足元！」

「!?」

「しまっ、くっ！退け、蟻ども!!」

ベルに一匹のキラアアントが迫り、攻撃しようとする。バーゲストは大量のキラアアントに絡まれており、ベルを助ける事が出来ない。するとリリルカが懐から魔剣を取り出し、キラアアントに炎を放ち、怯んだ隙にベルがキラアアントは斬り裂く。

「はああああああ!!」

「燃えろっ！」

キラアアントを倒し切り、戦闘が終了する。

「ふう…本当に今回は多かったですね…」

「ああ、恐ろしい数だった。そうだったな、蟻とは数が武器の生き物だと改めて実感した…」

「ホントですね…そういうえばリリ、さっきのつてもしかして魔剣？本当にありがたいとう、なんだか凄く嬉しかったよ」

「えっ!?べ、別にベル様を助けようとした訳じゃないんですからねっ！ベル様が居なくなったら、リリの収入が減るからこうしたままでですか、勘違いしないでくださいー！」

「？」

「一先ず休憩するぞ、流石にあの数の後直ぐに現れるとは思えん。今のうちに腹拵えだ」

「あ、はいー！」

適当に座り、ベルはシルから貰った弁当を、バーゲストは自分で作った弁当を食べ始める。

するとバーゲストはリリにもう一つ弁当箱を差し出す。

「これは…?」

「リリの分だ、しっかり食べる」

「え、リリの為にわざわざ作ってくれたんですか!？」

「ああ、一人も二人も変わらんからな」

「あ、ありがとうございます…」

リリはバーゲストから弁当を受け取り、美味しそうに食べ始める。そして弁当を食べ終わると、リリが申し訳なきように二人に話す。

「あの、ベル様、バーゲスト様」

「ん？」

「どうした？」

「明日一日、お休みを頂いてもよろしいでしょうか？」

「いいけど…何か用事でもあるの？」

「ファミリアの集会があつて…どうしても出席しないといけないんです。契約違反なのは分かっています。ペナルティはお受けしますから…」

「え、いいよそんな事！それよりごめんね、リリ…僕、気が回らなくて…休みたい時は遠慮なく言つてね」

「ベルの言う通りだ、ファミリアの都合なら仕方ないだろうし、リリも体調を崩す時はあるだろう。無茶はするな」

三人はその後暫く探索した後ダンジョンを出た。

そして三人で一緒に道を歩いていると、ベルが立ち止まってバベルの塔を見上げる。

「ベル様、どうかさされましたか？」

「あ、いや、バベルって何でこんなに高いんだろ…って、ちよつと思つただけなんだ」

「ベル様もご存知の通り、バベルは空いたスペースを貸し出ししていますが、それは20階までです」

「え、そうなの？」

「はい、ブライベートルーム神様達の領域と考えてもらえばいいと思います。孤高が好きという神様も居る訳ですから」

「うーん…そういう神様達の話聞く度に思うけど、『天界』ってそんなに暇なところなのかな？神様達が下界に降りたいって思つちやうくらい？」

（私の前世の世界の神様は割と楽しそうでしたけれど。FGO流行つ

てましたし、転生者を見て楽しんでましたし)

バーゲストが自身を転生させた神様の事を思い出していると、リルカがこう言う。

「お仕事が嫌になって、逃げ出して来たのかもしれないよ？」

「それって…」

「はい、亡くなった人の、死後の進路ですね。まあ、最終的には、殆どのが転生させてもらえるようなのですが…でも、リリは死ぬ事に憧れていたことがありますよ？」

「え…?」

「一度、神様達の許へ還れば、今度生まれ変わるリリは今のリリよりちよつとはマシになっているのかなあ、なんて」

「リリ…!」

「ごめんなさい、変な事言つて。真に受け取らないでください、リリはこれでも遅くなりましたから。今ではそんな事、ちつとも思っていないません! さあベル様、バーゲスト様。遅いのですから早く帰りましょう」

そう言つて歩き出すリルカをベルは少し不安げに見つめていた。

リルカと別れ、次にシルに弁当箱を返しに行く。

「ご馳走様でした、いつもありがとうございます」

「いえいえ、何時も残さず食べてくれて、作り甲斐があります」

するとベルが前は無かった本か飾られている事に気付く。

「あれ、前にこんなの飾ってありました?」

「ああ、それは…お客様のどなたかが、お店に忘れていったようなんです」

『ゴブリンにも分かる、現代魔法』?」

「興味あります?」

「え、でも…」

「取りに来る様子はないし、減るものではないです。読み終わったら返してくれば良いですから」

そう言つてベルはシルから本を受け取った。

「良いんですか？ありがとうございます！」
そして本を抱えて、ベルはバーゲストと共にホームへ帰ったのだっ
た。

第六話 弱肉強食

ヘステイアがベルのステイタスを更新した時、事件は起こった。

「……魔法だ」

「え？」

「魔法ですか？」

「うん……ベル君に魔法が発現してる……」

なんと、ベルに魔法が発現していたのである。

驚きのあまりベルは起き上がり、背中に乗っていたヘステイアがひっくり返ってしまう。

「お、おおお……」

「【ファイアボルト】まさか魔法まで発現しちゃうなんて……」

「か、神様！魔法、魔法ですよ、僕、魔法を使えるようになりましたあー！」

「おめでとう、ベル」

「これはボクの推測だけど、この文面からすると君の魔法は詠唱が要らないのかも」

「え？」

「ま、とにかく明日、ダンジョンで試し撃ちでもしてくるといいさ。慌てなくても君の魔法は逃げたりしないぜ？」

そして三人は明日に備えて就寝したが、今すぐ魔法を使いたいベルはこっそり抜け出してダンジョンに向かうのだった。

そして翌日、バーゲストが目を覚ますと……

「ぐぐううう……！ま、また逃げちゃった……僕のバカバカ……！」

そこには何故か凄く自分を責めているベルが居た。

「……一体何があったのですか？」

「何だいベル君、悪い夢でも見たのかい？昨日読んでたこの本のせい

じゃないのか……うわっ!!」

ヘステイアが昨日ベルが読んだ本を手にとって開くと、驚愕の声が上がった。

「魔導書^{グリモア}?」

「そう、読むだけで資質に応じた魔法が発現する本。正に魔導書さ。これ、一体どこで手に入れたんだい?」

「酒場で借りたんです。誰かの忘れ物だから、読んでみればって……」

「誰かの忘れ物お!?!」

「どうかしたんですか、神様?」

「ベル君、魔導書ってのはね、この通り、誰かが一度読んだらそれっきり効力が消えるもんなんだよ」

「なっ……とにかく、謝って弁償しまっ……!」

「無理だ、魔導書がいくらするのか知ってるのか、君は!ヘファイストス・ファミリアの一級品装備と同等……或いはそれ以上だぞ!」

ベルの顔がどんどん青くなり、自分が盛大なやらかしをした事に気付く。バーゲストは魔導書について話し合っている二人を横目に朝ご飯を作っていたのだった……

「すみませんすみませんすみません!」

ベルは魔導書を持って豊穡の女主人に訪れ、謝罪していた。

「それは大変な事をしてしまいましたね、ベルさん……!」

「ちよっ、シルさん!何他人事のように言ってるんですか!」

「やっぱりダメ、ですか?」

「すっごく可愛いけど、ダメです……」

「てへ♪」

するとミアはベルから受け取った魔導書をゴミ箱に捨てる。

「み、ミアさん……！」

「忘れな」

「で、でも……！」

「読んじまったもんは仕方ないだろ！こんな代物、置いてくやつが悪いんだ」

「し、しかしですね……！」

「ん？」

「ダンジョン行ってきますー！」

ミアに睨まれたベルは店から出て行き、外で待つバーゲストと共にダンジョンに向かった。

リリルカが休みの為不在だった事以外は特に何事も無く、ダンジョン探索を終えた二人は、翌日、バベルの塔の前の広場でリリルカを探していた。

「あれ、リリまだ来てないのかな……？」

「……ベル、あちらを」

バーゲストが視線を向けた先には、リリルカの背負っている大きな緑色のバックの姿があった。

「あ、居たー！」

そしてベルもリリルカの姿を確認するが、リリルカは冒険者に絡まれている。

二人はリリルカに近寄ろうとするが、二人の前に別の冒険者が現れる。

「おい」

「あ、あなたは、あの時の…」

そう冒険者は以前ベルが見たパルウムを追っていた冒険者だった。

「お前ら、あのガキとつるんでんのか?となると、何も知らねえって訳じゃあるまいな?」

「な、何がです…?」

「とぼけんな、お前俺に協力しろ。一緒にアイツを嵌めるぞ」
「なっ!」

「そんな顔すんなって、お前らだってアイツが貯め込んだ金、狙ってんだろ?冒険者同士、協力して役立たずの荷物持ちからっ…!」

「ば、バーゲストさん!」

その冒険者の言葉を聞いた瞬間、バーゲストは冒険者の首を掴み上げた。空中でバーゲストの腕を掴み、必死に抵抗する冒険者にバーゲストは言う。

「貴様、いきなり現れてよくそんな戯言を口に出来たものだなっ…!」

まだダンジョンに潜っていないのに、戦闘状態の口調になったバーゲストは冒険者を放り投げ、冒険者は尻餅を着きながら咳き込んでいる。

「て、てめえ!こんな事して、タダで済むと…!」

「失せろ、お前の様な奴に割く時間は無い」

「くっ…!」

バーゲストに気圧された冒険者は二人から離れて行った…

「…お二人とも」

「!リリ、いつからそこに…?」

去っていく冒険者を見ると、後ろからいつの間にか居たりリルカに声をかけられる。

「あの冒険者様と何を話していらしたのですか?」

「気にしなくて結構、聞くに耐えない戯言でしたから。それよりリリは大丈夫でしたか?絡まれていたようですが…」

「はい、大したことありませんよ。さっさと行きましょう」

リリルカはそう言ってダンジョンに向かって歩き出し、二人もそれに続いた。

「…………もう、潮時かあ……」

探索を終え、ホームへと向かう帰り道、ベルはバーストにある提案をする。

「僕、リリが心配です。僕達のホームで匿ってあげる事は出来ないんでしょか？」

「…私もそうしたいですが、ヘステイア様が許してくれるかどうか……」

二人はヘステイアにリリルカを自分達のホームで匿えないか相談するのだった。

「なるほど、例のサポーター君をね……」

「はい…リリはどうも、悪い冒険者に狙われてるみたいなんです。少しの間でも、匿ってあげられれば……」

「…二人共、君達にとってそのサポーター君は、本当に信用に足る人物なのかい？」

「え？」

「ごめんよ、敢えて嫌な事を言ってる。今までの君達の話聞く限り、彼女はどうもききな臭いんだ、考えてみてくれ。ベル君は本当にナイフを無くしたのか？」

「……………」

二人は黙ってヘステイアの話に耳を傾ける。

「冒険者に絡まれてた件にしてもそうだ。彼女は君達に、何かを隠している」

二人はヘステイアの言葉を聞き、少し考えると、ヘステイアの顔を見て……

「え、10階層に？」

翌日、リリルカとダンジョンと共にダンジョンに潜ろうとすると、リリルカが10階層に行く事を提案した。

「ええ、今日はそこまで行ってみませんか？お二人の実力なら大丈夫ですー！」

「けど、バーゲストさんならともかく、僕なんてこの前も7階層でリリの魔剣に助けられたられたくらいだし…」

「アレは蟻の数が異常だったせいもあると思いますが…」

「それに10階層からは……大型のモンスターだって出るし…」

「ベルは怪物祭モンスターフェアの時にシルバーバックを倒しているでしょう」

「た、確かにそうですけど……！」

「問題ありません、今のベル様なら！バーゲスト様だっていますし、昨日見せて頂いた魔法だって！ベル様ならやれます、11階層まで降りた事のあるリリが保証しますよ！」

「うーん……」

バーゲストは構わない様だが、まだ悩んでいるベルを見て、リリルカはある話をする。

「ベル様、実はリリは近日中に大金を用意しなければいけないのです」
「もしかしてそれって……」

「事情は言えません。ただ、リリのファミリアに関係することなので……どうか、リリの我が儘を聞いてくださいますか……？」

「…分かった、今日は10階層まで行ってみよっか」

「ありがとうございます、ベル様！」

そうして10階層目指して探索を進めた三人は、あっさりと10階層に辿り着いてしまった。

「リリの提案を聞いてくださり、ありがとうございます。リリはお二人のサポーターになれて、本当に幸運でした」

「うん、まあ……10階層だって、いずれは行かなきゃならないからね」
「それで……差し出がましいのですが、ベル様。ここからは、これを使っ

「てみてはいかがでしょうか？」

「リリルカはそう言つてベルに一本の剣を差し出す。」

「バゼラード？」

「はい、バーゲスト様の剣ならともかく、今のベル様の武器では、大型のモンスターを相手するのに、少々リーチが短過ぎますので」

「ベルはバゼラードをグリーン・サポーターに取り付け、ヘステイア・ナイフを右脚に装備しているポーチに収納した。」

「よし…き、行こうか、リリ」

「はい、ベル様！」

「そうして一行は10階層へと足を踏み入れたのだった：

「10階層は霧に包まれており、白い草と木が生えていた。」

「ここが、10階層…」

「はい、今回の目的地です」

「…二人共、離れるなよ」

「はい！」

「歩みを進め、バーゲストとベルは10階層に生えている木を見る。」

「リリ、これって…」

「はい、迷宮ランドフォームの武器庫です。しかし…処理している暇は無いようです」

「そう言つと霧の向こうからオークが現れ、近くにある木を引き抜き、棍棒のように持つ。」

「天然武器…ダンジョンネイチャーウェポンがモンスターに与える武器…ベル、いけるか？」

「はい！」

「よし、私が隙を作る。その間に突っ込め！」

「ベルはオークに向かって走り出し、バーゲストは詠唱を始める。」

「【鎖は我が獵犬達、我が敵を捕らえる牙となれ】【チェーン・ハーディング】！」

「バーゲストの右腕から伸びる鎖が剣に巻き付き、バーゲストは剣をオークに向けて投擲する。」

「ハアアアア！」

「バーゲストの投げた剣がオークの肩に突き刺さり、オークが怯んで

いる内にベルはオークの膝を切り裂く。

倒れたオークの上に乗れ、バゼラードを胸に突き刺すとオークは絶命し、灰になった。

「よし……」

「ベル様、バーゲスト様！まだ来ます！」

オークが更に二体現れ、ベルは片方にファイアボルトを放つ。

「ファイアボルト！」

しかし一発では倒しきれず、二発放つて片方を倒すと、もう片方が棍棒を振るい、ベルは避ける。

するとオークの肩背中にバーゲストが飛び乗り、オークが地面に倒れると、バーゲストは鎖でオークの首を絞める。

「今だ、やれ！」

「はい！」

鎖を解こうとするオークの頭にバゼラードを突き刺し、トドメを刺した。

「勝てた……やったよりりり……りり？」

ベルとバーゲストが周囲を見渡すと、リリルカがいつの間にか居なくなっていた。

「りり、何処なの!?まさか、モンスターに……!」

「ベル、地面に何かあるぞ！」

二人が地面を見ると、そこには何か丸いものが何個も転がっていた。

「これって、モンスターを誘き寄せる為の……!」

「いや、この匂い……どうやらかなり強力な物だな。見ろ、周りがあつという間にモンスターだらけだぞ」

二人が背中を合わせ、周りを見ると大量のモンスターが全方位から迫っていた。

「りり！何処だ、返事をしろ！」

バーゲストがそう叫ぶとクロスボウの矢が何本かベルに放たれ、紐の付いた矢がヘスティア・ナイフの入ったポーチに命中するとポーチが引つ張られて奪われる。

矢が放たれた方を見ると上に登る階段の途中にリリが居た。

「ごめんなさい。ベル様、バーゲスト様。もう、ここまでです。アイツに全部聞いたんでしよう?」

「聞いたって、何を!？」

「普通よりかなり強力な物を用意しましたが、お二人なら生き残れる筈です。折を見て逃げ出してくださいね…それではさようなら、ベル様、バーゲスト様…」

リリルカはそう言って上へと登っていった…

「リリ、リリ！」

「ベル!先ずは周りのモンスターに集中しろ！」

リリルカは上の階層に上がり、立ち止まる。

「人が良すぎですよ…【響く十二時のお告げ】【シンダー・エラ】」

そう詠唱するとシアンスロープの耳が無くなり、リリルカの姿がパルウムになる。

「お二人が悪いんです…アイツにさえ、会わなければ…ううん、これで良いんです。ベル様もバーゲスト様も、冒険者なんですから…リリの嫌いな…冒険者なんですから…」

リリルカはそう言ってベルから奪ったヘステイア・ナイフを取り出す。

「ヘフアイストスの武器…これなら何処に行っても売れます。目標の金額にだって、届くかも…」

リリルカはヘステイア・ナイフを仕舞って走りだす。

地上を目指して、更に上の階層へ行く階層を登ると、上がった瞬間に何かに足が引つ掛かり、転んでしまう。

「あっ…!？」

「嬉しいじゃねえか、大当たりだ」

リリの足を足で引つ掛けて転ばせた冒険者…ゲドはリリルカを蹴り飛ばしながらそう言う。

「散々舐めやがって…このクソパルウムが！」

「がふっ！う、うっ…！」

「いい様だな、コソ泥」

リリルカを何度か踏みつけた後にゲドはそう言っけてリリルカの髪を掴み、乱暴に持ち上げる。

「あ、あああっ…！」

「そろそろアイツらを捨てる頃だと思ったぜ…此処で網を張ってりや必ず会えるってなあ…！」

「あ…み…？」

「この階層でお前が使える道はそう多くねえ、四人で手分けしてたんだが…ふ、ははっ！見事に俺の所に来るとはなあ…！」

「ああっ…！」

ゲドはリリルカのローブを乱暴に引きちぎり、リリルカを投げ捨ててローブの内側にある物を物色する。

「はは、良いもん持ってんなあ、おい！魔剣まで持ってんじやねえかよ！」

「派手にやってますなあ、旦那！」

そう言っけて現れたのはリリルカを虐げているソーマ・ファミリアの団員のカヌウだった。

「おお、来たか。早かったなあ…見ろよこのガキ、魔剣まで持ってやがってよお。やっぱりお前らの言う通り、かなり溜め込んでるみたいだぜ、コイツ」

「そうですかい…ねえ、旦那。一つお願いがあるんですが、そいつの持ちもん…全部置いてって欲しんでさあ」

カヌウはそう言っけてゲドに袋を投げつけると、袋の中からキラアントの顔が現れ、ゲドは慌てて地面に叩きつける。

「き、キラアント！て、テメエ…何やってるか分かってんのか!?」
「ええ、瀕死のキラアントは、仲間を集める信号を出す…冒険者の常識でさあ」

カヌウがそう言うのと更に二人、瀕死のキラアントを背負ったソーマ・ファミリアの団員が現れる。

「しよ、正気か…テメエエエエ!!」

「旦那、オレらとやり合ってる間に、奴等の餌食にはなりたく無いでしょう?」

そう言っつて瀕死のキラアアントがゲドの方に投げられる。

「く…クソがつ!」

ゲドはそう言っつて魔石を捨て、逃げ出したが、直ぐに逃げた先から悲鳴が起こり、血の浴びたキラアアントが現れる。

「ひっ…!」

「よおアード、大変な事になったなあ…? 同じファミリアの仲間だろう? 助けてやるから、全部寄越せ」

「えっ…?」

「それとも、昨日みたいにまた誤魔化しやがるのか? それなら…」

カヌウはそう言っつて瀕死のキラアアントをリリルカに突きつける。

「分かりました、分かりましたから…」

リリルカは鍵を一つ取り出す。

「ノームの貸金庫の鍵です、お金は宝石に換えてしまってます…」

カヌウはリリルカから鍵を奪いとる。

「これだったかあ」

カヌウはリリの服のフードの部分を掴んで持ち上げる。

「か、カヌウさん…!」

「見てみるよ、アード」

リリルカが顔を上げると、数え切れない量のキラアアントが現れていた。

「こんなに、ヤバい状況だぜ? お前、囿になってくれ」

「えっ!? そんな、約束がつ…!」

「サポーターなんぞと、マトモに約束する冒険者が何処にいる? お前はもう用済みだ。最後に俺たちを、しっかりと支援してくれやあ! サポーター!」

カヌウはリリルカをキラアアントの群れに向かって投げつけ、その間に離脱した。

キラアアント達はいきなり飛んできたリリルカに警戒するが、ジリ

ジリとにじり寄って来る。

「は…は…これだから冒険者は…でも、そうですね…これは、あのお人好しのベル様とバーゲスト様を騙した報い…だとしたら、諦めも…悔しいなあ…」

リルルカは目に涙を浮かべながら言う。

「神様…どうして、どうしてリリを、こんなリリにしたんですか…？弱くて、ちっぽけで、自分が大嫌いで…でも、何も変わらないリリに…（寂しかった、誰かと居たかった、必要とされたった。でも…もう、終わる。やつと死ぬる、やつと終われる。何も出来ない自分を、弱い自分を、ちっぽけな自分を、価値の無い自分を、寂しい自分を…ああ、リリはやつと…）」

『リリ』

「死んでしまおうんですかっ!？」

「ファイアボルトオオオ!!」

「ハアアアアアア!!」

瞬間、リルルカに迫っていたキラアアントに二つの炎が放たれる。リルルカの近くにいたキラアアントは燃え尽き、その他のキラアアントは炎を放った存在を一斉に見る。

そこには、手を翳しているベル・クラネルと、炎を宿した剣を持ったバーゲストが居た。

その頃リルルカの所属するソーマ・ファミリアについて調べ、リルルカがベルとバーゲストによからぬ事をしていると感じたエイナは、ヘファイストス・ファミリアの店でバイト中のヘステイアの下に来ていた。

「お願いします、神ヘステイア。私からも説得しますが…あのサポーターと手を切るようベル君とバーゲストさんに…」

「無駄だよ」

「はい?」

「二人はもう決めちゃってるんだ。ベル君は、何があるうと、あのサポーター君を、見捨てないって。バーゲスト君は、何があるうと、あのサポーター君を守るって」

ヘステイアはそう言いながらベルとバーゲストがリリルカをどうしたいのか答えた時の事を思い出した。

「神様：僕はそれでも、あの子が困っているなら、助けてあげたいです。寂しそうですね、その子：神様と出会う前の僕みたいにな…」

「…バーゲスト君は？」

「私は…あの子が傷ついているなら、守りたいのです…騎士として、そして私の信念の為：弱肉強食。弱者は強者に尽くし、強者は弱者を守る。リリは今まで私やベルの為に尽くしてくれました。例えそれが自分の為であったとしても、私は尽くしてくれたリリを守りたい、例えどんな事があろうと…！」

「はあ…はあ…はあ…」

ベルとバーゲストはキラークラントを全滅させ、リリルカの方に振り向く。

「リリ、無事だよ？なんとも無い？」

「怪我をしているな、早く手当しなければ」

「ベル様：バーゲスト様…どうやって、ここまで…？」

「いや、霧でよく見えなかったんだけど…あの後他の冒険者が来て、周りにオークが居なくなっちゃって…それで直ぐ追って来れたんだ。間に合って良かったよ！」

「…どうして…」

「え？」

「どうしてリリを助けたんですか！どうしてお二人はリリを見捨てないんですか!？」

「え、え？」

「まさか、ご自分が騙された事に気付いて無いんですか！リリがお二人を驚かそうと思ってベル様のナイフを持っていったとも思っているんですか!!」

「つととー…リリ？」

リリルカは隠していたヘステイア・ナイフを乱暴に投げつけ、ベルは慌ててキャッチする。

「お二人は何なんですか!? バカなんですか! マヌケなんですか! 救いようの無い阿保なんですか!」

「ベルはともかく私も入るのか?」

「え、ベルはともかくってどういう事ですか バーゲストさん!? っていうかりり、落ち着いて「無理です!」

「お二人は何も気付いて無い! リリは換金の時にお金をちよろまかしていました、お二人とリリの分け前は2:1では無く半々です! 調子に乗って1:2にした時もありました! アイテムのお使いを頼まれた時も、定価の倍以上の料金を吹っかけました! 陰で酷い悪口を言った事もあります! 分かりましたか!? リリは悪い奴です、盗人です! お二人に嘘ばかり吐く、最低のパルウムです! それでも、それでもお二人はリリを助けるんですか!」

「うん」

「当然だ」

「どうして!」

「お、女の子だから?」

「何だその理由は」

「馬鹿あ! またそんな事言っつて、ベル様は女性なら誰でも助けるんですか、信じられません! 最低です! ベル様のスケゴマシ! 女だったらし! スケベ! 女の敵いいいい!!」

「…じゃあ、リリだからだよ」

リリルカに酷く罵られた後に、ベルは優しくそう言った。

「えっ…?」

「僕、リリだから助けたかったんだ。リリだから居なくなっほしく無かったんだ」

リリルカの足元に、涙がポツポツと落ち始める。

「理由なんてみつけられないよ。リリを助ける事に、理由なんて」

リリルカは顔を上げ、涙を流しながらベルを見る。

「リリ、困ってる事があるなら、相談してよ。僕馬鹿だから、言ってく

れないと分からないんだ。ちゃんと助けるから」

「う、うう…!」

「…リリ」

次はバーゲストから声をかけられ、リリルカはバーゲストの方に顔を向ける。

バーゲストは穏やかな表情で、戦闘時の口調ながらも優しく言った。

「私には信念がある。弱肉強食…弱者は強者に尽くし、強者は弱者を守る。お前は今まで私達に尽くしてくれただろう?だから私もお前を守る。お前に刃が向けられたなら、私が刃を受け止めよう。お前に刃を向ける者を、私が倒そう。お前を虐げる全てから、お前を守ろう…だから、これからも私達の為に、頑張ってくれるか?」

「あ、あああ!!」

リリルカはその言葉を聞いてから二人に思いつきり抱き着いた。

「うぐつ、ひつぐ…ごめんなざいいいい!」

二人は顔を見合わせ、優しく笑いながらリリルカを抱きしめたのだった…

…
そしてその夜、ヘステイアがバーゲストのステイタスを更新すると

バーゲスト

レベル1

力：B 734

耐久：B 779

器用：C 697

敏捷：C 643

魔力：A 824

《魔法》

【チエーン・ハーディング】

・拘束魔法

・詠唱式【鎖は我が獵犬達、我が敵を捕らえる牙となれ】

《スキル》

【太陽の騎士（着名）】

・任意発動

・魔力を消費することで武器に炎を付与エンチャントする

・魔力を消費することで炎を放出させる

【聖者の数字】

・日の当たる午前中において、力の超高補正

【ワイルドルール】

・自身に従う存在がいると全能力の補正

・従う存在が多いほど効果向上

・モンスターを倒す度に短時間、自然治癒力が上昇

・モンスターを倒す度に短時間、力に補正

【強者^{仲間}としての責務】

・早熟する

・守る存在がいる限り効果持続

・守ろうとする想いの丈により効果向上

「何だこのスキル!？」

ヘステイアはまた頭を抱えたらしい。

第七話 劍姫と修行

リリルカとこれからもパーティーを組む事になったベルとバーゲストは、エイナにリリルカの事を相談する為にギルドに向かっていた。

「それにしても、二人共あんなに仲良くなつてよかったですね！」

「あれは仲が良いと言うのかしら…」

（ベルを取り合つて牽制しあつた様にしか見えませんでした…）

バーゲストはベルを取り合う二人の事を思い出しながらギルドに歩いていった…

その頃リリルカとヘステイアはまだホームで言い争っていたが、リリルカがふと気になつてヘステイアにある質問をする。

「そういえばヘステイア様、バーゲスト様はベル様に好意を抱いていないのですか？」

「バーゲスト君が？まさか、あの子は君とは違つて僕とベル君の関係を進めようとしてくれるんだ！ベル君に対して好意なんて…」

その瞬間、ヘステイアの脳裏に浮かんだある光景…

「ベル、食器を洗うのを手伝ってくださいます？」

「あ、分かりました」

「…ベル、食器の並べ方がなつていませんわ」

「え、そうですか？」

「これでは取り出しにくいでしょう。良いですか？この食器は…」

「なるほどなるほど…バーゲストさんは凄いですね！」

「一緒に生活していくのですから、ベルもこれくらいは出来るようになっておくように」

「はい…」

楽しそうに話しながら食器を洗っている二人を見て、ヘステイアはその光景を思い出してこう思った。

（あれは恋人とかいうより、どちらかと言えば…夫婦…!?)

「ヘステイア様？」

「ま、不味いぞ、バーゲスト君もまさかつ、ベル君の事が…!？」

ヘステイアはバーゲストがベルに好意を抱いているかもしれない
と思い、頭を抱えるのだった。

その頃ベルとバーゲストはギルドに到着していた。

「えつと、エイナさんは…」

「ベル君とバーゲストさん？」

ベルとバーゲストがエイナの声ができる方を向くと、ソファアに座つ
ているエイナと対面するように座っているアイズの姿があった。

ベルはアイズを見た瞬間逃げだそうとするが、バーゲストが後ろか
ら襟元を掴み「ぐええ！」と声を上げながら引きずられていく。

「こんにちはエイナさん。それにアイズも、怪物祭の時以来ね」
「うん」

「あの、バーゲストさん、そろそろ離してください…」

「ああすみません。いきなり逃げだそうとするものでしたから」

「ベル君、ヴァレンシユタイン氏が、君に用があるそうなの」

「え、僕に？」

「なるほど…ベル、リリの事は私が話しておくから、貴方は彼女と話し
てきなさい」

「は、はい…」

エイナとバーゲストは一旦離れ、ベルはアイズと対面する様に座
る。

「この前、ダンジョンでオークに襲われてたよね？」

「は、はい！どうしてそれを…」

するとアイズはベルが無くしていたグリーン・サポーターを取り出
す。

「これ、君達が居なくなつた後に落ちてたから、返そうと思つて」
アイズはグリーン・サポーターを差し出し、ベルは受け取る。

「あ…それじゃあ、あの時助けてくれたのは…！」

「ずっと謝りたくて…」

「え？」

「私が逃したミノタウロスの所為で、君の事いっぱい傷つけたから…
ごめんなさい」

アイズはそう言つてベルに頭を下げた。

「ち、違います！ヴァレンシユタインさんは全然悪くなくて、寧ろ助けてもらった命の恩人で…っというか、謝るのはお礼も言わずに散々逃げ回った僕の方で…ごめんなさい！」

そう言つてベルも頭を下げる。

アイズはそんなベルを見て少しだけ笑みを浮かべると、ベルはその表情を見てドキリとしていた。

あの後丁度エイナとリリルカに関する話を済ませたバーゲストはベル達と合流し、一緒にギルドを出たのだった。

「ダンジョン探索、頑張ってるんだね」

「え？」

「こんな短期間で10階層に辿り着いて、凄いね」

「い、いえ！そんな事無いです。もっと強くならなきゃいけないのに、まだまだで、戦い方も素人同然ですし。も、目標にも全く手が届かなくて…バーゲストに頼つてばつかですし、ホント、全然ダメで…」

「…バーゲストさんはこの子に戦い方を教えてあげないの？」

「やっても良いのですが…」

「出来るんですか!？」

ベルはバーゲストが戦い方を教えられるという点にびっくりする。

「私とベルは戦い方が違いますし、私が出るのは基本的な事に連携の取り方の指導、盾の構え方、剣、槍、弓の使い方…ベルの様なナイフは私の体格では教えるのに不向きでしたので…」

「そうなんだ…じゃあ、私が教えてあげようか？」

「え？」

「それは良いですわね」

「え!？」

こうしてベルはアイズが次の遠征に行くまでの間、ベルに訓練をつける事にしたのだった…

翌日、まだ日も見えておらず、空が若干明るくなった頃、ベル、アイズはオラリオ外壁の上に来ていた。

「えっと…それで、ヴァレンシユタインさん」

「アイズ」

「え？」

「アイズで良いよ、皆私の事をそう呼ぶから…嫌？」

「い、嫌じゃないです！…あ、アイズ、さん…と、ところであの！訓練つて、僕は何をすれば」

「何をしようか…」

「え？」

まさかの発言にベルは一瞬固まる。

「昨日からずっと、何をしたらいいか考えていたんだけど…君の武器はナイフなんだよね、蹴りや体術は使うの？」

「い、いえ…」

「ナイフを貸して」

そう言っただけでアイズはベルからナイフを受け取る。

ベルはアイズが何をするのか真剣な眼差しを向け、注目していると

…

「こうかな？いや、こう、こう？」

よく分からないポーズを取り始めた…

(アイズさんって、もしかして天然…?)

「あ、あの、一旦整理した方が…」

ベルがそう言っただけで手を伸ばした瞬間、アイズは瞬時にベルの顔に回し蹴りをかました。

ベルは綺麗に吹っ飛び、地面に倒れる。

「あつ……！」

(やっぱり、アイズさん天然なんだ……)

倒れたベルにアイズは近寄り、膝を着く。

「……ごめん」

「そんな！アイズさんは、悪くなくてゴホッ、ゴホッ！」

起き上がり、そう言ったベルを見てアイズは立ち上がる。

「やっぱり戦おう」

「え？」

アイズは腰にあるデスペレートを引き抜くと、ベルは立ち上がってアイズから少し離れる。

アイズはデスペレートを置くと、鞘を持って構える。

それを見たベルもグリーン・サポーターからナイフを取り出す。

「うん、それで良いよ」

「え？」

「今、君が反応したみたいに、これから戦う中で色々な事を感じて。そうすれば、戦い方は嫌でも身につく」

アイズがそう言って一歩進む度にベルは一歩退がる。

「…君は臆病だね」

「っ！」

「身を守る為に臆病でいる事は、大切な事だと思う。でも、それ以外に、君は何かに怯えてる」

その時ベルの頭に浮かんだのはミノタウロス。

最早ベルのトラウマになりつつあるそれを思い出し、ベルは強くナイフを握りしめると、アイズに向かってナイフを振るい、アイズとベルの特訓が本格的に始まったのだった。

因みにその頃バーゲストは……

「ふう……弁当を作るのに少し手間取りました。二人はもう訓練を……レフィーヤ？」

「あ、バーゲストさん、丁度良かったです！アイズさん見ませんでした！?!」

「…ああ、アイズなら…あそこに…」

「!あ、アレはさっきのヒューマンー!?!」

こうして早朝はバーゲストが見守る中でのアイズとの訓練。

その後はリリルカと共にダンジョンに潜る日々が始まったベル。訓練の成果は着実に表れていた。

「ベル様、バーゲスト様。今日はどこまでいきましようか?」

「あ、うん。明日休みにする分、出来るだけ奥に潜りたいかな」

「すみません、リリの都合で…」

「仕方ないだろう、下宿先の都合だからな」

「そうだよ。それに僕もやる事があるし」

10階層を進んでいる中で、リリルカはベルにある質問をした。

「ベル様。どうしてこの頃、ダンジョンに潜る前からボロボロなんですか?」

「あはは、ちょっとね…」

リリルカが誤魔化しているベルを怪しく思っていると、前からインプの群れが現れる。

「リリは退がって!」

「はい!」

リリルカを退がらせてベルとバーゲストは武器を構えるとインプ達は二人を囲みながらジリジリと接近する。

するとリリルカがボウガンから矢を放ち、インプ達を怯ませる。

「ふっ!」

二人はその隙を突いてインプを次々に斬り裂く。

するとインプが一体、ベルの背後から襲いかかるとするが、ベルはそのインプを回し蹴りで吹き飛ばし、撃破する。

その後もベルは体術を駆使しながらインプ達を撃破していった。

(視界は広く、死角は作らない!)

アイズから学んだ教訓を思い出し、インプ達と対峙する。

「ベル様、凄い!」

(対応の手際の良さが前とは段違いですわね…たった数日でここまで変わるなんて…)

バーゲストもベルの成長の早さに少々驚きながら、ベルとバーゲストに怯えて下がっていくインプ達を見据える。

するとインプ達の後ろから今度はオーク達が現れる。

「ちよつと多いね…」

「一旦逃げて、態勢を立て直しましょうか？」

「いや…やろう」

「その意気だ、いくぞ、ベル！」

「はい！はあああああ！」

そして魔物を倒しきり、休憩中に弁当を食べていると、ベルはリリルカとバーゲストにこう訊いた。

「僕って、魔法に依存しちやってるかな？」

「依存、ですか？リリはそこまで気にしていませんが、確かにベル様の魔法は使いやすい節がありますし…手軽に使ってしまう分、必殺としての一面が薄れているかもですね」

「やっぱりそうだよね…」

「魔法とは本来切り札です。奥の手と言い変えてもいいかもしれませんが…」

「まあ、私もよく使うがな」

「でも、魔力も上がれば、規模も出力も上昇します。ベル様はそこら辺全く詠唱もせずに炎を剣に宿したり放ったりするバーゲスト様には劣るかもしれませんが、それでもベル様の魔法は成長性はピカイチです。自信を持ってください！」

「そっかな…うん、ありがとう、リリ」

そうしてダンジョン探索が休みの翌日、ベルとアイズはいつも通りに訓練を始めようとした時だった。

「二人とも良いかしら？」

「バーゲストさん？どうしたんですか？」

「ええ：アイズ、今日は私と戦ってみないかしら？」

バーゲストは突然、アイズと戦う事を提案したのだった。

「バーゲストさんが、私と？」

「ええ、流石に見るだけには飽きてきたところです。ベルの成長にも繋がると思いますし、どうですか？」

「…分かった、私もバーゲストさんと戦ってみたい」

アイズはそう言つてデスペレートを引き抜く。

バーゲストも距離を取り、剣を抜いて盾を構える。

「では、ベル。合図を」

「は、はい！…それでは…始めっ！」

ベルの合図と同時にアイズはバーゲストに近付き、剣を振るうが、バーゲストはそれを盾で全て受けていく。

（防御が硬い…！まるで盾が壁の様に立ちはだかる…これで彼と同じレベル1…!?!）

「はあっ！」

バーゲストがアイズの剣を盾で受けると同時に押し返すと、アイズは勢いよく押し返され、バーゲストは剣を振るう。

「くっ…！」

アイズはデスペレートでそれを受け止めるが…

「っ!？」

「せあっ！」

バーゲストに力任せに押され、ズルズルと地面を削りながら後退する。

（今の力…私がテイオナみたいな力自慢の戦い方じゃないにしても、レベル1にしては異常…）

（そうか、バーゲストさんのスキル、聖者の数字…!）

（なんとか頑張ってはいますけれど、一瞬でも気を抜けば斬られていたわ…やはり速いわね…）

二人は睨み合っていると、アイズが走り出す。

（来るか！）

「はあああああー！」

アイズがバーゲストを斬ろうと防がれては別の方向から迫り、また防がれれば更に別の方向から迫る。

アイズがバーゲストの周りを高速で移動し、あらゆる方向からデスペレートを振るうが、バーゲストはそれを盾で受け止め、剣で相殺し、ある時は身体を逸らして避ける。

(この盾が無ければ既に何度も斬られていましたわっ！)

盾を贈ってくれたベルに感謝しつつ、バーゲストは猛攻するアイズの動きに少しずつ慣れていく。

(段々攻撃に反応するのが早くなってる、このままじゃ…！)

「そこだっ！」

「っ！」

バーゲストはデスペレートを盾で弾き、アイズは大きく仰け反り、尻餅を着いてしまう。

バーゲストが剣を振り下ろすと横に転がって回避し、立ち上がったバーゲストと距離を取る。

「バーゲストさん、強いね…！」

「魔法有りならもう負けている。お前が風を纏う魔法を使っていたなら、私はもう切り刻まれているだろう。それに私は午前中、日が出ている間は力が大幅に強化されるからな」

(あの力の強さはそういうスキル…！けれど)

「それだけじゃない、バーゲストさんは多分…：身体の作りが私達とは違う。もつと強くて、強大な何か…！」

「ほう、確かにこんな角を持つている時点で普通では無いな…：それを負ける理由にするか？」

「まさか…！」

アイズはデスペレートを構え、バーゲストに強い眼差しを向ける。

「そうだ、来い！アイズ・ヴァレンシュタイン！私を倒してみろ！」

(バーゲストさんに攻撃を当てる方法…！)

アイズはバーゲストに駆け出し、一歩二歩進むと…

「はあっ！」

「っ!!」

デスペレートを投げ出した。

バーゲストは武器を投げてくるとは思わず、咄嗟に盾で防ぐと、デスペレートに一瞬気を取られた内にアイズを見失う。

(何処につ!?)

すると突然バーゲストの足が払われ、バーゲストは下に視線を向けると、低い体勢の状態でバーゲストの足を足で払っているアイズの姿があった。

(私が下を見つらいのを利用してっ…!)

バーゲストは地面に倒れ、アイズは弾かれて空中に浮いたデスペレートをキャッチしてバーゲストの首元に素早く突き付けた。

「…完敗、だな」

「うん、良い勝負だったよ」

アイズはデスペレートを仕舞い、バーゲストに手を差し伸べる。

バーゲストはアイズの手を掴み、立ち上がると剣を拾って仕舞う。

「あんな大口叩いておいて負けるなんて、格好がつきませんわね」

「ううん、バーゲストさん凄く強かったよ。私も勝ててホッとしてる」

「お二人ともお疲れ様です!何か、言葉に出来ませんけど何か、凄い戦いでした!」

少し興奮気味にベルが二人に近寄って来る。

「アイズさんの攻撃もそれを防ぐバーゲストさんも凄かったです!

あー僕も二人みたいに強くなりたいなあ…!」

「じゃあ、君も始めよっか」

「え?」

「今日は2対1でやってみますか、ベル?」

「え?」

この日、ベルは地獄を見た。

あの後気絶してはアイズの膝枕の上で起きたりを繰り返したり、昼

寝の特訓をしたベルとバーゲストはアイズに連れられて街を歩いていた。

「アイズさん、何処に行くんですか？」

「お腹が空いてるみたいだから、何か食べよう」

「そ、そんな、大丈夫で『ぐうううう』あつ…！」

「気にしないで、私もお腹が空いたから」

アイズはある屋台の前に立つと注文する。

「ジャガ丸くんの小豆クリーム味、三つください」

「えっ!？」

ベルは店員を見て絶句する。

「いらっしやいませええっ!？」

なんと屋台で働いていたのはヘステイアだった。

「クリーム多め、小豆マシマシで」

アイズがそう言ってもちっとも反応しないヘステイアの視線はベルに注がれており、アイズはベルとヘステイアを交互に見る。

「なあああにをやってるんだ君はあああ!全く、次から次へと君は! とうとう、遂に、よりにもよって!この女までええええ!!」

ベルにしがみつきながらそう言うヘステイアを見て、アイズはバーゲストに視線を向けると、バーゲストは右手で眉間を押さえていた。

「じゃあ、後二日だけだっっていうんだね？」

ヘステイアに訳を説明したベルは、ヘステイアに頭を下げていた。

「はい、元々、ロキ・ファミリアの遠征が始まるまでっていう約束だったんです。お願いします、神様!」

「…バーゲスト君はどう思ってるの?」

「アイズとの訓練が始まってから、ベルは確実に前より強くなっています。彼の為にも受けさせるべきです」

「君が教えるのじゃダメなのかい?」

「私とベルでは体格差があり過ぎて教えられる事が少ないのです。体格が近いアイズの方がベル個人の教官としては向いているでしょう」

「…はあ…分かったよ、二人がそこまで言うなら…」

「神様…！」

「但しヴァレン何某君！ボクのベル君に変な真似をしたら、その時点でこの話は無しだ！いいね!？」

ヘステイアはアイズを指差し、睨みつけながらそう言う。

「はい」

「誘惑なんて以ての外だからなー！」

「…はい？」

「ボクのベル君に唾をつけておこうたってそうはいかないぞ！なんてったってボクの方が先なんだ！」

アイズはヘステイアの言った事が理解出来ずにおり、ヘステイアはベルに飛びついてしがみ付く。

こうしてヘステイアは今日の訓練を見学することになった…

「いやあー、メインストリートと違って、この辺はかなり暗いねえ」

夜の訓練も終え、メインストリートに向かう途中の暗い道を歩く四人。ヘステイアは暗いのを理由にベルにピツタリくつついていた。

「あ、あの、神様…?？」

「ベル君、ボクが転ばないように、しっかり手を繋いでいておくれ♪」

アイズは先程から周りをキョロキョロと見渡しており、バーゲストも腰に差した剣に手を掛けていた。

「アイズさん？」

「……見られてる」

「やはりか」

その瞬間、上から黒い装備に身を包み、槍を持ったキヤット猫ピープル人が現れ、更に同じような装備をした四人のバルウムが現れる。

「ベル、ヘステイア様を守れ」

「はい！神様、隠れて……！」

キヤットピープルの男がアイズに槍を振るい、アイズはデスペレートで受け止める。

バーゲストはバルウム達に炎を放ちながら詠唱を始める。

「鎖は我が猟犬達」

「……いつ魔法をつ！」

剣を持ったバルウムがバーゲストに剣を振るうがバーゲストはそれを盾で受け止めると、反対から槍を持ったバルウムが近付くがさらに剣先を向け、炎を放つと槍持ちは退がる。

「我が敵を捕らえる牙となれ」

次は斧を持ったバルウムが上から迫るが……

「チエーン・ハーディング」

盾で止めていた剣持ちのバルウムを鎖で捕まえ、上の斧持ちのバルウムに向けて投げる。

「ぐわっ！」

二人がは空中でぶつかり、上に押されて建物の屋根に落下する。

「っ！」

しかし最後に戦鎚を持ったバルウムがバーゲストの背に向けて戦鎚を振るおうとすると……

「フアイアボルト！」

ベルが魔法を放った事で攻撃を中断し、退がった。

その様子を見たキヤットピープルは。

「詠唱を抜いて、魔法を撃ちやがった……」

「あの方に報告だ、きつと喜ばれる」

「もう十分だ、退くぞ」

キヤット、ピープルと四人のバルウムは建物の上に撤退する。

「待つて！」

「これは忠告だ、【剣姫】。今後一切余計な真似はするな」

「どういう意味？」

剣持ちのバルウムの言葉の意味がわからないアイズにキヤット、ピープルがこう言う。

「大人しくダンジョンに潜ってろつつてんだよ、人形女。あの方の邪魔をするなら…殺す」

そう言つてキヤット、ピープルとバルウム達はその場を去つて行つた。四人は一先ずメインストリートに出た。

「いやあ〜一時はどうなるかと思つたよ…」

「あの人達、何だつたんでしよう。僕達をいきなり襲つてきて…」

「闇討ちは、よくあるよ」

「あるんですか!?!」

「オラリオも色々物騒なところもあるのは、リリで分かっていたでしょう?それとベル、先程は助けてくれてありがとう」

「あ、いえいえ…」

「けれど、ダンジョンの外で仕掛けてくるのは珍しい」

「襲つてきそうな相手に何か心当たりは無いのかい、ヴァレン何某君!」

「…あり過ぎて、逆に…」

「はあ…全く、物騒過ぎやしないかい、君達のファミリアは…」

「ごめんなさい…」

三人はアイズと別れ、それぞれのホームへ帰還したのだった。

「バーゲストさん、どうしたんですか、バベルの塔をジツと見て…」

「…何でもありません、早く帰りましょう」

バーゲストはバベルの塔に居るある存在を一瞬だけ睨んでホームに帰つたのだった。

第八話 物語の一頁

「アイズがレベル6？」

「はい、凄いですよね…リユースさんから聞きましたけど、ランクアップって、強大な敵を打ち倒さないと出来ないって」

「要は危険を冒す、死闘を制し、偉業を果たせば良いという事でしょう。物語の英雄達はその身を削り、知恵を絞って怪物達を倒してきたように」

食器を洗いながらベルとバーゲストはランクアップに関する話をしていた。

「死闘…」

「私にも貴方にも、危険だと分かっているとしても、命を落とす可能性が高いとしても、戦わなければならぬ時は訪れます。それを乗り越えた時、恩恵の力は昇華される」

「なるほど…」

ベルはバーゲストの言葉を聞いて、強くなりたいと改めて思うのだった。そして…

「はああー！」

「っ！」

ベルとアイズの訓練も最終日。二人はバーゲストが見守る中、剣を交える。

そしてベルは遂に、アイズに反撃する事に成功した。

「初めて、反撃出来たね」

「一週間、ありがとうございました！」

「私も、ありがとう。楽しかったよ。それじゃあ、頑張つてね」

「はい。アイズさんもその、頑張ってください！」

こうして、ベルとアイズの訓練は終了し、ベルは大幅な成長を果たしたのだった。

「それじゃあ、本当にヴァレン何某との特訓は今朝で終わったんだね？」

「はい。予定通り、今日からロキ・ファミリアの遠征があるそうなの

で」

「そっかあ、終わったかあ…」

ヘステイアはベルのステイタスの紙を見て少し困惑していた。

「それじゃあ神様、行ってきますす！」

「あ、おいベル君！ステイタス！」

「すみません、帰ってから見ます！」

「ヘステイア様、私も行って参ります」

ベルとバーゲストはホームを出て行き、ヘステイアは一人でベルのステイタスを見ていた。

(このアビリティ…)

「アイズさん達、今頃何階層でしようか？」

「まだ潜り始めた頃だろう、私達より上にいる筈だ」

ベルとバーゲストはいつも通りリリルカを連れてダンジョンに潜り、現在9階層に来ていた。

「しかし…嫌な予感がするな…」

「嫌な予感？」

「ああ…今日のダンジョンは何か違う、何か…ベル！リリ！」

バーゲストが叫ぶと三人の上が崩落する。

バーゲストは咄嗟に二人を吹き飛ばし、二人と分断される。

(なんとなくそんな気はしていましたけれど、ダンジョンが崩落なんて絶対にあり得ない…！ここまで仕込みますか…!?)

バーゲストは振り向くと、拳が眼前に迫っており、バーゲストの意識はそこで途絶えた。

バーゲストを気絶させた張本人、オツタルは、バーゲストがダン

ジョンの壁に背を預けて気を失ったのを確認すると、振り向いて歩き出す。

「周辺のモンスターは狩り尽くした、襲われる事は無いだろう」

オツタルは次に邪魔をする可能性がある者の下へ向かった。

バーゲストの角が一本取れていた事に気付かずに…

「バーゲストさん、大丈夫かな…？」

「きつと大丈夫です。バーゲスト様はとてもお強いですし、どちらかと言えば危ない状況にあるのはリリ達の方でしょう」

「そっか…じゃあ早く合流しないとね」

バーゲストと分断されたりリルカとベルは合流の為にダンジョンを進んでいると、ベルは立ち止まり、辺りを見渡す。

「どうかしましたか、ベル様？」

「リリ、何か感じない？誰かに見られているような…」

「さあ…ただ何か、この階層には違和感があります」

「うん。モンスターが少な過ぎる…それに冒険者も…」

ベルは初めてミノタウロスを見た時も、こんな感じだったのを思い出す。

「行こう、リリ」

「あ、はい」

ベルがそう言つて、二人が歩き出した瞬間…

「グオオオオオオオ!!」

モンスターの咆哮と思われる音がダンジョンに響き、二人は足を止める。

「今のは…」

ドスン…ドスン…と二人の後方から足音が響き、二人が振り返ると、其処には片方の角が折れた、大剣を持っているミノタウロスが居

た。

「え……え……？何で9階層にミノタウロスが……!?ベル様、逃げましょう！バーゲスト様のいないリリ達では太刀打ち出来ません！早く……！」
リリルカがそう呼びかけるも、ベルはあの時のトラウマが蘇り、その場から動けずにいた。

「ベル様……！」

ミノタウロスは二人に段々近寄っており、完全に二人を狙いに来ていた。

「グオオオオ！」

ミノタウロスが大剣を持ち上げ、二人に向かって振り下ろす。

「しっかりと下さいー！」

リリは咄嗟にベルを突き飛ばして大剣を避けるが、大剣が叩き付けられた際に生じた衝撃で二人は吹き飛ばされる。

「あ……い……！」

ベルはハツとし、自分の膝の上に倒れているリリルカを見ると、リリルカは頭から血を流しており、気を失っていた。

「リリ……い……！」

ミノタウロスは再びベル達の方を向き、近付いてくる。

「リリ……めん……！」

ベルはリリルカは投げ飛ばし、投げた方とは反対に走り出し、ミノタウロスにファイアボルトを放つ。

ミノタウロスはベルの方を向く。

「【ファイアボルト】！【ファイアボルト】！」

ベルはファイアボルトを連発し、ミノタウロスが炎で生じた煙で見えなくなつた瞬間……

「なっ……!?」

煙から大剣を持ったミノタウロスの腕がベルを殴るように横薙ぎに振われ、ベルは咄嗟に腕をクロスさせてガードするも、吹き飛ばされて壁に激突する。

「ぐっ……ぐはっ！」

ベルの纏っていた鎧が砕け、ベルの身体から剥がれる様に地面に落

ちる。

ミノタウロスはベルに近付き、大剣をベルに振るい、ベルはそれを
いなす。

攻撃をまともに受ければ、鎧の無くなったベルは今度こそ終わる。

ベルはミノタウロスの攻撃をいなし続けた。

(このままじゃ、いずれやられる…！隙を見て逃げ出すか、バーゲスト
さんや他の冒険者が助けに来るのを待つか…!?)

ベルはミノタウロスの攻撃を躲す中で必死に考えていると…

「うつ…あ…ベル、ベル様…！」

気を失っていたリルルカが目を覚まし、ベルの名を呼ぶ。

「リリ…！リリ、逃げて…！逃げて！」

「いや…」

「逃げろよ！」

「ダメです…！」

「くっ、早く行けえええええ!!」

「う、うわあああああ!!」

リルルカは立ち上がり、叫びながらその場を離脱した。

(これで良い…！リリが逃げれば、僕も逃げられる…訳無いだろ!!今、
コイツを行かせたらリリは…死ぬ…！)

「ちくしょう！」

ベルはヘステイア・ナイフを抜き、バゼラードとヘステイア・ナイ
フの二本を持ってミノタウロスと対峙した。

その頃ロキ・ファミアリアは、遠征中に怪我を負った冒険者を見つけ、
何があったか話を聞いていた。

「ま、間違いねえ…9階層に、ミノタウロスが…」

「何れにしろあなた方が無事で良かった…他の冒険者は？」

「奥のルームで、一人襲われてた…あの白髪の子、今頃は…」

「白髪!? ねえ、金髪の鎧を着た女の人は居なかった!?」

白髪と聞いてアイズはベルを思い浮かべ、バーゲストの事を聞く。

「い、いや…そんな奴の姿は無かった…」

「っ!」

アイズは走り出し、ベルを探し始めた。

「おいアイズ!」

「ちよ、遠征中だよ!」

(まさか、あの子が襲われてる…?! ミノタウロスに襲われているのが、もし本当にあの子で、近くにバーゲストさんがいないなら…勝ち目は無い! 殺される…お願い、間に合って…!)

アイズは走り続けると、ミノタウロスの咆哮が微かだが聞こえ始める。

(ミノタウロスの鳴き声…微かだけど聞こえる。でも、音が反響して、道が…)

「冒険者…様…?」

アイズがベルの居場所が分からず、どうするべきか考えていると、陰から傷を負った冒険者…リリルカが現れ、アイズに声を掛ける。

「冒険者…さま…」

「どうしたの? しっかりして!」

アイズはリリルカを抱えると、リリルカはアイズを見つめながら小さな声で話す。

「冒険者さま…どうか、どうかお助けください…! あの方を、ベル様を、助けてください…!」

「! 場所は!」

「正規ルート…E—16の、広間…」

「ありがとう」

(そこにあの子が…!)

アイズはリリルカに教えられた場所に向かってリリルカを抱えながら走る。

(もうすぐ、広間に…!)

「…【劍姫】」

「!?」

広間^{ルーム}へと向かう道の途中で、アイズの前にある存在が立ちはだかる。

「【猛者^{おうじや}】、オツタル…!」

オラリオ最強の冒険者、オツタルがアイズの前に立ち、剣を向ける。

「手合わせ願おう」

「なっ…!?!」

「敵対する派閥^{かたき}とダンジョンで相まみえた…殺し合う理由には足りんか?」

「!まさかつ…!」

アイズは以前ベルと居た時にフレイヤ・ファミリアに襲われた事を思い出す。

(警告の意味は…!)

「その娘を置け…死ぬぞ」

アイズはリリルカを壁の側に置き、楽な姿勢で座らせる。

アイズはデスペレートを引き抜き、オツタルを見据える。

(相手は、オラリオ唯一のレベル7…!余計なことを考える余裕は、無い!)

「【目覚めよ^{テンベスト}】」

アイズは風を纏ってオツタルに突っ込んでいく。

「そこを退いて!」

アイズはデスペレートを振るうが、オツタルはいとも簡単にアイズの攻撃を大剣で受けていく。

「っ…!」

「——温い、だが、新たな高みに至ったか」

(この重圧、レベルの差だけじゃない…!これが、【猛者^{おうじや}】の、武人の力量…!このままじゃあの子が…!行かなくちゃ、助けなくちゃ…死なせたく無い…!)

アイズはデスペレートを強く握り、オツタルを睨むと…

「!」

ティオナとティオネが現れ、オツタルを攻撃し、隙が出来る。

「ロキ・ファミリア…！」

「今！」

アイズはその隙にオツタルの避けて進むが、オツタルはアイズを攻撃しようとして振り向きながら大剣を振るうと…

「誰に剣向けてんだ、猪野郎!!」

今度はベートが現れ、オツタルの大剣を受け止める。

「ちっ！」

アイズは既に奥へと進んでしまい、テイオナとベートが後を追って奥に向かった。

「やあ、オツタル…」

「…フィンか…」

オツタルはフィンに視線を向ける。

「まさか、立ち塞がっているのが君とはね…理由を訊いてもいいかな？」

「…敵を討つのに理由は要らん、時と場所を選ぶ道理も無い」

「もつともだ、では…それは派閥ファミリアの総意と取っていいのかな？女神フレイヤは、僕達と全面戦争をするか？」

「……………」

「…もう一度訊こう…それは、女神フレイヤの意志なんだね？」

フィンはオツタルを強く睨んでそう訊くと、オツタルは目を瞑り。

「俺の、独断だ…」

そう言っただけでフィンの横を通ってその場から離れようとした瞬間。

「!?ぐっ…!?」

「なっ!?」

オツタルの背中にアイズ達が進んだ方向から何かが飛んできて命中した。フィンがオツタルの背中に当たった何かを確認すると…

「ベート!?」

「ぐっ…クソがっ…！」

飛んで来たものの正体はなんとベートだった。

すると今度はアイズが勢いよく飛んで来る。

「アイズまで…一体何があったんだい!？」

「うわあああああ!?!」

アイズ達が飛んで来た方からティオナが叫びながら走ってくる。

「ティオナ、無事か!?!」

「無事だけど! 正直凄く危なかった! 一体どうなってるの!?!」

ティオナはフィン達の側に立ち、振り返って奥の方を見ながらそう言うのと、ベートとアイズも立ち上がって奥の方を見る。

「おい、何でアイツは邪魔すんだよ?」

「分からない、あの人は絶対にこんな事しない筈…」

「二人共一体どうした? 誰の話を…」

「リヴェリア、アレを見るんだ」

フィンがそう言い、リヴェリアが前を見ると、何かが歩いて来ている。

背が高く、鎧を纏い、金髪の髪を持った女性…

「…バーゲスト…!?!」

オツタルの次に立ちはだかったのは、何時も持っている剣と、黒い刀身に赤い光の線がある大剣を持ったバーゲストだった。

「バーゲストさん、何で…!」

「アアアアアアアアアアアアア!!」

バーゲストはダンジョンにとても大きな咆哮を轟かせ、アイズ達に向かつて突っ込んで来る。

「ティオネ! その子を連れて退がれ!」

「はい!」

ティオネがリルルカを連れて後ろに退がり、フィン達はバーゲストが振り落とす黒い剣を避けてバーゲストから離れると…

ドゴオオオオオオオオン!!

凄まじい衝撃がフィン達を襲い、ダンジョンの地面や壁にバーゲストを中心とした亀裂が入る。

「何だよあの馬鹿力!?!」

「こんな力を持っていたなんて…!」

「…リヴェリア、彼女の角、一本無くなっている」

「何?…確かに、以前見た時は二本あったな…まさか、角が二本無い

とああなるのか?」

「恐らくはね…問題は何で角が無いかだけど…」

「…なるほど…」

「オツタル、何か知っているのかい?」

「…恐らく、俺が取った」

「恐らく?」

「色々事情があった…だが、俺の不始末なら俺がなんとかせねばならんな」

オツタルは前に出てバーゲストと対峙すると剣を地面に突き刺し、何も持たずに構える。

「アアアアッ!」

バーゲストはオツタルに飛びかかり、剣を振るうがオツタルはそれを避け、バーゲストが自身の横を通ろうとした瞬間に…

「ぬんっ!!」

バーゲストの頭に拳を叩き落とし、バーゲストは地面に激突する。

「うわっ、今凄い音したよ、大丈夫!」

「……」

バーゲストは地面に伏せたまま動かなくなると、黒い大剣が小さくなり、やがてバーゲストの角になる。

「彼女の角が今の黒い大剣?!?リヴェリア、彼女の容態は?」

「…頭から血は出ているが、命に別状は無さそうだ。レベル1で【おっしや猛者】に殴られてよくこの程度で済んでるものだ…」

「そうか…ありがとう、オツタル」

「元々俺の引き起こした事だ、感謝される必要は無い」

オツタルはそう言っただけで今度こそその場から去っていった…

「さて…また目覚めたら暴れる、なんて事になる前になんとかしないとね…」

「何かで縛るか?」

「馬鹿、そんなあの力の前じゃ意味無いわよ」

「この角が元に戻れば良いんだが…」

「元の場所に戻したらくつつかないかな…」

ティオナはバーゲストの取れた角を持ってバーゲストの角があった場所に近づける。

「いやそれでくつつく筈が…」

「あ、くつついた！」

ティオナの声で一同は一斉にバーゲストの顔を見ると、確かに取れていた角が元の場所に付いていた。

「不思議な身体だね…ティオナ、バーゲストを背負ってくれ」

「はい！」

ティオナはバーゲストを背負い、アイズは再びベルが居る広間^{ルーム}に向けて駆け出した。

フィン^{フィン}はアイズの後を追っていると、リヴェリアが話しかけてくる。

「フィン、バーゲストについてどう思う？」

「…本当に人かどうか疑っているよ、あの力、僕でもまともに喰らえばタダじや済まなかっただろうね…取り敢えず彼女の主神や、ロキにこの事を話しておく必要があると思うだ」

「…私は、バーゲストは悪人では無いと思っている」

「僕だってそうさ、なんてったって、レフイーヤの事があるからね…食堂で見た時も、礼儀正しい子だと思っただし、悪人とは思えないけれど…さっきの姿を見た時、僕の親指は今までで一番疼いていた」

「脅威になると？」

「彼女次第かな、あの力を自分の物にするかそれとも…恐ろしい厄災になるか…」

そうしてアイズ達がリリルカの言っていた広間^{ルーム}に辿り着くと、そこには…

「…うそ…」

「アイズ！どうしたのって…！」

アイズ達の視線の先には…

「はあああああ!!」

「グオオオオ!!」

死闘を繰り広げているベルとミノタウロスの姿があった…

ベルはミノタウロスの攻撃をいなしていたが、隙を突かれてグリーン・サポーターごとミノタウロスの折れていない左の角で突き上げを喰らい、地面に叩きつけられた。

「ぐ、ぐあつ……！」

ベルが起きあがるにも中々起き上がれずに、ミノタウロスが徐々に迫って来る。

(ここまで、なのか……)

ベルは一瞬内心、少し諦め始める。

(リリ、無事だと良いな……バーゲストさんも大丈夫かな……)

ベルは目を閉じ、リリルカやバーゲスト、ヘスティアの事を思い出す。

(神様、すみません……僕……)

『あなたなら、きつと出来るわ』

「っ!!」

ベルは瞬時に起き上がり、ミノタウロスが振り落とした大剣を回避する。

(馬鹿か僕は！あの日言っただろう、追いつきたいって、強くなりたかって、英雄になりたいって！それを応援してくれる人が、信じてくれる人がいるのに！先ず僕が諦めてどうする！)

ベルはヘスティア・ナイフと地面に刺さっていたバゼラードを引き抜き、再びミノタウロスと向き合う。

「また前みたい……アイス・ヴァレンシユタインや、バーゲストに助け

られる訳にはいかないんだ!!」

(そうじゃないと、英雄になんてなれない…!高みなんて届かない!)

「来い!!僕は今日、お前を倒す!!」

ミノタウロスはそう宣言したベルを見て…

「グオオオオオオオオオオオオ!!」

今までで一番の咆哮…いや雄叫びを上げ、ベルに向かって行った。

アイズ達はベルとミノタウロスの戦いを静観していた。

「…おい、助けるんじゃないのかよ」

「ベート、分かるだろう。彼とミノタウロスから伝わってくるこの気迫…邪魔するなど一人と一匹が叫んでいるようなものだ」

「けど、良いの?あの子、レベル1なんですよ。死んじゃうよ?」

「……………」

ティオナからそう言われてもアイズは黙って戦いを眺めていると

…

「手は出さなくて良い…」

「うわっ!バーゲスト起きたの!?!」

ティオナの背負っていたバーゲストが目を覚まし、ティオナはバーゲストを降ろす。

「すまない、迷惑をかけたようだ…頭が痛いし考えが上手く纏まらない…思考も少し単純になっている…角が外れたか?」

「やはり、あの角は君にとって重要なものみたいだね」

「まあ…」

「それよりさ、本当にあの子助けなくて良いの?」

「ああ…アレはベルの冒険だ、手を出そうものなら私が止める…」

バーゲストはベルとミノタウロスの戦いを見てそう言った。

「バーゲスト様…」

「リリ、心配するな。ベルなら大丈夫だ」

ベルはミノタウロスの攻撃を避けながらこう思っていた。

（確かにお前は大きい…！けれどバーゲストさんの方がもっと硬かったし、力が強かったし、お前より大きく見えた！）

ベルは一日だけアイズとの特訓でバーゲストとも特訓した事がある。あの時はバーゲストに手も足も出なかったが…

（バーゲストさんより弱いお前の攻撃を躲す事は出来る…！けど、攻撃が通らない、ファイアボルトもあまり効いてないし、一体どうすれば…：待てよ…：ミノタウロスが硬いのはともかくバーゲストさんは何であんなにも硬いんだっけ…！）

ベルはバーゲストの姿を思い出すと、戦うバーゲストの姿は硬そうな鎧を纏っていた。

（鎧で身を守っているからあんなに硬かったんだ、なら、鎧の内側はそうでも無いという事…！ならミノタウロスも、外側からじゃなく内側からなら…！）

バーゲストの鎧とミノタウロスの体表を同じものとして考えたベルはミノタウロスも内側から攻撃出来ればと考えるが、ヘステイア・ナイフやバゼラードでミノタウロスの内側に刃を通すのは困難である。

（もっと考えろ考えろ！バーゲストさんも言ってただろ！物語の英雄達は身を削り、知恵を振り絞って怪物を倒してきたって…！）

ベルはミノタウロスと攻防を繰り返しながらミノタウロスに決定的な一撃を与える為の作戦を必死に考える。

（ヘステイア・ナイフやバゼラードじゃ軽すぎる…！ミノタウロスの肉を斬り裂くには、もっと重い剣が……！）

ベルはそこでミノタウロスの持つ大剣を見る。

（…よし…！）

「【ファイアボルト】！」

ベルはファイアボルトを放ち、ミノタウロスを怯ませる。

「あの魔法、詠唱していない！」

「ああ、だが相手が悪い」

「軽過ぎだ！」

「じゃあ、手詰まり……」

ベルがミノタウロスに突っ込んでいき、ミノタウロスはベルに向かって大剣を振り下ろす。

ベルはそれをバゼラードで受け止めると、バゼラードは耐えきれずに碎け散る。

「はあああ！」

しかしベルは自身の横を通るミノタウロスの右手首にジャンプして、ヘステイア・ナイフを空中から全体重を掛けて突き刺す。ミノタウロスは体勢を崩して地面に倒れ、ベルは続けてヘステイア・ナイフを捻る事でミノタウロスの右手を使用不能にする。

「……ミノタウロスが大剣を振り落として重心が前に行った瞬間に全体重と空中からの勢いを使ってミノタウロスを倒れさせ、その隙に右手を使えなくする……考えたな。バゼラードが壊れたのも想定内か、ミノタウロスの勢いを出るだけ殺さないように……」

「そこまで考えているのか？」

「必死に考えているだろうな、勝つ為に」

ミノタウロスが立ち上がり、大剣を持とうとするも、右手に力が入らなくなっており、ミノタウロスの右手から大剣が落ち、地面に刺さる。

「ふっ……！」

「グオオオ！」

ベルがヘステイア・ナイフを左手に持ち変えてミノタウロスに近づき、ミノタウロスは右腕を振り回し、ベルに攻撃するがベルはそれを避けて大剣を拾う。

「はあああ!!」

ベルは大剣を振り回し、ミノタウロスの身体を切り裂いていく。

ベルとミノタウロスは距離を取り、再び睨み合うと、ミノタウロスが姿勢を低くする。

「はああああああああ!!」

「グオオオオオオオ!!」

正面から互いに突っ込んでいくベルとミノタウロス。

「若い……」

「馬鹿が……」

ミノタウロスの突進に真正面から挑むのは危険な行為であり、それでミノタウロスにやられる冒険者は少なくは無い。

「ベル様!」

「大丈夫(だ)」

リリルカが叫び、アイズとバーゲストが同時にそう言う。ベルの持った大剣とミノタウロスの角がぶつかると大剣が砕ける。ベルはミノタウロスの角を横に避けるが、ミノタウロスは角をベルに向けて更に突き出す。

しかしベルは姿勢を低くしてミノタウロスの角に下を潜ってミノタウロスの懐に入ると……

「はあっ!」

「グオツ!」

大剣によって出来た傷にヘステイア・ナイフを突き刺す。

「ファイアボルト」……!」

「グ、グオオ……」

ミノタウロスは身体の内側から燃やされ、口から血を噴き出す。しかしベルに向けて腕を振り下ろそうとすると……

「ファイアボルト」!」

「グオオオオ!」

更に燃やされ、動きが止まってしまう。

「ファイアボルト」!!」

ベルが三発目のファイアボルトを放つとミノタウロスの身体は膨張し、上半身が弾け飛ぶ。

残った下半身から炎が上がり、膝をつくと灰になって消えた……

「……ベル様……」

「勝ちやがった……」

「立ったまま、気絶してる…」

「マインド、ゼロ…」

ミノタウロスとの死闘を制したベルは立った状態で気を失っており、背中に刻まれたステイタスが丸見えになっていた。

「…よくやったな、ベル…」

バーゲストはそう言っただけに微笑んだ…

その後アイズとリヴェリアの二人にホームへ送ってもらったベルとバーゲスト。

ヘステイアはベルをベッドに寝かせ、バーゲストと共に様子を見ている。

「バーゲスト君は大丈夫かい？」

「頭痛はしますが、特に問題はありません…それより今は、ベルを褒めてあげてください」

「うん…頑張ったね、おめでどう…」

ヘステイアはそう言っただけでベルの額にキスをする。

「これがボク達の…物語の…^{ページ}一頁目だ…！」

第九話 離れた黒犬。二人の鍛冶師

「……申し訳ありません、もう一度言ってもらいたいのですが……」

バーゲストは目の前にいる存在に対してそう言った。

ヘステイアは隣で驚いた顔をしており、言葉を発せなかった。

バーゲストとヘステイアの目の前にいる存在……ヘルメスは、バーゲストに対してこう言う。

「じゃあ、もう一度言わせてもらうよ。バーゲストちゃん。君にアルテミス・ファミリアの増援として、エルセスの遺跡に向かって欲しい」それは、運命を変える冒険の始まりだった。

事はベルがミノタウロスとの死闘を制し、その所為でベッドでずっと眠っている時に起きた。

ベルが動けない為ダンジョンに行くのを休み、ヘステイアがバイトに行つてしまい暇になってしまったバーゲストは、ホームの地下でのんびりしていると……

「どなたか居ないのですかー?」

と、上から声が聞こえてきた為、バーゲストは上に上がると水色の髪をした眼鏡を掛けている女性が居た。

「勝手に入ってしまい申し訳ありません、ノックをしても何も無かったので……」

「いえ、気にする事ではありません。それより此処に何か用が?」

「用があるのは貴女です、バーゲスト。私と一緒に来てもらいたい。」

私はアスファイ・アンドロメダ。ヘルメス・ファミリアの団長です」

「私に用が…?」

「はい。ヘルメス様がヘステイア様と貴女に話があるので、貴女をバベルに連れてくるようにと…」

「…分かりました、直ぐに準備致します」

バーゲストは直ぐに着替え、アスファイと共にバベルに向かった。バベルに着き、ヘファイストス・ファミリアの店の奥の部屋に入ると…
「おつ、やっと来た」

其処には既にヘステイアとヘルメスが対面しており、水を飲みながら二人を待っていたようだった。

「初めまして、俺はヘルメス。悪いね、急に来てもらって」

「構いません、神ヘルメス。今日は特にする事ありませんでしたので。私はバーゲスト。以後お見知りおきを」

「それじゃあバーゲスト君も来たんだし、話してもらおうよ。ヘルメス、一体話って何なんだい?」

ヘステイアがそう言ってヘルメスを見ると、ヘルメスは真剣な表情になる。

「それじゃあ本題に入らせてもらうけど、まあ、単刀直入に言えばヘステイア・ファミリア…もっと言えばバーゲストちゃん個人に依頼を出したい」

「私に?」

「ああ…依頼内容は、アルテミス・ファミリアの増援として、エルセスの遺跡に向かって欲しい、だ」

「…は?」

そして冒頭に戻る。

ヘステイアは少し固まっていたが、直ぐに質問する。

「アルテミスの所に増援って、一体どういう事だい?」

「エルセスの遺跡には古代、大精霊達が封印した恐ろしいモンスターが居たんだが、最近になってその封印が解けてね。結構ヤバイ事態になってきているのさ」

「それで何でバーゲスト君を増援に送るんだい!? もっとレベルの高い

冒険者や人が多いファミリアを……！」

「……なるほど、事態は急を要するのですか？」

「鋭いね、バーゲストちゃんは」

ヘステイアが頭の上に？を浮かべていると、ヘルメスは説明する。

「恐らくエルセスの遺跡に居るモンスターは強力だ、第一級冒険者の手が欲しくなるほどね、だけど……」

「ロキ・ファミリアは遠征中。フレイヤ・ファミリアは主神から離れない……他のファミリアは？」

「居なくは無けれど、今オラリオにいる冒険者でフレイヤやロキの眷属以外でこの事態に介入出来るのは君だけだと考えた」

「ヘルメス！君は何を言っているのか分かっていないのか!? バーゲスト君はレベル1なんだぞ?!」

「けれどバーゲストちゃんは【凶^{ヴァナルガンド}狼】に勝利している。酔っていたとはいえ、その時は恩恵すら刻んで無かったんだろう？彼女の實力なら問題無いと俺は思う」

「けど……！」

「それに、エルセスの遺跡にはアルテミスも向かっている。最悪の場合、アルテミスにも危険が及ぶ」

「だからと言ってバーゲスト君を向かわせる訳にはいかない。絶対に許さないよ、ボクは」

怒りを込めた声色でヘステイアはヘルメスにそう言う。

「バーゲスト君には助けてもらってばかりなんだ。この子を危険な場所に向かわせる事は出来ない。例え神友の為でもね」

ヘステイアは迷惑をかけている点に関しては、ベルよりバーゲストの方が世話になっていいると思っていた。

ベルの為に自分のファミリアに入団してくれたバーゲストには多大なる感謝の念があり、バーゲストも自分の眷属としてベルと同じように大切にしなければならぬと思っていた。

ヘルメスはヘステイアの強い視線を感じながらバーゲストに目を向ける。

「俺とヘステイアが話し合っても決着はつかないだろう。バーゲスト

君、君はどう思う?」

「……………」

バーゲスト目を落とし、依頼について考える。

(オリオンの矢に関わる事になるなんて…原作通りならアルテミス・ファミリアは壊滅し、女神アルテミスはアンタレスに取り込まれる…映画で見る限り私では勝てる訳ありませんが、それは神の力を持つ^{アルカナム}たアンタレスの場合。女神アルテミスを取り込む前なら…もしかしたら…)

バーゲストは出来る事ならアルテミスを救いたかった。

だが今の自分にアンタレスを倒す程の力があるかどうかはハッキリ言って不安要素が多かった。

だが、それでも…

(それでも、私はバーゲスト。そして円卓の騎士、ガウエインの名を背負う者。騎士として、この困難に立ち向かわずして、強者となれようか…!)

ベルは命賭してミノタウロスに勝利した。自身も覚悟を決めなければと、バーゲストは顔を上げ、ヘステイアを見て、その次にヘルメスを見る。

「ヘルメス様、アルテミス・ファミリアはどうなるとお考えですか」

「…正直、アルテミスのファミリアじゃ不安だ、倒せる事は無いだろう」

「であれば、私が行けば倒せると?」

「少なくとも悪い結果にはならないと思っっている…引き受けてくれるかな?」

「…私で良ければ、最善を尽くしましょう」

「バーゲスト君!」

ヘステイアはバーゲストに駆け寄る。

「考え直すんだ!これは明らかに君が背負う様な問題じゃないぞ!」

「ヘステイア様…」

「ボクやベル君には君が絶対に必要なんだ!こんな危険な事に関わる必要は…!」

「ヘステイア様、安心してください」

「バーゲスト君…」

「私は必ず二人の居るホームに帰ってきます。私は騎士、バーゲスト。騎士としてやるべき事をやるだけです。私が必要とされるなら、私は行きます。例えどの様な死地であろうとも…」

ヘステイアは涙を流し、バーゲストはヘステイアを優しく抱きしめる。

「私を信じてください。私はベルを危険な場所から連れ戻す為に居るのです。これくらいの事を乗り越える事が出来なければ、そんな事不可能でしょうから…」

「…分かった、必ず、絶対、無事に戻って来るんだよ…」

ヘステイアはバーゲストから離れ、ヘルメスの方を向く。

「ヘルメス！その依頼は受けよう！但しバーゲスト君の支援は最大限に！それと、報酬はたんまりと貰うからね!!」

「ああ分かってるよ。無茶な依頼をしてるんだ、それくらいは喜んでするとも」

「それで、いつ、どうやって出発するんだい？」

「ああ、明日だ」

「……………明日？」

翌日の早朝、オラリオ外壁にて。ヘステイア、ヘルメス、バーゲストの三人が集まっていた。

「神ヘルメス、数々のマジックアイテムを譲渡していただき。ありがとうございます」とうごごぎいます」

「良いんだよ、君やアルテミスが無事に戻ってくる為に役立てるからね。それよりすまないね、本当は防具なども渡したかったが、君に合うやつが無くてね…」

「それよりさ、出発するなら普通門からだろうか？何でこんな場所に…」

「お、来た来た」

ヘルメスが上を見上げ、ヘステイアとバーゲストも追う様に上を見上げると、竜が一匹、空を飛んでいた。

「ハーハッハッハッハッ!!」

「う、うわっ!?!」

声が聞こえ、竜から何かが飛び降りて来るのを見たヘステイアは、驚いてその場から離れる。

「が、ガネーシヤ!?!」

「そう、俺がガネーシヤだ!!」

竜もガネーシヤを追って降りると、バーゲストは竜に近寄る。

「これに乗って行くのですか?」

「ああ、俺がガネーシヤに頼んでおいた。普通なら1ヶ月掛かるのをこいつなら8日で着くらしい」

「この竜は孵化した時からタイムしてあるから誰の言う事でも聞くぞ! それに特に速いのを選んで来た!」

バーゲストが竜の頭を撫でると、竜はバーゲストの手に頭を押し付けてくる。

「それじゃあ、そろそろ出発しようか」

「はい。神ヘルメス、神ガネーシヤ。多大なるご支援に感謝致します。必ずやその期待に応えてみせると誓いましょう。ヘステイア様」

「バーゲスト君、ベル君はボクに任せて、アルテミスを頼んだよ。それと、絶対に無事に帰って来るんだよ」

「はい、誓います」

バーゲストは竜に跨がり、空を飛んで行く。

「行つてらっしや〜い!!」

「頼んだよ、バーゲストちゃん!!」

「ベル君と一緒に待つてるからね〜!!」

上からガネーシヤ、ヘルメス、ヘステイアの順で遠ざかるバーゲストに言葉を贈る。

やがてバーゲストは見えなくなり、空が明るくなり始めた。

「ヘステイア、改めて謝罪する。すまなかつた、そしてありがとう」

「良いんだよ、もうその話は終わったんだ。今はバーゲスト君が無事に帰って来るのを祈るだけさ」

ヘスティアは微笑みながらバーゲストが飛んで行った方向を眺めると、振り返ってその場を離れた。

バーゲストがエルセスの遺跡でどの様な物語を作り上げるのか、今はまだ、誰にも分からない…

「……………あれ？」

ベルは目が覚めると、其処は知らない場所だった。

「此処は…？…僕は確か、ミノタウロスと戦って…あれ、防具がある…？」

ベルはミノタウロスの戦いで破損した筈の防具やバゼラードがある事に気付き、疑問を抱きながら辺りを見渡す。

「湖…えっ、僕今水の上に立ってる!？」

辺りは湖が広がっており、ベルは湖の水面に足を着いて立っていた。

「一体何がどうなって……………え？」

ベルは驚いていると、自身の目の前に誰かが立っている事に気付く。

そこには、全身を白い鎧で包んだ、青いマントを靡かせている騎士が、剣を水面に突き立てて、ベルと同じ様に水面に立っていた。

「あ、あの…すみません…」

「……………」

「こ、此処って何処なんですか？やっぱりダンジョンの中……」

騎士は何も言わず、ベルをジッと見つめていると、水面に突き立てた剣を抜き、そして……

「な、ちよつと!?!」

ベルに突然斬りかかって来た。

ベルは咄嗟にヘスティア・ナイフを抜いて剣を受け止めるも……

「ちよつと話を、ぐわっ!?!」

騎士はベルを力任せに押し切り、吹き飛ばす。

ベルは受け身を取り、騎士の居る方向を見るが……

「いない!?!何処に、ぐわっ!?!」

騎士が一瞬で居なくなり、ベルが慌てていると、いつの間にか背後に居た騎士はベルの背中に蹴りを喰らわせる。

ベルはゴロゴロと転がり、仰向けになったところで止まった瞬間……

「っ!!」

騎士は既に空中からベルに向けて剣を振り下ろそうとしていた。

ベルは転がってギリギリで剣を回避すると、剣が凄まじい勢いで水面に打ちつけられ、大きな水飛沫を発生させる。

ベルは互いに姿が見えなくなった隙に考える。

(なんて速さだ、アイズさんより速かった……!それにこの水飛沫、なんて力なんだ。どうして僕を襲うんだ……っ!?!)

水飛沫の中から剣がベルに向かって現れ、ベルは咄嗟にバゼラードで受け止めるが……

「なっ、ぐあっ!?!」

バゼラードは一瞬で砕け散り、ベルは顔を逸らすが、頬が剣先にに触れ、赤い血が流れる。

剣は再び水飛沫の中に消える。

「【ファイアボルト】!!」

ベルは剣が現れた方向に向けてファイアボルトを放つが……

(え……?)

次の瞬間、自身の首に剣が迫っている事に気付く。

ベルは横を向き、後ろを確認し、騎士が自分の後ろから剣を振るっているのを確認した瞬間、剣がベルの首は刎ねた。

「うわあああああああああああ!?!」

「おおおおお!?!どうしたんだいベル君?!いきなり目が覚めた瞬間から絶叫なんて!!」

「ああ神様!!僕死んでませんよね?!生きてますよね?!首ちゃんと繋がってますよね!?!」

「死んでないし生きてるし首も繋がってるよ!良かった、目が覚めたんだね…!」

ヘスティアは目に涙を浮かべながらベルに抱き着く。

「ぐえ、か、神様…?」

「ベル君の馬鹿あ!心配したんだぞお!」

「す、すみません…」

「全く今回も君はねえ!大体!」

ベルは目覚めた初っ端からヘスティアによる説教が始まり、後からリルルカも合流して二人から説教された結果、夢で会った騎士の事は完全に頭から抜け落ちてしまった。

「じゃあ、バーゲストさんは暫く帰って来ないんですか?」

「ああ、バーゲスト君の料理が暫く食べられないなんて…!」

ヘスティアからバーゲストがエルセスの遺跡に向かった話を聞いたベルは、不安そうな顔をする。

「大丈夫なんでしょうか…危険な場所なんですよね?」

「ああ、本当ならロキヤやフレイヤに頼み込むような案件だ、バーゲスト君がやる様なクエストじゃないんだけどね…けれど、バーゲスト君ならきつと大丈夫だよ、取り敢えずベル君は大人しく休むんだぞ?」

「あ、はい」

ベルはバーゲストが今何をしているのか考えながら再びベッドに横になり、ヘステイアは動けないベルやいないバーゲストの代わりになんとか家事をしようとしていた。

因みにその日の夜、ベルがレベル2になってヘステイアがめっちゃくちゃ驚いたのは言うまでも無い。

それから数日、ベルはこの短期間でレベルアップした事によって注目されたり、二つ名が「未完の少年」リトルルキーになったりして、リリルカと共に豊穡の女主人でお祝いをしていた。

途中から混ざって来たシルとリユも加えてベル達は今後の方針をどうするか話していた。

「では、クラネルさんとアーデさんは今後、ダンジョンの中層に向かうおつもりなのですね」

「はい！けど、バーゲストさんもないので、勿論調子を見ながらですけど…」

「そうですね…差し出がましい事を言うようですが、バーゲストさんが居ない状態で13階層より先に潜る事は、まだやめておいた方が良いでしょう」

「ベル様とリリでは、バーゲスト様無しに中層には太刀打ち出来ないとお考えなのですか？」

「そこまで言うつもりはありません。ですが、上層と中層は違う。モンスターの強さも数も、出現頻度も…能力の問題では無く、ソロでは処理しきれなくなる。バーゲストさん無しに中層に向かうなら、貴方達は仲間を増やすべきだ」

ベルはリユからそう言われて悩み始める。

「でも、肝心の仲間に加わってくれそうな人が…」

「パーティーの事でお困りか？【未完の少年^{リトル・ルーキー}】？」

近くに居た冒険者が席を立ててベル達に近づいてくる。

「え？」

「仲間が欲しいなら俺達のパーティーにテメエを入れてやろうか？俺達はレベル2だ、中層にも行けるぜ？けどその代わり…」

その冒険者はリユーに視線を向ける。

「このえれえ別嬪なエルフの嬢ちゃん達を貸してくれよ」

「えっ!？」

「仲間なら分かち合いだ、なあ？」

冒険者がそう言い、ベルは立ち上がってパーティーの誘いを断ろうとした瞬間…

「失せなさい」

ベルが喋るより早くリユーが冒険者達にそう言う。

「貴方達は彼に相応しく無い」

「ま、まあまあ妖精さんよ。俺らならこんなカスみたいなクソガキより断然良い思いさせてやるぜく？」

冒険者がそう言ってリユーに手を伸ばした瞬間…

「触れるな!!」

リユーはコップとコップの取っ手の間に冒険者の手を入れさせ、そのまま捻る。

冒険者が痛みに怯んで尻餅を着く。

「私の友人を蔑む事は許さない」

「このアマ、女だからって容姿しねえぞ！」

冒険者がリユーに飛び掛かろうとした瞬間、ドゴン!と大きな音が響き、店内に居た全員が固まる。

音がした方を見ると、ミアがカウンターに拳を叩きつけていた。

「騒ぎを起こしたいなら外でやりな、此処は飯を食べて酒を飲む場所さ!!」

「お、おい、行くぞー!」

「アホタレ! ツケはきかないよ!」

「は、はいい！」

冒険者達は金を置いて逃げる様に店から出て行った…

「…ベル様、良かったですね、この場にバーゲスト様が居なくて」

「え、何で？」

「バーゲスト様ならベル様の悪口を言った辺りであの冒険者達に殴り掛かってたかもしれませんから…」

「そ、そうかな…」

「…それでは、仕切り直しをしましょうか！」

「そ、そうですね！」

そして翌日、ベルはバベルの塔に来ていた。

防具がミノタウロス戦で壊れてしまったので、新しい防具を買いに来たのである。

「後、神様が言ってたけど、バーゲストさんも盾を無くしちゃったんだっけ、新しいのを買っておこうかな…確か製作者名は、アルトリア・キャスターだっけ？」

ヴェルフ・クロツゾ製作の防具とアルトリア・キャスター製作の盾を探すベル。

しかしどちらも中々見つからず、もう売ってないのかと思ったその時…

「だ、か、ら！何でいつもいつもあんな端っこに!!」

「そうですよ！あんなに端っこに置くなんて、何かの嫌がらせですか!？」

「こちとら命懸けでやってんだぞ！もう少しマシな扱いをだな…！」

赤い髪の男と金髪の少女に迫られている店主が、近寄ってくるベルを見てそちらに声を掛ける。

「いらっしやいませ！何かお探して？」

「あ、はい。ヴェルフ・クロツゾさんの防具と、アルトリア・キャスターさんの盾って、もう売られて無いんですか？」

「っ！…ふっ、はははは！」

ベルがそう言うのと隣に立っていた赤髪の男が突然笑い始める。ベルが何事かとその男を見ると。

「あるぞ冒険者！ヴェルフ・クロツゾの防具ならな！」

男はそう言っただけでベルに防具を差し出す。

「どうだ、使ってくれるか？」

「え、でもこれ、貴方のものじゃないんですか？」

「ああ、俺のもんだな、俺の打った作品だ」

「え!？」

「どうせだから名乗っておくぜ、得意客第一号。俺はヴェルフ・クロツゾ。ヘファイストス・ファミリアの、今はまだ下つ端の鍛冶師だ」

「ええ!?! 貴方が!?!」

「おう！そうだ、お前アルトリア・キャスターの盾を探してんだろ？」

「は、はい」

「紹介してやるよ！こっちの金髪の奴が、そのアルトリア・キャスターだ！」

ヴェルフがそう言うのとヴェルフの後ろからアルトリアがひよこつと顔を出す。

「は、初めまして、アルトリア・キャスターです」

「おうアル坊、この冒険者はお前の盾をどこ所望らしいぞ？」

「……です……」

「ん？どうした？」

「今、私の打った盾は無いんです……!」

一先ず、ヴェルフの打った防具を買った後に別の場所に移動した三人。

「まさか、噂の【未完の少年】リトル・ルーキーが俺の防具を買いに来てくれるなんてな！」

「僕も、クロツゾさん本人に会えるなんて思いませんでした」

「なあ、そのクロツゾさんってのはやめてくれないか？そう呼ばれるのは嫌いなんだ」

「じゃあ、ヴェルフさん？」

「さん付けか、まあ今は良いか。なあベル・クラネル！お前は俺の作品を二度も買いに来てくれた。もう俺の顧客だ、違うか？」

「ええ、まあ……」

「くそ、遅かったか……」

ヴェルフがそう言い、ベルが同意すると周りに居た他の鍛冶師達が離れていく。

「ああ悪い、ちよつとした縄張り争いだよ。それでだ、ベル。俺と直接契約を結ばないか？」

「え、直接契約？」

「お前の専属になつて、武器でも防具でも作ってやる。ただ、俺の我儘を聞いてくれるとありがたい。勿論礼はする」

「何ですか？」

「俺を、お前のパーティーに入れてくれ！」

「ええ!？」

「頼むー!」

頼み込むヴェルフを見てベルは特に断る理由も無いし、寧ろ仲間を増やしたいと思つていたところなので受ける事にした。

「分かりました、よろしく願います」

「恩に着るぜ！ありがとな、ベル！さて、これで一先ず俺とお前の話は終わった訳だが…」

ヴェルフはそう言つてベルが居る方とは反対の方を見ると、そこには膝を抱えて頭を膝につけて落ち込んでいるアルトリアが居た。

「アル坊、お前どうするんだよ、ベルはお前の盾が欲しいって言つてんだぞ？」

「ううう、本当にすみません、最近は違うものばっか打つてて、今すぐにも作りますからお願いなので見捨てないでください…！」

「まあこれからは俺が盾を作つてやれば良いか。ベルの専属になった訳だし」

「うわあああん！ヴェルフの馬鹿ああ!!裏切り者おお!!」

アルトリアはベルに泣きつくつと、ベルは慌てて説明する。

「いえいえ！大丈夫ですから、そんな今すぐじゃなくても、それに盾を使うのは僕じゃなくて、僕と同じファミリアに所属する人なんです！」

「え？」

ベルはバーゲストがアルトリアの打つた盾を使っていた事と、そのバーゲストが現在依頼を受けてオラリオに居ない事を説明した。

「なるほどなるほど…では！その人が戻つて来るまでに盾を作れば良いんですね、分かりました！よし！頑張つて凄い盾を作るぞー！そしてあわよくばその人と直接契約を…！」

「急に元気になったな…」

「直ぐ元気になるのが私の取り柄ですから！そうだベルさん！私もベルさんのパーティーに入れてください！」

「ええ!?!」

「お願いします！バーゲストさんに見合う盾を作る為には必要なんです！」

「ま、まあ、そういう事なら…」

「やったー！」

喜ぶアルトリアを見てベルとヴェルフは苦笑する。

この日、ベルのパーティーに新たなメンバーが二人加入したのだっ
た。

第十話 黒犬は月の下へ

ヴェルフとアルトリアがパーティーに入つての初めてのダンジョン探索。

ベル達は1階層に来ていた。

「やって来たぜ1階層ー!」

「全く、ヴェルフは初めて1階層に来たからってはいしやぎ過ぎです…」

はいやいでいるヴェルフを見てアルトリアがやれやれといった感じでそう言う。

「悪いなベル、昨日の今日でこんな無茶を聞いてもらつて!」

「あ、それは私からも感謝させてください」

「あ、いえ。ヴェルフさんとアルトリアさんが鍛治のアビリティを手に入れる為だつて言うなら、契約した僕も無関係じゃないですし」

ベルは笑つてそう言うが、後ろに居たりリルカの表情は良いものは無かつた。

「それはこの人達はそれで万々歳でしょうけど…だつたらご自分のファミリアの方と探索すれば良いのではないですか?」

リルカがそう言うのと、ヴェルフとアルトリアはむっとした表情を見せる。

「あ、だ、だからさりり。ヴェルフさん達はファミリア内でその…」

「仲間外れなんですよね。ベル様ったらそんな話に絆されて、オマケに新しい防具で買収されて…!どうして一言相談してくださらないのですか!?!」

「ご、ごめん…」

「それに…!」

リルカはアルトリアに視線を向けると、アルトリアは首を傾げた。

(パーティーに新しい女性が入つて来たなんて、ヘステイア様を知つ

たらどうなるか…!）」

リリルカがアルトリアがベルに変な感情を抱いたら…!と警戒している、ヴェルフが前に出てリリルカに言う。

「そんなに俺達が邪魔か、チビ助?」

「チビではありません!リリには、リリルカ・アーデという名前があります!」

「おお!じゃあよろしくな、リリスケ!」

「もういいです!」

「でもさリリ。僕、気に入ってるんだ、このヴェルフ・クロツゾさんの作る防具が、だから——」

「クロツゾ!?今、クロツゾと言いましたか!」

「う、うん…」

「あの呪われた魔剣鍛冶師の!?没落した鍛冶貴族の!」

「何、それ…」

「知らないんですかベル様!」

リリルカはヴェルフを見ながらベルに説明する。

「かつて強力な魔剣を打つ事で名を揚げた鍛冶一族、それがクロツゾです。ですが、ある日を境にその能力を失い、今では完全に没落したと…」

「ああ、ただの落ちぶれ貴族の名だ。今はそんな事どうでもいいだろ?」

「でも…」

リリルカが「でも…」と言ったところで、モンスター達がベル達の周囲に湧き始める。

「どの道こんな話してる場合じゃねえな…よし!オークは俺に任せろ、アイツなら俺の腕でも当てられる…!」

「では、リリも微力ながら援護します」

ヴェルフが大剣を抜き、オークを見据えながらそう言う、リリも腕に装着したボウガンを構えてそう言う。

「おつ、俺が気に食わないんじゃないやなかったのか、リリスケ?」

「む、嫌ってるに決まっています。ただ、ベル様のお邪魔になりたく無

いだけです」

「では、私とベルさんでインプをやりましょう」

「え、アルトリアさんもリリ達と一緒に大丈夫ですよ？多分僕一人でインプはやれますから…」

「オークは杖で殴っても余りダメージが入らないので」

「あ、そうですか…」

ベルはアルトリアを見て、11階層に来るまでの事を思い出す。

(見るからに魔導士って感じの武器を持つてるのに、ここまでモンスターを全員杖で殴って倒してるんだよね…)

アルトリアはその明らかに魔法を使う為にありそうな杖でここまですでモンスターを殴って倒して来たのだ。

ベルとリリルカも最初はびつくりしたが、もう少し慣れている。

「じゃあ、三人とも、お願いします！」

ベルとアルトリアは同時に駆け出し、先にベルの方がインプの群れに突撃し、飛びかかって来るインプをすれ違いさまに斬る。

(遅い、いや、僕が速くなってる…！)

続けて二体のインプを斬り裂き、上空にジャンプしたベルにインプ達が目を向けると、その隙についてアルトリアが杖をインプの頭に叩きつける。

「ベルさんばかり見ていると、私にやられますよ！」

アルトリアは杖をインプ達に向けて振るうと、ベルが上空からインプ達に襲いかかり、次々と倒していく。

「おお、すげえ…！」

オークを倒したヴェルフがベル達の方を見るとインプが全滅していた。

「ヴェルフさん、リリ！避けて！」

ベルがそう叫ぶと、二人の背後からハード・アーマードが転がって来ていた。

ベルは手をハード・アーマードに翳すと…

「！もう一体…!?!」

ベルの背後からもう一体のハード・アーマードが転がって来る。す

るとアルトリアがベルの背後に立つ。

「ベルさん、アレは私がやります。対処方ならありますから」

「分かりました、お願いします!」

ベルは目の前のハード・アーマードを見据え、しっかりと狙いを定めると…

「光よ!」

そう呟いたアルトリアの杖の先端に光が宿る。

そして向かって来るハード・アーマードに対してまるで野球のバツターの様な姿勢で待ち構える。

「ファイアボルト!」

ベルが魔法が放ったと同時にアルトリアは近付いて来たハード・アーマードに杖を振りかぶり。

「弾けて、シヤステイフォル!」

杖が当たった瞬間に、杖に宿った光が弾けて、ハード・アーマードを打ち返した。

二体のハード・アーマードはどちらも空中で消滅し、魔石が落ちて来る。

「今のは…」

「おう、アレはアルトリアの魔法だ。やっと魔導士らしいところ見せたな…」

「時間経過と共に威力が上昇する魔法?」

「はい、その分魔力消費量も多くなりますが、ベルさんの「ファイアボルト」と同じで、中々使い勝手が良いんですよ。詠唱も短くて楽です」

「へえ…」

「やっぱり良いよなパーティーっていうのは!」

「そうですね、私とヴェルフだけで潜っていた時より随分動きやすくなつた気がします」

「パーティーの利点だな。余裕を持てれば、モンスターへの対処も変わる」

リリルカが魔石を拾っている間に三人で話していると、他のパーティーの姿が見え始める。

「他のパーティーが来始めましたね」

「リリスケが魔石を集め終わったら昼飯にしよう。モンスターは連中に任せてな…おいベル、それ何だ？」

「え？」

ベルはヴェルフにそう言われて右手を見ると、右手がキラキラと光を発していた。

「光ってますね」

「何これ…」

三人でその光を見てみると、突然他の冒険者達の悲鳴が上がる。

「やべーぞー！インファントドラゴンだ！」

「逃げろ！」

他の冒険者達がベル達にそう言つて横を通り過ぎていく。

「えっ！リリは!?!」

「アーデさん！」

リリルカは遠くで魔石を回収していた途中で、インファイトドラゴンがリリルカに迫る。

「グアアアアアア!!」

「リリスケ逃げろ！」

「っ!!」

リリルカはヴェルフにそう言われてインファイトドラゴンから逃げるが、このままでは追いつかれてしまう。

「はあっ、はあっ…!!」

「くそっ！」

「こつち向け！」

ヴェルフが駆け出そうとした瞬間、アルトリアがナイフを一本取り

出し、インファイトドラゴンに向けて投げる。

そのナイフはインファイトドラゴンの長い首に突き刺さると…
ドゴンッ!!

つと音がし、ナイフの刺さった部分が光を放って爆ぜる。

「グガアアア!?!」

「ファイアボルト」!!」

インファイトドラゴンが振り向いた瞬間、ベルが手を翳し追撃した
その瞬間…

ドゴオオオン!!

「うわっ!?!」

今までのものより明らかに強力な「ファイアボルト」が放たれ、インファイトドラゴンの頭が消し飛んだ。

魔法の反動でベルは尻餅を着き、灰になったインファイトドラゴンを見て魔法を放った右手を見た。

「間違いない。それが英雄願望アルゴノウトのスキルだ」

ダンジョンから帰還し、ベルはヘステイアにダンジョンであった事を話すと、そう言われた。

「自分より強大な敵を打ち倒すための力…:…どんな窮地も覆す可能性を持った、言っちゃうなら、資格かな。馬鹿みたいに英雄に憧れる子供が、英雄になる為の切符さ。その一撃に全てを賭けて、その一撃に全ての力を注ぎ込む。圧倒的な力の不条理に対して、そのたった一つのちっぽけな力で、逆らうんだ。君が手に入れたのは『英雄の一撃だ』」

「英雄の…:一撃…:」

ベルは微笑んでいるヘステイアを見つめ、何かを考え込んでいた。

二人が晩御飯を一緒に食べていると、ベルはヘステイアにある質問

をする。

「そういえば神様、『クロツゾ』っていう鍛冶貴族の事、聞いた事ありますか?」

「例の鍛冶師君の家名だね…って、ベル君!!君って奴は、また新しい女の子と親しくなったようじゃないか!!今度はヘファイストスの子まで、全く君って奴は!!」

「ええ!?!な、何か分からないですけど、ごめんなさい!」

「はあ…それで、クロツゾに関してだけ。かつては魔剣を沢山作つた一族ってぐらいは知ってるけど、その程度かな」

「そうですか…」

「でも、その鍛冶師君本人のことなら、お店の方でちよつと聞いてきたよ。ついでに同時にパーティーに加入した少女鍛冶師君の事もね…!まあ、それで鍛冶師君に関してだけど、彼、魔剣が打てるらしいね」
「!?っ、ごごふっ、ぐふっ…!えっ…!?!」

ベルが驚きを露わにしている横でヘスティアは続ける。

「それもかなり強力なヤツって噂だけど、ファミリア内じや宝の持ち腐れって嘆かれてたよ」

「どうして、ですか?」

「彼は魔剣を作らないんだ。作ってしまったえば富と名声が約束されている筈なのに。腕は確か、だけど何か訳ありってところかな。君が契約を結んだ鍛冶師君は」

「……………」

「そして少女鍛冶師君の事なんだけど」

「アルトリアさん…確か、投げたナイフが爆発していたような…」

「少女鍛冶師君の方は劣化版の魔剣を作れるらしい」

「劣化版…?」

「ああ、作つた物に魔力を込められるらしい。一回だけで、威力も大したこととは無い、使用後は使い物にならなくなる。確かに珍しいけど、それだけであまり役には立たないって」

「なるほど…」

「なんだ、今日リリースは休みか」

「はい、下宿先のノームの親父さんが病気なので看病してあげたいって。だからすみませんけど、今日は…」

「それなら仕方ないですね…」

「そうだな…なあベル、それなら今日一日、俺に出来ないか？」
「へ？」

「約束しただろ、パーティーに入れてくれたら礼をするって。お前の装備全部新調してやる！」

「わあ…！」

こうしてベルはヴェルフの工房に向かう事になった。

アルトリアは後で行くと二人に告げて自分の工房に向かった。

ヴェルフの工房に着き、ヴェルフはベルが自分が魔剣を作れる事に對して何か態度を変えないかなど気にしていた事を謝罪して作業を始める。

ヴェルフがミノタウロスの角を使ってナイフを製作しながら話始める。

「俺、魔剣は嫌いなんだ」

「え？」

「実はな、客なら腐るほどいた。俺がクロツゾだと知って、魔剣を作れと言ってくる奴らばかりな。本当に辟易したよ。強くなる為の、名をあげる為の道具が欲しい。どいつもこいつもそう言いやがる。違うだろ、そうじゃないだろ、武器ってヤツは」

それはヴェルフの鍛冶師としての信念だった。

「ただの道具でも、成り上がる為の手段でもない。武器は使い手の半身だ。使い手がどんな窮地に立たされたとしても、武器だけは裏切っちゃいけない。だから俺は魔剣が嫌いだ、使い手を残して、絶対に碎けていく。あれの力は人を腐らせる。使い手の矜持も、鍛冶師の誇りも、何もかも。だから俺は、魔剣を打たない」

ベルは、ヴェルフが何故魔剣を打たないのか、その理由を知った。作業は進み、やがて一本のナイフが出来上がる。

「うわあ……！」

「素材が良かったんだろうな。俺の今までの作品で、間違いなく最高の出来だ。よし！それじゃ名前を付けるか。『牛若丸』……いや、ミノタウロスの短刀だから、『ミノたん』……」

「いやいやいや！最初のやつで良いじゃないですか！」

「そうか？じゃあ『牛若丸』にするか……ほれ」

「ありがとうございます、ヴェルフさん」

「ふう……」

ベルに牛若丸を渡したヴェルフは、何処か不満そうな顔をする。

「どうかしましたか、ヴェルフさん？」

「まだ会って数日だし、信頼丸ごと預けろとは言わない。でも……リリスケみたいなのに、俺やアル坊のことも、仲間っぽく呼んでくれよ」

「……分かった、ヴェルフ」

二人の間に確かな信頼関係が築き上げられていたその時……

「お二人とも、お待たせしました！」

「おう、アル坊！」

「アルトリアさん、用事は終わりましたんですか？」

「はい！バーゲストさんに渡す盾の試作品が出来たんです！」

「おお！どんなもんだ、見せてみる」

アルトリアが持つてきた盾を三人で見ながら、ベルはふと気になった事を二人に訊く。

「そういえば、二人はどうやって仲良くなったの？」

「ん？ああ、確かに、俺は最初アルトリアの事は避けてた。コイツが魔力を込めた武器の事一番熱心に研究しているって聞いて、てつきり

魔剣みたいなものを作ろうとしている奴なのかと思っていた。けどな、それは違うって、ヘファイストス様から聞いたんだ」

「はい。私は自分が作るどんな物にも製作過程で魔力を込められると知って、ある事をしようと思ったんです」

「ある事…？」

「はい！ズバリ、普通の武器としても扱え、魔力を放つ事が出来る武器を作る事！これが私の目標です！」

「おう！その目標が気に入ってな、だからコイツの研究にはちよくちよく付き合ってたんだ。どんな素材なら魔力を放出しても壊れないとか…あの杖は確かその研究の副産物だったか？」

「そうですね、今では私の大事な武器ですけど。あれだけでしたよね、魔力を放出して壊れなかったの」

「まあ、魔道士が使う杖に似た設計だったからな」

「他のは一回放出して砕けたり、それ以降魔力を放出しなかったりで、中々上手くいかないんですよねえ…」

アルトリアはそう言って試作品の盾を撫でる。

「いつか作れると良いですね」

「はい！絶対作ってみせます！」

三人はヴェルフの工房を出て、それぞれのホームへの帰路へついた。

そして翌日から暫くはリリルカも交え、四人でダンジョン探索に勤しむのだった…

では、ここからは『白兔の物語』ではなく『黒犬の物語』を見ていくでしょう。

「団長！モンスターの数が多くなって来ました！」

「くっ…怯むなっ！この先には村がある、なんとしても迎撃しろ！」
アルテミス・ファミリアはエルセスの遺跡の近くにあった森で蠍の様なモンスターの群れと戦闘を繰り広げていた。

主神のアルテミスも弓を構えてモンスターを次々と矢で射抜く。

しかし蠍型のモンスターは数を増やし、アルテミス・ファミリアを徐々に追い詰める。

「っ！」

「団長！」

団長のレトウーサが他の団員を庇って大きな蠍型のモンスターの攻撃を受け止める。

しかし小さな蠍型のモンスターがその隙にレトウーサに飛び掛かろうとしていた。

「レトウーサ！」

アルテミスが叫び、矢を放とうとするが間に合いそうに無い。

しかしその瞬間、レトウーサに飛び掛かった蠍型のモンスターは上から降って来た何かに潰された。

「なっ…！」

落下の衝撃で土煙が舞い、レトウーサが周囲を確認出来なくなると…

「はああっ!!」

その掛け声と共に蠍型のモンスター達が土煙と一緒に焼き払われ、一気に数が減る。

土煙が晴れると、レトウーサに攻撃していた大型の蠍型モンスターも黒焦げになり、灰になっていた。

「――すまない、これでも急いで来たのだが」

その騎士は、アルテミス・ファミリアの前に立ち、モンスター達に剣を向けていた。

「遅れて来た分の仕事は果たそう…これより騎士バーゲスト、戦線に加わる!!」

ヘステイア・ファミリアからアルテミス・ファミリアの増援。バーゲストがアルテミス・ファミリアと合流したのだった。

さあ、白兔は自分の物語の一頁を作り上げた。

次は黒犬が自分の物語の一頁を作る時だ。

黒犬は月女神を救えるのか。

運命を変える事は出来るのか。

第十一話 黒犬と狩人達の歩み

「では、君はヘルメスの依頼で増援として送られたヘステイアの眷属、という事か」

「はい、一人のみでの参戦となり増援としては不安でしょうが、私はヘルメスから依頼されて此処にいます」

「ふむ…」

バーゲストはアルテミス・ファミリアのキャンプ地点で、焚き火の側で食事をとりながらアルテミスに此処へ来た事情を説明していた。

「分かった、君の実力は昼のモンスター達を焼き払う姿で証明されている。短い間だが、よろしく頼む」

「お役に立てるよう、全力で努めます」

「ああ…それにしてもヘステイアの…あの子も自分のファミリアを持つようになったのだな。ヘステイアはファミリアではどう過ごしている？」

「ヘステイア様の普段の様子…ですか…」

バーゲストはヘステイアの事やファミリアの事をアルテミスに話した。

「まさか、ヘステイアが自分の眷属に好意を寄せているとはな…」

「ええ…ですが彼は今他の人に夢中でして、毎日振り向かせるのに必死な様子です」

「そうかそうか…それにしても、君は凄いな。あのモンスター達を最も簡単に焼き払った。君のような冒険者を眷属に出来たヘステイアは幸運だな」

「それを言わせてもらえば、私こそヘステイア様の眷属になれた事はまさしく幸運でした。ヘステイア様やベルと居る日々はとても楽しいものでしたから」

「そうか…」

アルテミスは少し微笑んでヘステイアがオラリオで楽しそうに過ごしている事に安堵する。

「しかしヘステイアが恋か…」

「いかがされましたか？」

「最近、私も眷属に恋とは素晴らしいものだと言われてな。バーゲスト、君はどうだ？」

「…恋、ですか…」

（恋愛経験は前世含めありませんし…恋…）

バーゲストは少し考え込んだ後に、アルテミスに言う。

「恋は確かに人を良い方向に変えるきっかけにはなりません。ですが良い結果に繋がるとは限りません」

「ふむ」

「想い人の為に努力する事は素晴らしい事です。ですが、愛を向けたからといって愛を向けられるとは限らない」

好きな人が振り向いてくれなかった。他に好きな人が居た、結ばれなかった、まだ良い方かもしれない。失恋は確かに辛い、悪い事に繋がる訳でも無い。

最悪なのは…

（その想いを利用される事…妖精騎士ランスロット…メリュジーヌの様に…）

「結局必要なのは時間です。その人が本当に愛するに値する人物であるかどうか…それを判断する十分な時間と…後は本人次第でしょう。自分の望んだ人であればよし、ですがそうでなかった場合は二つの選択肢があります。潔くその恋を終わらせるか、それでも愛するのか」

「…やはり恋は難しいな、あまり分からない」

「私も、恋などした事はありませんので。一つの意見として覚えて頂ければ」

「そうか…そろそろ休もう。長旅に加えて戦闘もあったというのに、話に付き合わせてすまなかった。ゆっくり休むと良い」

「はい、アルテミス様も、どうかごゆっくり」

バーゲストとアルテミスは別れ、バーゲストは充てがわれたテントに入ると…

「む」

「あっ」

テントには翡翠色の髪を持つ猫人の女性が居た。

「…失礼します」

「ど、どうぞお構いなく…」

バーゲストは取り敢えず鎧を脱ぎながら考えた。

（女性とテントで二人きりとか落ち着きませんわ！助けてベル！ヘスティア様！元男の私にこれは荷が重いです！）

初めて会った上に元男なバーゲスト、猫人の女性は寝巻き姿で無防備な事もあって緊張してしまう。

緊張したバーゲストが若干不機嫌そうに見える女性も同じ様に緊張していた。

「えっと…取り敢えず自己紹介だけでもしませんか…？」

「そ、そうね…私はバーゲストよ、姓は無いからバーゲストと呼んでくれれば…」

「バーゲストさん…ですね、私はランテって言います！よろしくお願ひします」

「ランテ…」

その名前を聞いてバーゲストはある考えが浮かんでいた。

（やっぱりF.G.Oのアタランテと少し似ているわね…性格は全く違うけど、彼女がこの世界のアタランテ…の様な存在なのかしら？）

「あの、バーゲストさん？」

「！…すみません、何でもありませんわ。取り敢えず今日はもう寝ましょう」

「あ、はい！」

テントの明かりを消し、二人は眠りについた…

「翌日」

「では、これより進軍を再開する。全員、遅れるなよ！」

『はい！』

バーゲストを加えたアルテミス・ファミリアはエルセスの遺跡へ向けて進行を開始した。

バーゲストは先頭にいる団長のレトウーサの近くに居た。

「今日で遺跡の近くまで進む、との事だったな」

「ああ、そして明日に遺跡を攻略する。ここまでかなりハードなスケジュールだったな…」

「ふむ…では、遅れてきた私はより一層力を尽くさねばな…しかし、こゝも森が多いと得意の炎が使い難いな…」

「そこはどうしようも無いだろう…」

そうした会話をしながら歩みを進めていると…

「！……来たぞ、戦闘態勢！」

レトウーサの号令と共にアルテミス・ファミリアの面々が武器を構える。

バーゲストも剣を構えると、蠍型のモンスター達が前方から大量に現れる。

「はああっ!!」

バーゲストは近付いて来たモンスターを片っ端から切り捨てていく。

「凄まじいな、その膂力…アマゾネスかと思うぞ」

「生憎、自分の種族に関しては私自身よく分らん！」

レトウーサとバーゲストがモンスター達を次々と倒し、他の団員もそれに続く。

(……モンスターを倒す度に力が溢れてくる…ワイルドールの効果ね…それに今は太陽も出ている。この状態なら苦戦はしなさそうね) バーゲストがそう思いながらモンスター達を圧倒していると…

「キシヤアアアアアアアア!!」

「!あのモンスター…!」

「大きい…今まで見た事の無いモンスターだ…バーゲスト!」

現れた新たなモンスターはこれまでのモンスター達より大きく、凶悪な鍔と鋭い尻尾を持っていた。

バーゲストはレトウーサの前に立ち、モンスターに剣を向ける。

「レトウーサ殿はファミリアの指揮に専念を、あれ程では無いが、大きな目も出てきている。頼む」

「…分かった、頼んだぞ!」

「ああ…さあ、来いっ!!」

大型蠍はバーゲストに勢いよく突進を繰り返し、バーゲストはそれに合わせて剣を振り下ろす。

ガギンツ!

(頭から尻尾の先まで大体10M^{メートル}…くらいかしら…かなり硬いわね、その割に素早いけれど…)

大型蠍は両腕をクロスさせてそれを防ぐと、尻尾をバーゲストに突き出す。

「甘いっ!」

バーゲストは右手を剣から離し。尻尾の先端を代わりに掴んで止める。

(この蠍…!聖者の数字が発動している私と力勝負が出来るなんて…どうやらかなり強いようね…けれど!)

剣を押し付けるバーゲストと、尻尾の先端をバーゲストに突き付ける大型蠍の拮抗状態が続き、バーゲストは次に…

「はああっ!!」

「!?!」

バーゲストは右手で掴んでいた尻尾を力任せに振り回し始め、蠍が宙に浮くと剣を手放し、両手で尻尾を掴み、振り回す。

木々や地面に大型蠍を叩きつけ、振り回しながら最後は勢いよく空へ放り投げる。

「鎖は我が猟犬達、我が敵を捕らえる牙となれ」「チェーン・ハーディング」!

空を飛ぶ大型蠍に鎖を飛ばし、巻き付けると、今度は思いっきり地面に振り落とす。

大きな土煙が上がり、バーゲストは鎖を消して剣を拾う。

「ギシャアアア!」

大型蠍は咆哮を上げながら土煙の中から出て来る。大型蠍を包む甲殻には少しだけヒビが入っていた。

「やはりあれ程の大きさになると硬いな…しかし、剣が刺されれば勝てる…!」

再び突進してくる大型蠍に剣を向けるバーゲスト。大型蠍は両腕の鋏と尻尾でバーゲストを攻めたてる。

バーゲストはそれを冷静に対応していく。

大型蠍が尻尾を突き出し、バーゲストはそれを避けると尻尾が地面に突き刺さる。

そしてバーゲストはその瞬間にすかさず…

ザシュ!!

「ギシャアアアアア!」

「やはり尻尾は斬りやすいな」

大型蠍の尻尾が切断し、断面から紫色の血が噴き出す。大型蠍はやけくそ気味に右の鋏をバーゲストに突き出すが。

ガシッ

「ツツ!!」

「狙うなら…此処かつ!!」

バーゲストは突き出された鋏を左手で掴み、引っ張って大型蠍の右腕を伸ばすと、関節部分に剣を振り下ろして切断した。

「ギシャアアア?!」

右腕も切断され、大型蠍は後ずさる。

バーゲストは切断した右腕を放り投げ、大型蠍に迫ると…

「ギ…ギギ…ギシャア…!」

「ぬ…?」

大型蠍は素早く転換してバーゲストから逃げ始めた。
バランスを崩しながらも、必死に逃げていたのだが…

「ギシヤア…!？」

「逃がさん」

しかし、気付けば大型蠍はバーゲストの左腕から伸びる鎖に捕らわれていた。残った左腕の鋏を鎖に振り下ろすが、まるで切れる気配は無い。そして…

「ふんっ！」

バーゲストが鎖を強く引っ張り、大型蠍が勢いよく飛んでくる。そして飛んでくる大型蠍に剣を引き…

ザシユウ!

タイミングを合わせて突き出し、甲殻を貫いて剣が大型蠍に突き刺さる。更に…

「燃えろ」

剣から炎が放出され、内側から燃やされる大型蠍は、甲殻の隙間や斬られた断面から炎を噴き出すと、灰になって消滅した。

「ふう…少々手間取ったな…アルテミス・ファミリアは…」

「バーゲスト!」

「レトウーサ殿、そちらも片付いたか」

「ああ、バーゲストも無事だったか？あの蠍、かなり強そうだったが…」

「ああ、こちらも問題無く片付いた」

「よし、なら早く戻るぞ。今回の襲撃はかなりの規模だったからな。暫くは安全に進めるだろう」

バーゲストはレトウーサと共に団員達が居る場所に戻って行った。

それからは特に大きな戦闘は無く、当初の目的地に無事たどり着く事が出来た。

「着いたく〜！今日も大変でしたねえ…」

「着いたからってあまり気を抜くなよ、ランテ」

「分かっていますよ団長〜！けど、バーゲストさん凄かったですね〜
…って…凄い…モンスターの返り血が…」

ランテがバーゲストを見ると、バーゲストは蠍のモンスター達の返り血を大量に浴びた状態になっていた。

「あの大きな蠍がやはりな…早く洗い流したいものだ…」

「ふむ…では、陣地の設営が終わったら、皆で水浴びに向かうとしよう」

「……………え？」

陣地の設営した後、バーゲストはアルテミス・ファミリアの面々と近くの川に水浴びに来ていたのだが…

（無理無理無理無理！私は元男！女性の方々の水浴びに混じるなど断じて許される事ではありません！）

と、そんな感じで顔を真っ赤にしながら目を瞑って川に身を沈めていた…自分が一番凄い身体をしている癖に…

（何故…何故こんな事に…！）

「え〜！バーゲストさんも一緒に水浴びしましょうよ〜！」

「い、いえ、私は皆さんが浴びた後で行きますから…」

「いやいや！バーゲストさん凄い汚れてますから！早く綺麗にしましょう〜！」

「そうですよ〜！」

「一緒に行こうよ〜！」

ランテを筆頭としたアルテミス・ファミリアのメンバーに迫られ、タジタジなバーゲスト。助けを求めるようにレトウーサやアルテミ

スに目を向けるが。

「いや、私も早くその返り血を洗い流した方が良いと思うぞ」

「そうだな。遠慮する必要は無いぞ、行こう」

残念ながらバーゲストが望んだ救いは得られず、結局一緒に行く事になってしまったのだった。

「それにしてもやっぱり…バーゲストさんの体、凄いですね…」

「ああ、色んな意味で大きいな」

「髪も凄い綺麗〜!」

「ア、アリガトウゴザイマス」

自身の容姿を褒めているアルテミス・ファミリアの裸体を極力見ないように努力しながら平常心を保つ。

(最悪直視してしまったとしてもランテなら大丈夫ですわ!)

「何でしょう、今凄く馬鹿にされた気がします」

「気のせいだろう。それよりお前たち、あまりバーゲストに詰め寄るな、落ち着けないだろう」

『はい』

離れた場所で見っていたアルテミスの一言でバーゲストから離れる団員達。バーゲストはホツとした表情を見せたその時、事件は起こった。

「あっ」

「うわっ…!?!」

「っ…!?!」

ランテの足とレトウーサの足が引つかかってしまい、レトウーサがバーゲストの方に倒れていく。

バーゲストは座っており回避出来ず、ハツとした表情で顔を上げた瞬間…

フニユン…

「……………」

「ふ、二人とも大丈夫ですか…?」

バーゲストは倒れてきたレトウーサの胸部を顔面で受け止めるような状態になっていた。

レトウーサはバーゲストの肩を支えに直ぐに立ち上がる。

「すまない、バーゲスト！大丈夫か!?……………バーゲスト?」

レトウーサがバーゲストを呼ぶが、バーゲストは顔面が宇宙猫の状態でレトウーサの顔を見上げていた。

因みにレトウーサは大きくは無いが小さくも無いサイズである。

バーゲストは肩を揺らされると顔を段々赤らめ…

「ちよつと滝に当たってます!!」

と言って滝がある方に急いで向かって行った。

「え、滝!?!」

「何故に滝…」

「バーゲストさーん!?!」

バーゲストは滝に当たりながら何かを叫んでいるが、滝の音でそれは掻き消されていた。

因みにランテはレトウーサに締め上げられていた。

「はあ…とんでもない目に遭いましたわ…」

あの後皆で焚き火を囲いながら食事を済ませ、後は明日に備えて休むだけとなったバーゲスト。

しかし水浴びイベントのレトウーサへのラッキースケベ事件の所為で眠れずにいた。

「グルウ?」

「あなたも、よくここまで頑張りましたね」

自身を運んでくれたガネーシャ・ファミリアのドラゴンの頭を撫

で、その後は少なくなっていた餌を補充する。すると…

「お前も眠れないのか？」

「!…レトウーサ殿、ええ。今は少し…」

「私もだ、明日の事を考えると、目が醒める」

「そうですね…」

(ちよつと別の理由だったなんて言えません…)

レトウーサは座っているドラゴンの側に座ると、トントンと手で自分の隣を叩く。バーゲストは少し考えるとレトウーサの横に座り、二人は月を見上げる。

「…実はな、ずっと前から不安だったのだ。本当に私達だけで、話に聞く恐ろしい怪物…アンタレスを倒せるかどうか」

「…レトウーサ殿はドラゴンを倒す程の実力者でしょう。そんな貴女が…」

「だがアンタレスはもつと恐ろしい。私が討伐したドラゴンなどでは比べものにならないだろう。私は…お前が戦ったあの大型の蠍に勝てるかすら怪しい」

「……」

「不安なのはアンタレスの事だけでは無い。アルテミス様の事もあ。もし私達が敗れば、アルテミスを守る者が居なくなる。それが怖くてな…」

「…アルテミス様はただでさえ私達と一緒に戦場に赴きますからね。そういう不安も勿論あるでしょう」

「ああ…だが、そんな不安も幾分か無くなった。初めてお前を見たあの日からな」

「私が？」

バーゲストは意外そうな顔をしてレトウーサを見ると、レトウーサは笑みを浮かべたまま続ける。

「どんな敵も、どれほど向かって来ても、お前は真正面から全て打ち破っていった。増援が一人だけだと分かった時は少し絶望したが、そんな気持ちもお前は吹き飛ばしてくれた」

レトウーサはバーゲストの方に体を向ける。

「バーゲスト、お前に頼みがある」

「頼み？」

レトウーサは頭を下げるとこう言った。

「もし私達が負けたら、アルテミス様を連れて逃げてくれ」

「!!」

「そして出来る事なら、私達の代わりにアルテミス様を守って欲しい。たった1日と半日の間柄だが、お前にしか頼めそうに無い」

「レトウーサ…」

「無理な頼みだとは分かっている。だが…!」

「戦う前から弱気になるな馬鹿者!!」

「なっ…!?!」

頼み込んでいるレトウーサをバーゲストは大声で叱りつける。

「何が私達が負けたら、だ!そんな事を考えている暇があるなら明日の作戦でも考えろ!」

「し、しかし、アンタレスとの戦闘で生きて帰れるかの保証は…」

「全く…ではこう言おう」

バーゲストは立ち上がり、レトウーサにこう言った。

「アルテミス様も、アルテミス・ファミリアの団員達も全員、アンタレスから守り抜く。ヘステイア様の名にかけて、な」

「バーゲスト…!」

「私は誰も死なせない為に此処にいる…心配するな、オラリオに全員生きて帰れる様に最善を尽くすとも。だから貴公は、団長らしく堂々としていけば良い」

レトウーサは啞然とした表情でバーゲストを見つめると、バーゲストは歩き出す。

「ほら、この話はここで終わりです。先に行つて休んでますわよ」

そう言つて離れていくバーゲストをレトウーサはジツと眺めていると…

「グルア」

「うわあっ!?!いきなり舐めるな!!」

ドラゴンにいきなり顔を舐められ、顔がベトベトになってしまう。

「全く……自分が情け無い……よし、私も休むか」

レトウーサも立ち上がり、自分のテントへと戻って行った……

その頃バーゲストは……

「恥ずかしい……」

（レトウーサ殿になんて口を叩いてしまったの、私は……！気付けば水浴びの時に来た川に来てしまっていますし……！）

「明日、レトウーサ殿に詫びを入れなくては……！」

「そうか？私はとても良かったと思うぞ、君がレトウーサに掛けてくれた言葉は」

「いえ、余りにも失礼な態度を……って、アルテミス様?!」

バーゲストの隣にはアルテミスがいつの間にか居た。

「ま、まさか、聞いておられたのですか!？」

「ああ、偶然な……しかし、君は凄いな。アンタレスから私や眷属達を守り抜くと、ああも断言するとはな」

「ええ、私の様な未熟者が何を言っているのか……」

「だが、君の言葉に嘘はなかった……大した人間だ。ヘステイアは本当に良い眷属に恵まれたな」

「光栄です」

アルテミスは月に手を翳し、バーゲストに言う。

「君は何故、そこまで強くあれる？何が君をそうさせる？」

「私が？」

「ああ、見知らぬ私達の為に恐ろしい怪物と戦い、私達を守ると断言した。何故だ？私がヘステイアの友神だからか？」

「私は……私がそうするべきだと思っただけです」

「それだけなのか？」

「はい……私がするべきだと感じたから……それだけなのです」

「……そうか、ありがとう。さあ、もう戻ろう」

アルテミスはバーゲストの手を引き、陣地へと戻っていく。

「必ず生きて帰ろう、バーゲスト」

「はい、必ず」

「あ、バーゲストさんやっとなんて来た」

「ランテ？まだ起きていたの？」

「えへへ、なんだか眠れなくて…」

「全く…まあ、私も人の事は言えませんが…」

バーゲストは鎧を脱ぎ、寝る準備が終わると明かりを消して横になる。

「…バーゲストさん、起きてます？」

「…どうしたのかしら？」

「いや、寝れるまで少し話しませんか？バーゲストに訊きたい事があつて…」

「訊きたい事？」

「はい…バーゲストさんって…」

ランテは真剣な声色でバーゲストに問う。

「恋した事って、ありますか…!？」

「真剣な声だから重要な事かと思ったのに…」

「重要ですよ…!で、どうなんですか…?」

「私はありませんが…私のファミリアの主神なら」

「ええっ!?!聞きたいです!」

「ダメよ、長くなるから。この話はまた明日しましょう」

「うう…そんなあ…」

「ほら、いい加減もう寝るのよ」

「はあい…」

ランテは残念そうにしながら目を瞑り、少し時間が経つ。すると…
「…バーゲストさん…もう寝ちゃいましたか?…明日、絶対皆で生きて、バーゲストさんのファミリアの主神様の話、聞かせてください」

ね…」

背を向けているバーゲストにそうやってランテは今度こそ眠りに
ついた…

(…ええ…必ず…全員生きて終わりにします…絶対に…私の全てをか
けて…)

眠っていた振りをしてランテの言葉を聞いていたバーゲストは胸
の内にそう固く誓う。

バーゲストはアルテミス達を守り通せるのか。

運命は変えられるのか。

アンタレスを倒す事が出来るのか。

これより始まるは、女神を殺す物語では無く、ある白兔の英雄が、泣
いている女の子を救う物語でも無い。

これは、黒犬であり、太陽の騎士の名を借りる存在が、運命に抗う
物語だ。

第十二話 運命の天蠍

―エルセスの遺跡、攻略当日。

「……………」

日が昇る直前の時間、バーゲストは鎧を着込み、剣の状態を確かめていた。

「バーゲスト」

「アルテミス様、おはようございます」

「ああ、おはよう…と言つても、まだ日は見えないがな…いよいよか」

「はい…他の皆さんは？」

「眠そうだが、皆準備している」

「申し訳ありません、私のスキルが午前の日が出る時のみに有効な所為で…」

「構わない、君は今回の戦いの主力だ、その君が全力を出せる様にするのは当然の事だ」

二人が視線を拠点の方に向けると、そこには眠そうにしながら攻略の準備を進めるアルテミス・ファミリアの面々の姿があった。

「…さて、そろそろ行こう」

「はい」

攻略の準備が終わり、団員が集まると、レトウーサが前に立って喋り始める。

「これより、アンタレス討伐に向けての作戦を説明する」

眠そうだった団員達が気を引き締めてレトウーサの言葉に耳を傾けると…

「バーゲストを前に出して突っ込む！以上！」

『ちよつと待てええええ!!』

余りにも簡潔に説明された作戦とも言えるかどうか怪しい内容に、団員達が直ぐさま突っ込む。バーゲストは苦笑し、アルテミスは少し

ぽかんとしていた。

「団長! どうしたんですか!？」

「まだ眠いんですが!？」

「何時もの団長は一体何処に…」

「お前たち、そんなに驚くか?」

レトウーサは咳払いをすると、改めて説明する。

「太陽が上がればそこからはバーゲストの時間だ、我々は全員でバーゲストの露払いや援護を担当する。アンタレスに関しては魔法やマジック・アイテムで援護する。今回の戦闘はバーゲストをどれだけ消耗させずに短時間でアンタレスの元へ向かう事が重要だ、皆、頼むぞ」

『はいー!』

「よし…ではアルテミス様、戦いの前に皆にお言葉を」

「ああ」

レトウーサと入れ替わりでアルテミスが前に立ち、話始める。

「皆、ここまで良く頑張ってくれた。だが本番はこれからだ、アンタレスがどれほどの強敵かは分からない…だが、私達なら、皆が生き残って勝利する事が出来ると信じている…必ず生きて、オラリオに皆で帰ろう」

『はいっ!!』

これより先は未知の世界。その始まりを祝福するかのように、空が明るくなり、日が昇り始めるのだった…

「はあく、やっぱ皆遠征でおらんと静かやなく…暇やわく…ん?」

黄昏の館でのんびりしていたロキはふと窓の外に目を向ける。

「何や、今日は雲が多いな」

それは、バーゲスト達がエルセスの遺跡に突入して、1時間後の出来事だった。

「はああああっ!!」

バーゲストは剣を振るい、蠍達を吹き飛ばしていく。

「バーゲスト!調子はどうだ!?!」

「問題は無い!魔力も使っていないからな、かなり余裕がある!」

「そうか、アンタレスの所まではどうやら一本道だ、このまま道中の魔物を殲滅しつつ、奥に向かうぞ!」

バーゲスト達は順調にエルセスの遺跡を攻略していた。

(やはりアルテミス様が捕食されていないから、異常な繁殖速度や進化が行われていない…これならアンタレス以外は問題無さそうね…)

「よし、この辺りは全滅したな…アルテミス様、ご無事ですか?」

「ああ、問題無い」

「よし、では早く先に向かうぞ!」

その後も特に問題は無く、バーゲスト達は先に進む。やがて…

「…!これは」

「どうした、バーゲスト?」

「…この匂い…間違い無い、この先にアンタレスが居る」

「!本当か!?!」

「ああ…恐らく周りに何匹か護衛がいる筈だ、それは任せても良いか?」

「ああ、任された…!皆聞いたな!この先にアンタレスが居る、気を引き締めろ!」

そしてその道の先に出ると、広い空間が広がっており、その中央には…

「…アンタレス…」

「あれが…!」

今まで見た蠍のモンスター達とは比べ物にならない怪物が、鎮座していた。大きな蠍から更に上半身が生えた様な姿。顔の部分にある一つ目がギョロリと動き、バーゲスト達を捉える。

「まるで、階層主……！」

「……やはり護衛がいるな、中々の大きさだ」

「バーゲストは予定通りアンタレスに当たれ、他の前衛が護衛を相手にする。行くぞー！」

バーゲストはアンタレスへと突撃し、レトウーサ達は護衛の対処に向かう。

「ウオオオオオオ!!」

アンタレスが咆哮を轟かせ、向かって来るバーゲストに対して下半身にある右腕の鋏をバーゲストの真横から振るう。

「ふんっ!!」

バーゲストはそれを切り上げると、鋏は上に弾かれる。アンタレスは反対の鋏をすかさず振るうが、バーゲストは跳んでそれを回避し、そのままアンタレスの顔に向かうが……

「っ……くっ……い……」

アンタレスは長い尾をバーゲストの上から差し向け、バーゲストは尾の鋏に捉えられ地面に拘束される。

バーゲストを挟もうとする尾の鋏と、剣と片手を使ってそれを阻止するバーゲストにアンタレスは上半身の腕の一本をバーゲストに突き出そうとする。

「鎖は我が猟犬達、我が敵を捕らえる牙となれ」！「チェーン・ハーディング」！

バーゲストは足から鎖を伸ばし、アンタレスの足に巻き付けると、鎖がバーゲストを引っ張ってアンタレスの拘束から逃れ、バーゲストの居た場所にアンタレスの腕が突き刺さる。

「はああああ!!」

バーゲストはそのままスライディングの様に鎖に引っ張ってもらい、鎖が巻き付いているアンタレスの足を切り裂く。

「ウオオオオオオ!!」

「先ずは足、一本!!」

足が一つ切り落とされたが、アンタレスは少しバランスが悪くなっ

た程度でまだ余裕そうだ。

勢いで背後を取ったバーゲストはアンタレスの背後から斬りかかろうとする。

(後頭部から剣を刺して炎を流し込めば……！)

アンタレスは尻尾を背後にいるバーゲストに叩きつけるが、バーゲストをそれを避けて尻尾の上に乗れ、アンタレスの背中に近づく。そしてアンタレスの後頭部に向かって跳ぶ。

(取った……！)

そう思った瞬間、アンタレスの上半身の腕6本の付け根がぐるりと回転し、腕が全てバーゲストに向けられる。

「っ!？」

咄嗟に突き出された腕を防御し、頬や脇腹を掠める程度に収めるが、空中で勢いが止まったバーゲストをアンタレスは尾で背後から捕まえる。

「しまった……！」

(まさか、上半身の腕が背後にまで向けられるなんて……！映画で見た以外の攻撃も想定すれば良かった……！)

「ぐあっ！」

バーゲストは尾によって後方に投げ飛ばされ、後ろにあった壁に激突する。

(くっ、土煙で何も見えん……！)

土煙でアンタレスの姿を確認出来ずにいると、煙の向こうから紫色の光が薄っすらと見える。

「まさか……！」

煙がアンタレスの姿を捉えた瞬間、アンタレスは口から光線を放とうとし……

ドゴンツ!!

瞬間、背中から爆破が発生し、顔が下を向く。光線は地面に放たれたが、アンタレスは顔を上げてバーゲストに当てようとする。バーゲストは立ち上がり、横に回避すると光線が下から上に振り抜かれ、地面から壁に向けて一本の焼け跡が出来上がる。

「バーゲスト、大丈夫!？」

「ああ、助かった!」

バーゲストに光線が放たれる直前、アルテミス・ファミリアの魔導士が魔法を放ち、アンタレスの射線を逸らしたのだ。

(しかし、どうしたものかしら…:どうやら背後からの攻撃は対処されるみたいですし、かといって真正面から戦うのは分が悪い…)

するとアンタレスは、自身に魔法を放った団員の方を向く。

「!まさか…!」

「ウオオオオオオ!!」

アンタレスはアルテミス・ファミリアの後方支援班に目をつけ、そちらに突進する。

「させるか! 【鎖は我が猟犬達、我が敵を捕らえる牙となれ】 【チエーン・ハーディング!】」

バーゲストは剣を地面に突き刺し、両手から鎖を放つと、アンタレスの背後から大量の鎖が巻き付き、アンタレスの動きを引っ張って止める。

「ぐう…!」

「ウオオオ!」

「くっ…:大人しく…:しろ…:!!」

バーゲストは炎を放出し、鎖を伝ってアンタレスを燃やす。

「今だ!」

「これでも喰らえっ!!」

アルテミス・ファミリアの団員がそこでポーションの様な物をアンタレスに投擲し、それがアンタレスを包む炎に触れた瞬間…

ボゴオオオン!!

大爆発を起こした。

「うわあ!…:ここまで強力なやつだったの!?!」

「今のうちに離れるぞ!こっちだ!」

アルテミスが支援班を引き連れてアンタレスから距離を取る。

バーゲストはアンタレスを包む爆煙をジッと睨んでいると…

「ウオオオオオオオオ!!」

アンタレスの咆哮が響き、爆煙が一気に晴れる。

(…今のは結構効いたのかしら…上半身の腕が2本無くなっているけれど…火力が足りないわね)

爆煙から出て来たアンタレスは全身に焼き痕がつき、上半身の腕が2本無くなっていた。

(私の剣も炎も急所を突かなきゃダメージを与えられない。どうにかして懐に潜り込む必然があるわ…)

バーゲストが外側が硬いモンスターに対してやって来た柔らかい所を突き刺し、そこから炎を流し込んで内側から焼くという戦い方。アンタレスに対しても同じような戦いを仕掛けようとしていた。

(落ち着いて、焦らないで…時間はまだある、マジック・アイテムもまだある。慎重に戦えば勝てる…!)

「ウオオオオオ！」

アンタレスはバーゲストに向き合い突進しながら下半身の鋏を振るう。

「そんな単調な攻撃で！」

最初と同じように剣で弾こうとし、剣を構えたその瞬間…

「っ…!?!」

バーゲストは、自身から力が抜ける感覚を感じた、そして…

ドゴンッ!

バーゲストは簡単に吹き飛ばされ、再度壁に激突した。

「バーゲストさん!?!」

「ぐっ…ゴホッ…ゲホッ…」

ランテが叫んで呼びかける。バーゲストは口から血を吐き出していた。

「ウオオオオオオオオ!!」

アンタレスの口から光が溢れ出す。標的は、バーゲスト。

「か…らだが…」

(一体…何が…まずい、身体が重い、攻撃を喰らう)

あの光線を喰らえば確実に死ぬ。バーゲストは必死に身体を動かそうとするが、頭がくらくらして上手く動かない。

やがてアンタレスは光線を放ち：

「バーゲストさんっ!!」

バーゲストは横から衝撃を感じる。衝撃を感じた方に視線を向けると…

(ランテ…!?)

ランテがバーゲストに横からタツクルしながらアンタレスの射線から逃げようとしていた。

光線が壁を焼きその熱が二人を襲う。

これより、バーゲストは試練に激突することになる。

「バーゲスト！ランテ!!」

丁度アンタレスの護衛を掃討したレトウーサが二人の名前を呼ぶ。土煙で二人の姿は視認出来ず、アンタレスの様子を見ながら助けに行こうとすると、土煙から鎖がレトウーサの方に向かって放たれる。

「！おい、手伝ってくれ！」

「は、はい！」

レトウーサが鎖をキャッチし、他の団員と一緒に引つ張ると、土煙からバーゲストとランテが引き摺られる様に出て来る。バーゲストはランテを地面に触れない様に片腕で抱えながら引つ張られ、レトウーサ達の元まで来る。

「バーゲスト！大丈夫か!？」

「私より…ランテを…」

「ランテ…！おい大丈夫か!？」

ランテは気を失っており、背中に酷い火傷を負っていて、どう見ても重傷だった。

「私を助けたせいで…すまない…！」

「謝るのは後にしろ！お前もポーションを飲め！誰か、ランテを連れて退がれ！」

バーゲストはポーションを受け取り、回復していると、アルテミスや支援班も合流する。

「それで、さっきは一体何があったんだ？」

「分からない…突然、力が抜けて…スキルが発動していない」

「そんな、まだ午前の筈だぞ、一体…」

するとアルテミスが上を向いて喋る。

「雨だ」

「雨…？」

「見ろ、此処は地下だ、そして水滴が落ちて来ている。恐らく、地上では今雨が降っているんだろう」

バーゲストやレトウーサが地面を見ると、確かに水滴がポツポツと落ちて来ている様だった。

「…まずい、太陽が出ていないなら私のスキルは使えない…」

「ではどうする？一旦撤退するか？」

「いや、それはダメだ」

アルテミスは撤退を却下し、アンタレスを睨む。

「マジック・アイテムも幾つか使った。これで撤退すれば次に討伐出来る可能性が低くなる。時間も無い、今仕留めるしかないだろう」

「…アルテミス様…分かりました…護衛は片付いている。ここからは戦える者全員でアンタレスを叩く。それで良いな？」

「ああ…ランテが自分の身を鑑みずに私を助けてくれたのだ…騎士として不甲斐ない…必ず、アンタレスをここで討伐する」

「よし、その意気だ…！全員、準備は良いな、行くぞ!!」

その頃、オラリオでは…

「では、最後の打ち合わせをします」

ベル達が屈んで初めてのの中層突入前の打ち合わせをしていた。

「あそこを抜ければ13階層：中層です。中層以降のモンスターは、炎などによる遠距離攻撃も仕掛けてきます。離れていても、油断しないてください」

「うん」

「おうよ」

「分かりました」

「では、ここから定石通り隊列を組みます。前衛はヴェルフ様、ベル様は最も負担の大きい中衛を。そしてアルトリア様とリリが後衛です」

四人はそれぞれの役割を確認して立ち上げる。

「ふふっ」

「お？何笑ってんだベル？」

「ベル様、緊張感が足りていないのですか!？」

「ごめんごめん…!でも、こういうのワクワクしてこない?皆で力を合わせて冒険しようって」

「…ふっ…ハハハハハハ!そうだよな分かるぜえ!ワクワクしなきゃ男じゃないもんな!」

「リリは賛同しかねますが…でも、お気持ちは分かります」

「そうですね、私もなんだかワクワクしてきました!」

ベル達は初めての中層攻略に向けて意気揚々といった感じだ。

「バーゲストさんも、依頼を頑張っているんだし、僕達も負けてられないね!」

「はい、帰って来た時にバーゲスト様が驚かれるくらい、リリ達も張り切っついていきましょう!」

「そして私は専属鍛冶師に…!」

「そこかよ」

「死活問題なんです!!」

(…大丈夫、一人じゃない。バーゲストさんはいないし、同じファミリアじゃないけど、仲間が居る。バーゲストさんも、アルテミス・ファミリアの人達と頑張っているだろうから)

「それでは、行きましょう!」

「おう！」

「よし、頑張るぞー!!」

(バーゲストさん、あなたに頼りきりにならない為に、僕も頑張ります
…！)

ポタツ…ポタツ…

「あ…あ…」

アルテミスの頬に血が落ちる。

「ぐっ…うう…！」

レトウーサは地面に倒れ伏し、アンタレスを…いやアンタレスが貫いた者を見つめる。

「バー…ゲスト…!!」

レトウーサの目には、尻餅をついているアルテミスを庇う様にアンタレスの腕を背中から受け止めているバーゲストの姿があった。

「ゴボツ…あ、アルテミス…様…」

アンタレスの腕はバーゲストを貫通しており、貫かれた場所と口や目から血が溢れ出る。

「良かった…た…無事、で…うぐっ!!」

アンタレスはバーゲストを貫いた状態で持ち上げ、そして遠くに放り投げる。

「ウオオオオオオオオオオ!!」

エルセスの遺跡に、アンタレスの咆哮が轟く。

自身の血が広がり、その中で倒れ伏すバーゲストはその姿を薄っすらと眺めていた。

第十三話 天蠍を喰らいし黒犬

——暗い…此処は…？

彼が目を開けると、そこは何も無い、ただ闇に包まれた空間だった。

——俺は…確か、アルテミス様を庇って、アンタレスに…

「おや、今度はちゃんと覚えているみたいだね」

——…その声は…うわっ…!?

何処か聞き覚えのある事が聞こえた瞬間、彼の視界に光が現れ、映像が映し出される。

「私はずっとあなたを探していたんだ『オリオン』」

「お、女の子は守るものだってお祖父ちゃんが、だから…!」

「ふっ…そんな事を言われたのは初めてだ…!」

「二人の心が通じ合うほど、槍の力は強まる…」

「本当に…本当にこの槍じやなきやダメなのか!？」

「苦しい戦いになるだろう、犠牲者も出るかもしれない。しかし、成し遂げてほしい。私達の愛する下界の為に!」

「それでも、一人の少年に押し付けるんですか。神殺しの大罪を!」

「僕はそんな事のためにあなたと!」

「ベル君、お願いだ、立ってくれ…!」

（そうだ、これは、女神を殺す物語じゃない。これは……君が泣いてる女の子を救ってあげる物語だ）

「次にあった時は、一万年分の恋をしよう、ベル!」

彼の視界に映るそれは、彼にとっても見覚えのある光景だった。し

かし、同時に彼が知らない物語の姿でもあった。

——あれは…キャストリア…？じゃあこの映像は…

「そう、これは君が死んでしまった後に訪れる、月女神の運命だ」

——…神、様…

「久しぶりだね、ずっと見守っていたよ。君のことを」

——…俺は、死んでしまったんですか…？

「死ぬ一歩手前かな、これから君がどうするのか聞いてみたくて」

——…俺では、アンタレスに勝てないんでしょうか…

「ふむ…そうだね、君はそもそも偽物だ。あの円卓の騎士ガウエインにも、妖精騎士ガウエインの足元にも及ばない、ちっぽけな冒険者だ」

——…俺は、きつと大丈夫って思ってたんです。油断はしなかったけど、心の奥底で、きつと大丈夫、上手くいくって…樂觀視してました。

「……………」

神は何も言わず、彼の言葉に耳を傾ける。

——きつと、誰も犠牲者を出さずに、アンタレスを倒せる…そんな理想を抱いて、戦ってきたのに…結果がこれじゃ、自分に呆れてしまいます…私は、傲慢だったでしょうか。

「…いや、君は頑張っているよ。僕が保証する」

神の顔はぼんやりとしていて分からないが、優しい声で彼に語りかける。

「君は確かに偽物だったけど、君が抱いた信念は紛れもない本物だ、助けたかったんだろう？君は、自分の力を人の為に振るつた」

——……………」

「ずっとそうしてきたじゃないか、もし仮に君がアンタレスに立ち向かわなかったとしたら、君は君じゃない。僕の知っている君は、前世から誰かの為に頑張れるとんでもないお人好しき」

——……………」

「君は騎士として、正しい事をした。その身に相応しい振る舞いを、刻まれた名に相応しい行いを。君は、一度でも、戦いから背を背けた事

「はあったかい？」

「……俺は、上手く、やれていたでしようか……」

「上手くやれていたじゃないよ。君は……素晴らしい人間だ、誰がなんと言おうとね……だから……もう一度、立ち上がってくれ……私はとっくに君のファンなんだ。君の物語を、まだ見ていたい」

「……けど、俺はもう死ぬ直前で……出来る事なんて……」

「今回はハプニングがあったけど、それ以上に足りなかったのは、君の覚悟だよ」

「……！」

「相手はあのアンタレスなんだぞ？ 神話ではあのオリオンの命を絶つた化け物だ。そんな相手に、まさか聖者の数字が使えなくなった君が普通に戦って勝てる訳ないだろう？ 君は、もうどうするべきか、分かっている筈だ」

それは、彼にとつての枷。理性を保つ為の、最後の鎖。

「……けど、もしアンタレスを倒したとして、その後に俺が、皆を手にかける様な事があれば……！」

「ねえ、目を閉じて」

「……えっ……？」

「いいから！早く！」

「……は、はい……」

彼は神の言う通りに目を閉じる。

「君は、ある平穏な村の真ん中で捨てられていた、赤ん坊だった」

その言葉を聞いて、彼の脳裏にこの世界に来てからの最初の記憶が蘇る。

「村の人達は君を大切にした。まるで家族のように……そして、君は大きくくなってから村の為に一生懸命働いた。君はその村の英雄になった」

バーゲストとして暮らした村の日々。モンスターなどに襲われる事もあったが、彼は村の人々の平和を守った。

「君は村を旅立ち、オラリオに来了。来た初日から色んな事があったね」

ベート・ローガに喧嘩を売り、その後ベルを回収し、翌日にはヘステイア・ファミリアの一員となった。波乱の幕開けだった。

「リリルカ・アーデと出会い、彼女を守ると誓った。君とベルは、彼女の英雄になった」

騙されながらも、リリルカを救った。理由はリリだからとか弱肉強食だからとか。二人のお人好しが生んだ結果だったが、悪いことでは無かった。

「ベルの冒険を見守ったね、あの子に戦う勇気を与えたのは、君でもあるんだよ」

ベルとミノタウロスの死闘を目の当たりにし、その姿を見てアンタレスに立ち向かう勇気を貰った。二人は知らず知らずのうちにお互いを支え合っていた。

「そしてアルテミス・ファミリアと出会い、共に戦い、アンタレスに立ち向かっている…目を開けてごらん」

彼は目を開き、神を見据える。

「きつと、君は色んな人を支えてきたし、色んな人に支えられてると思う。君は、アルテミス・ファミリアの皆が大事？」

——…はい、アルテミス様が…レトウーサさんやランテが…アルテミス・ファミリアの皆が、大事です

「なら大丈夫！君は素直だ、心の奥底から本当にそう思っている！それがあるなら大丈夫！だから…いっちょやろうぜ！冒険！」

——神様…はい！俺、頑張ります！

瞬間、彼がいる場所から光が溢れ出し、視界が白く染まっていく。

「頑張れ！少年！君の冒険、物語、運命の先に、幸福がある事を願っているよ！」

その言葉を最後に、彼は再び戦場へと戻っていった。

「大丈夫だよ、君には立派な角剣があるじゃないか」

「バーゲスト……！しっかりと、するんだ……！バーゲスト!!」

アルテミスは倒れ伏すバーゲストに必死に呼びかけている。

(ポーシヨンを使っても、傷が治らない……！万能薬はランテや他の団員に使ってしまった……！このままじゃ、バーゲストが……！ヘステイアの子が……！)

「……あ……あ……」

「！バーゲスト、目が覚めたのか……！しっかりとしろ、今治療を……！ダメだ、血が止まらない……！」

「……み……な……」

バーゲストは意識が朦朧としている中、視線をアンタレスの方に向けてると、レトウーサ達がボロボロになりながらも必死に戦っていた。しかし、既に負傷で動けなくなっていている団員が殆どだ。

(このままじゃ……さつき見た光景に……ベルに辛い運命を背負わせてしま……う……だから……！)

「ア……テミ……さま……」

「バーゲスト！喋るな、無理に喋ると……！」

「私……角……」

「バーゲスト……？どうした……!?!」

アルテミスはバーゲストが何かを伝えようとしている事に気が付き、バーゲストの口元に耳を寄せる。

「私の……角を……引き抜いて……」

「角を引き抜けば良いのか!?分かった!」

どつちにしろこのままじゃバーゲストは死んでしまう。アルテミスはバーゲストの言葉に賭け、バーゲストの右角を……

「頼む……！」

勢いよく引き抜いた。

バチツ

瞬間、バーゲストの体に赤雷が走る。バーゲストの身体を炎を赤黒

い靄が覆い、アルテミスは慌ててバーゲストから離れる。靄はどんどん大きくなり、アンタレスが靄に目を向けレトウーサ達も動きが止まる。

「これは…なっ、角が…!?!」

するとアルテミスが握っていた右角がどんどん大きくなり、アルテミスが咄嗟に手放すと、それは剣となつて地面に突き刺さり、更に大きくなる。

——その角剣の名は、妖精剣『ガラティーン』バーゲストの理性そのもの。

剣の巨大化が止まった瞬間、靄から巨大な腕が伸びる。それはガラティーンの柄を掴み、そして靄の中から赤い眼光がアンタレスを捉えたその時…

「ウオオオオオオオ!!」

アンタレスは靄に向かって光線を放った、そしてその瞬間、靄が晴れ、赤雷が周囲に迸る。靄の中にいたのは…

「アアアアアアアア!!」

その身を巨人の様に巨人化させ、右目を黒く染め、獣の様な咆哮を発するバーゲストだった。

ドゴオオオオオオオン!!

バーゲストは光線に対してガラティーンを振り抜き、相殺する。

「バーゲスト…なのか…?」

「アルテミス様、こちらに!」

啞然としているアルテミスをレトウーサが回収し、アルテミス・ファミリアの面々は向かい合うバーゲストとアンタレスから距離を取る。

「ウオオオオオオオオ…!」

「グルルルルル…」

睨み合う両者、その様子を見ていたアルテミス・ファミリアの面々に異変が訪れる。

「だ、団長、私なんだか、力が抜けていきます…」

「私も…」

「何？まさか、バーゲストが何か…？」

「グルアアア!!」

バーゲストはガラティーンに炎を宿し、アンタレスに振り下ろす。アンタレスは防ごうと残った上半身の腕を全てクロスさせるが、いとも簡単に腕は全て切り裂かれ、首の直ぐ横から胸の中心…魔石がある部分に向けて剣が食い込む。

「ウオオオオオオオ!!」

アンタレスは下半身の腕2本をバーゲストの身体に左右から突き刺すが…

「ウオオオオ…!?!」

「グルアアア!!」

バーゲストの身体にその腕は少ししか傷を与えられず、バーゲストは魔石に向かって更に剣を押し込む。

「ウオオオ…ウオオオオオオオ!!!!」

アンタレスは口を開きバーゲストの顔面に向けて…

「バーゲスト!」

光線を放った。

ジュウウウウウウウ…

バーゲストの顔面に光線が直撃し…バーゲストは仰け反る。しかし…

「グ…ル…アアアアアア!!!!」

バーゲストは勢いよく体勢を戻すどころか、その勢いを利用してアンタレスの胸元に噛み付いた!

「ウオオオオオオオオ!!?」

バーゲストはアンタレスの胸元の一部を噛みちぎると、ぐちゃぐちゃと口で咀嚼して飲み込む。

「グルルルルル…!」

バーゲストが唸ると、ガラティーンは更に強力な炎を発し、アンタレスを剣が食い込んだ部分から内側を焼いていく。

「ウオオオオオオオオ…!!」

身体を節々や、バーゲストに噛みちぎられた箇所から炎が溢れ出

し、やがてアンタレスの口や目からも炎が溢れ出す。

「ウオオオ…オ…」

アンタレスは全身を焼かれ…最早下半身と上半身の繋ぎ目が炎で溶けている。バーゲストはアンタレスの首を掴んで持ち上げると、先程まで下半身と繋がっていた部分からポトポトと肉片が落ちる。

「ウオオオオ…オオオオ…」

「グルルルルル…グルア!!」

バーゲストはガラティーンを手放し、アンタレスの首を両手で掴むと、首からギチギチと音がし始める。

「ウオオオオ…オ、!!」

ブチイ!!

次の瞬間、アンタレスは頭と上半身が引き千切られ、アンタレスは最早虫の息だ。分断された上半身と下半身がまだピクピクと動いているあたり恐ろしい生命力だが、もう何も出来ないだろう。

「グルルル…フシュー…」

バーゲストはアンタレスが動かなくなったのを確認すると、アンタレスの頭を食べ始めた。

「アンタレスを…食べている…!?」

(まるで、あの冒険者の様だな…)

レトウーサはバーゲストの行動に驚愕し、アルテミスはある冒険者の事を思い出していた。

ガリツッ!ボリツッ!グチャ!ネチャ!

やがてバーゲストはアンタレスの頭部を完食し、次にアンタレスの上半身と下半身に目を向けると…

「グルル…?」

そこにはもうアンタレスだったものの灰と、アンタレスの魔石しか無かった。頭部を食われたことにより、アンタレスは遂に討伐されたのだ。

「やった…のか…?」

「アンタレスを倒したの…?」

「いや、皆、気を抜くな!」

バーゲストはガラティーンを拾うと、アルテミス達の方に向かってズシンズシンと歩き始める。

アルテミス達を見るその眼は、正に獣そのものだった。

「グルルルル…!!」

バーゲストはアルテミス達を睨み、ガラティーンを強く握り締め、剣を振り上げようとした瞬間…!

「バーゲスト君、ベル君はボクに任せて、アルテミスを頼んだよ。それと、絶対に無事に帰って来るんだよ」

「はい、誓います」

バーゲストの脳裏に、主神との約束がよぎる。

(へス…ティア様…アルテミス…様…皆…)

視界がクリアになり、バーゲストの目に理性が戻る。そしてその瞬間、バーゲストは気を失った。

「……………」

バーゲストが次に目を覚ますと、そこはテントの中だった。

「……………私…は…」

「あ、バーゲストさん！目が覚めたんですね!？」

「…ランテ」

「大丈夫ですか？どこか痛かったり、気分が悪かったりしませんか？」

バーゲストの直ぐ側にはランテが居た。

「私は大丈夫よ…あなたこそ、怪我は？」

「私は大丈夫です！^{エリクサー}万能薬使ってもらいましたし…あ、団長とアルテミス様呼んできますね、待っててください！」

ランテは慌ててテントから出て行き、バーゲストはボーっとしなが

ら待っていると、レトウーサとアルテミスがテントに入ってくる。

「バーゲスト、調子はどうか？」

「レトウーサ殿……」

「胸を貫かれたからな、もうダメかと思ったぞ」

「アルテミス様……」

「……何があつたか、覚えているか？」

「ええ……なんとなくですけど……皆さんは、無事でしたか？」

「ああ、怪我人はいるが死者は出ていない。バーゲスト……私達は勝つたんだ」

「そう……ですか……」

アルテミスとレトウーサは微笑みながらバーゲストに話すも、バーゲストの表情はどこか優れない。

「……どうした、バーゲスト？」

「……私は、自分が恐ろしいのです。アンタレスの頭を食らった自分が……きつと皆さんにも恐ろしく思われているでしょう……」

バーゲストがそう言うのと、アルテミスとレトウーサは顔を見合わせると……

「……あつはつはつはっ!!」

「なっ！笑うとは何ですか！こっちは真剣に悩んでいますのよ!?!」

「ふふふつ……すまない、君は案外自分を過小評価するな……レトウーサ」

「はい、ほら行くぞ、バーゲスト」

アルテミスが立ち上がり、レトウーサがバーゲストをお姫様抱っこする。

「なっ、一人で歩けます！降ろしてください！」

「大人しくしろ、傷が開いたらどうする」

「くろう……!」

レトウーサにお姫様抱っこされたまま、バーゲストがテントを出ると……

『バーゲスト（さん）!!』

「うひゃあ!?!な、何ですの!?!」

バーゲストが出てくるのを待っていたのか、アルテミス・ファミリ

アの面々が待ち構えていた。

「バーゲストさん、お疲れ様でした！」

「カツコよかったぞ！」

「アンタレスを食べ始めた時はちよつと驚きましたけど、あの大つきい姿！とても頼もしかったです！」

アルテミス・ファミリアの皆はバーゲストにお礼や称賛を送る。その光景を見てバーゲストはポカンとしていた。

「君を怖がる子など、私のファミリアにはいないさ。さあ皆、そろそろ夕食にしよう」

そしていつの間にか皆で焚き火を囲い、手に夕食を持っていた。アルテミスが立って皆を見渡しながら話し出す。

「皆、今日は良くやってくれた。これで下界に残る脅威がまた一つ取り除かれた。宴はオラリオに戻ってからまた開くが、誰も失っていない事を祝して、今日は存分に楽しんでくれ！……そして、我が神友、ヘステイアの眷属、バーゲスト」

アルテミスはバーゲストを見つめ優しく言う。

「ありがとう、君が居てくれたお陰で、誰も失わなかった。君は私達の英雄だ、君と共に戦えた事とても誇りに思う。君から受けた恩を、忘れる事は無いだろう」

バーゲストはその言葉を聞き、口元を緩める。

「…私も、忘れられません。皆さんと一緒に戦った事…私も誇りに思っています。私も皆さんから受けた恩は、忘れません」

「…それでは、乾杯！」

『乾杯っ!!』

「…本当に、よく頑張ったね…」

楽しそうにアルテミス・ファミリアの皆と共に食事をするバーゲストを別次元から覗き見る神は、そう呟いた。

「本当に凄いよ、君は…本能ですら誰かを守りたいという願いが根底

にあるなんて：君はこれから多くの人達を救う為に、その力を振るうのだろう：それはきつと：とても素晴らしい事だ」

神はこれからもバーゲストの行く末を見守る。それはまるで、子の成長を見守る親の様だった。

「本当に、もう行っちゃうんですか？」

「ええ、主神や仲間を待たせていますからね。貴方達も出発するのでしよう？先に行って待っているわ」

翌日、バーゲストは飛竜に乗ってオラリオに向かう事にした。

「良いな、飛竜…」

「私達全員分の飛竜は用意出来ないからな、仕方ない」

「ふふ：皆さんが戻ってくる時には美味しい店で予約を取っておきますから、楽しみにしてなさい」

「やったー！あ、その時はバーゲストさんの主神様の恋の話、聞かせてくださいね！」

「ええ、分かっているわ」

「バーゲスト」

「レトウーサ殿」

「道中には気をつけるんだぞ、昨日は重傷を負ったんだからな？巨大化から戻ったら塞がっていたが…」

「分かっています。そちらこそ、長い道ですけれど、どうかご無事で」

「ああ：アルテミス様、お待たせしました」

最後にアルテミスがバーゲストの前に来る。

「ヘステイアに伝えてくれ、『良い眷属と巡り会えたな、大事にするんだぞ』と：それと『ありがとう』も」

「ありがとうございます、必ず伝えます」

バーゲストは飛竜に跨がり、上空に飛び上がる。アルテミス・ファミアが手を振って来るので振り返しながら、バーゲストはオラリオに向かい始めたのであった…

かくして、黒犬は見事に月女神の運命を勝ち取った。

「ホームには誰も居ませんでしたわね…ヘステイア様もダンジョンに向かったと見て間違いなさそうですね…」

バーゲストが仲間と主神を探して回る。

「取り敢えずダンジョンの中に…あら？」

バーゲストがバベルの前の広場まで来ると、丁度バベルから見知った顔ぶれが出て来る。

ヘステイアとベル・クラネルにリリルカ・アーデ。依頼をしてきたヘルメスにアスフィ。恐らくバーゲストがいない間に仲間になったであろうヴェルフ・クロツゾにアルトリア・キャスターにタケミカヅチファミリアの面々。そしてリユー・リオン。

全員くたくたの様で、黒犬が近付いてくるのにも気付かない。

「どうやら、私がない間に色々あったようですね」

「え？…ば、バーゲストさんっ!?!」

「バーゲストくん！戻って来たんだね！」

ベルが驚き、ヘステイアが歓喜しながらバーゲストに飛びつく。慌ててキャッチしたバーゲストをギューと抱きしめる。

「本当に、良かった…！お帰り…！」

「…はい、只今戻りました、我が主神」

「バーゲスト様…本当に、本当に大変だったんですよ…！」

「リリ、ベルと一緒に居てくれてありがとう」

「バーゲスト様、お疲れ様です」

「ありがとう、リユーさん、なんだかベル達が世話になったみたいね」

「あー！おっほん！」

するとヘルメスが態とらしく咳込み、バーゲストに話しかける。

「バーゲスト君、先ずは生還おめでとう。君が無事に帰って来た事を

嬉しく思う…それで、クエストの方は…？」

「ええ、なんとか誰一人犠牲にせずに、アンタレスを討伐しました」
「そうかそうか！それは良かった！いやー、ベル君達も、バーゲストやアルテミス達も皆無事！一件落着だね！」

「ああ…という訳で、今から皆でご飯だ！タケも呼んで、パーティータイムと洒落込もうじゃないか！」

「あ、じゃありユーさんにお世話になりましたし『豊穡の女主人』に行きませんか？」

「ええ、私もそれで良いと思います」

「じゃあ、皆一旦帰って、『豊穡の女主人』で宴だー！」

（そういえば多分ロキ・ファミリアも『豊穡の女主人』で宴会じゃ…まあ、良いですか。ヘステイア様とロキ様が喧嘩を始めたら止めれば良いでしょう）

「ヘルメスー！バーゲスト君の件があるんだ、奢るんだぞー！」

「はいはい分かってるよ」

「あ、バーゲストさん！新しい仲間が増えたんですよ！」

ヘステイアがヘルメスから言質を取っているのを見ると、ベルがそう言っただけでアルトリアとヴェルフを連れて来る。

「ヴェルフ・クロツゾだ、よろしくな」

「ええ、よろしく…確かベルの防具の製作者だったかしら？」

「お、知っててくれたのか！ベルとは専属契約を結んだんだ。んでこっちが…」

「あ、アルトリア・キャスターです、よろしくお願いします…」

「ええ、あなたは…私が使っていた盾を作った人ね、よろしく」

「うわあ…」

「どうした、アル坊？」

バーゲストに対してタジタジなアルトリアにヴェルフが疑問を抱く。

「いや、話には聞いてましたけど、見て下さいよこの圧倒的に恵まれた肉体に丁寧な立ち振る舞い…！絶対良いところのお嬢様ですよ！私みたいな田舎育ちの村娘が、こんな人と専属契約を結べるんですか…」

!？」

「えつと…勘違いしてるようですけれど、私も田舎育ちの村娘よ。貴女と同じだわ」

「」

「あ、アル坊こりや少しダメだな…じゃあ俺たちは先戻りから、ベル！
リリ助！また後でな！」

「あ、うん！」

えつ、同じ村娘なのに…この差は…？と、表情が宇宙猫になってる
アルトリアをヴェルフが抱えて連れて行く。他のファミリアの面々
もいつの間にか居なくなっていた。

「ではお三方、リリも戻りますね。また後で」

「うん、また後でね」

リリルカも去って行き、いつの間にかハステイア・ファミリアの
面々だけになっていた。

「それじゃ、僕達も一旦ホームに帰ろうか」

「はい！久しぶりですね、神さまやバーゲストさんと一緒にホームに
帰るの」

「ええ…本当に…帰りましょう。私達のホームへ」

こうして、黒犬の物語の一頁は終了した。

これからは再び、主神や白兔、仲間達と共に更なる困難へと立ち向
かっていくだろう。

第十四話 知らない事

「……………」

無事にバーゲストがオラリオに帰還し『豊穡の女主人』で宴を楽しんだ翌日：色々あったので少し休暇を取ろうとホームでバーゲストのステータスを更新すると：

「えー…この度、おめでたい事にバーゲスト君がレベルアップした訳だけど…」

三人が囲む机の上の紙にはバーゲストのステータスが書かれていた。

バーゲスト

レベル2

力：10

耐久：10

器用：10

敏捷：10

魔力：10

アンタレス
天蠍：1

《魔法》

【チェーン・ハーディング】

・拘束魔法

・詠唱式【鎖は我が猟犬達、我が敵を捕らえる牙となれ】

【ブラックドッグ】

・召喚魔法

・詠唱連結

・通常詠唱の後に第二階位を詠唱出来る。

・詠唱式【黒犬よ、お前の爪と牙を以って我が敵の肉を喰らえ】

・第一階位Ⅰ【お前は大地を駆ける勇猛な黒犬だ】

・第一階位Ⅱ【お前は爪を振るう凶暴な黒犬だ】

・第二階位【しかしお前は未だ卵だ、その時まで眠れ】

・第二階位解呪式【目覚めよ】

【ブラックドッグ・ガラティーン^{捕食する}・ガラティーン^{日輪の角}】

・攻撃魔法

・詠唱式【この剣は法の立証、あらゆる不正を糺す地熱の城壁。跪け】

・妖精剣『ガラティーン』を所持している場合のみ使用可能

《スキル》

【太陽の騎士^{ガウエイン}（着名）】

・任意発動

・魔力を消費することで武器に炎を付与^{エンチャント}する

・魔力を消費することで炎を放出させる

【聖者の数字】

・日の当たる午前中において、力の超高補正

【ワイルドルール】

・自身に従う存在がいると全能力の補正

・従う存在が多いほど効果向上

・モンスターを倒す度に短時間、自然治癒力が上昇

・モンスターを倒す度に短時間、力に補正

【妖精剣・抜刀】

・自身の角（剣）を引き抜き妖精剣『ガラティーン』として使用する。

・必要に応じて自身の身体や装備品を拡大する。

・全ステータスに高補正

・自身に狂化付与

【魔力吸収】

・任意発動

・自身から半径30Mの指定した対象から魔力を吸い取る。

【天蠍の眷属】

・任意発動

・魔法【ブラックドッグ】の第二階位を使用した場合、卵の中身を

黒犬の眷属から蠍型の眷属にする。

・発展アビリティ『天蠍』のランクが高いほど蠍型の眷属のステータスが向上する。

「ナニコレ」

「私にも…その…分かりかねます…」

「あ、あははは…」

珍しく動揺しているバーゲストに、目が死んでるヘスティア。そんな二人を見て苦笑いするベル。

「冗談じゃないぞ…！何故か発展アビリティはこの天蠍アントアレスつてやつしか選べなかったし、魔法は三つ持つてるし、なんだよ妖精剣つて！君の角つて剣だったの!?初耳なんだけど！」

「神さま、落ち着いて…」

「これが落ち着いていられるか!」

(スキルは隠してるやつも含めれば合計で7つ…！ホントにレベル2のスティータスなのか、これ…!?)

ヘスティアはバーゲストの異常性を再確認し、頭を抱える。

「ヘスティア様…申し訳ありません…」

「!いやいや!バーゲスト君が謝ることじゃ無いよ!ごめんね、大声出しちゃって…にしても、何度見ても頭がおかしくなりそうだ…」

「スキルが6つに魔法が3つって、どう考えてもおかしいですよね…」

「魔法は仕方ないとして、スキルの事はあまり他の人に漏らさない様に。二人とも、良いね?」

「二分かりました」

「じゃあ今日はゆっくりしようか。僕もバイト休みだし」

「あ、でしたら私はアルトリアに会ってきます。鎧の修復を頼まなければいけないので」

「うん、分かった。気をつけてね」

バーゲストは壊れた鎧を布に包んで背負い、ヘファイストス・ファミリアに向かった。

「すみません、わざわざ私が使っている工房まで来てもらって」

「いえ、頼んでいる身なのですから、これくらいは当然です。あそこが？」

「はい、まあ、工房というか…私の家でもあるというか…とにかくどうぞ、入ってください！」

バーゲストはアルトリアに促されて工房に入ると、その中には鍛冶に使う道具や炉の部屋と区切られる様に障子戸で区切られていた。

「今、お茶を出しますね。その部屋にどうぞ」

「ええ…」

バーゲストはもう一つの部屋に入りると、その部屋は畳が敷き詰められてらおり、座布団や囲炉裏、畳まれた布団などがあった。

「この部屋…極東式なのね」

「ええ、元々は私と、私を拾ってくれた人と二人で住んでました」

「その方は極東の方だったのかしら？」

「はい、村正って言って、私は小さい頃、彼が鉄を打つ姿を見て育ちました」

（もう驚きませんわよ…）

ペペローンナやアルトリアが居る以上、自分の知っている Fate のキャラが出ようと驚かないことにしたバーゲストである。

「村正が亡くなってから、ファミリアのホームに住む事も考えましたが、村正にとっても大事な場所だったでしょうから。ヘファイストス様にお願ひして此処に住んでるんです」

「…亡くなった…ですか…」

「はい…七年前の、イサイルス闇派閥との大抗争で」

「…多くの人が亡くなったとは、聞いています」

「そうですね…私はまだその時は子供でしたけどけれど…はい、お茶です。終わるまでゆっくりしてください」

アルトリアはそう言って部屋を出る。少しすると、作業をしている

音が聞こえ始めてきた。

(…ペペローンナ、アルトリア、そして村正…ここまで来ると原作とは何か違う点があるかもしれないわね…)

そんな事を考えながら、バーゲストはのんびり作業が終わるのを待つのだった…

「ふう、良い仕事しました〜！」

「ええ、完璧な仕上がりよ。ありがとう、アルトリア」

「いえいえ。あ、それとバーゲストさん用に作った盾！お渡ししますね」

アルトリアはそう言って工房の隅にあった丸型盾を持ってくる。

「前のより大きいわね」

「ベルさんからバーゲストさんはかなり身長が高いから、少し大きめに作りました。前と同じで腕に巻き付けて固定するタイプですから、魔法を使う時も邪魔にならないと思います」

「ありがとう…直接契約を結んだ訳なのだし、これからもよろしくね」「はい！」

二人は握手を交わし、そこで別れるかと思いきや…

「あ、私レベルアップしたのギルドに言わなきゃ」

「あら、私もそれを言わなければいけませんでしたわね」

…二人でギルドに行く事になった。

「バーゲストさん、凄く驚かれましたね…」

「ええ…まあ、流石にアレ天蠍を倒してレベルアップ出来なかったらちよつとおかしいもの」

エイナにレベルアップの事を伝えると「大体ベル君と同じくらい…

!?!二人とも揃って早過ぎます…！」と凄く驚かれた。

「じゃあ、今度こそお別れですね…また会いましょう！」

「ええ、また」

ギルド本部前で今度こそバーゲストとアルトリアは別れ、それぞれの帰る場所に向かった。そして…

「で、何で帰って来たらロキ様とフィン団長とリヴェリア殿が居るのですか？」

何故かヘスティア・ファミリアのホームにはロキとフィンにリヴェリアが居た。

「こつちが聞きたいくらいだよ！やいロキ、僕たちのホームまで来るなんて、昨日みたいにコテンパンにされたいみたいだね！」

「はあ？コテンパンにされたのはそつちやろがい！昨日の決着、ここですつてもええんやで!？」

「やめろロキ」

「ヘスティア様、落ち着いてください」

昨日の宴の時と同じようにリヴェリアとバーゲストがそれぞれの主神を抑える。するとフィンが喋りだす。

「バーゲスト、怪物モンスターファミリア祭の時に戦ったモンスターの事を、覚えているかな？」

「あの植物のモンスターですか、それが何か？」

「それで今回、ある情報から港町メレンで調査することになったんだけど」

「バーゲストたんも行かん？」

「行かないよっ!!」

ロキが誘った瞬間、ヘスティアが即拒否する。

「大体、何でバーゲスト君を誘うんだい！何も理由も無いだろう!？」

「いやいや、バーゲストたんもうこの事に関してはバリバリ関係あるし、それにうちも港町メレンに行くのは女子だけやからな。ベート同じでバーゲストたん鼻良いからな、調査に向いとるやろ?」

「だったら【凶狼】ヴァナルガンドを連れて行きなよ…」

「いやー、ベートはオラリオに残すって決めたから、な！ええやろ？」
「良くないよ！」

「ドチビじゃないわ！バーゲストさんに訊いとるねん！」

「一柱がバーゲストの方を向いてどうするのかと訊いてくる。」

「別に行っても良いのですが…」

「ええ!?バーゲスト君、昨日オラリオに帰ってきたばかりなんだよ!」

「今回は直ぐ近くにある港町メレンですし、私もあのモンスターの事は気に
なりますので」

「ぐぬぬ…」

「じゃあ決まりやな、そんなじゃあ明日の朝、オラリオの入り口で集合
な。じゃあ帰んで、二人とも」

「ああ、お待ちください。ロキ様」

要件が済んだので帰ろうとするロキ達をバーゲストが呼び止める。

「どしたん？」

「よろしければ、夕飯はここで食べていきませんか？」

「ええ!?バーゲストく「マジで!?食べる食べる!」おいロキィ!少しは
遠慮しろおー!」

「丁度買い出しに行こうと思っていたので…それでも良ければ」

「あ、じゃあ僕も行きます！」

「ええわええわ!ウチはバーゲストさんの料理食べてみたい!」

「ロキ…流石にそれは…」

「えー、良いやろ別に…待ってる間はどちビで時間潰せばええし」

「おい!」

「では、買い出しに行ってくるのでお待ちください」

バーゲストはベルと共に買い出しに行ってしまった…

「…さて、待ってる間に話してこか」

「…バーゲスト君の正体について、だろ」

その場にいる全員が真剣な表情で話し始めたのは、ロキ達も最近気
になっている、バーゲストの正体についてだった。

「どちビ、バーゲストたんが何者なんか、お前は知つとるんか？」

「さあね…僕だつてバーゲスト君には驚かされてばかりだ。分かっているのは優しい子だつて事だけ、それ以外はさっぱりさ」

「ふむ…彼女に関して気になる事があれば、教えていたただきたいのですが」

「気になる事?」

「例えばあの角…アレは引き抜くと剣になり、バーゲストは凶暴になつてしまう…あの角に関して情報は?」

「…あの角はバーゲスト君の理性そのものらしい。引き抜くと巨大化も出来るつて、本人から聞いた…それとステイタス更新したら、あの剣の名前も分かった」

「名前?」

「妖精剣『ガラティーン』それがあの剣の名前だ」

「妖精剣…妖精?! バーゲストたん妖精と関わりがあるんか!?!」

「本人は妖精に会った事は無いつて言つてたから、彼女が赤ん坊の頃に何か仕込まれたのかもね…それと、最近までバーゲスト君が依頼でオラリオの外に居ただろう?」

「あー、ヘルメスから聞いたで。アンタレスとかいうヤバイモンスターを倒したんやろ?」

「そう、それで今朝バーゲスト君のステイタスを更新したらレベルアップが出来てね…」

「はあ!?!」

バーゲストがレベルアップしたと聞き、三人は驚愕する。

「…どチビ、ホンマに不正とかしとらんのか?」

「してないよ!」

「いやいや、【リトル・ルーキー】といい、バーゲストたんといい…お前の眷属成長早過ぎやで…」

「僕だつて驚いているさ!」

「まあ、アンタレスとやらがそれほどのモンスターだというなら納得は出来る」

「そうだね…それで、その事で何か分かった事が?」

「あまりステイタスの事は話したく無いんだけど…バーゲスト君の発

展アビリテイが一つしか選べなかった」

「何やそれ…それで、その発展アビリテイっちゅうんは？」

アンタレス
「…天蠍」

「…っ!?」

「この事をバーゲスト君に聞いたら、それはびつくりな解答が帰ってきてね…バーゲスト君はアンタレスとの戦いで角を引き抜き、アンタレスを瀕死まで追い込んだ後…アンタレスの頭を食べたって」

ヘステイアが暗い顔でそう話すと、ロキ達は少し考えた後、ヘステイアに声を投げかけた。

「アンタレスの魔石は食ったんか？」

「?いや、食べたのは頭だけだって言ってたよ？」

「…二人とも、どう思う？」

「まだ判断し辛いね、モンスターを食べる冒険者なら、昔一人いたし」
クリーチャー
「怪人は魔石を食べると聞いている。一先ずは保留という事にしてはどうだ？」

「せやな、^{メレン}港町に一緒に行くついでに何か分かればええんやけど…」

「えつと…?」

「すみません、神ヘステイア。私達は最初、バーゲストの正体は怪人
クリーチャー
なんじやないかと思っていたんです」

「怪人…?」

「はい」

そこからヘステイアはロキ達にレヴィスという怪人^{クリーチャー}が自分達と敵対しているという事を話した。

「つまり…君達はバーゲスト君を疑っていた…?」

「ああーそんな怒らんといてや。バーゲストたんはめっちゃ優しい子やって、ウチらも分かってんで?けど、アイズたんの事もあるし…それになあ…」

「…何さ」

「…フレイヤから言われたねん、バーゲストとの接触は慎重になって」

「フレイヤが?」

「どうもあの色ボケ女神も、バーゲストたんの事を気にしとるらしい

わ。アイツがわざわざ忠告してくるとか、絶対なんかあるやろ?」

「…バーゲスト君の…正体…」

妖精剣の事、アンタレスを捕食した事。バーゲストに関する様々な疑問がヘスティアに降りかかる。

「まあ、これ以上はもう良いだろう。あの角がどんなものか分かっただけでも収穫はあった」

「そうだね、バーゲストに関してはこれから調べていけば良さ。それに…丁度時間みたいだしね」

「ただいま戻りました」

「沢山買って来ましたよ、神様!」

「おー、お疲れ!…さてさて、後はバーゲストさんの料理を楽しむだけやな!」

「ふふ、今日は腕によりをかけて作らないといけませんわね」

バーゲストは直ぐにエプロンを着けて調理を始める。

「エプロン姿のバーゲストたんもええなあ…」

「おい」

美味しいそうな匂いが漂い始め、やがて料理が出来上がる。

「うひょー!…どれも美味しそうやなー!」

「遠慮せずに、どうぞ」

「ほな、いただきまーす!!」

ロキが最初に食べ始め、続いてフィンとリヴェリアが口に運ぶ。

「ほう…これは」

「見事なものだね…」

二人がバーゲストの料理を賞賛していると、ロキが震え始める。

「ロキ様?…どうかしましたか?」

ベルがロキに呼びかけた瞬間…

「美味ああああああああい!!」

「ロキ、叫ぶな」

「いやいや、美味すぎやろこれ!はあー、バーゲストたんますますうちに欲しくなったわあ…」

「やらないからね」

「お願いしますお義父さん！娘さんをウチにくださいい！」

「誰がお前なんかにやるか！後、誰がお義父さんだ!?」

「ちえ、まあええわ。港町^{メレン}でバーゲストさんと存分に楽しんだる…！」
「いい加減しろ」

いつもより騒がしくなった（大体ロキのせい）ヘステイア・ファミリアの食卓。そんな中、ヘステイアの表情は少しだけ暗かった。

「はあ…ロキめ、何度もバーゲスト君を勧誘しおって…」

「あはは…それだけバーゲストさんが魅力的な人なんでしょうね」

「それは分かるけどさー…」

ロキ達が帰り、いつも通り三人だけになったホームで、ヘステイアは考えていた。

（バーゲスト君が何者か…なんて、僕には何にも分からないよ…）

ヘステイアにとつて、最初にバーゲストを誘ったきっかけはベルの為、だった。そこからバーゲストの事を知り、やがてベルと同じくらいにかけがえのない存在になった。だが…

（僕はバーゲスト君に何もしてあげられてない…バーゲスト君の事をよく分かってないし…バーゲスト君に助けられてばかりだ…）

日常生活、ベルの事、アルテミスの事…ヘステイアはバーゲストに對して多大なる恩がある。

（…僕って、バーゲスト君の主神に相応しいのかな？）

ヘステイアは徐々にバーゲストに對する罪悪感を募らせていた。就寝に入り、他の二人が眠っている中、ヘステイアはベッドの上で考え続ける。

（ロキの所とか、アストレアの所とか…バーゲスト君は僕の眷属にな

るより、もつと別の道があつたんじや…バークスト君を僕の我儘で入
団させて…今も迷惑をかけ続けている…僕は…)

結局、その日ヘスティアは、あまり眠れなかった。

「ん…んく…うわつ、ヤバい！」

翌日、ヘスティアは目が覚めると慌ててベッドから起き上がる。

「あ、神様。おはようございます」

「おはよう、ベル君！それに…あれ、バークスト君は？」

部屋を見渡してもバークストの姿は見当たらず、机の上にはバーク
ストが作ったであろう朝食が置かれていた。

「バークストさんならもう出て行きました。僕が起きた時にはもう鎧
に着替えてて…」

「—そっか…もう、行っちゃったんだ…」

「神様…？どうかしましたか？」

「…いや、何でもないよ！それより僕も早く行かないと。よし、今日
も頑張るぞー！」

そう言ってヘスティアは洗面台の方に向かっていった。ベルから
は見えなかったが、その時の表情はあまり良いものとは言えなかつ
た。

顔に水をつけて洗い、ヘスティアは顔上げると、水に濡れた自分の
顔が鏡に映る。

「…『良い眷属と巡り会えたな、大事にするんだぞ』か…アルテミス…
僕、どうすれば良いかな…？」

「あ、バーゲストだ！おはよー！」

「テイオナ。ご機嫌よう、今日からよろしく」

「うん！」

バーゲストが集合場所に来ると、ロキ達が既に到着していた。

「それにしても…見事に女性しかいませんわね…」

「そうなんだよねー、ロキに訊いてもずっとしらばっくれるし」

バーゲストが周囲を見渡すと、港町メレンに行くロキ・ファミリアの面子は見事に女性しかいなかった。

「よーし、バーゲストたんも来たし、皆揃ったなー？じゃあ出発しよか。港町メレンに!!」

バーゲストはロキ・ファミリアと共に港町メレンで何を体験するのか。

ヘスティアのバーゲストに対する悩みはどうなってしまうのか。

今、新たな冒険が、幕を開ける。

第十五話 真の楽園と中層ダイジエスト

前回、食人花ヴァイオラの調査に誘われたバーゲストは、ロキ・ファミリアの女性面子と共に港町メレンを訪れていた。

「うわあー、久々に来たー!」

「本当、何年振りかしら?」

「ダンジョンに入るようになってから、全然来てなかったねー!」

「いつ見ても、綺麗な景色ですね:オラリオのすぐ近くにあるのに、私、全然縁が無くて:」

港町の景色を早速楽しみ始める面々、初めて来るバーゲストもその例に漏れず、というかロキ・ファミリアの皆より辺りをキョロキョロ見渡していた。

「近いって言っても、あの大きな市外壁のせいでオラリオからは望めないし、縁が無いのは仕方のない事じゃない?」

「海と通じる巨大な汽水湖:ロゴグ湖の湖岸沿いに栄えるこの街は、オラリオにとって事実上の海の玄関です。連日数え切れない船が入港し:異邦の人々と外国の品々で溢れかえり、賑わっています」

アリスアの説明を聞きながら、一行は店が立ち並ぶ区間に足を運ぶ。

「わっ、この巨黒魚ドドバスでっかー!都市でも売られてるけど、ここまでおっきいの初めて見た!」

「鱗もモンスターみたいに発達してますねー。モンスターから身を守るためにこうなった、って聞きましたけど」

「そういえば、レフィーヤも海からオラリオに来たんでしよう?」

「はい、そうです。まだ学生の時は、友達と一緒に港町をよく散策してました」

「じゃあ、料理が美味しいお店とか知ってる?後で連れてってよー!」

ティオナ達が港町メレンの街を楽しんでいる中、バーゲストとアイズは黙々と街並みを眺めている。

(此処が港町メレン:潮の香り:こっちの世界じゃ初めてね:それに:あん

なに綺麗な湖も、いつ振りかしら…)

「どうした、アイズ、バーゲスト？嬉しそうだが、お前たちも興奮している口か？」

少し楽しそうな二人を見てリヴェリアが声をかける。

「…リヴェリアは、この街に来たことがあるの？」

「そうだな。オラリオに入る前も含めて、数えるほどだが。森で暮らすエルフ達の中にはこの潮の香りが苦手だと言う者も多いようだが……私は好きだ」

リヴェリアはそう言つて湖を眺める。

「あの窮屈な里には無い、この青い景色を目の当たりにした時、それは感動したものだ…バーゲストはどうだ？初めて見るのだろう、この景色は」

「…ええ、とても素晴らしいわ…誘つてくれたロキ様には感謝しなければいけないわね」

「そうか、それは良かった」

「ほら、きよろきよろせんと進むでー！海が、いや湖がうちらを呼んどるー！」

「何言つてんのよ…そつちが無理矢理連れてきたんでしよう。女性^{私達}団員だけを！」

女性団員しか連れて来なかったロキに対してティオネは不満があるそうだ。

「本当に私達だけで来ちゃったし…あくん、団長…」

「あははは…」

フィンと来られずに残念がつているティオネ。そして一行はロキについて行くと港に到着する。

「さーて、港におるとは思うんやけどな…お！皆、あっちゃー！」
誰かを探していたロキは目的の人物を見つけると、一行を連れてその人物…もとい神の元へ向かう。

「おーい、ニョルズー！」

「ん？ありや、ロキ！何年振りか？前に会ったのはつい最近のように感じられるが」

「神々の尺度やと数年なんてあつという間やからなあ。いや、たまには顔出そうと思つてたんやで？ほんまほんま」

「ウソつけ、このヤロウ。リヴェエリアも元氣そうだな。お前たちの評判は、市壁の内側から毎日聞こえてくるぞ」

「あまりおだてないでくれ、ニヨルズ。名声なんてものは、えてして誇大になるものだ」

「……リヴェエリア様、こちらの男神様おがみをご存知なんですか？」

ロキとリヴェエリアと仲の良さそうなニヨルズに関して、レフィーヤがリヴェエリアに質問する。

「オラリオに入る前に、色々世話になつてな。ロキは天界から交友があるそうだが。オラリオに海産物を恵む、ニヨルズ・ファミリアの名前は、お前たちも聞いた事があるだろう」

「ああ、言われてみれば……」

「ニヨルズ・ファミリアは大海に出て漁をする漁業系の派閥だ。このメレンで漁のほとんどを彼等が担っている」

「へー、そうなんだー！」

「で、どうしたんだ？いきなりこんな大所帯で押し寄せてきて。フィンやガレスはいないみたいだが……ん？」

ニヨルズが一行の面々を見渡していると、ふとバーゲストに目が留まる。

「ロキ、その角が生えてる嬢ちゃんって、もしかして【凶ヴァナルガンド狼】をボコしたつて噂になつた……」

「ああ、この子な。バーゲストたんつて言うねん、ウチのファミリアの子やないけど、今回ちよつとついて来てもろた。にしてもバーゲストたんつてやつぱ目立つな……」

「そりや、デカくて角が生えた人物なんて目立たない訳ないだろ…話が逸れたな、用件は？」

「実は調べ物ついでに慰安旅行中でなく、『息抜き』のために、ちよつと教えてほしい事があるんや。自分、当然こちら辺の地理には詳しいんやろ？そこでやなあ……」

そこでロキはニヨルズと何かヒソヒソと話し始める。

「なんか、凄いヒソヒソ話してますけど…」

「私はそれより、ロキが持参しているあの大荷物が気になります…」

少しすると話し終わったロキはニョルズが離れる。

「よし！楽園の場所は分かった！サンキューニョルズ！さあ皆、行くぞー！」

そう言っつてロキは何処かを目指して歩き始めた。

「なんだろう…」

「いい予感はないな…」

「楽園とは…？」

女性団員達は嫌な予感がしながらもロキについて行くのだった…

ロキに連れられ歩き続けると、やがて白い砂浜にたどり着く。

「すごいー！白ーいー！」

「港か岩場だけだと思ってたのに、こんな浜もあったのね…」

「綺麗…」

皆が白い砂浜に目をキラキラさせていると、ロキが大荷物を取り出す。

「準備は整った！さあ、アイズたん達——これを着るんやー！」

『こゝ、これは…！』

大荷物の中に入っていたもの…それは——！

「来たアアアア！うちの可愛い子供らの『水着姿』キタアアアア！！」

なんとアイズ達に用意した水着だった！

「メレンにきた理由、こつちが本命でしょ…？」

「18階層で、何回も水浴びしましたけど…」

「この水着を着た分、なんだか、逆に恥ずかしいです…」

「人数分の水着を、ここまでずっと一人で運んでいたのですか…！」

なんと恐ろしい、この神、まさかこの為だけに女性団員を連れてきたという。水着を着て顔を赤らめている女性団員達を見てロキは興奮しっぱなしだ。

「うおーっ！うほおーっ！最高やー！太陽の下で輝く眩しい肢体、ここが真の楽園やー!!」

そう言つて団員一人一人の水着を堪能するロキ。しかしふとある事に気付く。

「あれ、リヴェリアとバーゲストたんはー!?うちの可愛いリヴェリアと可愛いバーゲストたんはどこやー!?」

リヴェリアとバーゲストがいなくなっているのである。勿論ロキは二人にも水着を渡しており、非常に楽しみにしていたのだが…

「リヴェリア様は、あっちの岩陰で、水着を持ったまま固まっています…」

レフィーヤが指差す方向には岩陰で水着を持って目の光を失ったまま固まっているリヴェリアの姿があった。

「え〜！リヴェリアの水着姿見たい〜！こうなったら、うちが直接着替えさしたる〜！」

そう言つてリヴェリアの元へ走り出そうとするロキをレフィーヤとアリシアのエルフ組が取り押さえる。

「待ちなさい！」

「リヴェリア様にそんな事させません！」

「うわっ、やめるんやー！痛いー！……でゆふふ、しかしほんまオツパイ大きくなつたなあ、アリシアもレフィーヤも」

ロキがそう言うのと二人はバツ！とロキから距離を取る。

「ぎ、気持ち悪い…」

「なんておぞましい生物…！」

「割と本気でドン引きしてる、潔癖症のエルフの皆さん…」

「気持ちは少し…いえかなり、分かりますけど…」

するとそこへアイズもやって来る。

「…私も、恥ずかしい」

「!?あ、アイズさんの、水着姿…！」

「わあー、やっぱりきれー！アイズ、似合ってるよ！」

「そういう問題じゃないんだけど…ティオナ達は…恥ずかしがる筈ないわよね…」

普段から肌の露出が多いアマゾネスの二人は他の団員と違って平常運転だった。

「別に、ねえ？減るもんじゃないし」

「何時も着てるのとあんまり変わらないし…ていうか、バーゲストは？」

リヴェリアの姿は確認出来たが、バーゲストは居ない、皆がバーゲストを探そうとすると…

「お、お待たせしました…」

「あ、バーゲストさん！遅かったですけど、何かあり…」

レフィーヤはバーゲストの姿を見た瞬間、言葉を止めてしまった…「えっと、この様な装いは初めてですから…少し手間取ってしまい…何か変なところは無いかしら？」

バーゲストの水着は上下共に黒。アナキティが着ている物と同じ様な水着に、少し透けている黒いパレオを腰に巻いている。

「あの、皆さん…？」

「うわー…なんていうか、バーゲスト…うん…やっぱり大きいからかな…？」

「確かに…水着で改めて見ると、あのサイズは反則よね…」

「……大きい…」

「エロいわね」

「ティオネさああああん!？」

「うんうん、ちよつとエツチだよね」

「ティオナさああああん!？」

全員が感じていた事をあつさりと言ってしまったアマゾネス二人に対してレフィーヤが悲鳴を上げる。

「取り敢えず！良く似合ってるよ、バーゲスト！」

「なんでしよう、嬉しいような嬉しくないような…ロキ様？」

ふとバーゲストがロキの名を呼び、そう言えばこんなバーゲストを

目の前にしてあの変態静かだなど、ロキ・ファミリアの面々もロキを見るとき……

「……………」

ロキは腕を組みながらバーゲストの水着姿を真剣な表情で見ている。すると……

「…ブハッ」

鼻血を噴いて倒れた。

「ロキ様ああああ!?!」

バーゲストが倒れたロキに慌てて駆け寄る。

「ロキ様!しつかりしてください!」

バーゲストたん…うち、死ぬならバーゲストたんのオツパイに埋もれて死にたい…」

「何の話!?!」

「うち、初めて筋肉に興奮したわ…」

「だから何の話ですか!?!」

「高身長…爆乳…美人…お淑やか…嫁力高い…筋肉…属性てんこ盛りやな…」

「ちよ、ロキ様!?!ロキ様ー!!」

鼻血を流しながら気絶するロキ、そんなロキに必死に呼びかけるバーゲストと、ロキに呆れるロキ・ファミリアの面々だった…

「はあ、眼福やく。海やないけど水着に可愛い女の子…ぐふふつ、最高の組み合わせやく。それに、今ならバーゲストたんの膝枕もついて来る!」

「分かりましたから大人しくしてくださいまし…」

鼻血を噴いたため一旦大人しく休む事にしたロキは、現在布の下敷きの上で日の光をビーチパラソルで防ぎながらバーゲストに膝枕さ

れていた。

「いや、ここから眺めるバーゲストたんの下乳も圧巻の迫力やで〜」
「縛り上げててもよろしくてよ?……そういえば、何故私の服のサイズを知っていたのですか?」

「ん?ああ、ペペに頼んだら一発やったで」

(ペペ殿……)

バーゲストの脳裏に「テヘペロ☆」と言っているペペロinnaの姿が浮かんだ。

「……けど、ホンマにええんか?うちは大丈夫やからバーゲストたんも行って来たらどうや?最近、アルテミスの増援に行って忙しかったやろ?」

「いえ、私は……」

「:何や?バーゲストたんもしかしてアイズたんと同じでカナヅチなんか?」

「そういう訳では無いのですが:私は、こうしてロキ様と一緒に楽しんでる皆を見ているでも充分楽しめています」

「……」

「……ロキ様?」

アイズが泳げる様に特訓している姿を眺めてバーゲストが微笑みながらそう言うのとロキは黙り込む。バーゲストは自身の胸でロキの表情が見えないため呼びかけると……

「——ウチって、バーゲストたんとは結婚してたんか……」

「は?」

「いや、何でも無いわ、忘れてくれや:ふう:さあて!バーゲストたんの膝枕も堪能したことやし!皆も水遊びを楽しんでる事やし!そろそろ本題に移るかー!」

「湖底の穴の調査ですか?」

「せやでー!バーゲストたん、そっちにある水中専用武器コーベル・エッジ持ってきて〜!」

湖底の調査は『ウインディーネ・クロス』を使った水着を着ており、発展アビリティ『潜水』を持つティオナとティオネが行うことになっ

た。

「…あの、今更なんですけど、ティオナさん達だけなら、私達が水着になる必要無かつたんじゃ…」

「……うおー、行けー、ティオナティオネー！頑張れー！」

「き、聞こえてないふり…」

「我が主神ながら酷いわね、本当に……バーゲストもごめんね、巻き込んじゃって…」

「いえ、お気になさらずに…」

皆でティオナとティオネが戻って来るのを待っていると…

「あ、あれは……！」

湖の中から食人花の触手が大量に現れ、近くにあったガレオン船を襲い始める。

「船が襲われています！無数の触手が船体に巻き付いて…まさか、食人花!？」

「あんな触手プレイ、あのデカイガレオン船でもひっくり返されるで！急いで救助ゴや！」

「ここからじゃ間に合わない……！ティオナ、ティオネ……！」

水中ではティオナとティオネがガレオン船に向かう食人花を倒し続けていた。

「やばっ、一体仕留め損ねた……！」

「まずい、船に……！」

仕留め損ねた食人花が水面から飛び出し、ガレオン船に向かうが…

「！鎖!？」

飛び出した瞬間に何処からか伸びてきた鎖が食人花に巻き付き、動きを止める。すると…

「ガッツッ……!？」

「なっ……!？」

ティオナ達が攻撃する前に、食人花は灰になった。

「なにつ、なにになに!?!何が起きたの!?!」

「ガレオン船が誰かが飛んで、誰かを仕留めた……!?!」

二人は水面から顔を出し、ガレオン船を見上げると、ガレオン船か

ら二人を見下ろす二人のアマゾネスの姿があった。

「…リヤガ・ル・ジータ……テイ・ヒリユテ」

「!!…うそ、バーチエ…?」

「———久しい顔がおる」

「!？」

二人が驚いていると、ガレオン船の上から更に二人を見下ろす神の姿があった。

「異邦の国で、まさかいきなりお前たちと巡り合うとは思わなんだ。まさに下界とは神より気紛れよ。それともこれこそが、神と眷族の運命か？」

その神はテイオナとテイオネを見て笑いながらそう言った。

「カーリー…!」

そんな神…カーリーを見て、テイオネは忌々しげにそう呟いた。

「はあ…」

神ヘステイアは悩んでいた。自分って、バーゲストに迷惑かけてばっかでお礼も何も出来て無くてね?主神としてヤバいんじゃないかね?と言った悩みである。

「今日のバイトも失敗ばかりだったなく…その所為でヘファイストスから『今日はもう帰りなさい』って言われちゃったし…明日からもこんな気持ちで、一体僕はどうすれば良いんだ…」

ため息を吐きながらトボトボと歩き、辺りをぶらついていると…

「あら、ヘステイア様じゃない!」

「ん?おー、ペペローンナ君、それに…アストレアも。久しぶりだね」
ヘステイアは声をした方を向くと、ペペローンナとアストレアがお

茶をしていた。

「ええ、久しぶりね。ヘステイア」

「ヘステイア様も良ければどうかしら？ なんだか余り元気が無さそうだし」

「あー…やっぱりそう見えるかい？」

「何か悩みがあるのかしら？ 私達で良ければ、話を聞かせてちょうだい」

「…そうさせてもらうよ…」

ペペローンナの奢りで、ヘステイアも参加する事になったのだった。

「さて、早速本題に入りたいところだけど…ヘステイア様を元気にするのが先かしらね？」

「そうね、まずは最近の事を話し合いましょうか？」

「あら、それなら！ ヘステイア様って最近「リトル・ルーキー」を助ける為にダンジョンに潜ったんですって？ さっきアストレア様から聞きましたよ」

「うぐっ…その、アストレアのこの子には世話になったね…」

「ふふっ、良いのよ。リユーが自分で行くと決めたのだし、それで、その話とても興味があるわ。リユーからはまだ聞けてないし、良ければヘステイアから聞かせてくれないかしら？」

「あー…僕もベル君から聞いた部分もあるし、それでも良ければだけど…」

ヘステイアは、ベル達の中層初攻略に関して語り始めるのだった…

最初は順調だったそうだよ、四人パーティーで火力も案外足りてたらしい。

「上出来じゃないか？」

「うん、全然歯が立たない相手じゃ無い。ヘルハウンドの火炎攻撃も、アルトリアさんが対処してくれるし」

「今回は遠距離に専念するので、バッチリ援護します！」

けど、アルミラージが大量に出て来たところから雲行きが怪しくなってきた、その後にはタケのところの子から怪物贈呈を食らってね…

「リリ、大丈夫!?!」

「はい…」

「ヴェルフも平気!?!」

「ああ、なんとかな…」

「馬鹿言わないでください！思いつきり怪我してるじゃないですか！」

「その様子だとアル坊も平気だな…」

その後も挟み撃ちでモンスターは次々と押し寄せて来て…

「なんでこう中層つてのはモンスターがやって来るのが早いんだ…！」

「中層…だからでしょう」

んで最終的に、上からのモンスターの奇襲でダンジョンが崩落して、ベル君達は二階層も下に落ちてしまったんだ。

「ぐっ…！皆!!」

「私は…大丈夫です…」

ベル君とアルトリア君とサポーター君はなんとか無事だったけど、ヴェルフ君がその時に足を怪我しちやっつてね…

「大丈夫?」

「ああ、すまん…」

直ぐにヘルハウンドが炎で攻撃してきたけど、アドバイザー君のお陰でベル君達は『サラマンダー・ウール』を装備してたから、なんとかその場を凌いだんだ。

「アルトリアさんも、さっきから一人で戦ってますけど、大丈夫ですか…?」

「大丈夫です。まだ魔力の籠ったナイフも何本かありますし…それよ
りベルさんはヴェルフの事をしっかり引き連れてあげてください」

ベル君がヴェルフ君を支えながら移動してたから、消去法でアルトリア君がメインで戦う事になったんだ。

「敢えて下の階層…18階層まで進む手があります」

「18階層…セーフティ・ポイントですか」

「はい、あくまで選択肢の一つですが…」

その後はベル君の判断で18階層を指す事になって、縦穴を使ったり、サポーター君のアイテムを使ったりで、なんとか凌いでいたんだけど…

「リリ！ヴェルフが…！」

「！リリさん！」

ヴェルフ君とサポーター君が倒れてしまっただけ…

「…ベルさんはヴェルフを運んでください。リリさんは私が運びます」

「え、けどリリの背負っているバックが…」

「仕方ありません、荷物は捨てます。命には変えられません…ヴェルフの大剣も捨てて行きましょう」

「わ、分かりました」

そんな感じでベル君はヴェルフ君を、アルトリア君はサポーター君を抱えて17階層に突入した。

18階層に向かう途中で丁度ゴライアスが出て来てね…けどそのままなら間に合いそうだったんだけど…

「ぐあっ!？」

「っ、アルトリアさんっ！」

アルトリア君も大分無茶していたからね…18階層への道を直前に転んでしまったんだって。咄嗟にサポーター君を投げて、サポーター君はそのまま18階層に転がっていったらしいけど…

「待っててください、今助けに…」

「私に構わないで！行ってください!!」

「っ!？」

そう叫んだアルトリア君の顔は、とても辛そうだったって。ベル君の頭には色んな事が過ぎたらしいよ？

(バーゲストさんがいれば…！いや、僕がもつと強ければ…！アルトリアさん…！)

その少女は言っていた、バーゲストと会うのが楽しみだと。その少女は言っていた、バーゲストと会うのが楽しみだと。

(——そうだ、二人はまだ出会っていない…！アルトリアさんの為にも、バーゲストさんの為にも、絶対、見捨てたり…しないっ!!)

少年は咄嗟に、抱えていた鍛冶師を18階層に続く穴に放り投げる。そして少女が転んだ際に手放してしまった魔力の籠ったナイフを拾い、少年の右手に無意識に光が宿る。

ベル君はその時、ある騎士の姿を思い出していたらしい。夢で会った、湖の騎士の姿を。

鐘の音が響き、少年の持ったナイフに光が宿る。少年は刃を、少女に迫る巨人の手に振るった。

指が軽く切れた程度、巨人は気にせず腕を伸ばし続け…

瞬間、切られた手が爆発した。

「ウオオオ…!?!」

巨人の右手は吹き飛び、指が周囲に飛んでいく。それは、魔力を放つのではなく、切った箇所を魔力を込め、それを爆発させた攻撃。

「今だっ!!」

何故そんな事が出来たのか少年には分からない。考える暇も無い。巨人が見せた一瞬の隙を狙い、少年は少女を抱えて走る。そして…穴に飛び込んだところで、少年の意識は途絶えた。

「つてな感じで、ベル君達はその後ロキ・ファミリアの面々に保護されただ。ベル君は眠ってる間にまた湖の騎士と夢の中で戦った。なんて良く分からない事言ってたけどね」

「あら、私は気になるわ、その湖の騎士…今度【リトル・ルーキー】に会いに行こうかしら?」

「そうね…とにかく、皆無事で良かったわね」

「うんうん！それが何よりだよ！あの後は、リヴィラの街に行ったり、ベル君がヘルメスに唆されたり、他の冒険者がベル君を襲ったり、黒いゴライアスが出てきたり大変だったけど!!」

「ふふ、大変そうだったけど、なんだか楽しそうね…私も機会があれば一度18階層まで行ってみようかしら」

「あらあら、正義の女神様がそんな事言っても大丈夫なのかしら？また18階層で異変が起きたらどうするのよ」

「そうね…けれど私も、偶には自分の手で花を贈りたいのよ…彼に…」

「…彼？」

「ええ、18階層にはね、私の子のお墓があるの…アリーゼ達を守ってくれた、大切な子の墓が…」

「…【無限の剣製】ね…懐かしいわ。彼には色んな人が助けられたもの…」

「…」

「なんだかしんみりしちゃったわね。それより！結構ヘステイア様の元気も出て来た事だし！そろそろ本題いっちゃいましょうかっ！」

「そうね、ヘステイア。話してくれないかしら」

「うん…僕、実は自分の子の事で悩んでるんだけど…」

第十六話 カーリー・ファミリア

「自分がバーゲストの主神に相応しいか不安？」

「そうなんだよ…」

ヘスティアは現在ペペローンナとアストレアの二人にバーゲストに関して相談していた。

「バーゲスト君が僕のファミリアに入ってくれてから、ベル君は凄く強くなった。きっとベル君自身の成長の速さもあつたけど、バーゲスト君のお陰でベル君は自分の夢に真っ直ぐ進めるんだ…けど…」

「そんなバゲ子ちゃんに対して罪悪感がある、ね…」

「そう！僕はベル君の為にバーゲスト君を自分のファミリアに入れたけど、バーゲスト君だつて僕の大事な子供なんだ！だつてのに…僕はバーゲスト君に何もしてあげられて無い…」

ヘスティアはベルに対してして来た事なら何度かある。

「ベル君には、あのナイフをあげたし…怪物モンスター祭の時も側に居たし、ベル君の為にダンジョンに潜ったりもした…けど、それに比べてバーゲスト君には…」

「何もしてあげられてない…と…」

「そう、バーゲスト君は今ロキ達と一緒にメレンに行つてるからどうしようも出来なくてさ…アルテミスからもバーゲスト君を大事にしてるつて伝言で言われちゃつて、僕つて本当に…バーゲスト君に何も出来て無くて…はあ…」

ため息を吐くヘスティアを見て対面の二人は考え込む。

「そうね…バゲ子ちゃんは多分気にしてないと思うのよね…ヘスティア様がそんなに悩むくらいバゲ子ちゃんは良い子だもの」

「うん…」

「けれど、気持ちとかで充分とか、そういう感じでも無いのよね。ヘスティア様がしてあげたいっていう気持ちも凄く大事な事だと思ふわ」
「そうね。今からでも遅く無いわ、ヘスティア。これからそのバーゲストさんが戻つて来た時に何か、色々な感謝を伝える為の贈り物を考

えてみない?」

「今から…?」

「そうよ!こんなの幾ら悩んだってどうしようも無いわ!今から一緒に、バゲ子ちゃんへの最高のサプライズの準備をしましょう!」

「サプライズ…うん、うん!そうだね!よーし、いっちょやってやるかあー!!」

こうして、ヘスティア達はバーゲストに対するサプライズ計画を始動させるのであった…

そしてその頃、バーゲスト達はティオネとティオナを回収して港に入港したガレオン船を追って港に戻ってきていた。

「どうか、何故お前はバーゲストに背負ってもらっているんだ!」

「しゃーないやん!うちが冒険者の足について行ける訳無いし、うちのファミリアの子誰もおんぶしてくれんもん!」

バーゲストにおんぶしてもらっているロキにリヴェリアが苦言を呈すと、ロキは仕方がないと反論し、そんな二人のやり取りを聞いてバーゲストは苦笑いしていた。

「さっきのガレオン船、港に行っちゃいましたけど…なんだかティオネさん達と険悪じゃなかったですか!」

「ティオナ、ティオネ…!」

「カーリー!!」

港に着くと、ティオネが大声で誰かの名前を叫んでいた。声のした方に行くと、二人を発見する。

「ここに何しに来た!」

「久方ぶりの再会だというのに、開口一番がそれか、ティオネ?まあいい…なに、ただの観光じゃ」

「嘘抜かしてんじゃないわよ…!」

「本当だとも。代わり映えしない日々には飽き、刺激を求めに来たのよ」

ティオネはかなりイラついており、どう見てもヤバめな雰囲気だった。

「駆けつけたはいいですけど……」

「凄く一触即発の雰囲気……ティオネさんのあんな顔、初めて見た……」

アイズはティオネ達が対面している集団に目を向けた。

（ティオネ達の知り合い？一柱の女神に、沢山のアマゾネス……どこかのファミリア……？特に——）

アイズは二人のアマゾネス……アルガナとバーチエに注目する。

（あの二人、強い。レベル5……ううん、6？オラリオの外のファミリアで、そんなことが……？）

オラリオのダンジョンの中のモンスターと、それ以外のモンスター達には大きな差がある。オラリオの外にいるモンスター達を倒しても、あまり強くはなれないのだが、目の前のアマゾネスはどうやら例外的ようだった。

（それに、あの人……ずっとティオネの事見てる）

アルガナの視線は常にティオネに向けられており、それ以外は眼中に無いようだった。

「それにしても、見ない内に……デカくなったのお……」

カーリーはティオネの胸を見てそう言う。

「どこ見て言ってるのよ……！」

次にカーリーはティオナに視線を移す。

「うむ、そなたは前と変わらぬな」

「どこ見て言ってるんだー！」

「お主等の名前は妾も聞いておる。ロキ・ファミリア、だそうじゃな？主神はどこじゃ？」

「……や」

ロキはティオナとティオネの前に出てカーリーと対面する。

「察してはおったけど……やっぱり、そういう事か。けど、この子らの今の親はうちやで、ドチビ二号。なんか用か？」

「ふうむ、お初にお目にかかるが……ド貧相じゃのう。妾やティオナの方がまだあるわ」

「おうゴラア初対面やのになんや喧嘩売つとんのかッ！買うぞチビ
ジャリがあああ！」

カーリーの煽りがロキにクリティカルヒットし、暴れだそうとする
ロキをレフイーヤとアナキティが抑える。

「お、落ち着いてください！」

「ややこしいから静かにしててよ！」

強制退場させられたロキから再び視線をティオネとティオナに戻
すカーリー。

「愉快的ファミリアのようじゃな。まあいい、暫くこの街で過ぐす。
お主等もいるやら、また会おうぞ」

「ふざけんなっ！」

「随分嫌われたものじゃ。そんなに妾達が憎いか？」

「二度とその面見たくなかったわよ……！」

「妾は会いたくて仕方なかったぞ。——愛する子供達よ」

そう言つてカーリー達はそこから去っていった……

「子供……？ティオネさん達と、あの女神様達の関係つて……？」

「……はあ。んくとなあ、もう気付いとると思うけど……ティオネら
が所属しとった、元ファミリアや。うちんどこに来る前の、最初のな」

一先ず一行は宿の方に移動し、そこでカーリー・ファミリアに関す
る話をすることにした。なお、ティオネとティオナは現在席を外して
いる。

「カーリー・ファミリアは、『テルスキュラ』という国に君臨する女帝と、その
派閥だ」

「テルスキュラ……オラリオからずっと離れた東南にある、半島の国、よ
ね？」

「ああ。海と断崖絶壁に囲まれた孤島……アマゾネスしかない国とし

て有名だ。知っている者も多いだろう」

「軍神アレスとこの王国ラキアと同じ、国家系ファミリアって言っても差し支えないなあ。しっかし、あかんわ。うち、つくづくロリとは相性悪い。生意気なドチビはジャガ丸おっぱいだけで十分やっちゅうのに…」

（そのジャガ丸おっぱいの眷族がこの場にいるのだけど…）

「なんやあのいけ好かん仮面、くう、腹立つく！」

「少し黙っている、ロキ…：話はそれだが、とにかく『闘国テルスキュラ』はアマゾネスの国。男子禁制であり、居たとしても奴隷か、種の繁栄の道具としてでなければ存在を許されないという話だ」

「学区で少し教わった時は、かなり野蛮な国、っていう印象でしたけど…」

「間違っていない。雄叫びと歓声が途切れる日が無いほど、戦い合っでは研鑽を続けていると聞く。血と闘争の国…：女戦士の聖地とも呼ばれているな」

「同時に、突き抜けた戦力を保有する数少ない『世界勢力』の一つ…：オラリオを除いてではありませんが」

「その通りだ。諸国と比べれば鎖国的で、外界の者達を知ることのできる情報は制限されているが…：頭領姉妹のアルガナとバーチェは、近年レベル6に至ったという噂が囁かれていた」

『?!』

その言葉にロキ・ファミリアの面々は驚愕する。それもそうだが、ダンジョン無しでそのレベルに至ることは普通は不可能なのだから。

「リヴェリア。ダンジョンも無いのに、どうしてそこまで強くなれるの？…：どうやって昇格ランクアップを？」

「日々、闘技場で『儀式』…：命を賭けた闘争を行っているらしい。捕獲したモンスターは無論のこと…：アマゾネス同士でさえも」

「どっかの冒険家が、見聞記の中に書いとったなあ。テルスキュラに忍び込んで、命かながら逃げ出した時の事を…」

「ラストイロ・フォーロの大陸異聞録か？」

「そうそう、それぞれ。館の書庫にもあるやつや。『彼の国では日夜、儀式ともつかぬ殺し合いを繰り返していた。私も彼女達の讃歌に倣

うことにする。かの地の女戦士こそ、真の戦士』……この一文、よう覚えとるわ」

レフィーヤ達はテルスキュラの話聞いてある考えが浮かんでくる。

「そ、それじゃあ、ティオナさんと、ティオネさんは…」

「テルスキュラ出身で、あの国が故郷。五年前、入団する前にそう言っ
とった。こんな事もな——『私達、数え切れないくらい同胞を殺し
てるけど、それでも勧誘するわけ?』ってな」

「!…ティオネ達が、仲間を…?」

二人の過去を聞いてその場の雰囲気暗くなり、しんみりしていると、外の方からティオネとティオナが言い争っている声が聞こえ始める。

「まずい！」

「と、止めないと…!」

皆が慌てて二人の元に行こうとした瞬間、ティオネがかなり怒った表情をして戻って来る。

「あ、ティ、ティオネさん…」

ティオネはその場を通り過ぎて去っていった…

(ティオネ…)

皆が心配していると、今度はティオナが暗い表情で戻ってくる。

「ティオナさん…大丈夫ですか？」

「だいじょうぶ…喧嘩とかは、してないから」

「…あの、ティオナさん達が今日会ったのもとにいたって…」

「うん、本当だよ」

「それじゃあ、えっと、その…」

「ごめん、ティオネのいないところで、あたし達のこと勝手に話しているか、わかんないや…でも…あたし、ティオネには、もうカーリー達に会ってほしくなかったな」

その後は取り敢えず休息に入り、明日に備えるのだった…

翌日、何組かに分かれて食人花の調査をする事になり、バーゲストはティオナ達と共に街中で調査をすることになった。しかし…

「はむ、むぐつ…おかわり！」

「二人ともご飯を食べてますわね…」

聞き込み調査は難航し、アマゾネス姉妹は店でご飯を食べていた。

「そう言うバーゲストさんも食べてますよね…！」

「申し訳ありません、良い匂いに釣られてしまつて…」

訂正、アマゾネス姉妹と黒犬だった。

「ティオナ、バーゲストさん。ティオネの様子は、どう？」

ティオネはカーリー・ファミリアとの接触のせいであり不機嫌になつており、何時爆発するかアイズ達には分からない。

「んー…苛々してるけど、今は大丈夫かな。朝はカーリー達がいなくて、おかわり」

「変な事をしないように私達がずっと見ていましたからね」

ティオネは不機嫌そうにしながら料理を食べ進めていた。

「…おかわり」

「お、おう。よく分かんねえけど、なんか機嫌悪くねえか、嬢ちゃん…？目が据わつてるぜ…」

「ね？普通にご飯も食べてるでしょ？私がティオネを気にかけるつて、いつもと逆な気がするけどー」

「そう、だね…ティオナは大丈夫？」

「私は平気だよ、アイズ。知つてると思うけどさ、考えるの苦手なんだ」

「ティオナ…」

「いやあ、本当によく食うなあ姉ちゃん達。冒険者は沢山見てきたけどよ、やつぱり第一級冒険者はすげえな」

なんだかしんみりした雰囲気になると、一人の男がアイズ達に話しかけてくる。

「そこの細い姉ちゃん…【剣姫】様もよく食うのかい？」

「アイズは私達みたいに食べないよー。ジャガ丸くんは好きだけど」

「あなたは…?」

「俺はロッド。一応、ニヨルズ・ファミリアの団長って事になってる」
「ニヨルズ・ファミリア…」

そこからアイズ達はロッドからニヨルズ・ファミリアの事やメレンでの事を聞いていく。

メレンにいる漁師は皆ニヨルズ・ファミリアの一員で、海の上でモンスターに襲われた時に恩恵が無ければどうしようも無く、メレンにあるファミリアはニヨルズ・ファミリアだけだからという理由だった。

漁以外にも海のモンスターを倒したり、海賊を追い払ったりしている内に、ロッドもLv. 2になったとの事。

「ご馳走様でした」(オラリオの外のモンスターの強さを考えれば、Lv. 2もあれば十分…ロッドさん以外も下級冒険者の中堅くらいはありそうですわね…)

料理を食べ終えながらロッドの話聞いてバーゲストがそう考えていると、アイズがロッドに訊く。

「海や湖で、食人花のモンスターを見た事がありますか?」

「昨日出てきたって言う化け物の事か?俺は今日の朝、海から帰って来たばかりだから、実物を見てねえんだが…アクアサーベント大水蛇じゃねえんだよな?」

「はい、体躯の大きさも異なれば、体皮の色も異なる。まず見間違う事は無いかと」

「…正直、心当たりはある」

「えっ!？」

「漁の途中、ロログ湖やこの辺りの海で何度か見かけた。長え体を持った蛇みたいな影が、船の下…水中を泳いでいるのを。でもよ、おたくらの言う化け物が俺たちに襲いかかってきた事は一度も無いぜ?」

「ええ?あの食人花のモンスター、めっちゃくちゃ凶暴だし、そんな筈は…」

(…何か、食い違ってる気がする。まだ私達の知らない何かがある…?)

自分達の知る食人花とロッドが見た食人花の違いに違和感を覚えるアイズ達。

するとテイオナがロッドや他の漁師達が身につけている袋に目をつける。

「?…:…ねえ、腰につけてるその袋、何?漁師の人達、みんな持つてるみたいだけど」

「おつ、よく気付いてくれた!これは魔法の粉でな、水面にばら撒けば、モンスターは寄ってこないっていう代物よ!」

「ええ!?見せて見せて!」

興味が湧き上がったテイオナはロッドの持つ袋に触れる。

「モンスターが寄って来ない…?まさか…!」

「あつ、気をつけろよ!」

「えつ、何が?——つて、くっさああああ!!」

ロッドの注意も間に合わず、袋から強烈な異臭が辺り一面に広がっていく。

「す、凄まじい異臭ですね。直接嗅いでない私達の方にも、臭いが…!」

「もう、先言つてよく!何入つてんのコレ〜!!」

「生物、でしょうか?色々なものが粉末状になってるようですけど…ん…?」

「あ…:あ…:」

「ば、バーゲストさん…!」

ただでさえ普通の人間にとつても鼻が曲がりそうな異臭。嗅覚が優れたバーゲストは…

ドサツ…

地に倒れ伏した。

「バーゲストさあああああん!」

あの後直ぐに袋を閉じ、臭いも落ち着いてバーゲストも復活し、改めて話をする。

「……いや、すまん、ホントに」

「いえ、私もすみません……」

「え、えつと……モンスターを寄せ付けなくて……そんなアイテム。オラリオにも無いですよね？」

「逆に、撒き餌なんじゃないの？ トラップアイテム 血 肉でも混ぜ込んで、船を襲おうとするモンスターを夢中にさせてくみたいな」

「この粉はオラリオ発明って聞いたぜ？ ほら、いるじゃねえか。オラリオにとんでもねえ、ハゼゼウスだのカキセルスだの……」

「……【万能者】？」

「そうだそうだ、それぞれ。そいつが作ったんじゃないやねえのか？」

「例えそうだとしても、オラリオを差し置いて、メレンに流す理由が……」

「ふむ……」

「バーゲストさん？」

「私のパーティーのサポーターが同じようなものを持っていましたわ……アレは彼女が自分で作っているようでしたけれど……」

バーゲストの頭に浮かんだのは、リリルカが持っており、ベル達が18階層に向かう為の一役を買った強臭袋。モルプルアレは袋から匂いを発するタイプだったが似たようなものなのかもしれない。

「えつと、ロッドさん達はこの粉をどなたから受け取っているんですか？」

「ボルグの親父……マートック街長の家からだ。都市から買い取って無料で俺たちに譲ってくれる。漁師だけじゃねえ、メレンによく出入りする船にもだ。もうずっと前から。あの親父も、ホントによくしてくれるぜ」

「へく。あの街のお偉いさんが」

(となると、リリは関係ないと見た方がいいかしら)

「まあ、ばら撒いても『レイダーフィッシュ』なんかは襲いかかってくるし、完璧とは言えねえが…でも確かに、この粉のお陰でモンスター
の被害はめっぽう減ったんだぜ」

アイズは粉の話の話を聞いて昨日の事を思い出す。

「…アリシア」

「ええ、昨日カーリー・ファミリアが食人花に襲われたのは、恐らくこの粉を持っていなかったから…」

(粉を持っていれば襲われず、持っていなければ襲われる…：やっばり、メレンの近海は平和になってる訳じゃない?)

「…ところで、ロキ・ファミリアさんよ。あのアマゾネス達、どうにかならねえか？」

ロツドの言うアマゾネス達と言うのは、間違いなくカーリー・ファミリアの事であろう。

「…何かあつたの？」

「いや、そういう訳じゃねえが…漁師おれたちも、街のモンもすっかり怯えちまってな…連中、すげえ強いのは見れば分かるし、それが我が者顔で通りの真ん中を歩いているもんだからよ…」

「……」

カーリー・ファミリアの話の聞いてティオネが更に不機嫌そうになっ
ていると…

「ロツド！大変だ、大通りでアマゾネス達が騒さわぎを起おこしてる！」

獣人の漁師がそう言いながら慌あわてた様子でロツドの元に来た。

「やべえアマゾネスに、マーク達が捕とらまって…！」

「なんだと!？」

「…ティオネ…？やばっ…！」

ティオナがティオネを呼ぶも返事が無く、先程までティオネが居た場所を見ると、そこには誰も居いなかった。

「！いけない…！」

「ど、どうしたんですか、ティオナさん、アイズさん…？」

「ティオネがいらない……！」

「飛び出して行っちゃった！エルファイ達、隣の館にロキがいるから呼んで来て！」

「わ、分かりました！」

「先に言ってるぞ！」

エルファイ達にロキを呼んでくるように言い、ティオナ、アイズ、バーゲストはティオネの後を追って大通りに向かった。

大通りに出ると、そこでは既にティオネとアルガナが戦闘を開始していた。

「ティオネ！」

（互角、いや、ティオネより……！）

「二人とも、止めよう！」

ティオナがそう言っただけで二人の元へ向かおうとした瞬間、もう一人のアマゾネスが三人の前に立ち塞がる。

「もう一人のLv. 6……バーチェ……！」

「どいてバーチェ！」

「……ル・ムー」

そう言うだけでバーチェはティオナ達に襲い掛かる。

「いったあく!?」

「この人も強い……！」

「二人共、私はティオネの方に向かう！」

「分かった！」

ティオナとアイズがバーチェを相手している隙に、バーゲストはティオネとアルガナの方に接近する。

「ティオネ！」

「バーゲスト!? 何で此処に……！」

「貴様が一人で突っ走るからだ！あまり心配させるな！」

「はあ!?それを言ったらアンタはLv. 2でしょ!?アンタが何で此処に来るのよー！」

「そんなのは後だ、今はとにかくっ…!!」

バーゲストとテイオネが言い合っている隙を突いてテイオネの攻撃しようとしたアルガナの拳を、バーゲストが受け止める…が…

「ぐっ…!?」

「邪魔だ」

アルガナの力はバーゲストを凌ぎ、バーゲストを押ししていく。

(嘘でしょう、聖者の数字を使っても、力で勝てない…!?)

「どこ見てんのよっ!!」

テイオネがアルガナに踵落としを喰らわせようとするもアルガナはバーゲストから離れてそれを回避し、距離を取る。

「バーゲスト、無事!？」

「なんとかな…しかし…やはりLv. 6は厳しいか」

「当たり前でしょ！普通なら今の一撃でやられてるわよ!!」

(ガラティーンを使う？いえ、街中では危険過ぎます。とはいえ、アルガナに対抗するには…アレを使いますか)

「まさか此処で初披露とは…【黒犬よ、お前の爪と牙を以って我が敵の肉を喰らえ】…【ブラックドッグ】!!」

バーゲストの足元から黒い靄が広がり、その靄から浮上する様に真っ黒な犬が三匹現れる。

「テイオネ、私は召喚魔法で援護する」

「分かったわ、頼むわよ…!」

「よし…行け!」

「ガア!!」

黒犬達がバーゲストの掛け声で一斉に駆け出し、アルガナに襲い掛かる。

「鬱陶しい…」

アルガナは面倒くさそうな表情を浮かべると、黒犬の一匹がアルガナに正面から跳び掛かる。

アルガナは拳を構えてそれを迎え撃とうとした瞬間。

「ギャン!？」

「っ!」

跳んだ黒犬はアルガナの拳：ではなく、背後からのティオネの拳が黒犬を貫き、アルガナに襲い掛かる。

(悲報、まさかの初黒犬、仲間に倒される。ですわ)

バーゲストはティオネに貫かれて塵となって消えた黒犬に合掌した：：

「ははっ!今のは危なかったぞ!」

「チツ!」

アルガナは寸で顔を傾けて拳を避けるが：

「ガウツ!」

「チツ：」

その隙を利用して二匹目の黒犬がアルガナの右足に噛み付く。

「ふんっ：」

「くう!？」

アルガナは噛み付かれたまま右足を上げ、回し蹴りを放つとティオネはガードするも後退り、噛み付いていた黒犬は飛ばされていった。

「ガア!!」

三匹目の黒犬がティオネと入れ替わる様に跳び付くも：

「消えろ」

上げたままの右足を黒犬の頭に叩きつけ、三匹目の黒犬は頭を潰されて塵となつていった：

「バーゲスト!追加!」

「分かっている!」黒犬よ、お前の爪と牙を以つ：」

バーゲストは詠唱の途中であるものが目に入る。

(子供!?!逃げ遅れたのね!)

バーゲストと同時に気付いたティオネは、子供のいる場所の近くの建物が激しい戦闘によって崩ようとしている事に気付く。

「っ!!」

「ティオネ!」

ティオネは駆け出し、その直前にバーゲストも駆け出す。子供の上に瓦礫が迫った瞬間、ティオネは子供を抱きしめて守るようにして丸くなる。

しかし、瓦礫が落ちた後、いつになっても衝撃を感じず、目を開けると…

「二人共、無事か？」

「バーゲスト…アンタ…」

バーゲストが更に上からティオネ達を守っており、二人は無傷で済んだ。

「アンタ、何で…！」

「何、私の方が大きいし、硬さにも自信がある。それに鎧も身につけているからな」

「だからって…！」

「…なんだ、イマのは？かばったのか、子供アレを？」

アルガナの方を見ると、アルガナは驚いたような、落胆したような表情をしていた。

「変わった…変わったな、ティオネ。強くなったが、弱くなった…オマエは、戦士ではなくなった」

「っ…！」

アルガナは残念そうにしながら続ける。

「むかしのオマエは、あんなクズを庇ったりしなかった。やっぱりオマエは、故郷テルスキュラで、ワタシたちと殺しあうべきだった」

「ふぎけん…！誰が、あんなところ…！」

「オマエ…まだセルダスを殺したことを、後悔しているのか？」
「っ!!」

「ティオネ？」

セルダス、という名前が出て来た瞬間、ティオネが凍りつく。

「あいつを殺したおかげで、オマエは強くなっただろう？」

「ッ！——ぶっ殺す!!」

「ティオネ!!」

ティオネが激昂し、アルガナに飛び掛かろうとした瞬間…

「ほい、そこまでや」

「!!?!」

声が聞こえ、三人が声のした方を見ると、そこにはロキとカーリーがいた。

「これ以上ヒートアップしたら、他人に迷惑通り越して洒落にならんわ」

「アルガナ、バーチエ、お主らも止めろ」

「カーリー…わかった」

カーリーからの命令でアルガナとバーチエはあっさり身を引く。

「すまんなあロキ。外の世界に出て、こやつらも興奮しているようじゃ。痛み分けでよいか？そなたの【剣姫】とやらの妾の子も相当痛み付けられておる」

「あーもう分かったから、いけ、いけ。そんで二度とうちらの前に出て来んな」

「じゃあな、ティオネ」

カーリー達は去っていき、ティオネはその後ろ姿を睨んでいた。

「あ、アイズさん、ティオナさん、大丈夫ですか？」

「いちいち…結構やられたあ〜…」

「私達は、まだ大丈夫だけど…バーゲストさんは？」

「大丈夫だ、瓦礫を喰らったが、それ以外に目立った傷は無い。だが…」

「くそつ、くそつ、ちくしよおおお!!」

「ティオネ…」

「思ってた以上に、あの子の『傷』は深刻みたいやな…」

食人花の調査中に現れたカーリー・ファミリア。その目的は何なのか、バーゲスト達は無事にオラリオに戻る事が出来るのか。メレンで起きた異変は、更に混沌と化していく…

第十七話 分裂

バーゲストは宿屋の自分の部屋の窓から外を見ながら考えていた。

(カーリー・ファミア…)

カーリー・ファミアのアルガナの拳を受け止めた時に、バーゲストは完全に相殺することが出来なかった。

(レベルの差から考えれば当たり前どころか、受け止めただけで異常ですけれど、それでもやはり、聖者の数字を使った状態でこれはキツイですわね…)

どうしたものか、と考えていると、部屋のドアがノックされる。

「どうぞ」

「入るで〜」

入って来たのはロキだった。

「バーゲストたん、怪我大丈夫か？」

「ええ、あの程度問題ありません。それよりティオネの様子は？」

「ん〜…さつきティオネをオラリオに戻すか話し合ったんやけど、やっぱダメだったわ」

「そうでしたか…それで？私の用は何でしょう？」

「実はちよつとバーゲストたんに頼みたい事があつてなあ…」

その頃、ある場所ではカーリー・ファミアとあるファミアが話し合っていた。

カーリーと対面しているのは、女神イシュタル。

イシュタルはカーリーにフレイヤ・ファミアを潰す為の依頼をしており、今日は打ち合わせをしていた。

「運び屋に『必勝の策』を移送させている。お前等にもおこぼれをくれ

てやろう…それを受け取った後、宴の始まりだ」

「その『切り札』とやらが気になるが…まあ、いいじやろう。話は把握した。取り敢えず、戦まで時間はあるという事じゃな」

「ああ」

「ならイシユタルよ、先に報酬の件について済ませておきたいのだが」
「報酬の財宝ならいくらでもくれてやる。好きだけの額を…」

「金は要らん、要らなくなった。別の報酬を貰いたい」

「？」

「付け加えると、その報酬は先に貰い受けたい」

「…言ってみろ」

「今、ロキ・ファミリアがこのメレンにおる。おっと、勘違いしてくれ
るな？妾達が此処に居る事とは関係無い、ただの偶然じゃ。何でも、
食人花だとかのモンスターを追っているらしい」

「食人花…？ああ、あれか。それで？まさか貴様…」

「ご明察の通り、あの者たちと戦いたい」

カーリーがそう言った瞬間、イシユタルは立ち上がって怒鳴りつけ
る。

「ふざけるなっ！フレイヤの眷属どもも馬鹿げているが、あそこの連
中も大概だ！フレイヤと一戦やる前に大事になるに決まってる！必
ず取り返しのつかない事になるぞ…！」

「すまんすまん。あのファミリア、というには語弊がある。妾達の狙
いは…とある姉妹じゃ」

「姉妹…？」

「ロキのもとには妾の子がおる。元、が頭に付くがのう…情けをくれ
てやって手放したのじゃ…ちと後悔しておるがのう」

イシユタルは元カーリーの子で双子となれば真っ先にあの姉妹を
思い浮かべる。

「…あのアマゾネスの姉妹の事か？」

「おうよ。あの姉妹と、アルガナとバーチエ。互いを戦わせたいの
じゃ」

「……………」

「……」

カーリーの言葉を聞いてアルガナは嬉しそうな表情を浮かべ、バーチエは変わらず無表情を貫いている。

「妾のもとから飛び出していったあの姉妹と、妾のもとに残ったこちらの姉妹……どちらが強いのか。どちらが勝ち残り、限界を超えるのか、『器』を昇華させるのか……」

その時、カーリーは目を見開き、恐ろしい笑みを浮かべた。

「闘争が見たい、血が見たい。一体どちらの選択が正しかったのか……血潮の雨を啜りながら、この眼で^{まなこ}拝みたい」

『っ……!!』

カーリーの表情を見てイシュタル・ファミリアの面々はたじろぐ。カーリーは表情を戻して続けた。

「お主等には姉妹以外を足止めしてほしい。今日アルガナ達をけしかけてみて分かったが……ロキ・ファミリアには【剣姫】など面倒そうな者がおる、特にあの角の生えた女騎士……」

「角の生えた女騎士……?」

「なんじゃ、知らんのか?」

「……いや、知ってはいるが……奴はロキの眷属では無い筈だ。それに昨日ギルドからLv. 2に上がったと伝えられたばかりだぞ……?」

「ふむ……とにかく、妾が望むのは姉妹同士の決闘よ」

「勝手な事を……! そんな条件、呑むわけが……!」

「ゲゲゲゲゲツ。やらせなよお、イシュタル様あ」

そう言ったのは、イシュタル・ファミリアの団長であるアマゾネスの、フリユネ・ジャミールだった。

「フリユネ……」

「いいじゃないかあ、フレイヤのところと戦る前の前哨戦さあ。それに遅かれ早かれこの連中がメレンに居座っているのはオラリオに知られちまうよお。なら、ロキ・ファミリアと戦うことが目的だったと思わせちまえば……」

「……ギルドにもフレイヤ達にもそれ以上の警戒はされない。そう言いたいのか?」

「ああ、【劍姫】はアタイが押さええといてやるよ。ゲゲゲゲッ…」

イシユタルがフリユネの進言を聞き、椅子に座って少し考えると…
「いいだろう、フリユネの言うことも一理ある。それに…私はロキ達も気に食わない。ただし、分が悪いようなら私達はすぐに手を引く。後の事は全てお前たちが責任を取れ」

「勿論だとも。飛び散る血は妾を興奮させ…死線の咆哮は腹の底を熱くさせる…この上ない馳走じゃ…不真面目な神々同士では味わえん、命を賭けた闘争…これこそ、妾の追い求めていた下界の醍醐味よ」

カーリーは再び恐ろしい笑みを浮かべる。

「闘争と殺戮こそが、子の真理。闘争の行く末、それが見たいのじゃ…！」

翌日、ロキ・ファミアの面々は今日の方針を決めていた。

「今日から調べる範囲を絞る。ニヨルズ・ファミア。ギルド支部。マートック街長の家。調べるんはこの三つや。疑われとるって気付かれたら面倒やから、あくまで昨日のノリと一緒に。何も掴んでへん風を装って、ニヨルズこここそ嗅ぎ回る。」

ロキは次にそれぞれが担当する場所を説明する。

「ニヨルズ神んところに探りを入れたらすぐバレるから、あつちはうちがつく。リヴェリア達はギルド支部と街の長んところを頼むな」

「カーリー・ファミアは？」

「基本無視や、ただ、またちよつかいを出してくる可能性はある。必ず集団で行動する事。それと…ほら、出てきいや」

ロキがそう言うと、バーゲストの召喚する黒犬が数匹現れる。

「この子達を一組に一匹ずつ付ける。何かあったら直ぐに分かる様になつてるからな…頼むで、お前たち」

『ワンツ！』

「テイオナとテイオネには、アイズとリヴェリアが付いたつて。因みに、拒否権は無しや」

「っ……！ロキ、私は……！」

「オラリオに戻らんつちゆうなら、大人しく言うことを聞くんや、テイオネ」

「っ……！」

テイオネはロキに抗議しようとしたがそれは許されず、テイオネは渋々ロキの言うことを聞いたのだった。

「質問はく？」

「…ロキ、バーゲストさんは？」

アイズがバーゲストがいない事に気付いてロキに訊く。

「あく…バーゲストたんはちよつと別の事を頼んどつてな、今日は同行出来んわ。他は無いなく？ほんじゃ、解散。みんな頼むでー」

その頃、バーゲストは街の外側の方をマントを羽織つて走り回っていた。

「カーリー・ファミアアの動向をチェックしてほしい？」

「そうや、連中が何かしそうになつたらすぐ伝えて欲しいねん。バーゲストたん、召喚魔法が使えるけん楽勝やろ？」

「なるほど…分かりました、やってみます」

（とは言ったものの…）

バーゲストは現在かなり焦っていた。

（カーリー・ファミアアが宿から消えていたとは…！）

カーリー・ファミアアの姿は既に宿から消えており、バーゲストは黒犬達を使いながらカーリー・ファミアアを捜索していた。

「向こうの黒犬から反応が…何か見つけたか？」

黒犬達の反応を頼りに移動するバーゲスト。

「ロキ様に伝言は出したが、流石に奴等を野放しには…」

その時、バーゲストはある事に気付く。

（捜索に当たっていた黒犬達が消えていく…？カーリー・ファミリアの仕業か…？）

黒犬達が消えていくのを感じていた瞬間、バーゲストはその場から飛び退く。

ドゴオン!!

バーゲストが居た場所に何かが叩きつけられ、周囲にヒビを入れていく。バーゲストが自分の居た場所を見ると、そこには赤いフルプレートを身に纏ったモンスターのような体型の人物が居た。

「フリユネ・ジャミール…！イシユタル・ファミリアかつ!!」

「ゲゲゲツ、ばれちまったかい。鎧越しでも分かっちゃうなんて、美しいっていうのは罪なもんささ」

「まあ、ある意味特徴的と…言えるだろうなっ！」

ガギンツ！

バーゲストは次に背後から迫った大剣に盾を振り、弾く。

「ちっ、バレたか。良い勘してるじゃないか。角女」

「次はアイシャ・ベルカか…いや、それだけでは無いな」

周囲からぞろぞろとイシユタル・ファミリアの団員が現れ、バーゲストを包囲する。

「ふん、これがつい最近Lv. 2になった冒険者に対する仕打ちか？

イシユタル・ファミリア。何故今襲って来る？」

「惚けんじゃないよ、アンタの力はLv. 5に匹敵すると情報は出たんだ。それに耐久においてはそれ以上の評価を受けてる…更には召喚魔法の使い手、これくらいは当然さ…それと理由についちゃ、教える訳ないだろう？」

「ゲゲゲゲ、そういう訳だ。悪いけどアンタには此処で死んでもらうよ」

「随分と物騒だな、此処は外の方とはいえまだ街中。それも昼のうちに始めるつもりか？住民が少ないとはいえ、そんな事をすればすぐ騒

ぎに……」

「安心しなよ、ここら一帯の人間は何も言わないさ。それにロキ・ファミリアなら、今はそれどころじゃ無いだろうしね」

「…美の女神とは、狡いものだな」

バーゲストは剣と盾を構える。

（恐らく女神イシユタルの魅了でこの辺りの人間はダメになっているのでしょうね…：敢えてこの場に残したのは私に対する人質。周りに一般人がいるなら炎は扱い辛い…：黒犬達を釣って私を誘い込んだ…）

「本当に用意周到だな、だからこそ解せん。何故私にそこまで…」

「だから教える義理は…無いって言ってるんだろ!!」

アイシャが近付き、バーゲストに大剣を振るう。バーゲストはそれに対処していると、反対側にいたフリユネが斧を振るう。

「ぐっ…!」

バーゲストは盾でアイシャの大剣。背中に剣を回してフリユネの斧を受け止める。

「はあ!」

二人を押し返して、バーゲストはアイシャの横を抜けてその場から離れようとする。

（一先ず人が多い方に向かわなければ…：イシユタル・ファミリアに狙われていては、搜索どころではっ!?)

バーゲストは足を止め、目の前にいる人物を見て驚愕した。

「バーチェ…!?!」

「……………」

そこに居たのはカーリー・ファミリアの頭領姉妹の片割れであるバーチェが居た。後ろからバーゲストを追って来たアイシャ達がバーチェを見る。

「おい、何でアンタが此処に居るんだい。それじゃ私らが手を組んでるってばれちまうだろ?」

「…ここで殺せば、問題無い」

「ゲゲゲ! 全くもってその通りだねえ!」

前に居るバーチエが拳を、後ろにいるアイシャ達が武器を構えて、バーゲストを挟み込む。

(…まずい、本当にまずいですわ。これ、マジで私死んじやうんじやないかしら?)

イシユタル・ファミリアだけならともかく、バーチエまで加わるとなると話は変わってくる。バーゲストは冷や汗を流しながら必死にこの場から逃げる方法を考えていた。

「…お前は、何だ」

「何?」

必死に考えているバーゲストにバーチエはそう問いかけた。

「カーリーが言っていた。お前は何か矛盾していると。その身体とその力は、本来合わさる事の無いものだ」と

「何を言ってる…」

「話してるところ悪いけどっ!!」

背後からアイシャが切り掛かり、バーゲストはそれをしゃがんで回避する。するとバーチエがすかさず拳を突き出し、バーゲストは今度はそれを飛んで回避する。

「ゲゲゲ! デカいだねえ!!」

「ぐう!」

フリユネが二本ある斧の片方を空中のバーゲストに向かって投げ付け、バーゲストはそれを弾いた瞬間…

「なっ…」

「ふっ…!」

バーチエが眼前に現れ、空中で回し蹴りを繰り返して、バーゲストを吹き飛ばす。

バーゲストは遠くの方の地面に激突しながら転がっていく。

「馬鹿! 飛ばしすぎだよ! お前たち、追え!!」

バーゲストは剣を地面に突き立てて立ち上がると、イシユタル・ファミリアの団員達が次々と襲いかかって来る。

「はあ…はあ…」 【黒犬よ、お前の爪と牙を以って我が敵の肉を喰らえ…】

バーゲストはそれを迎え撃ちながら詠唱を始める。

「【お前は大地を駆ける勇猛な黒犬だ】『ブラックドッグ』……!」

バーゲストの足元から出て来たのは、大きな体躯を持つ黒犬だった。バーゲストは隙を突いてその黒犬に跨り、黒犬はイシユタル・ファミリアとバーチエから逃げる為に駆け出した。

(これで逃げられるか……いや)

バーゲストが後ろを見ると、バーゲストを追う人物が二人居た。

(バーチエとアイシャか……まずい、二人とも俊敏はかなり高そうだ……私を乗せたコイツでは逃げ切れん……!)

「逃がさないよ……!」

「……………」

バーゲストに迫る途中で、バーチエはカーリーが言っていた事を思い出していた。

『しかし解せんなあ、あの騎士。何故あのような力を持っているながら、その身に太陽の輝きを宿しているのじゃ?』

カーリーはバーゲストに対してそのような疑問を抱いていた。バーゲストが戦う姿を見て、そしてバーゲストが黒犬を召喚した瞬間、カーリーはバーゲストの力とその内にある何かに勘づいた。

『恐らく、昼にやり合ったらそれなりに苦労する相手じゃろうなあ、アレは。しかしアレを野放しにすると後々面倒そうじゃ。バーチエ、お主も手伝ってアレを始末……いや、出来れば捕まえろ』

(カーリーがあれば興味を持つなど……貴様は一体……ん?)

するとバーゲストが手を翳し、その手から鎖が何本も伸びる。それは炎を纏ってアイシャとバーチエに向かっていく。

バーチエはそれを素早い身のこなしで、アイシャも同様だが時折大剣で弾きながらバーゲストへ更に接近する。

(これではダメね、どうしましょう。二人だけのうちに迎え撃つ?いえ、二人を相手してる間に他の連中が来たら本末転倒……他の眷属を召喚して足止め……いや、二人には意味は無いでしょうね……ぐっ……!?)

すると突然黒犬のバランスが崩れ、バーゲストは地面に放り出される。すぐさま状況を確認すると、黒犬の後ろ足が無くなっており、先

程まで居た場所の地面に大剣が突き刺さっていた。

「グ、グオ…ギャ!?!」

足を無くし、もがいていた黒犬をバーチェが上から踏み潰し、黒犬は塵と化す。そしてバーチェはすぐさま倒れた状態のバーゲストに接近し、足を振り上げる。

「ふっー!」

「ぐうっ!!」

バーゲストは膝を着いたままバーチェの踵落としを盾で受け止めると、衝撃がバーゲストを伝って地面にヒビを入れた。

「はなっ…れろっ…!」

「!」

バーゲストは盾に炎を纏わせると、その直前にバーチェは離れる。バーゲストが盾を見ると、バーチェの踵が当たった場所がへこんでいた。

「すまない、アルトリア。受け取ったばかりだというのに…」

バーゲストは立ち上がり、バーチェとアイシャを見据える。二人は様子を伺っており、まだ動く気配は無い。

（他の団員が来るまで足止めのつもりでしょうね…詠唱は…恐らくさせて貰えないでしょうね…）

「どうした、来ないのか？相手はお前たちより格下だぞ」

「そんなに慌てなくても、他の連中が来れば存分に相手してやるさ」

「…この後に本命が控えている、お前で力を使い切る訳にはいかない」
「なるほどな…本命か…」

バーゲストと二人は睨み合いを続け、焦りからかバーゲストの頬に汗が流れる。そして次の瞬間…

「ふっー!」

バーゲストは咄嗟に左腕を突き出すと、盾の裏側から鎖が飛び出して来る。

（!盾の裏側にずっと隠していたのか）

（だけど、さつきみたいに炎を纏っていない。それをすると隠せないからね…!）

パシッ

つと、二人はほぼ同時に鎖を掴んだ。そして鎖を引っ張ると、バーゲストが二人の方に引っ張られていき、バーゲストはなんとか踏ん張る。

「ぐっ…」

「さあ、次はどうするんだい？さっきみたいに鎖に火をつけるかい？」
「……」

二人は再び鎖を引っ張ってバーゲストを近づけようとした瞬間、バーゲストは右手に持っていた剣を手放した。

ジャリン!!

と音がして、気付けば二人は宙を待っていた。

「…は？」

「っ…!!」

二人が地上にいるバーゲストを見ると、バーゲストは二人と繋がっている鎖を持つ左腕を掲げており、右手には角から剣に変形するガラティーンがあつた。

「アアアアッ!!」

バーゲストが叫びながらガラティーンを二人に向けて振るうと、黒い炎の斬撃が二人に向かつて放たれる。

二人に炎が迫り、アイシャは当たると思った瞬間…

「ふっ…!!」

「なっ…!?!」

バーチェがアイシャを足場にしてその場から移動する。アイシャも蹴られた衝撃でその場から動き、二人に炎は命中しないという結果になった。

「グウウウ…!!」

バーゲストは遠くに落ちていく二人を睨みながらガラティーンを角に戻し、頭に戻した。

「はあ…い…はあ…い…——ふう…初めて使ったが、なんとか制御出来たな。よし、今の内に行くか」

バーゲストは再び黒犬を召喚し、ロキ達の元へ向かった。

バーゲストがイシユタル・ファミリアとバーチエに襲われている時、レフィーヤ達もカーリー・ファミリアに襲われていた。神威を消し、ただの少女に扮したカーリーに誘導され、レフィーヤは攫われてしまった。

「アルガナ……！」

「……………」

「グルルルル……！」

そしてその時、ティオネとリヴェリアはアルガナと対峙していた。アルガナはニヤニヤとしており、反対にティオネは怒りを見せ始めており、バーゲストの黒犬も唸っていた。

「またのこのこと……！」

「ティオネ、下がっている」

ティオネを制してリヴェリアが前に立つ。

「用件があるなら私が聞こう。無いのなら、去れ」

「：ラダ・ファ・アール。ナハーク・ジ・ディナ、ノイ・フィ・ギャラード・ソア・デイ・ヒユリテ」

アルガナのその言葉を聞いた瞬間、ティオネは固まった。

「アマゾネスの言語……いや、テルスキユラ 闘国の？ティオネ、どうした！」

「！ワンツ！ワンツワンツ!!」

すると今度は黒犬が何か異変を察知したように吠え始める。

「バーゲストの眷属まで、一体何が……」

「どういう事よ！説明しろっ！」

激昂したティオネがアルガナに詰め寄ろうとし、リヴェリアがなんとかそれを止める。

「リヴェリア様！」

するとアリシアが慌てた様子で現れ、リヴェリアに呼びかける。

「どうした、何があった?」

「エルファイ達が、レフィーヤが…!」

「っ!アルガナアツ!!」

アリシアの言葉を聞いてテイオネはアルガナに対する怒りを爆発させる。しかしアルガナは言うだけ言ってその場を離れていった。

「テイオネ、今は構うな!早く戻るぞ!」

「くっ…!」

リヴェリアは状況を確認にする為にテイオネを引き止め、アルガナを見逃した。

ロキ・ファミアリアの面々は一旦港の方で合流し始めた。

「ごめん、ロキっ…やられちゃった…」

「ロツド、手当しろ!急げ!」

「分かりやした!おいてめえ等、手を貸せ!」

ボロボロになって連れられてきたエルファイ達をロツド達が治療する。その姿を見たロキは明らかに怒っていた。

「これをやらかしおったんは…」

「カーリー・ファミアリアです…いきなり、襲われて…」

「ごめん…!レフィーヤが、連れていかれちゃった…!」

「…大丈夫や。すぐにレフィーヤは助けに行く。自分らは今は休んどきや。な?」

悔しそうにしながら涙を流すエルファイとリーネにロキは優しくそう言った。

「ロキっ…本当に、ごめん…!」

治療の為に連れていかれる二人を見送った後、ロキは再び怒りの表情を露わにする。

「あんのクソチビ。うちに喧嘩売りおったなあ…!!」

「…ロキ。殺気、漏らさないで。他の団員が怯える…」

「おいおい、頼むからこの街の中で抗争なんておっ始めないでくれよ…」

殺気を漏らすロキにアナキティが注意し、巻き込まれたメレンはどうなるのが心配になるニョルズ。ロキはカーリー・ファミリアの目的は何なのかを考える。

(街中で堂々と仕掛けてきおった…宣戦布告のつもりか? いや、エルファイ達だけは見逃して、レフィーヤを連れ去った——)

「ちっ…そういう事か。アキ! テイオナとテイオネ、呼び止めるんや。どこにも行かせたらアカン!」

一方、まだ状況が把握出来ないテイオナとアイズは、街中での騒ぎに混乱していた。

「何、この騒ぎ…? 何が起こっているの!? それに…」

「ワンツ!」

「この子もずっと鳴いてるし…まさか、他の皆に何か…!」

「!急ごう!」

そう言つて走り出したアイズにテイオナも続こうとするが、

「テイオナ、来て」

「えっ、テイオネ!」

いつの間にか現れたテイオネがアイズに気付かれない様にテイオナを捕まえる。

「!」

側にいた黒犬がテイオナを連れて行くこうとするテイオネを見て、アイズに気づかせる為に吠えようとした瞬間…

バシュ!

と音が鳴り、黒犬は鳴き声を上げる間もなく頭を蹴り飛ばされ、塵となつていった…

「え、ええっ! ちよ、何やってムグっ!」

「いいから!」

戸惑うテイオナの口を塞いで、テイオネは強引にテイオナを路地裏へと引き込んだ。

「何すんのテイオネ!? 何かあつたんでしょ、どうしてこんなところに

「……」
「ラダ・ファア・アーロナハーク・ジ・デイナ造船所ノイ・ファイ・ギャラード・ソア・デイヒュリテに姉妹だけで来い」
「!!」

「さっきアルガナが私に言った言葉よ。襲われたのはエルファイ達。その中で……レファイヤが攫われた……ふざけやがって、あいつ等……! 私達を釣るためにファミリアに手を出しやがった!」

「……どうするつもりなの?」

「聞かなくても分かかってんでしょ、アンタ。私達の手でケリをつける」
「テイオネ……アイズ達を頼っちゃ、ダメなの?」

テイオナの言葉は、テイオネを更にイラつかせた。

「あんた、この後に及んでどこまですつとぼけてんのよ! 私達のせい
でレファイヤ達は……!」

「でも私達、ファミリア家族でしょ? もう私達、前とは違うよ?」

「っ! カーリー達の考えなんて、あんたも分かかってるでしょ! あいつ等の狙いは『儀式』! テルスキュラ闘国でやっていた、闘争のその先!」

『儀式』それは真に最強の戦士を生み出す為にテルスキュラ闘国で行われていたもの。カーリーはテルスキュラ闘国で強くなったアルガナとバーチェ。外の世界で強くなったテイオネとテイオナのどちらが最強の戦士に相応しいのかを知りたがっている。

「私達が『儀式』に応じないと、あいつ等はまた今日みたいな事を繰り返す! 何度でも、いつまでも!」
「……」

「私達の手で終わらせるしかないの。アイズ達にも……団長達に頼っちゃ、絶対にダメ」

「……分かった。アイズ達に隠し事はやだけど……これは、そういう風にしてないと、いけない気がする」

「……なら行くわよ、夜まで、誰にも見つからないように身を隠す!」
瞬間、二人の頭上を何か飛び越えようとしていた。二人が頭上に視線を向けると、そこには屋根から屋根へと飛び移ろうとしている大きな黒犬と、それに跨るバーゲストの姿があった。

「……テイオナ、テイオネ?」

バーゲストは二人の姿を確認し、屋根に着地すると、二人の方へ降りてきた。

「あんた、何で此処に…」

「それはこちらの台詞だ、お前たち、此処で何をしている？」

「…あんたには関係無いわよ」

「…お前たちの方に置いていった黒犬が三匹消えている。何があつた？」

「ロキ達に聞けば？」

「なら、一緒に戻る——」

「放っておきなさいよ！私達の事は！」

「っ!？」

「ちよ、ティオネ…！」

ティオネの怒号にバーゲストは若干たじろぎ、動きを止める。

「そもそもあんたは、他派閥の人間で、今回同行しているのは食人花の調査の為でしょ!?!なら、そっちに専念しなさいよ！私達とカーリー達の件に関わろうとするのはやめなさい！」

「…カーリー・ファミリアが、何かやったのか」

「っ!？」

つい勢いで自分の発言が墓穴を掘った事に気付くティオネ。ティオナはバーゲストに説明をする。

「エルファイ達が襲われちゃって…レフィーヤが攫われちゃったんだ…カーリー達は、私達だけで夜、造船所に来て…」

「それでロキ達から離れたのか…自分勝手だな」

「うっ…それは」

「…あんたに何が分かるのよ、あの場所を…テルスキュラ闘国を知らないアンタに、何がっ!？」

「…確かに私には何も分からない。だが、貴公らが、ロキ・ファミリアの皆を想ってこの選択をしたのは分かる」

「っ!？」

「二人がどれほどロキ・ファミリアの事を大事に思っているかも私には分からない。だが二人が皆を大事に思っているように、皆も二人の

事を大事に思っているのは、付き合いが短い私でも分かる」

「バーゲスト……」

「…ならどうするつもり？今から私達を皆の元に連れて帰るつもり？」

「生憎と先程襲撃から逃れたばかりでな、少し疲れている。それに、お前たち二人を相手に勝てる自信は私には無い…お前たちは、どうして欲しい」

「それは…」

「…あなたはもう、関わらないで。出来るなら私達がケリをつけるまでアイズ達にも接触しないで。黒犬も撤収させなさい」

ティオネがそう言うのと、バーゲストは「ふむ」と言っただけに手を当て、暫く考えたと。

「…分かった。今回の件が収束するまで、私は単独行動を取らせてもらう。アイズ達にも接触しない。黒犬も撤収させる。これでいいか？」

「えっ、いいの？」

「…どういうつもり？」

「嫌ならやめても良いが」

ティオネはバーゲストを見つめ、ため息を吐く。

「分かったわ、ありがとう。それじゃ私達はもう行くわよ」

「ああ」

ティオネは振り返ってその場を離れていく。ティオナも後に続くとうとすると…

「ああ、待て、ティオナ」

「ん？何々？」

「渡したいものがある」

バーゲストがそう言っただけでティオナを呼び止めると、ティオナに背を向け、何かぶつぶつと呟き始めた。

「よし、これだ」

バーゲストが再びティオナの方を向き、手を差し出すと、バーゲストの掌に何かがあった。

「何これ…黒い卵？」

「お守りのようなものだ」

「ふーん…」

「ちよつとテイオナ！早く行くわよ」

「はい！ありがとう、バーゲスト。またね！」

そう言つて走り出してその場を去つていくテイオナの背をバーゲストは見えなくなるまで見つめていた。

「さて…私も、準備を始めようかしら」

バーゲストはそう言つてテイオナ達とは反対方向に歩き始めたのだつた…

第十八話 演奏開演

「はあ!? バーゲストさんの黒犬が消えたあ!?!」

「う、うん…カーリー・ファミリアの使っていた宿を調査している途中で…」

ロキは調査から帰ってきたアナキティの言葉に驚愕した。

「ちよ、ちよい待ち…嘘やろ…」

「どうする。もう黒犬に頼った捜索はできないぞ。いやそれより、黒犬が消えたという事は…」

「バーゲストさんの身に何かあったかもしれん…単独行動させた人は迂闊やったか…?」

ロキは想定外の事態に混乱しながらも、一旦情報をまとめる。

「取り敢えず、カーリー・ファミリアは見つけられ無かつたんやろ?」
「う、うん…」

「…訪れたばっかの土地で上手く隠れんぼできるわけない。やっぱり、連中には協力者がおるな」

「そうなるな…全く、食人花の件も片付いていないというのに」

カーリー・ファミリアに襲撃されレフィーヤを誘拐され、そのせいでテイオナとテイオネが消えてしまい、続いてバーゲストの行方や安否も不明となり、ロキ達はかなりまずい状況に立たされていた。

「…まず、相手狙いをはつきりさせておきたいのですが」

「まあ、十中八九テイオネとテイオナ…テルスキュラ闘国の『儀式』とかいうのをやろうって腹やる。あの童女神クツチビも含めて生粋の戦闘中バトルジャンキー毒者みたいなしな。そんで、テイオネらもその誘いに乗った」

「エルファイ達が襲われた挙句、レフィーヤが攫われたのがテイオネ達に火をつけたか」

「レフィーヤ…」

アイズが攫われてしまったレフィーヤを心配する。

「テイオネらとバーゲストさんの捜索は続けるとして…連中は見つけ

次第ブツ潰す。アイズたん、斬りまくってええでー。リヴェリアも砲撃^{まほう}ブツ放したりー」

「この街中でできるわけ無いだろう…」

「そもそも、攫われているレフィーヤはどうするのよ…」

自分達が何かすればレフィーヤに何かあつてしまうのではないかと不安になるアナキティに、ロキは言う。

「こう言っちゃあれやけど、レフィーヤにはティオネらを釣る『餌』以上の価値は無い。あつちは真つ向勝負が狙いやからな。人質に取られるなんてまずありえん。まあ、土壇場になつたら何をやらかすか分からんけどな」

「その根拠は敵の求めているものが『闘争』そのものであるから、という解釈でいいんだな?」

「そーいうことや。全力で殺し合うには人質なんて、雑音にしかならへんやろ。代わりに、あつちはうちらが水を差すんを何としてでも足止めしようとしてくる筈や」

「だから思いつき張り倒せつて? コレ、もう殆ど『抗争』じゃない…」
「なあ、アイズたん、連中と戦つたんは自分しかおらんのやけど、あのボインボイン姉妹抜いたら敵の強さってどんぐらいやと思う?」

「…他のアマゾネスは、Lv. 3から、4」

その言葉を聞いたアナキティ達は困つた表情を浮かべる。

「幹部はともかく、敵の中堅はこつちより厚そうね」

「ええ、悔しいですが…」

「私やアイズを含め、武器を整備に出しているのも痛いな。予備の武器で間に合わせるとはいえ…」

「せめてバーゲストたんがおればなんとかなつたかもしれない…」

「…ああ…ロキ、渡し忘れてたんだけど…」

するとアイズはロキに何か渡すものがあつた事を思い出し、ロキに渡した。

「ん? なんやコレ、アイズたん?」

「^{マドック}街長さんの家に忍び込んで、見つけた」

「…でかした、アイズ」

アイズから渡されたものを見て、ロキはニヤリとしながらそう言った。ロキは少し席を外し、戻って来ると指示をだす。

「よし…アキ、ちよつとお使い頼まれてくれへん？」

「別にいいけど…今から？」

「ああ、至急や。やる事は全部そこに書いた」

そう言つてロキはアキに手紙を渡す。

「分かった…任せて」

アキは手紙を持って走つて出て行つた。

「他のもんは引き続き、情報収集も頼む…さて、あとはテイオネらとバーゲストたんの方やな…」

一方その頃、目が覚めたレフイーヤは拘束された状態でカーリーと対面していた。

「じゃからあ、暇潰しにちよこつと話を聞かせてもらうだけでいいのじゃ」

「……………」

「他意は無い。そんなに警戒せんでもいいではないか」

面倒くさそうにレフイーヤを説得するカーリーから一旦目を逸らし、レフイーヤは周囲を眺める。

（攫われて、目が覚めたらここに…空気が湿ってる。それに僅かに塩気も。つまり汽水湖…：ううん、海の近く？手を縛り上げているのは、ただの鎖みたいですし…千切ろうと思えば千切れそうですけど…）

「…止めておけ、お主もわかっているじゃろう？不用意に動けばここにいる者が一斉に取り押さえる」

「!!」

「小声で詠唱を口ずさもう、などという腹積もりもお勧めせん。こやつらもテルスキユラ闘国では一端の戦士じゃ」

レフィーヤの考えを読んだカーリーは余計な事をしないように忠告する。

「鼠の足音にも気付くし、詠唱は潰し慣れておる。喉を潰され、血に溺れながら碌に呼吸できないのも嫌じゃろう？」

「…っ!？」

「なに、大人しくしていれば危害は加えん。ことが済んだら、解放してやろう」

「私は、アイズさん達…ティオナさんとティオネさんを釣るための『餌』ってことですか？」

「さて、どうじゃろうなあ。お主がティオネやティオナの話を聞かせてくれるなら、教えてやらんでもないぞ？」

「だから、それは…」

「別に弱点を探ろうだとか、そういうつもりではないと言っているだろうに。妾が知らない二人の話を聞きたいだけじゃ。巢立った娘の事を知りたい、親の心境というやつじやのう」

そうカーリーは言った。姉妹の事を気に入っていたカーリーは純粹に二人が外の世界でどのように育ったのかを知りたいらしい。

「…大した話なんて、出来ませんけど…」

「よいよい。大したことのない話を聞きたいのじゃ」

「…私が知っているティオネさんとティオナさんは、強くて、明るくて、ダンジョンの『遠征』の時はいつも…」

レフィーヤは悩んだ末にやがて二人のオラリオでの様子をカーリーに話し始めた…そして…

「あっははははははははは！あのティオネが恋する乙女!?嘘じゃろう。傑作じゃー!だっはははははははははっ!!」

二人の話を聞いたカーリーは爆笑していた。主にティオネの恋バナを聞いて。

「そうか、そうか、あのやさぐれた娘が恋か…なるほど、変わってしまったものじやのう…あやつは一生鋭いままだと思っていたが、やはり不

変の神々とは違うという事か」

カーリーはなんだか嬉しそうに笑いながらそう言った。まるで子供の成長を喜ぶ親のように。

(子供を見る神の目…ロキが私達を見るような…残忍で、恐ろしい女神様だと思っていたけど…この神の、眷属への愛はきつと本物…この神の情に訴えれば、不毛な戦いも止められる?)

レフィーヤはカーリーの持つ眷属への愛情を使って戦いをやめてもらうよう説得を始める。

「あの、戦いを止められませんか? テイオナさんもテイオネさんも、きつと戦いたくないと思っています。カーリー様が、慈悲を恵んでくだされば…」

「できぬ」

「っ!」

そんなレフィーヤの希望を、カーリーはあっさりと簡単に否定し、踏み躪った。

「妾は鬭争と殺戮を求めてこの下界に降りてきた。確かに子は愛おしい、じやが唯一無二の娯楽を手放すなど嫌じや。御免蒙る」

「っ! 主神様がそんなだから、鬭国は殺し合いが絶えないんじゃないんですか!?! 沢山の人が死んでしまっうんじゃないですか!?!」

カーリーの発言にレフィーヤは憤慨し、カーリーに向かってそう吠えた。しかしカーリーは態度を変えずにレフィーヤを相手する。

「これこれ、勘違いするでない。鬭国は妾が訪れる前からあいつた国じやった。こちらの我儘で国の歴史と文化をねじ曲げようなど、それこそ神の暴挙、下界への冒涇じや。子供達からすれば業腹ものではないか?」

「それ、は…」

カーリーからの反論にレフィーヤは出す言葉を失う。カーリーの言っている事に間違いは無く、何が悪いという話になれば、一番悪いのは古くから続く鬭国の文化そのものである。

「妾は子等に恩恵を恵んでいるに過ぎん」

「……………」

「……ロキの子よ。何故、妾がテイオナ達を国から出したか、わかるか？」

まだ納得出来ていない様子のレフィーヤにカーリーは続ける。

「え……？」

「あやつ等が初めてじゃったからじゃ。テルスキュラ 闘国から出たいと具申ししてきたのは」

「！」

「来る者は拒まず、去る者は追わず……出たいというのなら妾は解放してやるとも。無論、恩恵を授けて育てやった恩……手放す見返りは頂くがのう。だが、どうじゃ。後にも先にも国を出たいと言ったのはテイオナ達だけ。他のアマゾネスは国に残り闘争の日々を続けている」

カーリーは申し出れば国から解放すると言った。だがそれでも絶えずテルスキュラ 闘国では生死を賭けた闘争が行われているという事は……

「全ては子供達の意志次第。止めても無意味というわけじゃ……妾が慈悲深い女神と勘違いしたのか、ロキの子よ？」

「……」

「子を救う久遠の灯火など、炉の女神にでも任せておけばいい。妾は他の神々と何も変わらん。下界に未知と興奮を求める、快樂主義者よ」

そう言つてカーリーはその場から去ろうとする。

「待つてくださいい！……貴方の目的は、何なんですか？」

「目的か。多々あるが、そうじゃのう。今は……」

カーリーは目を見開きながら笑い、レフィーヤに言った。

「闘争の行く末。殺戮の果てに生まれる『最強の戦士』とはいかほどのものか……それを見てみたい」

そう言つてカーリーは今度こそその場を去ろうとしたが……

「あ、そうじゃそうじゃ」

再びレフィーヤの前に戻つて来た。

「……何ですか」

「お主にはもう一つ聞かせてほしい事があつたのじゃ……お主等と一緒にいるあのバーゲストとかいう騎士。あやつは何者じゃ？」

「バーゲストさん？なんで貴方がバーゲストさんを…」

「あやつの強さは今はどうでも良い。先ほど語ったように、どのような人間なのか言ってくれば良いのじゃ」

「…嫌です、今の貴方には何も喋りたくありません」

「頼む」

「！」

レフィーヤを見つめるカーリーの顔は、真剣そのものであり、よほどバーゲストの事を重要視しているとレフィーヤは理解した。

「な、何でそこまで…」

「闘争の神であるゆえな。子の強さやその本質を見抜く事は下界に降りてからも使える妾の特技じゃ。バーゲスト…最初見た時は驚いたぞ、お主、あやつの事はどれほど知っておる？」

「い、いえ…所属ファミリアくらいしか…」

「あやつの種族も知らんか？」

「は、はい…」

「ふむ…」

カーリーはレフィーヤから目を逸らし、顎に手を当てて少し考え込むと、再度レフィーヤを見て言う。

「恐らくあやつはエルフか、それに近いものじやろう」

「なっ…」

レフィーヤはカーリーの言葉を聞いて直ぐに反論する。

「あ、あり得ません！角が生えたエルフなんて…それに、バーゲストさんは耳が長くありませんし…」

「じゃがのう…バーゲストを見た時、妾が感じたのは三つじや」

カーリーはそう言って指を一本ずつ立てながら説明する。

「一つ、太陽の力。どこの太陽神かは知らんが、あやつは間違いなく太陽の加護を得ている。恐らくは生まれた時からな」

「太陽の…加護…」

「一応訊いておくが、あやつの所属ファミリアは？」

「…ヘステイア・ファミリア、です…」

「ヘステイア？…ふっ…あつははははははは！」

カーリーはそれを聞くと何故か笑い始める。

「ど、どうしたんですか…?」

「ふふっ…いやなに、先ほど子を救う久遠の灯火など、炉の女神にでも任せればいいと言ったが…まさかその炉の女神の眷属だったとはな…」

「は、はあ…」

「さて、話を戻すかの。二つ目に感じたのは妖精、エルフの気配じやな」

「バーゲストさんが…エルフ…」

「そして最後、これは少し難しかったが…あの黒い犬を見て確信したぞ。あやつは——」

時刻は夜、それぞれが、それぞれの目的の為に動き出していた。

「行くわよティオナ…ティオナ？」

「……………」

「何よ、じっと見つめて」

「んーん。勝とうね、ティオネ」

「当たり前よ。過去なんてものが追いかけて来るなら、今日で絶対に終わらせる」

ヒュリテ姉妹は過去に決着をつける為。

「アイズさん、一報です！ナルヴィ達が——」

「——分かった。港周辺で、見張ろう。何か見つけたら、閃光弾か、魔法を空に撃つて。相手を見つけても、私かりヴェリアが行くまで、仕掛けちゃだめ」

「分かりました!」

「レフィーヤ…ティオナ、ティオネ…」

アイズ達は、仲間を救い出す為に。

「ロキ、アイズ達が情報を掴んだそうだ。港で動きがあるらしい」

「ん、決まりやな。わかった、うちもこれから漁港の方へ行く」

「本来の目的である食人花の件も片付いていない。やることが山積みだな」

「ああ、そっちはアイズ達のおかげで大体の絡繰はわかった」

「何っ?」

「あとで話すわー…ま、今回の事件に絡まತ್ತとる、『糸』の方はわからんけどなあ」

ロキは真相を暴く為に。

「来い、来い…ティオネ…早くお前の血を飲ませろ!」

アルガナは造船所でティオネを。

「瞑想か、バーチエ? 珍しいのう。早くティオナと戦^やりたいか?」

「……………」

バーチエは海蝕洞でティオナを。

カリフ姉妹は、己の宿命の相手を今か今かと待ち侘びていた。

「ふふっ、聞くまでもなかったか。妾も楽しみじゃ…宴が始まるぞ

……さあ、長い夜の始まりじゃ。——闘争の行く末、どうかこの目に

に拝ませてくれ、愛しき子供達!」

カーリーは、己の欲望を満たす為。そして……

「……………ふう…」

バーゲストは暗い路地裏の壁に寄りかかる様に座っていた。

「…ロキ様やアイズ達には悪い事をしてしまいましたわね…きつと心配してくれているでしょう…さて…」

立ち上がり、路地裏から出ると、バーゲストを月明かりが照らす。

「綺麗な満月…ティオナ達が造船所に向かっていますわね…私も向かいましょうか」

「グルルル…」

すると暗い路地裏に紛れ込んでいたのか、黒犬がぞろぞろと現れ始める。黒犬は他の路地裏からも現れ始め、バーゲストが居る場所があつという間に黒犬で埋め尽くされた。

「かなり大変でしたけれど、なんとか準備出来ましたわね…貴方達、行きますわよ」

バーゲストが歩き始め、黒犬達もそれに続き始める。

（関わるな、と言いましたわね、ティオネ。それは無理な話ですわ…騎士とは国を守り、人に尽くし、誠を誇るもの…あの盾の騎士はそう言っていた…この場で逃げれば、私は…きつと、私ではなくなってしまう。ですから…あくまでも、自分勝手にやらせてもらいますわ）

——騎士は、騎士である為に。

オラリオの西側、造船所にある魔石灯の光は全て消えており、不気味な静けさが辺り一帯を包み込んでいた。

「静かだね…」

「ええ、不自然なくらいに。きつと造船所造船所に来るように言いつけられたのと、無関係じゃない」

ティオナとティオネは暗い造船所を警戒しながら進む。

「待っていたぞ、ティオネ、ティオナ」

そんな二人の前に、共通語コイネーではなく、アマゾネスの言語で呼びかけた戦士：アルガナがいた。

「……………ここ、夜遅くでも船大工が働いている筈なんだけど、どうしたの？」

「眠ってもらった」

「レフイーヤは？」

「カーリーとバーチエのところだ。ここにはいない…お前はこの先へ行け、ティオナ。道はすぐわかる。バーチエが、お前を待っている」
アルガナはある方向を指差し、ティオナは頷くとそちらに向かって歩き始めた。

「……………ティオナ、負けるんじゃないわよ」

「…うん、ティオネも！」

「ティオネ、お前はこっちだ」

アルガナはそう言って船がある方に歩き始める。ティオネはそれに続き、やがて連れられてきたのは、ガレオン船の上だった。

「こんな船の上で戦やろうっていうの？すぐにバレるわよ？」

「見つかり方が問題ない。誰も来ることなどできないからな」

アルガナがそう言った瞬間、船が動き始める。

「船が動きだして…まさか！」

「ああ、海上の、そして即席の闘技場だ。私達の国のものより狭いが、な」

（沖まで出れば邪魔はまず入らない…どつちかがくたばるまで、勝負を続けられるってわけか…）

「カーリーの入れ知恵ね…アンタが望む『儀式』の舞台にはぴったりだわ」

船が港から離れ、沖の方に向かっていく。そしてそれを見ていた存在がいた。

「見つけた。テイオネ…それに、アルガナ。カルミリア、みんなを呼んで！私は先に行く！」

「はい！」

アイズはテイオネの方にいち早く駆けつけようとする。

「テイオネ…！」

「オオオオオオオオ！！」

「!?」

しかし、そんなアイズを邪魔する存在が現れた。

「あれって…食人花!?」

「そんな、こんな時に！」

（何で、どうして…本当に、偶然？）

まるでロキ・ファミリアに『儀式』の邪魔をさせない為に現れたような食人花は、近くにいた漁師を襲い始める。

「う、うわああああああ!!」

（こうしている間にも船が…沖に出られたら、テイオネが…!）

「た、たすけてくれええええ!!」

「っ——みんな、先に食人花を！」

アイズはテイオネの方に向かうのを断念し、先に食人花の方を対処する。すると…

「ワオオオオオオオオン!!」

「っ!」

「今度は何!？」

次に犬の遠吠えが聞こえ、アイズは遠吠えの方に目を向けると、建物の屋根の上に、人を一人乗せれそうな大きさの黒犬がいた。

「あれは…バーゲストさんの黒犬!?」

「ワオオオオオオオオン！」

黒犬がもう一度吠えようと、メレンの各所から別の遠吠えが聞こえ始める。そして…

「あ、アイズさん！黒犬達が、こっちに向かってきてます！」

「こんな数の黒犬が…」

黒犬達が港に集い、食人花へと向かっていく。

「！皆、食人花の相手は黒犬に任せて、住民の避難を優先して！私は黒犬と一緒に食人花を倒す！」

アイズは指示を出し、他の団員は住民を避難させに行く。するとアイズの隣に、先ほど吠えていた黒犬が来ると、アイズ見てしゃがむ。

「…乗れってこと？」

「ワンツ！」

「…分かった」

アイズは黒犬に跨り、食人花を見据える。

「よし、行こう…！」

「ワオオオオオオオン！」

食人花に向かって、アイズと黒犬は駆け出した。

「お、あれバーゲストたんの黒犬やん…てか数多ない？はー、バーゲストたんホンマ凄いなあ…」

「とりあえず、バーゲストは無事なようだな。姿を見せない理由は分からないが…」

「うーん…っと、動いたか。リヴェリア、ここを離れるで！」

何かが動いたのを察知したロキは、そう言っただけで動き始める。

「なんだとっ!？」

「食人花を湖に放つとる黒幕…犯人を追いつめたる。探偵ごっこや」

「この状況で、私達もか？あの食人花はどうする？」

「黒犬達もおるし、あの数ならアイズたんらだけでも大丈夫やろ。ちゆうか、あそこにみんな集まったら敵の思う壺やと思うで」

遠くで黒犬に乗りながら食人花を斬るアイズを見ながらロキはそう言う。

「ちよつと、相手にとつても予想外のことが起きとるみたいや…多分、尻尾を出す」

「今が、好機だと？」

「ああ、言い逃れできん証拠を、現場を押さえたる」

「…食人花の方はお前の言う通り、アイズ達だけでどうにかなるだ

ろう。だが、テイオネ達はとうする?」

「うちは、うちの眷属達こどもたちを信じとる。なーんも問題ない」
「……………」

「それに魔法をブツ放して街を火の海にするわけにもいかんやろ?で
きへくんで自分も言ううとつたやん。戦闘はアイズらに一任や」

「:致し方ないか。わかった。アリシア、来い!手を貸せ!」

「は、はい!……………私、ですか?」

リヴェリアはアリシアを引き連れてその場を離れていった。

「そつちはリヴェリアらに任せてと……………怪我が治ったばつかで悪いけ
ど、エルファイ達は付いてきてや!。うちの護衛おもり、頼むで」

「わ、わかりました!」

「さて……………こころが詰めやな」

エルファイ達を連れて歩き始めたロキはそう呟いた:

そしてテイオナは、アルガナの指示した通りに進んでいた。

「道はすぐわかるって言ってたけど、どういうことだろう?……………?
この匂い……………」

(知ってる匂いだ。血、ううん、闘技場の中で嗅ぎ慣れた——闘テルスキュラ国の
臭い)

テイオナは匂いがする方向に進んでいくと、やがてある場所にたど
り着く。

「ここは……………海蝕洞?なんかダンジョンみたい」

テイオナは海蝕洞の中に入っていく。

(自然にできたものに……………手を加えて掘ったのかな。もしかして、レ
フィーヤもここにいる?)

「わかんないけど、この先に進めば——」

テイオナは更に進む、すると:

「来たのう、テイオナ」

テイオナの耳にその言葉が届き、同時に視界に一人と一神が視界に現れる。

「…カーリー、バーチエ！」

「……」

(壁の上に他の戦士達も…やだな、本当に『闘技場』みたい)

「カーリー、レフィーヤは？」

「こことはまた別の空洞に捕らえておる。なに、心配せずとも解放してやろう……『儀式』の決着がついた後でな…こんな日が来るとは思わなんだ…師弟同士、ここまで成長した姿で闘争を迎える時など、な」

そう言うときカーリーはテイオナの胸を見る。

「まあ、片方の胸はあまり成長しておらんが…」

「だから体の話はするなあー！」

カーリーがテイオナを茶化し、テイオナが憤慨しているとバーチエは静かに構えた。

「…構えろ、テイオナ。死合え」

「…戦わなきや、駄目？」

「何を今更抜かしておる、テイオナ」

「私、バーチエと殺し合い、したくないよ…」

テイオナにとってバーチエは自分に本を読み聞かせてくれた存在だ。バーチエがそれをしてくれたから、テイオナは今のテイオナになつたとも言える。

「……お前に本を読み聞かせたのは、間違いだったな……」

「……バーチエ、また強くなつたんだね…Lv. 5の戦士を…エルネアを殺したの？」

「ああ。アルガナはベルナスを…そして私達はLv. 6になつた。問答は終わりだ…戦わざるをえなくしてやる」

そう言つてバーチエは左腕を上げる。

「【^食テイ・^殺アストラ】…【ヴェルグス】」

詠唱を唱えると、バーチエの左腕を紫色の液体が覆う。

「左腕を覆う、バーチエの付与魔法…！属性は——『猛毒』！」

「アルガナが『蛇』だとすれば、バーチエは『毒蟲』。彼奴の魔法こそ、『蟲毒の王』を名乗るに相応しい武器よ」

『ころーせつ！ころーせつ！ころーせつ！』

周囲のアマゾネス達が、ティオナとバーチエに向かってそう囁し立てる。

「っ…！」

「逃げられぬぞ、ティオナ。逃すものか。熱狂と興奮、雄叫びは血を呼び、この石棺を唯一の闘技場に変える。ふはははっ！さあ、始まりじゃー！」

カーリーがそう言い、バーチエがティオナに襲い掛かろうとした瞬間。

ピキッ…！

「！」

バコンツ！と音が響き、海蝕洞の壁から鎖が飛び出してくる。

「えっ、えっ!?何、なんなの!?!」

突然の事態にティオナが驚いていると、鎖はティオナに巻き付き、ティオナを引っ張って海蝕洞の壁に縫い付ける。

「何であたしがこんな目に!?!」

「あの鎖…まさかつ！」

「ほう…?」

「——その勝負、私が預かった」

突然、ティオナが入ってきた方から声が響く。その場にいる全員がそちらを見ると…

「ば、バーゲスト!?!」

「突然何だと思っっているだろう。だから簡潔に、分かりやすく言うてやる」

バーゲストはティオナ、バーチエ、カーリーを見てこう言った。

「彼女を倒したければ、まずは私を倒していけ！とな」

——どうぞ皆様ご観覧。今宵は太陽と月のデュオ。

——しかしどうかご注意を。

——今宵は黒犬が吠える時。

——皆様の望む演奏は、遠吠えで掻き消されるでしょう。
——もしそれがお望みなら、どうぞ今宵は楽しんで。

第十九話 演奏閉演

「彼女を倒したければ、先ずは私を倒していけ!とな」

海蝕洞に突然現れたバーゲストは、カーリーやバーチエに向かって
そう言った。

「……………」

「くくつ…いきなり来て何を言い出すかと思えば、馬鹿げた話じやの
う。ティオナを倒したければ先ずはお主を倒せ? 一体どういうつも
りじゃ?」

バーチエがバーゲストを睨みつけ、カーリーは少し笑いながらバー
ゲストに問う。

「言っただろう、勝負は私が預かったと。ティオナと『儀式』をしたけ
れば…私とバーチエがその『儀式』をして私を倒せば…今繋がれてい
るティオナを解放しよう」

「はっはっは! 意味が分からんぞ、今は夜…お主に味方してくれる太
陽はおらんぞ…?」

カーリーがそう言うのと周囲のアマゾネス達が降りてバーゲストに
近付く。

「ふっ…」

バゴンツ!!

バーゲストが突然地面を力強く踏みつけると、地面に亀裂が走り、
その亀裂は近づこうとしたアマゾネス達の足元に及び、アマゾネス達
はそれを見てたじろぐ。

「ほう…」

「太陽が無いから…何だ?」

バーゲストがそう言うのと、背後から黒犬達が現れる。

「こちらの要求を呑むなら、私も鎧を脱ぎ、素手で戦おう。だが、もし
そうならない時は…」

「後ろの黒犬共々、お主の相手をせねばならんと……………」

カーリーは目を細めてバーゲストを見据える。ティオナやアマゾネス達は緊張した様子で行く末を見守っていた。

「お主、そもそも何故この場所が分かった？」

「それは…【目覚めよ】」

「…？え、なにになに？」

バーゲストが唱えると、ティオナの懐がモゾモゾと動き、黒い卵が出て来て地面に落ちる。すると…

「キシヤアアア！」

地面に落ちた瞬間に卵が割れ、黒い靄が溢れ出すと、中から小さな蠍のモンスターが現れる。

「うえええええ!? バーゲストから貰ったお守りが、蠍に〜!?」

「落ち着け、それは私の眷属…この黒犬と同じだ。さて、これで分かっただろう、女神カーリー」

「なるほど、それを頼りにお主はティオナを尾けてきたと…鎖といいその召喚魔法といい、中々器用なことをするのう」

「それで、私の要求は呑んでくれるのか？」

カーリーは「ふむ」と言って考え始める。

（受ける必要は無い。黒犬達はこの場にいる者たちで十分対処出来るじやろう。しかし…）

カーリーはバーゲストをジツと見る。

（今のあやつ、太陽が無くても普通に強そうじゃな。何故じゃ？何か他のスキルが働いているのか？とにかく、あれの相手はバーチェにしか出来そうにない。それにバーチェの話では、アレはまだ隠し玉を持っている…）

「…：…いくつか聞きたいことがあるのじゃが？」

「何だ？」

「お主、本気でバーチェに勝てると思っておるのか？しかも殴り合いで」

「さあな、この先の勝敗なぞ分からんが…私は勝てると思っている」

「ふむ…なら、何故ここまでする？お主はティオナ達とは違う派閥の者じやろう。何が狙いじゃ？」

「狙い…？ふむ…私が私であるため、だろうな」

「なんじゃそれ!?あつはつはつ！……じゃが、その言葉に偽り無し…それにお主には個人的興味もある…良かろう。バーチエ、すまんが彼奴の相手をしてやれ」

「カーリー、それは…！」

「バーチエ、殺すとしたら此奴とテイオナ。どちらが良い？」
「!!」

「もしかしたら、テイオナを殺さずに済むかもしれんぞ？」

「…分かった」

バーチエも納得したところでバーゲストが鎧を脱いでいく。剣と盾を捨て、鎧の下にあった服が露わになる。

「ば、バーゲスト！」

「テイオナ、申し訳ありません。勝負がつくまでは鎖に縛られたままですわね」

「いや、それより何で来たの!?ていうか約束と違うじゃん！」

「単独行動をすと言っただけです。アイズ達とも接触させていませんし、黒犬も一度は撤収させました。約束は全て守っています」

「そういうの屁理屈って言うんだよ!?バーゲスト、お願いだからこの鎖ムグツ!？」

テイオナの口を鎖で塞ぐと、バーゲストはバーチエの方を向く。

「待たせてしまったな。では、始めるとしよう」

「……」

バーチエはバーゲストの言葉を聞いて静かに構え、バーゲストも構えた。

【ディ・アスラ食い殺せ】……【ヴェルグス】

バーチエが詠唱し、左腕が毒に覆われていく。

「…【鎖は我が猟犬達、我が敵を捕らえる牙となれ】【チエーン・ハーディング】」

バーゲストもそれに対抗する様に詠唱し、鎖が腕に巻き付き、スキルを使って炎を付与する。

「いくぞっ…！」

「来い、バーチェ・カリフ!!」

一方その頃、ヘスティア・ファミリアのホームである教会の地下では…

「やるじゃないかベル君! いやあ、君がケンカをして帰ってくるなんて意外だなあ…」

ボロボロになって帰って来たベルやヴェルフをヘスティアやリルカ、アルトリアの3人が手当していた…

「仕方ないですよ、ベルさんの性格上。自分の事ならともかく、ヘスティア様の悪口を言われたんですから」

「そういうお前もバーゲストの悪口言われて若干キレてたじゃねーか イテツ!?!」

「何か言いましたかヴェルフ?」

「え、バーゲスト君の悪口?」

「そうなんですよヘスティア様!! アイツら、バーゲストさんの事を角が生えてて気持ち悪いとかなんとか訳分かんない事言ってたんですよ!?! アイツら絶対いつか私の武器の実験体にしてやる…!」

「落ち着いてください、アルトリア様…バーゲスト様ならきつともつと穏便に事を済ませた…いえ、あの方も手を出しそうな気が…とにかくベル様が怪我を負うような事にもならなかったでしょう」

「…:…:そっか、でも、やっぱリケンカは良くないぜ。こんな怪我までしてるじゃないか」

「だって、あの人達…バーゲストさんだけじゃない、神様の悪口まで言っただけです。それを聞いたら思わず…」

「……君がボクの為に怒ってくれるのは、とても嬉しいよ。でも、それで君が危険な目に遭う方が、ボクは悲しいな」

「神様……」

「それに、バーゲスト君だって、この事を聞いたら自分の所為でベル君が傷付いたーって自分を責めると思うな」

「そんな、コレは僕が勝手に」

「ベル様がそう思っても、バーゲスト様はご自身を責めますよ」

「リリ……」

リリルカはヴェルフに薬を塗りながら続ける。

「あの人は自分が強いと分かっているから、自分より弱い人を護らなければならぬと必死になっているんです……失礼ですが、ベル様の實力はバーゲスト様には遠く及びません……バーゲスト様からすればベル様は仲間であり、守るべき人なのですから」

「そうだぞーベル君。バーゲスト君がミノタウロスと戦う君の事をどれだけ心配していたと思っているんだい？一休みしたら眠っている君の近くにずっと居たんだぞ、彼女……それに、中層の事でも説教喰らったよね？」

「それはヘステイア様も同じではなかったでしょうか？」

「あ、あはは……」

ヘステイアは引き攣った笑顔を見せながら説教された時の事を思い出していた……

「アルテミス様の様に戦う術を持つ神ならともかく、戦いとは全く無関係なヘステイア様がダンジョンに潜るとはどういう事ですかっ!!」

「だ、だって、ベル君達が心配で……」

「まずは自分の心配をしてくださいっ!!ヘステイア様が送還されれば、ベルは更に危険な目に遭っていたでしょう!!私も、今回の依頼を果たす事は出来なかったでしょう!!」

「う、うう……」

「ベルが心配なのは分かります、ですが私もヘステイア様の事が心配なのです……もしヘステイア様に何かあったら、私は、私は……」

「ご、ごめんなさい……」

「うわー…大変そうだな、ヘステイア…」
「ヘルメス様、あなたにも話があります」
「マジかよ」

「…うん、ボク、もう絶対バーゲスト君の説教は喰らいたくないな…」
「まあ、バーゲスト様はヘステイア様の事が大好きですからね」
「え？」

「あ、それ私も思いました。凄く大切に思っているのが少し見ただけで分かりましたもん」

「確かに、ヘファイストス様も、バーゲストを見て何か安心してたな確か…「あの子が眷属でヘステイアは幸せ者ね」って言ってたな」

「幸せ者…：そうだね…：とにかく…：今度は笑い飛ばしてやってくれよ。僕の神様は、そんなことで怒るほど器の小さいやつじゃない、つてね」

「…：はい、次は我慢します…：」

ベルがしよんぼりした表情でそう言い、ヘステイアは頷いた。

「でも、相手方の反応は気になります。逆恨みをしてこなければいいのですが…」

「相手はどこだい、サポーター君」

「アポロン・ファミリアです」

「何だつて？」

そのファミリアの名を聞いた瞬間、ヘステイアが顔を顰める。

ヘステイア・ファミリアでそんな会話が あった頃、バーゲストと

バーチエは死闘を繰り広げていた。

(……ステータスでは……勝っている……恐らくレベルが上がりたてのせいで身体にズレが生じているが……鎖でその差をカバーしている……しかし……妙だ)

バーチエが感じている違和感を、闘争を見届けるカーリーも感じていた。

(やはりおかしいのお……ステータスが昼間とは違うが……総合力なら今の方が上か？力は下がっている様に見えるが、その他のステータスが昼間の時より高く感じる……ふむ……)

バーチエとカーリーが冷静に分析している時、バーゲストは内心少し焦っていた。

(勝つつもりですが……持久戦は不味いですわね……今の私は海蝕洞の外にいる黒犬達も含めたワイルドルールのスキルによつてステータスを大幅に上げた状態……)

そう、バーゲストがなぜ夜にも関わらずここまで戦えているのか。それはバーゲストのスキル、ワイルドルールの効果によるものであった。

(黒犬達が多いほど私のステータスが上がる……しかし裏を返せば、外にいる黒犬達の数が減っていけば私のステータスは元通り……早く決着をつけないと……！)

「……お前、焦っているな？」

「!!」

肉弾戦を繰り広げる中、バーチエが突然そう言う。

「動きを見れば分かる、お前はこの戦いを早く終わらせたがっている……私の毒のダメージを気にしている訳では無いな……ならば、やはりそのステータス、何らかのスキルの力か？」

(気付くの早すぎですわ……!?)

「おかしいと思った、もし私がお前なら、陽が昇るまで時間を稼ぐ、そうすれば勝算が高くなる……しかしお前はその選択をしない、いや、する事が出来ない……それはつまり、陽が昇るまで耐え切る自信が無いという事だ」

「意外と饒舌だな」

「ああ、私は興奮すれば饒舌になる夕チなんだ…何が言いたいかわかるか？」

「何だ？」

「お前との闘争、想像していた何倍も良い…！私はお前を糧とし、更なる力を手に入れる…!!」

バーチエはそう言って猛攻を仕掛ける。バーゲストは炎を纏った鎖で牽制しながら応戦した。

「私が、短期戦を望んでいるとつ、分かりながらつ…付き合ってくれろのかっ!？」

「ああ、お前が何の言い訳も出来ない勝ち方をしてこそ意味がある…！私の毒を炎で弱めているとはいえ、効果が薄すぎるな…対異常か？」

(…天蠶、まさか対異常を少し備えていたなんてね…嬉しい誤算ですわ…)

「ならば…コレはどうだ…！」

バーチエの毒が左腕から全身に広がっていく。

(嘘つ、バーチエの毒…昔は左腕だけにしか…)

「…全身に纏えるのか？」

「昔は左腕だけだったがな…私の魔法も全身を覆えるほど強くなつた…鎧…とまではいかないが、私の魔法は相手に痛みと苦しみを強いる」

(攻守一体…猛毒の鎧…毒が蓄積すれば私の身体も無事では済みませんが…簡単な話ですわ…)

「用は、貴様が倒れるまで毒に耐え続けなければいいのだろうか？短期決戦は、私から望んだ事だっ!!」

バーゲストは臆せずバーチエに立ち向かい、拳を突き出すが、バーチエは少し屈む様に避けてバーゲストの懐に入ると、強烈なアップーカットを入れる。

「ぐっ…!!」

「む…」

(痛い…咄嗟に炎で弱めましたが、大分毒を貰いましたわね、今は…それに…)

(先程より明らかにキレが無い…それに少し柔かった…やはりステータスが先程より下がっている)

「しかしっ!!」

「っ!」

バーゲストはそれを気にせずバーチエ拳を振るう、バーゲストの右ストレートをバックステップで避けたバーチエに、右腕から鎖が伸びる。

「ハアッ!」

「ぐっ…」

右腕を引くと同時に左腕を引つ張られたバーチエの顔面に叩き込み、バーチエは吹き飛ばされながらも受け身を取る。顔を上げてバーゲストを睨むと、ペットと血を吐いて再び近付く。

全身に火を纏うバーゲストに全身に毒を纏うバーチエ。二人の闘争は更に激化していく。

「くっ…くくく…!」

カーリーは目の前で行われる闘争を見て心躍らせていた。

(バーゲストが乱入してきた時は少し残念じゃったが…それは間違いじゃったか…!こんなにも素晴らしい闘争を目にする事が出来るのはもう…!しかし…それもここまでかの…)

「ぐうっ!!」

「どうした、もう終わりかっ!」

時間が経てば経つほど、バーゲストのステータスが下がっていく。外にいる黒犬達はかなりの数を減らしていた。

「…ぷはあっ!」

テイオナが頭を何度も振り、自身の口を塞いでいた鎖を外すと、カーリーに叫ぶ。

「カーリー!今すぐ闘争をやめさせて!カーリー達の狙いは私でしょ!?バーゲストは何も関係無い!」

「ダメじゃ、もう今は無関係では無い。あやつは自分から命を賭けて

この闘争に割り込んできた。それにせつかくここまで面白くなつたんじゃないか、最後までちゃんとやり切らねば面白く無くなってしまうのではないか」

「カーリー……！くっ……バーゲスト、今すぐこの鎖を解いて！私が戦うからだからー！」

「黙れ、テイオナ！」

「っ……バーチェ……」

「今、コイツは私と戦っているのだ。己の全てを賭けて……！私とコイツの戦いに、お前が割り込む余地は無い！」

「その通りだっ！勝手に割り込んだ身で申し訳ないが、私は私の為に、この戦いから、逃げる訳にはいかん!!」

「バーゲスト……！けどっ、それじゃ……！」

「いい加減にしろ、テイオナ……それがバーゲストのした選択じゃ、この闘争においてお前はただの観客じゃ、選手に野次を飛ばすでない」

「っ……どうして……他のファミリアの……私の為に……そこまで……」

「他のファミリアだから、何だ!?!」

「っ!?!」

「私は、テイオナの事を友だつ、思っている!!テイオナはっ、違ふのかっ!?!」

「バーゲスト……！」

「バーチェと戦いたく無かったのだろうか？苦しんでいる友をつ、私は見捨てる事などっ、出来んっ!!理由など、それだけだっ！」

「うわ、今の言葉に嘘が無いとか、マジか」

カーリーは少し引いた感じでバーゲストを見る。テイオナは瞳に目を溜めてバーゲストを見る。

「お喋りとは、余裕だな!!」

「ぐふっ……！」

「まだだっ!!」

バーチェの蹴りがバーゲストの腹部に命中し、バーゲストは怯むと、バーチェは更に顔にスト레이트を叩き込み、バーゲストが仰け反る瞬間に頭を掴み、勢いよくバーゲストの頭を自分の方に振り下ろ

し、それと同時に脚を曲げ、膝を上げてバーゲストの顔面に膝蹴りをかます。

「があっ…」

「バーゲスト!!」

「コレで、終わりだっ!!」

ティオナが叫び、よろけたバーゲストにバーチェは回し蹴りを繰り出し、それはバーゲストの横顔に叩き込まれバーゲストは横に吹き飛ばされて壁に激突した…大きく土煙を上げてバーゲストの姿が見えなくなってしまう。

するとティオナを拘束していた鎖が消える。

「ハアツ…ハアツ…ぐふっ…」

「あ…バ、バーゲスト…」

「最後の方はもう炎で毒を弱める事すら出来ておらんかったな。お主の拘束も解けたし、これは決まったかの」

ティオナは膝を着いて震えながらバーゲストが吹き飛ばされた方を見ており、カーリーは黙って様子を見ており、バーチェも息を整えながらバーゲストが飛ばされた方をずっと見ていた。

(おかしい…)

バーチェには確信があった。戦いはまだ終わっていないという確信が。

(ティオナを縛っていた鎖が、アイツが死んで消えたのなら…)

バーチェはチラリと横目である存在を見る。

(何故あの黒犬は消えない…!)

そう、黒犬達は未だ健在、それはつまり…
バリツ…

黒犬の長は、まだ息があるという事だ。

「っ!?!」

バーゲストが居る土煙の方から何か飛んできたのを確認したバーチェは咄嗟にそれを避けると、それはバーチェの後ろに居たカーリーに向かっていく。

「カーリーー!」

ドゴオン!!

「……ほう」

飛んできた物体…黒い大剣をカーリーの頭の直ぐ横を通って壁に突き刺さっていた。

それを確認したバーチエは直ぐにバーゲストの方を見る。

ジャラララ…

「フウウウウウウ…」

ズシリ、ズシリと、重たい足取りで少しずつ土煙から出て来たのは、鎖を地面に引き攣らせている、先程までと雰囲気明らかに違う角が片方だけのバーゲストだった。

「バーゲスト…!」

「その姿、昼間に一瞬だけ見えた、あの時の…!」

テイオナの表情が明るくなり、バーチエが昼間にバーゲストを襲った時に起きた事を思い出している…

「くくく…あっはっはっはっはっは!!」

『!?』

カーリーが突然高笑いし、その場にいるバーゲスト以外の人物が驚く。

「ふ、ふふ…なんじゃお前、太陽の加護なんぞ持っておる癖、本性はそれか!! 実に面白いのう! お主は太陽の下で戦う崇高な騎士などでは無い! 夜に紛れて獲物を狩る恐ろしい獣そのものよ!! 三つ目の気配が、こんなものとはな、はっはっは!!」

「カーリー…何を…なっ!?!」

バーチエが動揺していると何本もの鎖がバーチエに向かい、バーチエは何度も避けるが、余りの数の多さに捕まってしまう。そしてバーゲストはバーチエを自分の方に引っ張り…

「アッ、アッ!!」

「ガッ…!!」

勢いよく近付くと同時に特大の頭突きをかました。

(あ、頭が…揺れ…る…)

バーチエが定まらない思考の中でバーゲストの姿を捉えると、バー

ゲストは右腕に鎖を何重も巻き付け、それに黒い炎を付与していた、周囲に赤雷が走り、バーゲストはゆっくり右腕を引き…

(ま、不味い…早く、動かなくて——)

バーチェの記憶は、そこで途切れた。

「フウツ…フウツ…！」

バーゲストは息を荒げながら、倒れ伏すバーチェを見下ろす。右足を上げ、バーチェの頭を踏み潰そうとした瞬間…

「バーゲスト、ダメツ!!」

「っ!!」

ドゴオン!と地面が割れる音がする。バーゲストの足は、間一髪でバーチェから逸れて、直ぐ横の地面を踏みつけていた。

「……………」

そこからバーゲストはゆっくりとカーリーの方へ歩いていく。直ぐに周囲のアマゾネス達が動こうとするが。

「よい、動くな」

「しかし」

「動くなと言っておる」

アマゾネス達は動きを止め、行く末を見守る。やがてバーゲストがカーリーの前に立つと、手を伸ばし…

カーリーの顔の直ぐ横に突き刺さっているガラティーンを引き抜いた。ガラティーンは小さくなり、角に戻るとバーゲストは角を頭に

戻す。

「……私の勝ちだ、バーチエはもう戦えん……『儀式』はここで終わりだな」

バーゲストはカーリーに静かにそう告げた、しかし……

「いや、まだじゃ。『儀式』は相手の命を奪うまで続く……先ほどティオナが邪魔をしなければ、『儀式』は完了だったんじゃがのう……」

「……私に、バーチエを殺すつもりは無い……」

「そうか……ならば、お主を闘^{テルスキユラ}国に連れて帰る」

「……何？」

「バーゲスト、お主の事が欲しくなった、お主ならば、必ずや妾が求める存在へそう『最強の戦士』へと……!」

「成れんき、私は……」

「――」

「私は……『戦士』では無い……私は……『騎士』だ……強くあるのは……自分の為では無い……大切な……人の為だ……だから……わたし……は……」

ドサリ……

「バーゲストっ!!」

そこまで言ってバーゲストは地に倒れた。直ぐにティオナが駆け寄り、バーゲストを抱き抱える。

「……で、あるか……」

「ティオナ!!」

「あ、アイズ!!」

「ウチもいるで……何やティオナ、案外無事や……って、バーゲストたん!?!ボロボロやん!?!え、どゆこと!?!」

ティオナの居場所を突き止めたアイズとロキが海蝕洞に入ってくる。アマゾネス達が直ぐに戦闘を始めようとするが……

「やめろ、お主ら」

「カーリー……」

「もう良い……残念ながら、此度はコレでしまいじゃ」

アマゾネス達はその言葉を聞いて拳を下ろす。

「え、何? ホンマ何があったん?」

「ロキ！それよりも今は早くバーゲストの治療を！」

「せ、せやな！アイズたん、ポジション！」

「分かった！」

「お主らも、早くバーチエを治療してやれ」

「わ、分かった…」

こうして、ロキ・ファミリアとカーリー・ファミリアの抗争は幕を閉じたのだった…

「……知らない天井ですわ…いや、よく見たら泊まっている宿の天井ですわね…」

バーゲストは目が覚め、窓の外を確認すると、なんとも気持ちのよい日差しが部屋に差し込んでいた。

「…っ…ふう…まだ所々身体が痛いわね…しかもなんだか身体が重…ん？」

バーゲストが違和感を覚えて、ふと自分にかけられた布を捲ると…

「……え、」

ロキ、ニヨルズ、カーリーは、今回起きた抗争の事や食人花の事で話していると、カーリーは絶望した感じの表情を浮かべていた…理由は、アルガナが救援に来たフィンに倒されてフィンの事を好きになったり、他のアマゾネス達もガレスとかにやられて皆恋する乙女となつてしまい、以前の様な牙がすっぽり抜けてしまった為である。

「やっぱ雌なんじゃなーあやつらも…もう皆使いものにならぬわ…」
(うわっ、死んだ魚みてーな目をしてる…)

「ま、自業自得やなく…取り敢えずコレで『儀式』も無くなりそうやし、テイオネラの心残りもこれで大丈夫やな」

「うう、妾の樂園が……大体……っ！」

カーリーはプルプルと震え、机をバンツと叩きながら立ち上がる
と、ある方向を指差す。

「妾が一番ふざけんなって思ったのアレなんじゃが!？」

「…うん、ウチもアレはマジで分からん」

「だな、どうしてそうなつたって感じだ」

三神がそう言いながら見つめる方向には…

「いや、だからその、私達は女同士で…」

「騎士とはお堅いのだな、こつちでは当たり前だぞ」

バーゲストに必死に迫るバーチェと、苦笑しながら丁寧に対処する
バーゲストの姿があった。

「嘘吐けバーチェ!!アマゾネスの女が女を好きになるなぞ闘テルスキュラ国どころか世界規模で前代未聞じゃぞワレエ!!」

「そうはならんだろ…」

「なつとるやろが…い…」

そう、何故か、本来ならアマゾネスは自分を負かした異性にしか恋愛感情を抱かない筈が、バーチェは何故か同性のバーゲストの事を本

気で好きになったようで、コレにはカーリー達もビツクリ。「起きたら速攻でバーゲストのいる宿に向かって夜這いならぬ朝這いをした。反省も後悔もしていない」との事である。

「いや〜…けど百合ってええなあ、ウチも間に挟まったりしてみたい…」

「それやったら多分お前天界に帰る事になるぞ」

「え、ウチってそ百合の間に挟まる男れと同じ粹なん？」

「うん」

「これからどうすれば良いんじやあああああ!!」

「バーゲスト、これから一緒にお昼でもどうだ」

「テ、テイオナ達も一緒なら…」

まあ、変な感じになったが、これにて閉演…太陽と月のデュオは黒犬の遠吠えで掻き消されたがそれが好きだという人も、居たのだから。

第二十話 神の宴

「おかしいな…」

バーゲストを見守り続ける神は、馬車に乗ってオラリオに戻っていく。バーゲストを見てそう言った。

「…：やっぱりおかしい…：僕がこの世界にバーゲストの身体を入れる際に、身体的な要素を幾つか改変した筈…：なのに…」

神はバーゲストを観察する中で疑問に思った事を調査していた。

「…：身体の構造、人間に寄せて作った筈なのに…：これは間違いなく妖精^{エルフ}…：原作に近いバーゲストの身体になっている…：手違いが起きた…？いや…」

神はバーゲストが映っている画面を横にスライドすると、アルトリアが映る画面に切り替わる。

「…：もしかして、何かあるのか…？」

神は暫く画面をジッと見ながら考え込む。

（何も無ければ良いけど…：彼の身体が原作に近い状態のままなら…：アレも残っているかもしれない…：どうしたものか…）

「神^{パーテイ}の宴？」

「そう！何かアポロンが何時もとは違った面白い感じにするってさ…：バーゲスト君も行かないかい？」

無事（バーチエに引っ付かれるのを何とかして）オラリオに帰還してホームに戻り、送ってくれたロキがヘステイアと喧嘩を始め、両者を宥めながらリヴェリアがロキを連れて行った後、ヘステイアから言われたのはそれだった。

「なるほど…必ずファミリアのメンバーを最低でも一人、最大で二人までを連れてくるように…ですか…」

「そうそう！ちよつと断る訳にもいかないし、どうせなら皆で行こうよ！」

「そうですね…分かりました。ではドレスの準備もしなければいけませんね。ペペ殿の店に行かなくては…」

「いやいや！バーゲスト君は帰ってきたばかりなんだからゆっくりしててくれ！どうせペペならサイズ把握してるし、ボクが行ってくるよ！ペペが選ぶドレスなら間違い無いだろう？」

「そうですねよ！バーゲスト様も向こうで大分無茶をしたようですし、ゆっくりしてください！」

「そ、そうですね…分かりました…今日は休む事に専念します」

ヘステイアとリルルカに言われてバーゲストはホームでゆっくり休む事にしたのだった…

ヘステイアとリルルカがペペの店に行ってしまった、ベルと二人きりでホームにいる事になってしまった。

「えっと…何があったんですか？凄いいぼろぼろになったって聞きましたけど…」

「そうね…フィン団長殿の気持ちが少し分かった気がするわ…」

「？」

「ベル、貴方も気をつけなさい。アマゾネスというのはね、自分の恋に命を賭けてるのよ」

「ホントに何があったんですか!?!」

「バーゲストさん!!盾壊れたって聞きましたよー!!」

ベルが困惑した所でアルトリアが地下にやって来た。

「アルトリア？確かに盾が壊れたから、時間がある時に持って行くこうと思ったのだけれど…誰から聞いたの？」

「ロキ・ファミリアの人が伝えに来ましたよ」

「気を使わせてしまったかしら：お礼を言っておかないと…」

「取り敢えず盾は持っていていきますね。明日はパーティーに行くから探索は無しですよ？明後日、ダンジョンの前で渡しますから！」

「ええ、ありがとう。直ぐ壊してしまつて申し訳ないわ」

「大丈夫ですよ！何個かの切り傷と凹みくらい、ちよちよいのちよいですから！」

アルトリアはバーゲストの盾を持って去つてしまった。暫くベルと話して時間を潰していると、ヘステイアとリルルカが帰ってくる。

「戻ったぞー！バーゲスト君のドレス、凄く良いのが手に入ったよ！」

「ええ、流石ペペ様ですね。試着しなくても絶対に似合うと分かるドレスでした」

「そこまで言うなんて：どんなドレスか見せてもらつても？」

「ふふふ…これだっ！」

「……え…」

バーゲストはヘステイアが出したドレスを見て絶句した。

そして迎えた神の宴当日：

ベルもきちんと正装にして来たが、初めて着る服に慣れないのかソワソワしており、その隣に立つバーゲストは逆に堂々と佇んでいた。

「似合つてるぜ、ベル君、バーゲスト君！」

「あ、神様…」

そこにヘステイアが合流し、二人の姿を見てうんうんと頷く。

「そんなに緊張しなくても大丈夫さ、ベル君」

「あ、そ、そうですか…」

「ヘステイア様も、良く似合っていますわ」

「ふふ、ありがとうございますバーゲスト君。君のドレス姿も最高だぜ」

(いやまあ…それもその筈…このドレス…)

バーゲストはチラリと自分の着ているドレスに目を向ける。

(バーゲストの第二再臨のドレスですもの…やっぱりペペ殿は何か見えているのでは…)

まさかの第二再臨ドレスが用意され、びっくりしているバーゲストがそんな風に考えていると、ミアハとナーザの二人が近寄ってくる。

「本当にすまんなヘステイア。服も馬車も、何もかも手配してもらって」

「何、ナーザ君の為さ。偶には贅沢も必要だよ」

「ありがとうございます。ヘステイア様」

「タケミカツチ達も、もう着ている頃だろう。そろそろ行こうか！」

「あ、はい！」

「分かりました」

そうしてミアハ達と共に会場に入ると、真っ先に声をかけて来る神が現れる。

「お、ヘステイア、ミアハ！ベル君達もいるじゃないか！」

ヘルメスはヘステイア達を見かけて近付いてくると、タケミカツチも一緒に居た。

「相変わらず騒々しいなヘルメス…まさかタケも一緒に居たとはね」

「別に好き好んで一緒に居た訳じゃ…」

「水臭いぜタケミカツチ！俺たちベル君の救出作戦と一緒に当たった中じゃないか〜！」

「おいやめろ暑苦しい！」

肩を組んでくるヘルメスをタケミカツチを引き離すと、ヘルメスはベル達の前に移動する。

「うん！命や千草ちゃんも素敵だが、三人とも決まってるじゃないか。だが見てくれ！ウチのアスファイも中々だろう？」

そう言つてヘルメスが手を向けた方向には白いドレスを着たアス

ファイが居た。

「や、やめてくださいいヘルメス様。本気で殴りますよ…」

「照れてるアスファイも可愛いぜ…」

ヘルメスがアスファイの耳元でそう呟いた瞬間…

ドゴンツ!!

つと音が聞こえ、ヘルメスは吹き飛ばされて壁に激突してしまつた。すると…

「諸君！今日はよく足を運んでくれた！」

「お、主催のご登場だ」

（神ヘルメスは何故無傷なのでしょう…）

壁に激突したのも何も無かつたかの様にしてに声がする方に視線を向けたヘルメスにバーゲストはちよつと引きつつ、バーゲストも声がする方に視線を向けると、会場の上の方から一柱の神と三人の眷属が姿を見せた。

「あの方が…アポロン様…」

「はい、そのようです」

（アレがアルテミス様の兄であるアポロン様か…それである男が団長のヒュアキントス…ベルを散々痛めつけた男ね…）

「今日は私の一存で普段と趣向を変えてみたが、気に入ってもらえただろうか？日々可愛がつている子供達を着飾り、こうして宴に連れ出すというのも、また一興だろう」

「いいぞーアポロン！」

「名調子！」

参加した神々が今回のパーティーの趣向について讚えると、アポロンは小さく頷く。

「多くの同族、そして子供達の顔を見られて、喜ばしい限りだ。今宵は、新しき出会いに恵まれる。そんな気さえする…」

アポロンは会場を一望すると、ベルとバーゲストに視線を向ける。

「！」

ベルも何か勘づいたのか無意識にアポロンから視線を外す。バーゲストもアポロンをジツと見つめ、何かを考えていた。

「さあ夜は長い、皆存分に楽しんでいってくれ!!」

皆がそれぞれパーティーを楽しんでいる中、ベルとバーゲストは他の神と話しているアポロンに視線を向けていた。

「アポロンと話したいのかい?」

するとそこにヘルメスが現れ、二人に話しかける。

「あ、いえ、神様とちよつと挨拶をつて思つて…」

「ですがヘステイア様は料理に夢中ですからね…」

「アポロンとは、天界の頃から付き合ひがあるんだが、面白い奴だよ。特に色恋沙汰の話題が尽きなくてねえ…なあ、ヘステイア!」

「モグモグ…知らないよ!!」

(何かあったのでしようね…それにしても、先程ベルだけでは無く私にまで視線を向けた気がしましたが、まさか…)

「後はそうだなあ…執念深い」

「え、それつて、どういう意味…」

ベルがヘルメスに聞き返そうとした所で、会場が騒がしくなる。何があつたのかと視線を移動させると、女神フレイヤとオツタルが会場に現れていた。

「おー、これまた大物が来たなー!」

「あの方は…」

「聞いた事はあるだろう? フレイヤ・ファミリアの主神、フレイヤ様だ」

「フレイヤ様…」

「では横の男性が、オラリオ最強の冒険者…オツタル」

(いや、多分私一度会っているのだけれど)

二人に視線を向けていると、ヘステイアがベルの背中に飛びついてくる。

「わわっ!?!」

「見るんじゃないベル君、バーゲスト君も！子供達が美の神を見ると、たちまち魅了されてしまうんだ！」

「ヘステイア様、分かりましたのでベルから降りてくださいい…」

ベルとヘステイアがそんな風に騒いでいると、フレイヤが気付いて近寄ってくる。

「久しぶりねヘステイア。ミアハ、タケミカツチもお元気かしら？」

「あ、ああ、まあね…」

「よ、よお…」

「そなたは今宵も美しいな」

タケミカツチが照れ、ミアハがそう言うのとそれぞれ自分の眷属から尻を抓られている。するとフレイヤはベルに近付いて頬に手を添える。

「今夜、私に夢を見せてくれないかし「見せるかー!!」」

フレイヤの手をヘステイアがベルから離れさせ、ベルに迫る。

「君も何赤くなってるんだベル君！この女神は男と知れば手当たり次第食べてしまう奴なんだ！君みたいな奴なんか一瞬で取って食われ…」

「貴女でも良いのよ？」

「ご冗談を、女神フレイヤ、私なんぞに貴女の相手は務まりません。ですの…あの、ヘステイア様…」

「何バーゲスト君にも手を出そうとしてるんだお前はー!!」

ベルに話している間に今度はバーゲストの頬を撫でていたフレイヤからバーゲストを救出するヘステイア。フレイヤに対して歯を見せて唸っている。

「残念だけど、ヘステイアのご機嫌を損ねてしまったようだし、もう行くわね」

そう言つてフレイヤをオツタルを引き連れて離れていった。すると…

「此処におったんかドチビ」

その声と一声で更に不機嫌になりながらヘステイアは振り返ると、そこにはロキとアイス、そしてアナキティが居た。

「アイズさん…」

「いつの間に来たんだよ君は！音もなく現れて地味な事この上ないな！」

「うっさいボケ！文句ならフレイヤの色ボケ女神に言えや！ウチらの登場シーン全部持っていきおつてからに!!」

そこからロキとヘスティアはまた喧嘩を始めてしまった。

「ちよ、ちよつとロキ…!」

「放っておいて構いませんわよ、アキ。何時もの事なのですから」

「え、あ…うん…」

「それよりも、ドレス。似合っていますわよ。流石ロキ様、自分の子の事はよく分かっているのでしょうね」

「あはは…ありがとうございます。バーゲストも凄く似合ってるわよ」

「ありがとうございます…ん?」

「ボクのベル君の方が可愛いんだ!!」

「何やと!?ウチのアイズたんの方が可愛いわ!!」

何故か倒れそうになっているベルはヘスティアが抱きしめながら今度はベルとアイズどちらの方が魅力的かで口論している二神。

「はあ…お二人とも、その辺りで。いつもの様に喧嘩するのは構いませんが、ベルとアイズを巻き込まないでください」

「お、バーゲストたん…うおつ、デッ…エツ…」

(今この人変なこと言おうとしましたわね)

「あかん、鼻血出そう…めっちゃ似合つとるで、バーゲストたん!」

「ありがとうございます。ロキ様も大変お似合いですよ」

「むふふーバーゲストたんに褒められた…」

「勿論、アイズもとても似合っているわよ」

「あ、ありがとうございます…その、バーゲストも、似合ってる…」

「ありがとう」

「よし！バーゲストたんと話したら気分も良くなったわ！ドチビに何か言われん内に行こか、二人とも！バーゲストたんも来る?」

「ふざけるな！君なんかにはバーゲスト君を「お誘いいただき光栄ですが、それはまた別の機会に致します」モゴモゴ…!」

「そっか、じゃまた後でな…あ、そうそう」

歩き去ろうとしたロキは振り返って再びバーゲストとヘステイアを見る。

「近いうちにフィンとか連れてそっちのホームに行こうと思っとるけん、そのつもりでおってや」

「フィン団長を…？分かりました」

「ん、ほんじゃさいなら〜」

ロキ達は今度こそ去っていき、バーゲストはヘステイアの口から手を離す。

「ぶはあ！全く、ロキの奴め…それにしても、近いうちにまた来るなんて…まさかまた何か頼む気じゃ…」

「かもしれないですね…一先ず、今はパーティーを楽しむとしましょう。ベルはいつまでアイズの後姿を眺めているのかしら」

「え、あ、すみません」

「むむむ…おのれヴァレン何某…！」

取り敢えずバーゲスト達も、今はこのパーティーを楽しむ事に専念するのだった…

「フレイヤ様、一つ訊いてもよろしいでしょうか」

「何かしら、オツタル」

時間経ち、話しかけてくる人物も居なくなつたところでオツタルは、フレイヤに質問をした。

「何故、あの騎士を誘ったのですか？あの者については警戒していた筈…」

「そうね…今思えば、少し危険だったかもしれないわ」
「危険…？」

「魅了が効きづらかったから、少し気になつたのよ…彼女、おかしいわね…確かに心は私に魅了されていたけれど…身体の方が反応しない

のよね…それに…」

フレイヤはバーゲストの頬に触れた右手を見つめる。

(触れた瞬間、あの子の魂の奥にある何かが動いていた…まるで…彼女が私に魅了されていく程に、表に出てこようとする…もし…ヘスティアが止めなかつたら…)

「いけないわね、好奇心だけで動く…これからは好き勝手に動くのは少し控えようかしら」

「是非、そうしてください」

「ふふふ…ん？」

するとフレイヤの視界にベルとアイズがペアで踊っている景色が入り込んでくる。その瞬間、フレイヤの心に何か黒い感情が湧き上がってきた。

「オツタル。ここにミノタウロスの群れを連れてこれないかしら？」

「不可能です、フレイヤ様」

「ぬおおおおお！アイズたん！バーゲスト以外のドチビの子と何やっとなるんやー！」

「私なら良いのですか…？」

「やめるんだベル君！おのれヴァレン何某く!!」

ベルとアイズが踊る姿を見てヘスティアとロキはアスフイの両脇に抱えられながら叫んでいた。

「後でどうなっても知りませんよ、ヘルメス様…」

「何、覚悟はしてるさ……っと、バーゲストちゃんは踊らないのかい？」

「誘ってくださる方がいないものでして」

「お、なら俺が「いえ、ヘルメス様は結構です」あ、そうですか…」
(折角だし、踊ってみたいのだけれど…私、ダンスの経験は無いですし、リードしてくれる方…身長差がありすぎるとダンスしにくいと聞

きますし、ここは…)

バーゲストはこの場でちゃんと自分をリードしてくれる身長差があまり無い人物の元へ向かう。

「あら、さつき振りね。ヘスティアの騎士さん？」

「はい、先程はきちんとした挨拶も出来ずに失礼致しました。私、ヘスティア・ファミアの一員であるバーゲストと申します。以後、お見知りおきを、女神フレイヤ」

バーゲストが向かったのはフレイヤとオツタルが居る場所だった。

「ご丁寧にどうも。知っているとと思うけれど、自己紹介しておくわ。私は美の女神フレイヤ、彼は私のファミアの団長、オツタル。よろしくね」

互いに自己紹介を済ませたところで、フレイヤが「さて」と言う。

「会いに来たという事は何か用件があるのかしら？もしかしてさつきの誘いを受けてくれるのかしら？」

「フレイヤ様…」

この人さつき自分で接触は慎重にとか危険って言ってたのに何でまた突っ込もうとするんだ…そうオツタルが思っていると、二人にとって意外な言葉がバーゲストから返ってきた。

「いえ、貴女様の寵愛は私には勿体無きもの…それに今回は、オツタル殿に頼みがあつてきたのです」

「俺に…？」

「はい。私、このような場は初めてであり、折角なので踊りたいのですが、私にダンスの経験は無いので、しっかりリードしてくれそうなオツタル殿にリードを頼みたいのです」

「ふーん…なるほど、確かに貴女の体格じゃオツタル以外の人だと手に余るわね…良いわ、オツタル、しっかりリードしてあげなさい」

「しかし、フレイヤ様…私には貴女を守る役目が…」

「あら、折角の誘いを無碍にするの？彼女、こんな場所に来るのは初めてだそうよ？思い出作りの手伝いくらいしてあげなさい」

オツタルは若干納得して無い感じだったが、少し考えると…

「…分かりました」

「それで良いわ。私の顔に泥を塗る様な事が無いようにね」
「はい…それでは」

オツタルはバーゲストの正面に立ち、手を差し出す。

「私と一曲、踊っていたただけるだろうか」

「ええ、喜んで」

バーゲストは少し微笑みながらその手を取った。

ヘステイアとロキは激怒した。必ず、かの邪智暴虐（そんな事は無い）の猛者から^{オツタル}バーゲストを取り戻すと決意した。

「うおおお!!何でや、バーゲストたん!どうして色ボケ女神のこの奴とおおお!!」

「ベル君に続いて君までえええ!!ボクも二人と踊りたいよおおお!!」

「へ、ヘルメス様…」

「はは…この後大丈夫かな、俺…」

しかし二人はアスファイに抱えられ動けない。するとフレイヤがそこに現れる。

「ごめんなさいね二人とも、あの子を横取りしちゃって」

「こんの色ボケ女神い!!バーゲストたんが何でアイツと踊つとるんやあー!」

「まさか、まだ狙っているのかい!?!やめるんだ!二人は僕の大切な眷属なんだぞ!!」

「仕方ないじゃない。あの子からオツタルにリードして欲しいって頼み込んできたんだから…それとも、二人の身長で彼女をきちんとリード出来るのかしら?」

「ぐ、ぐぬぬ…」

「ははっ、確かに、彼女をリードするなら適任なのは彼だろうね」

ヘステイアとロキは悔しげな表情を見せ、ヘルメスはフレイヤの言

葉に賛同する。二人とも背が高く、特にバーゲストの方は角があるため非常に目立っているが、周囲からは「意外だが違和感が無い」「お似合いのペア」等の言葉が聞こえていた。

「ふふ、お似合いのペアだそうですよ、私達」

「…不本意だが、どうやらそうらしい。しかし、初めてにしては筋が良い。緊張もしていないようだ。これならば次からは誰と組んでも問題無いだろう」

「ありがとうございます。これもオツタル殿がしっかりリードしてくださるお陰ですわ」

「…そうか」

（相手が女性の方でしたら絶対緊張していたでしょうね…オツタル殿が居てくださって助かりましたわ…それにしても…こうして近くで見ると…）

「凄い身体ですわね…」

「何か言ったか？」

「いえ、お気になさらずに」

（危なかったわ、つい言葉に出てしまった…しかし本当に凄い身体ね…服越してもはつきり分かるわ…私も筋肉には自信がありますが、これほどのものでは無いわ…本当に…凄い…いけない、集中しないと…やはり少し緊張しているのかしら、私…）

「…ん？」

フレイヤは踊っている二人を微笑みながら見続けていると、何か変化を察知する。

（彼女の魂が動いている…また奥にあるものが表に顔を見せようとしているわ…けど…さつきとは逆…さつきは心が反応していたけれど、今度は身体が反応している…反面、心に反応は無い…これは…）

フレイヤの魅了に反応したバーゲストの心。そしてオツタルと踊っている時に反応したバーゲストの身体。フレイヤがこの差について考えようとするが…

(…先に踊るのを止めた方が良いかもしれないわね…)

フレイヤがそう思い、二人に声を掛けようとした瞬間…

「諸君、宴は楽しんでいるかね!」

唐突にその声が聞こえ、それと同時に曲が止み、ダンスが止まる。声を出した人物…アポロンは、階段を降りて真っ直ぐベルの方へ歩いて来る。すると会場の明かりが消え、ベルとバーゲストにスポットライトが当たる。

「!オツタル殿はフレイヤ様の元へ…って、もういないですわ…」

バーゲストがフレイヤの方へ目を向けると、暗い中、フレイヤの横にオツタルは居た。バーゲストはベルの方に向かい、隣に立つと、アポロンも二人の正面に立つ。

「…ムッフフ…」

「ヒイ…!?!」

「ベル、落ち着いて、アイズ。貴女は離れていなさい」

「う、うん…」

アポロンが気色の悪い笑みをベルとバーゲストに向け、ベルの背筋に悪寒が走る。バーゲストはそんなベルを落ち着け、近くに居たアイズを遠ざけた。

「二人とも!」

ヘステイアが慌ててベル、バーゲストとアポロンの間に割って入る。

「やあヘステイア。先日は私の子供達が世話になったようだねえ?」

「あ、ああ…ボクの方こそ…」

「私の子は君の子に重傷を負わされた。それなりの代償を要求したい」

「はあ?どういう事だい?ベル君だって怪我をして帰って来たんだ! そんな一方的な話が…」

「これを見ても言えるのかな!?!」

アポロンがそう言って自信の背後に手を向けると、その場がスポットライトで照らされ、包帯を全身に巻き、松葉杖を突いている小人が現れる。

「痛え！ちよー痛えよおー!!」

「なっ!?!」

「べ、ベル君？本当にこんな…」

「してませんしてません!」

「やるとしても私ですわね」

「バーゲストさんはするんですか!?!」

「先に仕掛けたのはそちらだと聞いている。証人も居る。言い逃れは出来ない!」

そう言うのとパルウムの背後にアポロン・ファミリアのメンバーが得意げに現れる。

「嵌められたな…」

外野に居たタケがそう呟き、ヘステイアは焦った表情を見せている。

「冗談じゃない!こんな茶番に付き合っていていられるか!行くぞ、二人とも!」

「ほーう?どうやっても罪を認めないつもりか、ヘステイア?」

「くっ…」

「ふっ…ならば仕方ない!アポロン・ファミリアは、君に戦争遊戯ウオーゲームを申し込む!」

「っ!!」

『うおおおお!!』

アポロンが宣言した瞬間、会場に居た神々が一気に湧き上がる。

「待ってました、戦争遊戯!」

「容赦ねえなあ、アポロン!」

「逆に見てみたい!」

周囲から次々とウオーゲームを求める声が響き、ヘステイアは顔を更に顰める。そしてアポロンは更に続ける。

「我々が勝ったら…君の眷属、ベル・クラネル及びバーゲストを貰い受ける!!」

「はあっ!?!」

アポロンからの要求にヘステイアは絶句。外野のロキもベルなら

ともかくバーゲストの事になるとキレそうになっている。

「ダメじゃないかヘステイア〜！こんな可愛い子達を独り占めしちゃあ〜」

「最初からそれが狙いか、変態め！」

「ふざけんやアポロン！バーゲストたんをお前にやるくらいならうちのファミリアにモゴモゴ〜！」

「ロキは黙ってて〜！」

乱入しそうになったロキをアナキテイが慌てて止める。アポロンはそんなロキも気にせず話す。

「酷い言い草だ。天界では、愛を囁き合った仲だろうか？」

「嘘を言うな嘘を！ボクは速攻でお断りしただろうが！…とにかく、こんな茶番に乗るわけないだろ！ウォーゲームなんか受ける義理は無いね！」

「ほう…後悔するぞ？」

「するものか！行くぞ、二人とも！」

「あ…はい！」

「……」

ヘステイアが真っ先に振り返って去っていき、ベルもそれに慌てて続く。バーゲストはアポロンの方に軽くお辞儀をしてから二人を追うのだった…

第二十一話 騎士行進

神の宴でアポロンからの宣戦布告を拒否したヘステイア達は、翌日、ホームでいつもと変わらぬ朝を過ごしていた。

「戦争遊戯ウォーゲームって確か「ファミリア」同士の決闘、でしたよね」

「ああ。ルールを取り決めた上でぶつかり合う総力戦さ。勝った方は負けた方の全てを奪う……団員からお金から、何から何までね：アポロンめ、ウチのファミリアに居るのが二人だけと分かっててあんな手を……」

ベルとバーゲストはダンジョンに行くための準備を済ませ、ヘステイアと共に階段を登る。

「今日はダンジョンを潜ったら、真っ直ぐ帰って来ましょうか、バーゲストさん」

「ええ、そうしましょうか：ん？」

「うん、ボクもバイトを早く切り上げ……って、バーゲスト君？どうしたんだい？」

「……外にアポロン・ファミリアがいます」

「え!？」

「本当かい!？」

バーゲストは地下から上に上がり、教会の中からスンスンと匂いを嗅ぐ。

「昨夜、黒犬達を予めホームの警護にあたらせておいて正解だったわね……黒犬達が危険を知らせていますし、教会を囲むように人の匂いがあります……どうやら神アポロンは、是が非でも私とベルの事が欲しいみたいですわ」

「ぐぬぬ……アポロンめ……」

「ど、どうしますか？大人しくホームの中に籠ってます？」

「いえ、不自然に思われて教会に魔法でも放たれたら堪ったものじゃないわ……ヘステイア様、ここから選ぶ道は三つです」

「なんだい?」

「先ず、アポロン・ファミリアとの戦闘は必須ですわ。そこからの行動が肝心です。この状況を終わらせる為の選択肢に先ず一、ギルドに逃げ込む。二、アポロン・ファミリアのホームに行つて戦争遊戯ウォーゲームを受ける。三、この場に集つたアポロン・ファミリアを壊滅させる」

「…バーゲスト君はどれが良いと思う?」

「二ですわね…ギルドに逃げ込んだところでその場凌ぎにしかありません、それにこの場でアポロン・ファミリアと派手にやり合えば私達もギルドからペナルティを受けるかもしれません。こうなつてしまつてはもう、真正面からやり合うしかないと思ひますわ」

バーゲストの言葉にヘステイアは考え込み、ベルは不安そうな表情でそれを見守っている。

「…バーゲスト君は、アポロン・ファミリアとの戦争遊戯…勝てると思つているのかい?」

「勝てます」

「!」

バーゲストの即答にヘステイアは目を見開く。

「私とベルでしたら、必ず」

「…分かつた…けれど、一先ずギルドに向かおう」

「ギルドに?」

「バーゲスト君を信じたいけれど…ボクは戦争遊戯を受ける事は出来るだけ避けたい。何かあるか分からないし…その場凌ぎでも良いから、一旦ギルドに行つて落ち着こう」

「…分かりました、では、少々お待ちを」

「ヘスティア・ファミリア：早く出て来い……っ！」

ヘスティア・ファミリアのホームを包囲する部隊の指揮を取っているアポロン・ファミリアのエルフ、リッソスはベル達がホームの扉から出て来るのを待ち構えていた。

するとホームの扉が開き始め、魔導師に魔法を放つ合図を送る為に手を挙げると……

「う、うわああああ!?!」

「っ、どうした!?!」

「こ、コイツらがいきなり……!」

リッソスの後方に居た魔導師達は突然黒犬の奇襲を受け、準備していた魔法が解除されてしまう。

「な、何だこの黒い犬どもは……まさか……!」

リッソスはホームの方に振り返ると、既にベルとヘスティアを乗せた黒犬と、バーゲストを乗せた黒犬がホームから離れ始めていた。

「くっ、気付かれていたのか……! 奴等を追え!」

「ワオオオオオオオン!!」

「なっ……」

「リッソス！教会から黒犬達が……こっちに向かってくる!」

「ぐっ……おのれ、ヘスティア・ファミリア……!」

「先ずは順調だな、このままギルドに向かうぞ」

「はい!」

「えっとなつと……次は右だ!」

ヘスティアが地図を見ながらギルドの最短ルートを示す。道が狭まり、建物の壁と壁に挟まれながら黒犬は疾走する。

「この黒犬達なら、アポロン・ファミリアの人達も追いつけないですよね?」

「追いつけはしない。だが、アポロン・ファミリアは我々がギルドに向かう事を予測し、ありとあらゆる場所で待ち構えている筈だ、例えば

…」

その瞬間、上から矢が迫り、バーゲストは瞬時にそれを剣で弾く。

「早速出て来たな」

「ちよつと何よあの犬、聞いてないんだけど!?」

「だから言ったのに〜!」

バーゲストが屋根の方に目を向けると、アポロン・ファミリアの一員であるダフネとカサンドラが複数の団員を引き連れながら屋根伝いに追ってきていた。

「鎖は我が猟犬達、我が敵を捕らえる牙となれ」〔チェーン・ハーディング〕

「弓兵、黒犬の脚を止めろ!」

アポロン・ファミリアの団員達が弓矢を放つが、バーゲストは当たりそうな矢を鎖で弾き、黒犬達はどんどんダフネ達を引き離す。しかし…

「二人とも!前にもいるよ!」

「つ!邪魔だ!」

「ファミリア・ボルト!」

バーゲストは前に現れた敵に対して剣先を向け、炎を放ち、ベルも魔法を放った。しかし…

「!サラマンダー・ウール…!」

前方に居たアポロン・ファミリアの団員はサラマンダー・ウールを身に纏っており、二人の攻撃を防がれてしまう。黒犬も脚を止め、ベル達は再び包囲される。

「ヘステイア・ファミリアの団員は二人とも炎を扱って聞いたから、サラマンダー・ウールを用意してたんだけど、どうやら正解だったみたいね」

屋根の上からダフネが脚を止めているバーゲスト達に対してそう言う。

「ふん、しっかり準備してきたのだな、少し感心したぞ」

「感心している場合かいバーゲスト君…!ここからどうするんだ…!?!」

「……(私が足止めして二人を逃す……いえ、ダメね……私が足止めするならヒュアキントス……彼を足止め出来ればベルだけでもヘステイア様を連れてギルドに行ける……恐らくリリ達も向かって来ている筈……ならばこの場合は……強行突破するしか……!)」

バーゲストが剣を握りしめ、ベルに指示を出そうとした瞬間……

「ふん、随分と小賢しい真似をしてくれたようだが、それもここまですか？ヘステイア・ファミリア」

「なっ……!?!」

「!ヒュアキントスさん……!」

なんとバーゲスト達の真正面に立っていたサラマンダー・ウールを身に纏う部隊の後ろから、ヒュアキントスが現れる。

「どうする？私としてはここで貴様らの腕を一二本は切り落としても良いのだが」

「ちよつと、やめなよヒュアキントス……大人しく降伏してくれない？私達もこれから仲間になる子に手荒な真似はしたくないんだけど」

「それは……って、バーゲストさん？」

喋ろうとしたベルをバーゲストが手で静止する。バーゲストは頭の中で思考を巡らせていた。

(何故ここにヒュアキントスが……?出て来るのはもう少し後だと思っていたのだけれど……いえ、落ち着きなさい。むしろこれは好都合。匂いの多さからしてもアポロン・ファミリアの戦力が大分ここに集まっている……それに)

バーゲストは空に目を向けると、太陽の光を遮ろうと雲が動いていた。

(この後、暫くは太陽が見えなくなる。そうなれば聖者の数字は使えなくなる。ベルならこの後出てくるソーマ・ファミリアの団員にも対処出来る筈だわ、なら……!)

「ベル!ヘステイア様!!黒犬にしっかり掴まれ!!」

「っ!!?」

二人はバーゲストの言葉に驚きつつも、言われた通りに黒犬にしがみ付く。

「はわあっ！ベル君がボクを覆い被さるように！」

「す、すみません神様！」

「いくぞっ!!」

「えっ、ちよ、うわあああああああ!!」

バーゲストが二人の乗る黒犬に鎖を巻き付けると、思いつきり上に引っぱりあげ、二人はギルドの方へ飛んでいく。

「ば、バーゲスト君！君はっ!?!」

「私は後で合流します、二人は早くギルドに！」

「っ…絶対合流するんだぞ！次会ったら説教だからなー!!」

ヘステイアがそう叫びながら遠ざかっていくのをバーゲストは少し見つめ、そして正面に立つヒュアキントスを見据える。

「ふん、無駄な足掻きを…」

「ヒュアキントス、私達は「リトル・ルーキー」を」

「構わん、奴は後で良い。それより、コイツを先に潰す方が後から楽だ」

「ほう、吠えたな【太陽の光寵童】ポエプス・アポロ 貴様らに私の相手が務まるのか？」

「吠えたのはどちらだ、Lv. 2になったばかりの分際で…やれお前達!!」

ヒュアキントスの号令により、バーゲストに向けて一斉に矢や魔法が放たれた。しかし、バーゲストはそれを物ともせず、ヒュアキントス達に立ち向かう。

しかし、バーゲストはこの時自分が取った選択が間違いだっただけは、今は知る由も無かった…

「バーゲストさん、大丈夫でしようか!?!」

「信じるしかない……！助けに戻るにしても、ボクが居るんじやベル君の邪魔になる。早くギルドに向かうぞ、ベル君、黒犬君！」

「はいー！」

「ワンー！」

あの後着地したベルとヘスティアはギルドに向けて黒犬を全力疾走させていたが、再び目の前に冒険者達が現れる。

「っ！あれば……？」

しかし、よく見れば服にあるファミリアのマークがアポロン・ファミリアのマークでは無い事にヘスティアが気付くと……

「キャウンー！」

「ぐっ！」

「うわっ!?!」

二人を乗せた黒犬の身体に矢が突き刺さり、黒犬は倒れ、二人は投げ出される。ベルがヘスティアを抱き抱えて着地する。

「神様！大丈夫ですか!?!」

「う、うん……けど、バーゲスト君の黒犬が……」

バーゲストの黒犬は最早走れそうな状態では無く、ベルはヘスティアをお姫様抱っこする。

「べ、ベル君!?!」

「神様、しっかり掴まってくださいー！」

ベルはヘスティアを抱えながら冒険者達を避け、突破し、ギルドに向かう。

「よし、この調子なら……！」

「ああ、ギルドに……っ!?!」

狭い脇道を走り抜け、追手を蹴散らし、撒きながら進むと……ガシャリ……と音がした。

「っ！」

ベルは足を止めると、少し先にある曲がり角から音の正体は現れた。

「ベル君……！」

「神様、退がってください」

ベルはヘステイアを下ろして退がらせると、目の前に現れた存在を見据える。それは、体格はバーゲストに並び、重厚な鎧を全身に身に纏い、剣と盾を持っていた。その存在は、ある世界ではこう呼称している。

—— 肅正騎士と。

「……………」

肅正騎士はゆっくりとベルの方へと歩み、そして…

「……………っ、ぐっ!?!」

素早く上から剣を振り、そして素早く下から上へと切り返す。ベルは最初の一撃目はなんとか防いだが、次の二撃目を防ぎきれず、胸に切っ先が及ぶ。

「ベル君っ!!」

(強い…！夢であつたあの騎士ほどじゃ無いけど、物凄く…！)

その後も肅正騎士はベルに剣を振るい、ベルは防御だけで手一杯で反撃出来ず、防戦一方になる。

「くそっ【ファイア・ボルト】！」

「……………」

ベルが下がって魔法を放つが、肅正騎士はそれを盾で防ぎながらベルに接近し…

「がはっ…！」

ベルにシールドバツシュを喰らわせ、建物の壁に叩きつけると、ベルは血を吐き出しながらダラリと座り込んでしまう。

「はあっ…はあっ…」

「ベル君！しっかりするんだ、ベル君！」

ヘステイアがベルに駆け寄ると、ベルは血だらけでボロボロになっており、もう戦えそうに無い。そして肅正騎士が二人に近づこうとする…

「…！」

突如、遠くに立っている塔の方から肅正騎士に矢が三本迫り、騎士はそれを盾で防ぐ。そして二人から一旦距離を取ると……

「おい、面白そうな事をやっているな?」

その言葉に肅正騎士が動きを止め、振り返ると、そこにはタケミカヅチ・ファミリアの桜花、命、千草の三人が居た。

「三人とも、どうして此処に……」

「無事か、ヘスティア、ベル……は、無事そうでは無いな……」

「ミアハ!という事は、今の狙撃はナーザ君か!」

ミアハがベルにポジションを浴びせると、ベルの怪我が治っていない。

「うう、み、皆さん……」

「ベル殿!……ここは自分達にお任せください!」

「ああ、お前達は先に行くのだ」

「け、けど……!」

ベルは自身を完膚なきまでに叩きのめした肅正騎士を相手すれば皆が無事じゃすまないと思ひ、この場から離れるのを躊躇う。

「ベル様!」

「大丈夫か!」

「リリ、ヴェルフ!」

そこにリリとヴェルフの二人が現れる。肅正騎士はベルの方に向かおうとするが、ナーザの狙撃が放たれ、咄嗟にそちらを防ぐ。

「行って、ベル……!」

「ベル様!……ここは皆さんに任せて、行きましょう!」

「……分かった。皆さん、気をつけてください!」

ベル達はその場を離れ、肅正騎士が追おうとするが……

「どこをつ!」

「見ているつ!」

桜花と命が肅正騎士の背後から左右に切り掛かると、肅正騎士は背後を見ずに斧を盾で、刀を剣で受け止め、押し返す。

「ぐっ……!」

肅正騎士は既に見えなくなったベル達の方を少しだけ見つめると、

振り返り、桜花達へと構えた。そんな肅正騎士にナーザは再び矢を放とうとした瞬間……

「…っ!？」

ドゴオン!!と音が響き、ナーザが居た塔の頂上部分が崩れる。

「ナーザ!!」

ミアハがナーザの方へと駆け出すと、崩れていく塔の一部に紛れてナーザが落下していくのが見えた。

「今のは……」

「千草殿、見えましたか!？」

「うん…今のは、魔法じゃない…今の攻撃は…弓矢…!」

「ナーザさんの居た塔が……!」

「心配だが、今は自分の事で精一杯だ!先を急ぐぞ、ベル!」

「…うん!そういえば、アルトリアさんは?」

「あの人はバーゲスト様の方に向かいました。直した盾を届けに行ってくつて」

「そつか…っ!皆、来るよ!」

ベル達の前方に冒険者達が現れ、戦闘態勢に入る。リルルカが後方でヘスティアを守りながら、ベルとヴェルフを前に出して突破していると、ヘスティアは倒した冒険者達のマークを見る。

「…やつぱりだ」

「神様?どうしたんですか?」

「サポーター君、コレを見てくれ」

「?何ですか…っ!?!こ、このエンブレムは……!」

「ああ…ソーマ・ファミリアだ」

「!おいおい、ソーマ・ファミリアって……」

「リリの所属ファミリア…?どうしてソーマ・ファミリアが、アポロン・ファミリアと一緒に僕達を……」

「ここに居たか、アーデ」

『っ!!』

襲つて来たのがソーマ・ファミリアだと判明し、何故ソーマ・ファミリアが襲つてきたのか不思議に思っていると、屋根の方から声が聞こえ、ベル達はそちらを向くと、そこにはメガネを掛けた男の冒険者が居た。

「ザニス様…」

「元氣そうで何よりだ。お前は死んだと、聞かされていたからなあ」

「リリ、あの人は？」

「…ソーマ・ファミリアの、団長です…ザニス様、なぜです…なぜアポロン・ファミリアに協力をつ!!」

ザニスはリリルカの問いに冷静に答える。

「依頼されたのは勿論だが、我々には、この争いに参加する理由がある」

「理由…?」

「お前を取り戻すためだ、アーデ」

「っ!」

「リリを、取り戻す…?」

「お前はかけがえのない同胞だ、他のファミリアに奪われたままにはしておけん。正義は、我々にある」

「そんな…私のせいで…?」

「おいリリ助! あんな奴の言葉を真に受けるな!」

「安心しろアーデ。お前を騙し、脅し、利用してきたヘステイア・ファミリアは間もなく壊滅する…」

「なっ! 僕はリリを騙してなんか…」

「黙れ【リトル・ルーキー】! 貴様が何と言おうがアーデは我々のファミリアに帰ってきてもらう。その為に、お前達へステイア・ファミリアは邪魔なのだ!」

「っ…」

リリルカは考える。どうすれば良いのかを、ベル達がソーマ・ファミリアの襲撃を受けない為には…

「まあ、しかし…大人しくアーデをこちらに差し出すのならば、我々が

お前達と争う理由は無くなるなあ?」

「っ!!」

「サポーター君、ダメだよ」

「…ヘスティア、様…」

「君、今自分を犠牲にしようとしただろ」

「……」

「嘗めるなよ、ベル君も、バーゲスト君も、半端な気持ちで君を助けたんじゃない。あり得ないけれど、君がここで犠牲になる事があったら、ベル君もバーゲスト君も、君を助けに行くだろうね」

「……」

リルルカにとって、ベルとバーゲストは自身を救ってくれた命の恩人だ。その恩人に傷ついて欲しくないのは当然だ。しかし…

『僕、リリだから助けたかったんだ。リリだから居なくなつてほしく無かったんだ』

『お前を虐げる全てから、お前を守ろう…だから、これからも私達の為に、頑張つてくれるか?』

あの時、二人は何故、自分を助けたのか、リルルカは思い返す。

「さあ、アーデ?どうする?」

「…私は…」

「リリ…!」

「私は…帰りません…!」

「…聞き違いか?もう一度言ってほしいのだが…」

「っ…ですから、リリは…もう、ソーマ・ファミリアには戻りません!!」

「リリ…!」

「よし!よく言つたりり助!」

「…本気が、アーデ?」

「ええ、本気です!リリの居場所はもう、ベル様やバーゲスト様のお側だどリリが決めたんです!私はもう、ソーマ・ファミリアに戻りたくありません!ですから、私の事は諦めてください!!」

「……そうか、残念だ、アーデ…お前がそこまでヘスティア・ファミリアに毒されているとは…」

ザニスはそう言うと言指を鳴らす。すると…

「なっ…!?!」

「おいおい、ふざけろ…!」

ベル達の居る道の脇道から、ベル達を前後挟む様にして肅正騎士が4人現れる。

「少々痛い目に遭わなければ…お前の目を覚ます事は出来ないようだ…」

「そんな…」

「悲しいが、コレもお前のためだ…行け」

ザニスの言葉で肅正騎士達が、ベル達へと歩みを進み始めた…

「…!あの塔…」

ナアーザの居た塔の頂上が崩壊した頃、バーゲストはアポロン・ファミリアの殆どを一人で受け持っていた。

(魔法の光は見えなかったわ…一体何が…それに…)

バーゲスト自身を囲んでいるアポロン・ファミリアの冒険者達の数を見て疑問を抱く。

(数が多すぎる。いつの間にかホームを囲んでいた部隊もいるし、変ね…何か嫌な予感がする…)

バーゲストの中に、少しずつ不安が生まれていく。それは動きにこそ出ないが、バーゲストは直ぐにこの場を離れてベル達と合流したがつっていた。すると…

「バーゲストさん!」

「アルトリア!何故此処に…」

「他の二人はベルさんの方に行ったので、私だけでもって…盾です!」
アルトリアから盾を受け取ったバーゲストは、直ぐにそれを装着す

る。アルトリアも杖を構え、アポロン・ファミリアと向き合っている。と…

「ちっ…しぶとい奴だ…それに援軍も来た…おい！アレはまだか？」

「もう来たってよ」

「なら良い、今すぐ出せ」

(アレ…？一体何を…っ!?)

バーゲストは『アレ』と呼ばれるものが現れた瞬間、思考が一瞬停止した。

(肅正…騎士…!?何故、アレがオラリオに…!?)

「ば、バーゲストさん、あの騎士、何か凄く強そうですね…」

バーゲスト達の目の前に現れた肅正騎士は三人。いずれも槍斧を持っており、バーゲスト達に向けている。

「…何だ、その騎士達は？」

バーゲストは今までとは違い、明らかに動揺した様子でヒュアキントスに問う。

「これか？コレはゴーレムだ。最近アポロン様が仕入れてな、それなりの額はしたそうだが性能は折り紙つきだ…癩だが、私よりも強い」
「だね、多分さっきの塔を崩壊させたのもコレの仕業でしょ？一体どこでこんな作ったんだか…」

「まさか…！」

バーゲストはギルドに向かったベル達の方を向くと、表情に焦りが見え始める。

「ば、バーゲストさん？」

「アルトリア、今すぐここを離れてベル達と合流っ!!」

ガギンツ!!

バーゲストが話していると肅正騎士達は動き出し、バーゲストは肅正騎士達の攻撃を防ぐ。

「アルトリア、行けっ!!」

「け、けど、バーゲストさんが…！」

「私に構うな！ベル達が危険かもしれん、頼む！」

「っ…！」

アルトリアは苦虫を噛み潰したような表情を浮かべながらバーゲストに背を向けて、走り出した。

「リッソス、お前達は奴を追え！」

「了解」

「待てっ、ぐうっ……！」

バーゲストは肅正騎士三人の連携攻撃と、他の冒険者の攻撃によりアルトリアの援護が出来ない。

（どうする、角を抜く!? けれど、この状況で街に被害を出さない自信が無い! けど……!）

「迷っている暇は、無い……！」

バーゲストは角を引き抜き、ガラティーンを構える。

「ひっ、ダフネちゃん、アレ……！」

「自分の角を引き抜いて……剣にした……!?!」

「ふん、全くどこまでも気味が悪い……アポロン様は何故このような輩を……」

「貴様等の事なぞ、どうでもいい……だが……！」

周囲に赤雷が走り、ガラティーンが黒い炎を纏う。

「お前達は、邪魔だ……!!」

（お願い、ベル、ヘステティア様、皆……どうか、無事で……!）

「ぐっ……くそっ……」

ヴェルフは地面に倒れ伏し、肅正騎士に踏みつけられていた。

「べ、ベル様……」

リリルカは左肩から血を溢れさせており、肅正騎士に髪を掴まれて

持ち上げられている。

「はあ…はあ…くっ…」

「ベル君…！」

ベルはボロボロになりながらも、二人の肅正騎士を相手取っていたが、限界を迎え、膝を着く。ヘステイアがベルに寄り添うと、肅正騎士が二人の前に立って剣を振り上げる。

「ぐっ…！」

ヘステイアがベルを守る様に抱きしめる様子を見て、ザニスは笑みを浮かべる。

「残念だったな、アーデ。お前が素直に戻って来れば、こんな事にはならなかったものを…」

「や、やめて…ください…」

「もう遅い…やれ」

ザニスのその言葉で、肅正騎士は剣を振り下ろした。

第二十二話 騎士に非ず

「くっ……!」

「神様っ…!?!」

ヘステイアがベルに覆い被さり、目を閉じて、背中に振り下ろされるであろう肅正騎士の刃の痛みに備える。しかし…

ガギンツ!

いつまで経っても痛いは訪れず、代わりに鉄と鉄がぶつかり合う音が聞こえた。

「大丈夫、アルゴノウト君、ヘステイア様!?!」

「えっ?」

「君は…」

二人は自分達の前に立ち、肅正騎士と対峙しているアマゾネスの姿を視認する。

「テイ、テイオナさん…?」

「うん、間に合って良かった!」

「どうして、ロキのこの【^{アマゾン}大切断】が此処に…」

ヘステイアがテイオナが現れた事に驚いていると、ラウルやアナキテイもその場に合流する。

「テイオナさん、あまり一人で突っ走らないでくださいっす!」

「ごめんごめん、けどそのお陰でアルゴノウト君達を助けられたんだから許して!」

「ていうか、何よこの騎士達…アポロン・ファミリアにこんなのがいるなんて聞いてないわよ…?」

肅正騎士達はテイオナ達へと向き直し、剣や槍斧を向けてくる。

「テイオナさん達が、どうして…」

「ふふーん、それはね〜…」

「あの子が、襲われてる?」

「うん、アポロン・ファミリアがアルゴノウト君達を総出で追いかけて回してるみたい。街中大騒ぎだよ!」

ベル達が襲われて少し経った頃、慌てた様子のテイオナがアイズにヘステイア・ファミリアが襲撃された事を伝えていた。

「はあ!? それバーゲストたんも襲われてるって事やん! ファインく、助け行こうやく!」

「…そうだね、ここは動くでしょうか」

フィンの言葉にその場に居た全員がフィンに目を向ける。

「…バーゲストには港町で調査に協力してもらった件もある。カーリー・ファミリアとの抗争の時も助けてもらった。それに…今後の為にも、ヘステイア・ファミリアとは良い関係を築いておきたい」

「ならなら…!」

「手が空いている団員を集めて、ヘステイア・ファミリアの救援に向かう、準備してくれ!」

「って訳で、助けに来たんだけ! あ、アイズも来てるよ!」

「あ、アイズさんも…」

「【リトル・ルーキー】! ポーションつす!」

ラウルがベルにポーションを振りかける。アナキテイや他の団員はリリやヴェルフの救助にあたり、テイオナは肅正騎士と攻防を繰り返していた。

「うわっ、強いなく…Lv. 4くらい? 何か【^ブ炎金^リの^ン四^ガ戦^ル士】みたい…」

四人の肅正騎士達は恐ろしく息の合った連携でテイオナと渡り合う。

「くっ…何故ロキ・ファミリアが…!」

「私達も驚いているよ、てっきりアポロン・ファミリアしかいないと思っていたのだがな」

「！…【九魔姫】」
ナイン・ヘル

「ソーマ・ファミリア団長、ザニス・ルストラ。ここからは我々が相手しよう」

「くっ…」

「アルゴノウト君、行って！」

「ティオナさん…」

「行けっ、ベル！」

「ベル様…！」

「ヴェルフ、リリ…分かりました、行きましょう、神様！」

「ああ、けどベル君、行き先を変えよう！」

へステイアはベルに抱えられながらそう提案する。

「行き先を変えるって…？」

「南西だ、南西に向かつてくれ！」

「え、な、南西って確か…」

「あの騎士がまだいるとしたら、足止めしている皆が危ない…！僕達だけギルドに向かつて安全になるのは意味が無い…この戦いを終わらせるために、行こう！」

「！はい、分かりました！」

そう言っただけでベル達は、ある場所に向かい始めた…

「ふんっ!!」

その頃、命達が相手していた肅正騎士は、駆けつけたガレスによって叩き潰されていた。

「む？なんじゃこやつ、ゴーレムじゃったのか…であれば」

粉々になった肅正騎士を見てガレスがそういつた瞬間、矢が飛んでくるが、ガレスはそれを斧で防ぐ。矢が飛んで来た方向を見ると、弓を持った肅正騎士が居た。

「遠慮はいらん！という訳じゃな！」

ガレスが斧を投げると、肅正騎士は避けようとするが、避けきれずに弓を持つていた左腕が消し飛ばされる。

「オオオオオ!!」

「ハアアア!!」

怯んだところを桜花の大斧が背後から右肩に振り下ろされ、その衝撃で膝を着いたところに命が首に刀を振るう。

「ぐっ!?!」

しかし刀は首の半ばで勢いが止まり、完全に首を刈るには至っていない。すると肅正騎士は矢を持った右腕を上げ、命に振り下ろそうとする。

「!?!」

しかし、その瞬間に右手が矢で撃ち抜かれ、碎かれる。肅正騎士は矢が飛んで来た方向を見ると、そこには頭から血を流しながらも弓を肅正騎士に向けたナーザが居た。

「さっきの…お返し…!」

「やああああ!!」

命が自身に喝を入れて刀に更に力を込めると、刀は肅正騎士の首を切り落とすに至った。

「はあ…はあ…恐ろしい強さでした…」

「全くだ…」

「気を抜くでない!まだ来るぞ!」

ガレスの言葉に命達は顔を上げると、肅正騎士達が更に向かって来ていた。

その頃アルトリアは、屋根から屋根へと飛び移りながらリツソス達から逃げていた。

「あーもー!しつこいですね!【光よ】!」

アルトリアはそう言いながら杖の先端に光を集め、振り向きざまに

追ってくる冒険者に向ける。

「弾けて、シヤステイフォル！」

「ぐあっ！」

「へへーんだ！女の子一人に大人げないんですよ！」

「こいつ、これを喰らえっ!!」

「え、うわっ!？」

追ってくる冒険者に舌を出して馬鹿にしていると、一人が魔剣を取り出し、アルトリアにその力を放つ。空中でそれを喰らったアルトリアは落下し、地面に墜落する。

「うっ…くっそ…」

「追いつめたぞ、貴様はここで終わりだ…!」

「くっ…」

リッソスが倒れ伏すアルトリアに短剣を向け、振り下ろそうとした瞬間…

「ちよつとちよつと〜！一人の女の子をそんな大勢で追いかけて回すなんて、冒険者の風上にもおけないわね！」

「っ！誰だっ!？」

突然、上から聞こえた声にリッソスが屋根の方を向くと、そこには赤い髪を靡かせる、一人の冒険者が居た。

「お、お前は…!」クリムクワン・セイバー【真紅の剣士】…!？何故、アストレア・ファミリアの団長がここに…!」

「フフン！私達は正義の味方を目指して頑張っているのよ、困っている人がいたら見捨てておけないわ！ヘステイア様はアストレア様のご友神だし、【リトル・ルーキー】はリユーのお気に入りだもの！それに…」

「なっ、ぐわっ!？」

「リッソス！」

突然現れたアストレア・ファミリアの団長…アリーゼ・ローヴェルは屋根の上から一瞬アルトリアを見ると、次の瞬間には地上に降り立ち、リッソスを斬り飛ばしていた。

「この子は…オラリオを救った英雄の、大切な一人娘なの。あなた

達なんかはこの子が酷い目に遭わされたら、あの人に顔向け出来ないわ」

アルトリアは自分をいきなり助けたアリーゼを地面に倒れたまま見て驚愕する。

「あ、アリーゼさんっ!?!」

「はいアルトリアちゃん! 久しぶりね、前に会った時より可愛くなったんじゃないかしら!」

「あ、ありがとうございます…アリーゼさんも相変わらずですね…」

「やだもう! 前と変わらず今日もこんな曇りでも太陽のように輝くキラキラとした超絶美少女なんて、お世辞も上手くなったのね!」

「いや、そこまで言っていないですね。本当に相変わらずです」

「くそっ…怯むな、相手は一人だ!」

「け、けど【真紅の剣士】クリムゾン・セイバーと言えばLv. 5の第一級冒険者だぜ!?!か、勝てる訳ねえよ!」

「くっ…やむを得ん、竜牙兵を使う! 足止めしている間に撤退するぞ!」

「ん?」

リッツスが突然牙の様なものを地面にばら撒くと、それが巨大化し、やがて大剣や双剣を持つ青い骨の人型のモンスターになる。

「…アルトリアちゃん、ちよつとごめんね」

「え、うわっ」

アリーゼはアルトリアを俵担ぎで持ち上げ、召喚された竜牙兵に剣を向ける。

「かかって来なさい、あなた達の目の前にいるのは、完璧で美少女な滅茶苦茶に強い第一級冒険者なんだから!」

「そのセリフ要りますか!?!」

「ベル君、着いたぞ」

「ここが…」

「ああ、アポロン・ファミリアのホームだ…アポロン、居るんだろう!?!」
ヘステイアがそう叫ぶと、ホームの門が開き、アポロン・ファミリアの団員が左右に分かれて並び、道を作る。ヘステイアはその道を堂々と進み、ベルも少し緊張しながらもそれに続く。

するとホームの扉が開き、中からアポロンが現れると、ニヤついた笑顔で口を開く。

「いやあヘステイア。こんなところまで乗り込んできて、どうしたと
いうのかな?」

「…パルウム君。その手袋を貸してくれ」
「えっ!?!」

突然ヘステイアにそう言われてルウムは驚き、戸惑いつつもヘステイアに手袋を渡した。

「は、はい…」

「ありがとう…ふっ!!」

ヘステイアは手袋を受け取るとそれを思いっきり振りかぶり、そしてアポロンの顔面へと投げて叩きつけた。

「ひっ!?!」

ヘステイアの行動にその場にいた眷属全員が驚いていると、ヘステイアはアポロンを指差し、勢いよく宣言する。

「上等だ! 受けて立ってやろうじゃないか、戦争遊戯をつ!!」

ヘステイアのその言葉を聴いたアポロンの笑顔はより一層増した。

「ここに神双方の合意は成った! 諸君、戦争遊戯だ!!」

「!!」
「!!」
「!!」

その言葉が放たれた瞬間、何故かアポロン・ファミリアのホームや噴水の中から神々が現れ、祭りだ祭りだと騒ぎ始める。少し騒いだ後はアポロンがホームの中に戻ると、神々もサツと退場し、街にも先程までの騒ぎが嘘のように静かになった。

「…取り敢えず、これで一先ずは大丈夫だろう」

「そう、ですね…あ、バーゲストさんにこの事を伝えないと！」

「ああ！早く戻ろう！……って」

ヘステイアが道を戻ろうと振り返ると、大型の黒犬が一匹走り寄って来た。

「おお！バーゲスト君の黒犬だ、迎えに来てくれたのかい？」

「……ワオオオオオオオオン!!」

「うわっ!?どうしたんだい急に…」

黒犬は一回だけ遠吠えすると、ヘステイアを背に乗せた。二人はアポロン・ファミリアやソーマ・ファミリアと戦闘を行った面々の安否確認のためにも来た道を戻り始めた。

「どういう事だい!!バーゲストくんがいないって!!」

「か、神様！落ち着いてください！」

「そ、そうっす！さ、さっきまでは居たんすよ？」

今回の騒動で加勢してくれた面々は、ヘステイア・ファミリアのホームの前で集合していた。バーゲストもいたらしいのだが、突然「一人にして欲しい」と言っただけで去っていったという。

「落ち着けやドチビ、バーゲストたん、どうやら自分の事かなり責めておったからな」

「ああ、心ここに在らずといった様相だった。あんな彼女の姿を見た時は、本当にバーゲストなのかと疑ってしまった」

ロキやリヴェリアのその話を聞いてバーゲストが心配になるヘス

ティア。すると…

「お、いたいた〜！おーいヘスティア〜！ベルくん！無事だったか〜い！」

「…ヘルメス…」

ヘルメスは相変わらずな様子で場に混ざり込んで来た。

「なんやヘルメス、お前まで来よったんかい」

「あはは、僕も少し見物してたけど、今回は危なかったね〜」

「…うん、今回は皆が助けてくれなきや、本当に終わってた。ありがとう、皆」

ヘスティアが一旦心を落ち着かせて助けてくれた面々にお礼を言うと、ロキが調子に乗りそうな瞬間リヴェリアが締めて黙らせた。

「そういえばさつき、バーゲストちゃんとすれ違い次いでに伝言を頼まれたんだ」

「本当かい!? バーゲストくんは、何て!？」

「お、落ち着けよ…バーゲストちゃんは…」

『大事な時に申し訳ありません、ヘスティア様。今はこのような事をしている場合では無いと分かっているのですが…どうかお許しください…私はヘスティア様に…ベルに…皆に今、顔向け出来ません。私がかもつと慎重であれば、より良い結果に繋がった筈なのに…私の至らぬせいで、皆に迷惑を掛けました。黒犬で安否が確認出来たので、少し離れます。直ぐに戻りますので、心配なさらないでください。本当に申し訳ありません、私は、騎士失格です』

「だつてさ」

「…なんだいそれ…今回の事は、バーゲスト君が悪いんじや…」

「けど、彼女はとてつもなく真面目で、正義感に溢れています。あの予想外のゴーレムの事があったとはいえ、判断を誤ったと己を叱責する

でしょうね」

フィンとその言葉にヘスティアは歯を食いしばる。場が重い空気に包まれていると……

パンツ！

と音がなり、全員がハツとして音がした方を向くと、そこには手を合わせているアリーゼの姿があった。

「はいーもうこの話はやめやめ！本人がそう言ってるなら今はそっとしてあげましょ。私にもそういう時があったけれど、意外となんとかなるものよ」

「相変わらずじゃのお主……」

「私が来た時にはもう居なかったのよ！彼女には今すぐにでも会いたいところを我慢してるんだから。一先ずこの場は一旦解散！皆疲れてるでしょ？」

「確かに、あのゴーレム達はめんどくさかったな」

「怪我人も何人かいるんだからさっさと帰って休む！ヘスティア様達は戦争遊戯の準備もあるんだから」

「……まあ、アリーゼの言うことは最もだ。これから忙しくなるだろうし、こちらの話は戦争遊戯が終わった後でもいいだろう」

アリーゼの言葉にフィンも同意して、その場はそのまま解散になると思いきや……

「……すみません！フィンさん、お願いしたい事があります！」

「ん……どうしたんだい、急に」

ベルの唐突な言葉にフィンは少し目を見開きながら応える。

（このままじゃダメだ……いつまでも……）

ベルは先程のバーゲストの伝言内容を思い出しながら、己を奮い立たせた。

（あの^{バーゲスト}人に守られる存在として見られるのは……!!）

「お願いします……僕を戦争遊戯までに……強くして欲しいんです!!」
「……………」

「助けてもらったのに、厚かましいのは分かっています。けど、これ以上バーゲストさんだけに色んなものを背負わせたくない！彼女の足

を引つ張りたくないんです！だから…お願いします!!」

ベルの言葉にその場にいた全員が耳を傾けていた。長い沈黙を打ち破ったのは…

「良い覚悟よっ！【リトル・ルーキー】!!それでこそリユーのお気に入りだわっ!!」

「えっ!?!」

突然フィンと頭を下げていたベルの間に割り込んだアリーゼだった。

「あなたのその覚悟、気に入ったわ！私が特訓をつけてあげる！」

「え、あ、はい、ありがとうございます…えっと、ところで、貴女は?」

「あら、そういえば自己紹介してなかったわね！私、アリーゼ・ローヴェル！アストレア・ファミリアの団長よ、よろしくね！」

「アストレア・ファミリアって…リユーさんの！はい！よろしくお願いいたします！」

二人が握手しているとフィンが軽く咳払いをする。

「あー…僕達も今ファミリアが忙しい訳じゃないし、誰かにやってもらうのも構わないんだけど…」

「フィン、私、やる」

「アイズたん!?!いきなり何言ってるの!?!」

「あ、私もやりたーい」

「テイオナまでどうした!?!許さん、許さへんでえ!!ウチの可愛い子供にハスティアの子の相手させるなんて!いや、バーゲストたんならええんやけど」「じゃ、二人に任せるよ」フィン!?!」

騒ぐロキを無視してベルの特訓相手が決まり、そしてその場は解散となった…

そしてその夜、バーゲストはオラリオを特に行き先も決めずにただ彷徨っていた…

(私は…)

バーゲストは今日の事を思い返す。

(肅正騎士達が現れたせいで、怪我人が原作よりも大勢出た。当然、ベルもリルカ達も…ヘスティア様も危険な目に遭った)

そこまで考えると、バーゲストは立ち止まり、自分の両手を見つめる。

(私は…皆が危険に晒されてる時、何をしていた…?)

やった事といえば、ヒュアキントス達の足止め。バーゲストはそれさえ出来れば、ベル達は安全だと確信していた。しかし…

「ふざけるな…ふざけるな…!!」

バーゲストの怒りが、他でもない自分に対して湧き上がる。

「何が足止めすれば良いだ!!一番安全な場所に居たのは、私だっただろう!!」

今回、加勢した面々でも第一級冒険者以外は大人なり小なり負傷した。肅正騎士達がそれほどまでに厄介な相手であったからである。しかし…

(私は…大した負重もしなかった…!!ベルやヘスティア様の方が苦しんだ…!なのに、私は…!)

守ると誓った存在を、今度は手の届く場所にいながら、全く守れなかったバーゲスト。彼女は自身への不甲斐なさに膝を着く。

(肅正騎士以外にも、何かしらの存在を考慮すべきだった筈だ…!ロキ・ファミリアやアリーゼが来なかったらどうなっていた…!?)

(ベルがこの先、何度も傷つくのは分かっている…!けど、ベルの前に先ず私が傷つくべきなんだ!!それなのに私は…)

「何も…守れなかった…あまつさえ…逃げ出した…」

バーゲストは怖かった、ボロボロのベルとヘスティアを見るのが。合流した時にボロボロになったリルカ達を見た時も彼女は表に出さないようにしつつもかなり動揺した。

自分の判断が、この結果を招いた。

バーゲストの中で今回の事はそう結論が出た。だから、自分のせいで傷ついた二人を見るのが怖くて、逃げ出した。

「……何が、騎士だ……」

手を地面に着き、ゴンっ!!と地面に頭を叩きつけるが、大した傷は付かない。バーゲストの瞳から涙がポツポツと地面に落ちる。

「私は……ただの、偽物で……愚か者だ……」

そうして地面に手をついたまま、バーゲストただ己に絶望している
と……

「——オイ」

ふと、声が聞こえ、バーゲストは顔を上げた。するとそこには……

「ヴァナル・ガンド凶 狼」……?」

そこにはベート・ローガが、ただバーゲストを睨みつけながら見下ろすようにして立っていた。

「……こんなところで何してんのか知らねえが……丁度いい、面貸せや、角女」

ヘステイアはホームのベッドの中で、目を閉じながらバーゲストの事を考えていた。

(バーゲスト君……早く帰って来ておくれ……そして、やり直させて欲しいんだ……)

ヘステイアはずっと考えていた。どうしたらバーゲストに相應しい主神になれるだろうか。

(僕は、君にずっと頼ってばっかだ…君がいなきや…今回の件も、何も出来なかった…それが君を苦しめた…)

「終わりにするんだ…ただ、守ってもらっただけの神は…嫌だ…!」

それぞれが、それぞれの決意を新たにする物語が、誰もが寝静まった頃に、開幕した…!!